

彼岸過迄

夏目漱石



彼岸過迄に就て

事實を読者の前に告白すると、去年の八月頃すでに自分の小説を紙上に連載すべきはずだったのである。ところが余り暑い盛りに大患後の身体からだをぶつ通しとおに使うのはどんなものだろうという親切な心配をしてくれる人が出て来たので、それを好い機会しおに、なお二箇月の暇を食むさばることにとりきめて貰ったのが原で、とうとうその二箇月が過去つた十月にも筆を執とらず、十一十二もつい紙上へは杳ようたる有様で暮してしまった。自分の当然やるべき仕事しごとが、こういう風に、崩くずれた波の崩れながら伝わって行くような具合で、ただだらしなく延びるのはけつして心持の好いものではない。

歳の改まる元旦から、いよいよ事始める緒口いとぐちを開くように事

がきまつた時は、長い間抑えられたものが伸びる時の樂たのしみよりは、背中に背負しょわされた義務を片づける時機が来たという意味でまず何よりも嬉うれしかった。けれども長い間抛り出しておいたこの義務を、どうしたら例いつもよりも手際てぎわよくやってのけられるだろうか考える、また新しい苦痛を感じずにはいられない。

久しぶりだからなるべく面白いものを書かなければすまないという気がいくらもある。それに自分の健康状態やらその他の事情に対して寛容の精神に充みちた取り扱い方をしてくれた社友の好意だの、また自分の書くものを毎日日課のようにして読んでもくれる読者の好意だのに、酬むくいなくてはすまないという心持がだいぶつけ加わって来る。で、どうかして旨うまいものができるようにと念じている。けれどもただ念力だけでは作物さくぶつのできばえを左右する訳にはどうしたって行きつこない、いくら佳いいも

のをと思つても、思うようになるかならないか自分にさえ予言のできかねるのが述作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋合せをするつもりであると公言する勇氣が出ない。そこに一種の苦痛が潜ひそんでいるのである。

この作を公にするにあたつて、自分はただ以上の事だけを言つておきたい気がする。作の性質だの、作物に対する自己の見識だの主張だのは今述べる必要を認めていない。実をいうと自分は自然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しばしば耳にするネオ浪漫派ローマンはの作家ではなおさらない。自分はこれらひようぼうの主義を高く標榜して路傍ろぼうの人の注意を惹ひくほどに、自分の作物が固定した色に染つけられているという自信を持ち得ぬものである。またそんな自信を不必要とするものである。ただ自分分は自分であるという信念を持っている。そうして自分が自分

である以上は、自然派でなからうが、象徴派でなからうが、ないしネオのつく浪漫派でなからうが全く構わないつもりである。

自分はまた自分の作物を新しい新しいと吹聴する事も好まない。今の世にむやみに新しがっているものは三越呉服店とヤンキーとそれから文壇における一部の作家と評家だろうと自分はどうから考えている。

自分はすべて文壇に濫用らんようされる空疎な流行語を藉かりて自分の作物の商標としたくない。ただ自分らしいものが書きたいだけである。手腕が足りなくて自分以下のものができたり、銜氣げんきがあつて自分以上を装よそおうようなものができたりして、読者にすまない結果を齎もたらすのを恐れるだけである。

東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購読者は実に何十万という多数に上っている。その内で自分の作物さくぶつを読んでく

れる人は何人あるか知らないが、その何人かの大部分はおそらく文壇の裏通りも露路ろじも覗のぞいた経験はあるまい。全くただの間として大自然の空気を真率しんそつに呼吸しつつ穏当に生息しているだけだろうと思う。自分はこれらの教育あるかつ尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じている。

「彼岸過迄」ひがんすぎまで

というのは元日から始めて、彼岸過まで書く予定

だから単にそう名づけたまでに過ぎない実は空むなしい標題みだしである。

かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、その個々の短篇が相合して一長篇を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうかという意見を持もっていた。が、ついそれを試みる機会もなくして今日こんにちまで過ぎたのであるから、もし自分の手際てぎわが許すならばこの「彼岸過迄」をかねての思わく通りに作り上げたいと考えている。けれども小説は建築

家の図面と違つて、いくら下手でも活動と発展を含まない訳に行かないので、たとい自分が作るとは云いながら、自分の計画通りに進行しかねる場合がよく起つて来るのは、普通の実世間において吾々の企てが意外の障害を受けて予期のごとくに纏まら^{くわだ}ないのと一般である。したがつてこれはずつと書進んで見ない^{うま}とちよつと分らない全く未来に属する問題かも知れない。けれどもよし旨く行^{うま}かなくつても、離れるともつくとも片^{かた}のつかない短篇が続くだけの事だろうとは予想できる。自分はそれでも差支^{さしつか}えな^さかろうと思つてゐる。

(明治四十五年一月此作を朝日新聞に公けにしたる時の緒

言)

風呂の後

一

敬太郎けいたろうはそれほど駿げんの见えないこの間からの運動と奔走に少し厭いや氣きが注さして来た。元々頑丈がんじょうにできた身体からだだから単に馳かけ歩くといいう労力らうりきだけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知ししているが、思おもう事が引ひつ懸かつたなり居据いすわつて動はかなかつたり、または引ひつ懸かろうとして手を出す途端とたんにすぽりと外はずれたりする反間へまが度重たびかさなるに連れて、身体よりも頭の方がだんだん云う事を聞かなくなつて来た。で、今夜は少し癩しやくも手伝てつて、飲のみたくもない麦酒ビールをわざとポンポン抜ひいて、できるだけ快豁かいかつな気分

を自分と誘つて見た。^{いざな}けれどもいつまで経つても、ことさらに
借着をして陽氣がろうとする自覚が退かないので、しまいに下
女を呼んで、そこいらを片づけさせた。下女は敬太郎の顔を見
て、「まあ田川さん」と云つたが、その後からまた「本当にま
あ」とつけ足した。敬太郎は自分の顔を撫でながら、「赤いだろ
う。こんな好い色をいつまでも電灯に照らしておくのはもつた
いないから、もう寝るんだ。ついでに床を取ってくれ」と云つ
て、下女がまだ何かやり返そうとするのをわざと外して廊下へ
出た。そうして便所から帰つて夜具の中に潜り込む時、まあ当
分休養する事にするんだと口の内で呟いた。^{つぶや}

敬太郎は夜中に二返眼を覚ました。一度は咽喉が渴いたため、
一度は夢を見たためであつた。三度目に眼が開いた時は、もう
明るくなつていた。世の中が動き出しているなと気がつくや否

や敬太郎は、休養休養と云つてまた眼を眠ねむつてしまった。その次には氣の利きかないボンボン時計の大きな音が無遠慮に耳に響いた。それから後はいくら苦心しても寝つかれなかった。やむを得ず横になつたまま巻煙草まきたばこを一本吸つてみると、半分ほどに燃えて来た敷島しきしまの先が崩れて、白い枕が灰だらけになつた。それでも彼はじつとしてゐるつもりであつたが、しまいに東窓から射し込む強い日脚ひあしに打たれた氣味で、少し頭痛がし出したので、ようやく我がを折つて起き上つたなり、楊枝ようじを銜くわえたまま、手拭てぬぐいをぶら下げて湯に行つた。

湯屋の時計はもう十時少し廻つていたが、流しの方はからりと片づいて、小桶こおけ一つ出ていない。ただ浴槽ゆふねの中に一人横向になつて、硝子ガラス越しに射し込んでくる日光を眺ながめながら、呑氣のんきそうにじやぶじやぶやつてるものがある。それが敬太郎と同じ下宿

にいる森本もりもとという男だったので、敬太郎はやあ御早うと声を掛けた。すると、向うでも、やあ御早うと挨拶あいさつをしたが、

「何です今頃楊枝ようじなぞを銜くわえ込んで、冗談じょうだんじゃない。そう云やあゆうべ昨夕あなたの部屋に電氣が点ついていないようでしたね」と云つた。

「電氣は宵よいの口から煌々こうこうと点ついていたさ。僕はあなたと違つて品行方正だから、夜遊びなんか滅多めったにした事はありませんよ」

「全くだ。あなたは堅いからね。羨うらやましいくらい堅いんだから」

敬太郎は少し羞痒くすくつたいような気がした。相手を見ると依然と

して横隔膜おうかくまくから下を湯に浸つけたまま、まだ飽あきずにじゃぶじゃ

ぶやっている。そうして比較的眞面目まじめな顔かほをしている。敬太郎

はこの気楽そうな男の口髭くちひげがだらしなく濡ぬれて一本一本下向したむきに

垂れたところを眺めながら、

「僕の事はどうでも好いが、あなたはどうしたんです。役所は」と聞いた。すると森本は倦怠^{だる}そうに浴槽^{ふち}の側に両脇^{りょうわき}を置いてその上に額^{ぬか}を載^のせながら俯伏^{うつぶし}になつたまま、

「役所は御休みです」と頭痛でもする人のように答えた。

「何で」

「何でもないが、僕の方で御休みです」

敬太郎は思わず自分の同類を一人発見したような気がした。それでつい、「やっぱり休養ですか」と云うと、相手も「ええ休養です」と答えたなり元のおり湯槽^{ゆふね}の側に突伏^{つつぶ}していた。

二

敬太郎^{けいたろう}が留桶^{とめおけ}の前へ腰をおろして、三助^{さんすけ}に垢擦^{あかすり}を掛けさせて

いる時分になつて、森本はやつと煙の出るような赤い身体を全く湯の中から露出した。そうして、ああ好い心持だという顔つきで、流しの上へぺたりと胡坐をかいたと思ふと、

「あなたは好い体格だね」と云つて敬太郎の肉付を賞め出した。

「これで近頃はだいぶ悪くなつた方です」

「どうしてどうしてそれで悪かつた日にや僕なんざあ」

森本は自分で自分の腹をポンポン叩いて見せた。その腹は凹んで背中の方へ引つけられてるようであつた。

「何しろ商売が商売だから身体は毀す一方ですよ。もつとも不養生もだいぶやりましたがね」と云つた後で、急に思い出したようにアハハハと笑つた。敬太郎はそれに調子を合せる気味で、「今日は僕も閑だから、久しぶりでまたあなたの昔話でも伺いましうか」と云つた。すると森本は、

「ええ話しましょう」とすぐ乗気な返事をしたが、活潑かつぱつなのはただ返事だけで、挙動の方は緩慢かんまんというよりも、すべての筋肉が湯に燂うでられた結果、当分作用を中止している姿であつた。

敬太郎が石鹼シャボンを塗つけた頭をごしごしいわしたり、堅い足の裏や指の股を擦こすつたりする間、森本は依然として胡座をかいたまま、どこ一つ洗う気色けしきは見えなかつた。最後に瘠やせた一塊ひとかたまりの肉団をどぶりと湯の中に抛ほうり込むように浸ひけて、敬太郎とほぼ同時に身体を拭きながら上つて来た。そうして、

「たまに朝湯へ来ると綺麗きれいで好い心持ですね」と云つた。

「ええ。あなたのは洗うんでなくつて、本当に湯に這入はいるんだからことにそうだろう。実用のための入湯にゆうとうでなくつて、快感を貪むさぶるための入浴なんだから」

「そうむずかしい這入り方でもないんでしようが、どうもこん

な時に身体なんか洗うな億劫おっくうでね。ついぼんやり浸つかつてぼんやり出ちまいますよ。そこへ行くと、あなたは三層倍も勤勉まめだ。頭おまけから足ようじからどこからどこまで実によく手落なく洗いますね。御負おまけに楊枝ようじまで使つて。あの綿密な事には僕もほとんど感心しちまつた」

二人は連立つて湯屋の門口かどぐちを出た。森本がちよつと通りまで行つて巻紙を買うからというので、敬太郎もつき合う氣になつて、横丁を東へ切れると、道が急に悪くなつた。昨夕ゆうべの雨が土を潤ふやかし抜いたところへ、今朝からの馬や車や人通りで、踏み返けしたり蹴あ上げたりした泥あとの痕あとを、二人は厭いとうような軽蔑けいべつするような様子で歩いた。日は高く上のぼつているが、地面から吸い上げられる水蒸氣はいまだに微かすかな波動を地平線の上に描えがいているらしい感じがした。

「今朝の景色は寢坊のあなたに見せたいようだった。何しろ日がかんかん当つてる癖に靄がいつぱいなんでしょう。電車をこつちから透かして見ると、乗客がまるで障子に映る影画のように、はつきり一人一人見分けられるんです。それでいて御天道様が向う側にあるんだからその一人一人がどれもこれもみんな灰色の化物に見えるんで、すこぶる奇観でしたよ」

森本はこんな話をしながら、紙屋へ這入って巻紙と状袋で膨らました懷をちよつと抑えながら出て来た。表に待つていた敬太郎はすぐ今来た道の方へ足を向け直した。二人はそのままいつしよに下宿へ帰った。上靴の踵を鳴らして階段を二つ上り切つた時、敬太郎は自分の部屋の障子を手早く開けて、

「さあどうぞ」と森本を誘った。森本は、

「もう直午飯でしょう」と云つたが、躊躇すると思いの外、あ

たかも自分の部屋へでも這入るような無雑作な態度で、敬太郎の後に跟^ついて来た。そうして、

「あなたの室^{へや}から見た景色はいつ見ても好いね」と自分で窓の障子を開けながら、手摺付の縁板の上へ濡^{ぬれてぬぐい}手拭を置いた。

三

敬太郎^{けいたろう}はこの瘠^やせながら大した病気にも罹^{かか}らないで、毎日新橋

の停車場^{ステーション}へ行く男について、平生から一種の好奇心を有^もつてい

た。彼はもう三十以上である。それでいまだに一人で下宿住居^{ずまい}

をして停車場へ通勤している。しかし停車場で何の係りをして、

どんな事務を取扱っているのか、ついぞ当人に聞いた事もない

れば、また向うから話した試^{ためし}もないので、敬太郎には一切がX^{エックス}

である。たまたま人を送つて停車場へ行く場合もあるが、そんな時にはつい混雑とに取り紛まぎれて、停車場と森本とをいつしよに考えるほどの余裕よゆうも出ず、そうかと云つて、森本の方から自己の存在を思い起させるように、敬太郎の眼につくべき所へ顔を出す機会も起らなかった。ただ長い間同じ下宿たてこもに立籠たてこもつてゐるという縁故だか同情だかが本もとで、いつの間にか挨拶あいさつをしたり世間話をする仲になつたまでである。

だから敬太郎の森本に対する好奇心というのは、現在の彼にあると云うよりも、むしろ過去の彼にあると云つた方が適當かも知れない。敬太郎はいつか森本の口から、彼が歴れつき乎とした一家の主人公であつた時分の話を聞いた。彼の女房の話も聞いた。二人の間にできた子供の死んだ話も聞いた。「餓鬼がきが死んでくれ

たんで、まあ助かつたようなものでさあ。山神さんじんの祟たたりには實際恐

れを作なしていたんですからね」と云つた彼の言葉を、敬太郎はいまだに覚えてゐる。その時しかも山神が分らなくつて、何だと聞き返したら、山の神の漢語じゃありませんかと教えられたおかしさまでまだ記憶に残つてゐる。それらを思い出しても、敬太郎から見ると、すべて森本の過去には一種ロマンスの臭におが、ほうきぼし箒星の尻尾しっぽのようにぼうつとおつかぶさつて怪しい光を放つてゐる。

女についてできたとか切れたとかいう逸話以外に、彼はまたさまざまな冒険譚ぼうけんだんの主人公であつた。まだ海豹島かいひょうとうへ行つて膾炙おつとせいは打うちつてゐないようであるが、北海道のどこかで鮭さけを漁とつて儲もうけた事はたしかであるらしい。それから四国辺のある山から安質アンチモニー莫尼モニーが出ると触れて歩いて、けつして出なかつた事も、当人がそう自白するくらいだから事實に違ない。しかし最も奇抜

なのは呑口会社の計画で、これは酒樽さかだるの呑口を作る職人が東京にごく少ないというところから思いついたのだそうだが、せっかく大阪から呼び寄せた職人と衝突したために成立しなかったと云つて彼はいまだに残念がつている。

もうけぐち

儲口を離れた普通の浮世話になると、彼はまた非常に豊富な材料の所有者であるという事を容易に証拠立てる。筑摩川ちくまがわの上流の何とかいう所から河を隔てて向うの山を見ると、巖いわの上に熊がごろごろ昼寝をしているなどはまだ尋常の方なので、それが一層色づいて来ると、信州戸隠山の奥の院とがくしやまというのは普通の人の登れつこない難所だのに、それを盲目めくらが天辺てっぺんまで登ったかに驚ろいたなどという。そこへ御参おまいりをするには、どんなに脚あしの達者なものでも途中で一晩明かさなければならぬので、森本も仕方なしに五合目あたりで焚火たきびをして夜の寒さを凌しのいでいる

と、下から鈴れいの響が聞えて来たから、不思議に思つているうちに、その鈴の音がだんだん近くなつて、しまいに座頭ざとうが上つて来たんだと云う。しかもその座頭が森本に今晚はと挨拶あいさつをしてまたすたすた上つて行つたと云うんだから、余り妙だと思つてなおよく聞いて見ると、実は案内者が一人ついてたのだそうである。その案内者の腰に鈴を着けて、後あとから来る盲者めくらがその鈴の音を頼りに上る事ができるようにしてあつたのだと説明されて、やや納得なつとくもできたが、それにしても敬太郎には随分意外な話である。が、それがもう少し高こうじると、ほとんど妖怪談ようかいだんに近い妙なものとなつて、だらしない彼の口髭くちひげの下から最も慇懃いんぎんに発表される。彼が耶馬溪やばけいを通つたついでに、羅漢寺らかんじへ上つて、日暮に一本道を急いで、杉並木の間を下りて来ると、突然一人の女と擦すれ違つた。その女は臙脂べにを塗つて白粉おしろいをつけて、婚礼に

行く時の髪を結^ゆつて、裾模^{すもよう}様の振袖^{ふりそで}に厚い帯を締^しめて、草履^{ぞうりばき}穿のままたった一人すたすた羅漢^{らかんじ}寺の方へ上^{のぼ}つて行^いつた。寺に用のあるはずはなし、また寺の門はもう締^しまつてゐるのに、女は盛装したまま暗い所をたつた一人で上^あつて行^いつたんだそうである。——敬太郎はこんな話を聞^きくたびにへえーと云^いつて、信じられ得ない意味の微笑^{みほ}を洩^もらすにかかわらず、やつぱり相当の興味と緊張とをもつて森本の弁口^{べんこう}を迎えるのが例であつた。

四

この日も例によつて例のような話が出るだろうという下心^{こころ}から、わざと廻り路までしていつしよに風呂^{ふろ}から歸^{かへ}つたのである。年こそそれほど取^とつていないが、森本のように、大抵な世間の

関門を潜^{くぐ}つて来たとしか思われない男の経歴談は、この夏学校を出たばかりの敬太郎^{けいたろう}に取つては、多大の興味があるのみではない、聞きようしだいで随分利益も受けられた。

その上敬太郎は遺伝的に平凡^{ひんぺん}を忌^いむ浪漫趣味^{ロマンチック}の青年であつた。

かつて東京の朝日新聞に児玉音松^{こだまおとまつ}とかいう人の冒険談が連載さ

れた時、彼はまるで丁年^{ていねん}未満の中学生のような熱心をもつて毎

日それを迎え読んでいた。その中^{うち}でも音松君が洞穴^{おど}の中から躍

り出す大蛸^{おおだこ}と戦つた記事が大変面白がつて、同じ科の学生に、

君、蛸の大頭^{すべ}を目がけて短銃^{ピストル}をポンポン打つんだが、つるつる

滑^{すべ}つて少しも手応^{てごたえ}がないというじゃないか。そのうち大将の後

からぞろぞろ出て来た小蛸^{こだこ}がぐると環^わを作つて彼を取り巻い

たから何をするのかと思うと、どっちが勝つか熱心に見物して

いるんだそうだからねと大いに乗気で話した事がある。すると

その友達が調戲からかい半分に、君のような剽輕ひょうきんものはとうてい文官試験などを受けて地道じみちに世の中を渡って行く氣になるまい、卒業したら、いつその事思い切つて南洋へでも出かけて、好きな蛸狩たこがりでもしたらどうだと云つたので、それ以来「田川たがわの蛸狩」という言葉が友達間にだいぶ流行はやり出した。この間卒業して以来足を播木すりこぎのようにして世の中への出口を探して歩いている敬太郎に会うたびに、彼らはどうだね蛸狩は成功したかいと聞くのが常になつていたくらいである。

南洋の蛸狩はいかな敬太郎にもちと奇拔きぱつ過ぎるので、真面目まじめに思い立つ勇氣も出なかつたが、新嘉坡シンガポールの護謨林栽培ゴムりんなどは学生はてのうちすでに目論もくろんで見た事がある。当時敬太郎は、果はてしない広野ひろのを埋め尽す勢いきおいで何百万本という護謨の樹が茂っている真中に、一階建のバンガローを拵こしらえて、その中に栽培監督者と

しての自分が朝夕起臥する様を想像してやまなかつた。彼はバ
 ンガローの床をわざと裸にして、その上に大きな虎の皮を敷く
 つもりであつた。壁には水牛の角を塗り込んで、それに鉄砲を
 かけ、なおその下に錦の袋に入れたままの日本刀を置くはずに
 した。そうして自分は真白なターバンをぐるぐる頭へ巻きつけ
 て、広いヴェランダに据えつけてある籐椅子の上に寝そべりなが
 ら、強い香のハヴァナをふかりふかりと鷹揚に吹かす氣でいた。
 それのみか、彼の足の下には、スマタラ産の黒猫、——天鷲絨
 のような毛並と黄金そのままの眼と、それから身の丈よりもよ
 ほど長い尻尾を持った怪しい猫が、背中を山のごとく高くして
 蹲踞うずくまつている訳になつていた。彼はあらゆる想像の光景をか
 く自分に満足の行くようにあらかじめ整えた後で、いよいよ実
 際の算盤そろばんに取りかかったのである。ところが案外なもので、ま

ず護謨ゴムを植えるための地面を借り受けるのにだいぶんな手数てすうと暇いが要る。それから借りた地面を切り開くのが容易の事でない。次に地ならし植えつけに費やすべき金高かなだかが以外に多い。その上絶えず人夫を使つて草取をした上で、六年間苗木なえぎの生長するのを馬鹿見たようにじつと指を銜くわえて見ていなければならぬ段になつて、敬太郎はすでに充分退却に価すると思ひ出したところへ、彼にいろいろの事情を教えてくれた護謨通つうは、今しばらくすると、あの辺でできる護謨の供給が、世界の需用以上に超過して、栽培者は非常の恐慌を起すに違ないと威嚇いかくしたので、彼はその後護謨の護の字も口にしなくなつてしまつたのである。

けれども彼の異常に対する嗜欲しよくはなかなかこれくらいの事で冷却しそうには見えなかつた。彼は都の真中にいて、遠くの人や国を想像の夢に上のぼして楽しんでゐるばかりでなく、毎日電車の中で乗り合せる普通の女だの、または散歩の道すがら行き逢う實際の男だのを見てさえ、ことごとく尋常以上に奇きなあるものを、マントの裏かコートそでの袖に忍しのばしてはいはしないだろうか考える。そうしてどうかこのマントやコートを引ひつくり返してその奇なところをただ一目ひとめで好いからちらりと見た上、後は知らん顔をして済ましていたいような氣になる。

敬太郎けいたろうのこの傾向は、彼がまだ高等学校にいた時分、英語の教師が教科書としてスチーヴンソンの新亞刺比亞物語しんアラビヤものがたりという書物を読ました頃からだんだん頭を持ち上げ出したように思われる。それまで彼は大だいの英語嫌えいごきらひであつたのに、この書物を読むように

なつてから、一回も下読を怠らずに、あてられさえすれば、必ず起立して訳を付けたのでも、彼がいかにそれを面白がつていたかが分る。ある時彼は興奮の余り小説と事実の區別を忘れて、十九世紀の倫敦ロンドンに實際こんな事があつたんでしようかと真面目まじめな顔をして教師に質問を掛けた。その教師はついこの間英国から帰つたばかりの男であつたが、黒いメルトンのモーニングの尻から麻の手帛ハンケチを出して鼻の下を拭ぬぐいながら、十九世紀どころか今でもあるでしょう。倫敦という所は實際不思議な都ですと答えた。敬太郎の眼はその時驚嘆の光を放つた。すると教師は椅子いすを離れてこんな事を云つた。

「もつとも書き手が書き手だから觀察も奇抜だし、事件の解釈おのずも自から普通の人間とは違ふんで、こんなものができ上つたのかも知れません。實際スチーヴンソンという人は辻待つじまちの馬車を

見てさえ、そこに一種のロマンスを見出すという人ですから」

辻馬車とロマンスに至つて敬太郎は少し分らなくなつたが、思い切つてその説明を聞いて見て、始めてなるほどと悟つた。それから以後は、この平凡極まる東京のどこにでもごろごろして、最も平凡を極めている辻待の人力車を見るたんびに、この車だつて昨夕人殺しをするための客を出刃ぐるみ乗せていつさんに馳けたのかも知れないと考えたり、または追手の思わくとは反対の方角へ走る汽車の時間に間に合うように、美しい女を幌の中に隠して、どこかの停車場へ飛ばしたのかも分らないと思つたりして、一人で怖がるやら、面白がるやらしきりに喜こんでいた。

そんな想像を重ねるにつけ、これほど込み入つた世の中だから、たとい自分の推測通りとまで行かなくつても、どこか尋常

と変つた新らしい調子を、彼の神経にはつと響かせ得るような事件に、一度ぐらいは出会^{であ}つて然^{しか}るべきはずだという考えが自然と起つてきた。ところが彼の生活は学校を出て以来ただ電車に乗るのと、紹介状を貰つて知らない人を訪問するくらいのもので、その他に何といつて取り立てて云うべきほどの小説は一つもなかった。彼は毎日見る下宿の下女の顔に飽^あき果てた。毎日食う下宿の菜^{さい}にも飽き果てた。せめてこの單調を破るために、満鉄の方ができるとか、朝鮮の方が纏^{まと}まるとかすれば、まだ衣食の途^{みち}以外に、幾^{いく}分かの刺戟^{しげき}が得られるのだけでも、両方共二三日前に当分望^{のぞみ}がないと判然して見ると、ますます眼前の平凡が自分の無能力と密切な関係でもあるかのように思われて、ひどくぼんやりしてしまった。それで糊口^{ここう}のための奔走はもちろんの事、往来に落ちたばら錢^{せん}を採^{さが}して歩くような長閑^{のどか}な気分で、

電車に乗つて、漫然と人事上の探検を試みる勇氣もなくなつて、昨夕はさほど好きでもない麦酒ビールを大いに飲んで寝たのである。

こんな時に、非凡の経験に富んだ平凡人とでも評しなければ評しようのない森本の顔を見るのは、敬太郎にとつてすでに一種の興奮であつた。巻紙をかう御供おともまでして彼を自分の室へやへ連れ込んだのはこれがためである。

六

森本は窓際まどぎわへ坐つてしばらく下の方を眺ながめていた。

「あなたの室へやから見た景色けしきは相変らず好うがすね、ことに今日は好い。あの洗い落したような空の裾すそに、色づいた樹が、所々暖あつたかく塊かたまつている間から赤い煉瓦れんがが見える様子は、たしか

に画^えになりそうですね」

「そうですね」

けいたろう

敬太郎はやむを得ずこういう答をした。すると森本は自分が

肱^{ひじ}を乗せている窓から一尺ばかり出張った縁板を見て、

「ここはどうしても盆栽^{ぼんさい}の一つや二つ載^のせておかないと納まらない所ですよ」と云った。

敬太郎はなるほどそんなものかと思つたけれども、もう「そうですね」を繰り返す勇氣も出なかつたので、

「あなたは画や盆栽まで解るんですか」と聞いた。

「解るんですかは少し恐れ入りましたね。全く柄^{がら}にないんだから、そう聞かれても仕方はないが、——しかし田川さんの前だが、こう見えて盆栽も弄^{いじ}くるし、金魚も飼うし、一時は画も好きでよく描^かいたもんですよ」

「何でもやるんですね」

「何でも屋に碌ろくなものなしで、とうとうこんなもんになっちゃった」

森本はそう云い切つて、自分の過去を悔ゆるでもなし、またその現在を悲観するでもなし、ほとんど鋭い表情のどこにも出ていない不断の顔をして敬太郎を見た。

「しかし僕はあなた見たように変化の多い経験を、少しでも好いから嘗なめて見たいといつてもそう思っているんです」と敬太郎が真面目まじめに云いかけると、森本はあたかも酔っ払のように、右の手を自分の顔の前へ出して、大袈裟おおげさに右左に振つて見せた。

「それがごく悪い。若い内——と云つたところで、あなたと僕はそう年も違つていないようだが、——とにかく若い内は何でも変つた事がしてみたいもんでね。ところがその変つた事を仕

尽した上で、考えて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事ならしない方がよっぽど増しだと思っただけでさあ。あなたなんざ、これからの身体からだだ。おとなしくさえしていりやどんな発展でもできようってのもんだから、肝心かんじんなところで山気やまぎだの謀叛むほん気だのって低気圧を起しちゃ親不孝に当らあね。——時にどうです、この間から伺がおう伺がおうと思つて、つい忙がしくつて、伺がわずにいたんだが、何か好い口は見付めかりましたか」

正直な敬太郎は慥然ぶぜんとしてありのままを答えた。そうして、とうてい当分これという期待あてもないから、奔走をやめて少し休養するつもりであるといつけ加えた。森本はちよつと驚ろいたよ
うな顔をした。

「へえー、近頃は大学を卒業しても、ちよつくらちよいと口が見付からないもんですかねえ。よっぽど不景気なんだね。もつ

とも明治も四十何年というんだから、そのはずには違ないが」

森本はここまで来て少し首を傾^{かし}げて、自分の哲理を自分で囃^かみしめるような素振^{そぶり}をした。敬太郎は相手の様子を見て、それほど滑稽^{こっけい}とも思わなかったが、心の内で、この男は心得があつてわざとこんな言葉遣^{ことばづかい}をするのだろうか、または無学の結果こうよりほか言い現^{てだて}わす手段を知らないのだろうかと考えた。すると森本が傾^{かし}げた首を急に豎^{たて}に直した。

「どうです、御厭^{おいや}でなきや、鉄道の方へでも御出^{おで}なすつちや。何なら話して見ましようか」

いかな浪漫的な敬太郎もこの男に頼んだら好い地位が得られるとは想像し得なかった。けれどもさも軽々と云つて退^のける彼の愛嬌^{あいぎよう}を、翻弄^{ほんろう}と解釈するほどの僻^{ひがみ}ももたなかった。抛^{よんどころ}処なく苦笑しながら、下女を呼んで、

「森本さんの御膳^{おぜん}もここへ持つて来るんだ」と云いつけて、酒を命じた。

七

森本は近頃^{からだ}身体のために酒を慎しんでいると断わりながら、注いでやりさえすれば、すぐ猪口^{ちよく}を空^{から}にした。しまいにはもう止ましようという口の下から、自分で徳利の尻を持ち上げた。彼は平生から閑静なうちにどこか気楽な風を帯びている男であつたが、猪口を重ねるにつれて、その閑静^{ほて}が熱^{ほて}ってくる、気楽はしだいしだいに膨脹^{ぼうちよう}するように見えた。自分でも「こうなりや併吞^{へいどん}自若^{じやく}たるもんだ。明日^{あした}免職になつたつて驚ろくんじやない」と威張り出した。敬太郎が飲めない口なので、時々思い出すよ

うに、盃さかずきに唇くちびるを付けて、付合つきあっているのを見て、彼は、

「田川さん、あなた本当に飲いけないんですか、不思議ですね。酒を飲まない癖くせに冒険を愛するなんて。あらゆる冒険は酒に始まるんです。そうして女に終るんです」と云った。彼はつい今まで自分の過去を碌ろくでなしのように蹴けなしていたのに、酔ったら急に模様が變つて、後光ごこうが逆ぎやくに射すとでも評すべき態度で、氣燄きえんを吐はき始めた。そうしてそれが大抵は失敗の氣燄であつた。しかも敬太郎を前に置いて、

「あなたなんざあ、失礼ながら、まだ学校を出たばかりで本当の世の中は御存じないんだからね。いくら学士でございの、博士そうろうで候こうのつて、肩書ばかり振り廻まわしたつて、僕は憎おひえないつもりだ。こつちやちゃんと実地を踏んで来ているんだもの」と、さつきまで教育に対して多大の尊敬を払っていた事はまるで忘

れたような風で、無遠慮なきめつけ方をした。そうかと思うと
 噫げつつぶのような溜息ためいきを洩もらして自分の無学をさも情なさけなさそうに恨うらんだ。

「まあ手つ取り早く云やあ、この世の中を猿どうぜん同然渡つて来たんで
 さあ。こう申しちやおかしいが、あなたより十層倍の経験は
 たしかに積んでるつもりです。それでいて、いまだにこの通り
 解脱げだつができないのは、全く無学すなわち学がないからです。もつ
 とも教育があつちや、こうむやみやたらと変化する訳にも行か
 ないようなもんかも知れませんよ」

敬太郎はさつきから氣の毒なる先覺者とでも云つたように相
 手を考えて、その云う事に相應の注意を払つて聞いていたが、
 なまじい酒を飲ましたためか、今日はいつともより氣燄だの愚痴ぐち
 だのが多くつて、例のように純粹の興味わが湧かないのを残念に

思つた。好い加減に酒を切り上げて見たが、やつぱり物足らなかつた。それで新らしく入れた茶を勧めながら、

「あなたの経歴談はいつ聞いても面白い。そればかりでなく、僕のような世間見ずは、御話を伺うたんびに利益を得ると思つて感謝しているんだが、あなたが今までやつて来た生活のうちで、最も愉快だったのは何ですか」と聞いて見た。森本は熱い茶を吹き吹き、少し充血した眼を二三度ぱちつかせて黙つていた。やがて深い湯呑ゆのみを干してしまふとこう云つた。

「そうですね。やつた後あとで考えると、みんな面白いし、またみんなつまらないし、自分じゃちよつと見分がつかないんだが。

——全体愉快つてえのは、その、女気おんなつけのある方を指すんですか」

「そう云う訳でもないんですが、あつたつて差支さしかえありません」

「なんて、実はそつちの方が聞きたいんでしょう。——しかし

雑談抜きでね、田川さん。面白い面白くないはさておいて、あれほど呑気のんきな生活は世界にまたとなかうという奴をやった覚おぼえがあるんですよ。そいつを一つ話しましょうか、御茶受の代りに」

敬太郎は一も二もなく所望した。森本は「じゃあちよつと小便をして来る」と云つて立ちかけたが、「その代り断わっておくが女気はありませんよ。女気どころか、第一人間の気がないんだもの」と念を押して廊下の外へ出て行つた。敬太郎は一種の好奇心を抱いだいて、彼の帰るのを待ち受けた。

八

ところが五分待つても十分待つても冒険家は容易に顔を現わ

さなかつた。敬太郎^{けいたろう}はとうとうじつと我慢しきれなくなつて、自分で下へ降りて用場を探して見ると、森本の影も形も見えない。念のためまた階段^{はしごだん}を上^あつて、彼の部屋の前まで来ると、障子^{しょうじ}を五六寸明け放したまま、真中に手枕をしてごろりと向うむきに転^{ころ}がつているものがすなわち彼であつた。「森本さん、森本さん」と二三度呼んで見たが、なかなか動きそうにないので、さすがの敬太郎もむつとして、いきなり室^{へや}に這^{はい}入り込むや否や、森本の首筋を攫^{つか}んで強く揺振^{ゆすぶ}つた。森本は不意に蜂^{はち}にでも螫^さされたように、あつと云つて半ば^{なか}跳ね起きた。けれども振り返つて敬太郎の顔を見ると同時に、またすぐ夢現^{ゆめうつ}のたるい眼つきに戻つて、

「やああなたですか。あんまりちようだいしたせいか、少し気分が変になつたもんだから、ここへ来てちよつと休んだらつい

眠くなつて」と弁解する様子に、これといつて他を愚弄する体
 もないので、敬太郎もつい怒れなくなつた。しかし彼の待ち設
 けた冒険談はこれで一頓挫を来したも同然なので、一人自分の
 室に引取ろうとすると、森本は「どうもすみません、御苦労様で
 した」と云いながら、また後から敬太郎について来た。そうし
 て先刻まで自分の坐つていた座蒲団の上に、きちんと膝を折つ
 て、

「じやいよいよ世界に類のない呑気生活の御話でも始めますか
 な」と云つた。

森本の呑気生活というのは、今から十五六年前彼が技手に雇
 われて、北海道の内地を測量して歩いた時の話であつた。固よ
 り人間のいない所に天幕を張つて寝起をして、用が片づきしだ
 い、また天幕を担いで、先へ進むのだから、当人の断つた通り、

とうてい女つ氣けのありようはずはなかつた。

「何しろ高さ二丈もある熊笹くまざさを切り開いて途みちをつけるんですからね」と彼は右手を額より高く上げて、いかに熊笹が高く茂つていたかを形容した。その切り開いた途みちの両側に、朝起きて見ると、蝮蛇まむしがとぐろを巻いて日光を鱗うろこの上に受けている。それを遠くから棒で抑おさえておいて、傍そばへ寄つて打ち殺して肉を焼いて食うのだと彼は話した。敬太郎がどんな味がすると聞くと、森本はよく思い出せないが、何でも魚肉さかなと獣肉にくの間ぐらいだろうと答えた。

テント
天幕の中へは熊笹の葉と小枝を山のように積んで、その上に疲れた身体からだを埋めぬうずばかりに投げかけるのが例であるが、時には外へ出て焚火たきびをして、大きな熊を眼の前に見る事もあった。虫が多いので蚊帳かやは始終釣しじゅうつていた。ある時その蚊帳を担かついで

谷川へ下りて、何とかいう川魚を掬^{すく}つて帰ったら、その晩から蚊帳が急に腥^{なまぐ}さくなつて困った。——すべてこれらは森本のいわゆる呑氣生活の一部分であつた。

彼はまた山であらゆる茸^{たけ}を採^とつて食つたそうである。ます茸^{だけ}というのは広蓋^{ひろぶた}ほどの大ききで、切つて味噌汁^{みそじる}の中へ入れて煮るとまるで蒲鉾^{かまぼこ}のようだとか、月見茸^{つきみだけ}というのは一抱^{ひとかかえ}もあるけれども、これは残念だが食えないとか、鼠茸^{ねずみだけ}というのは三つ葉の根のようで可愛^{かわい}らしいとか、なかなか精^{くわ}しい説明をした。大きな笠^{かさ}の中へ、野葡萄^{のぶどう}をいっぱい採つて来て、そればかり貪^{むさ}ばつていたものだから、しまいに舌^{した}が荒れて、飯が食えなくなつて困つたという話もついにつけ加えた。

食う話ばかりかと思うと、また一週間絶食をしたという悲酸^{ひさん}な物語もあつた。それはみんなの糧^{かて}が尽きたので、人足が村ま

で米を取りに行つた留守中に大變な豪雨があつた時の事である。元々村へ出るには、沢^{さわ}辺まで降りて、沢^{さわ}伝いに里へ下るのだから、俄雨で谷が急にいつぱいになつたが最後、米など背^し負^よつて歸れる訳のものでない。森本は腹が減つて仕方がないから、じつと仰^{あおむけ}向に寝て、ただ空を眺^{なが}めていたところが、しまいにぼんやりし出して、夜も昼もめちやくちやに分らなくなつたそうである。

「そう長い間飲まず食わずじゃ、両^{りよう}便^{べん}とも留^とまるでしよう」と敬太郎が聞くと、「いえ何、やつぱりありますよ」と森本はすこぶる氣樂そうに答えた。

敬太郎は微笑せざるを得なかつた。しかしそれよりもおかし

く感じたのは、森本の形容した大風の勢であつた。彼らの一行

が測量の途次ぼうぼう茫々たる芒原すすきはらの中で、突然面も向けられないほどの

風に出会つた時、彼らは四よつ這ばいになつて、つい近所の密林の

中へ逃げ込んだところが、一抱ひとかかえも二抱ふたかかえもある大木の枝も幹も凄

まじい音を立てて、一度に風から痛振いたぶられるので、その動揺が

根に伝わつて、彼らの踏んでいる地面が、地震の時のようにぐ

らぐらしたと云うのである。

「それじゃたとい林の中へ逃げ込んだところで、立っている訳

に行かないでしょう」と敬太郎が聞くと、「無論突伏していま

した」という答であつたが、いくら非道ひどい風だつて、土の中に

張つた大木の根が動いて、地震を起すほどの勢いきおいがあるうとは思

えなかつたので、敬太郎は覚えず吹き出してしまった。すると

森本もまるで他事ひとごとのように同じく大きな声を出して笑い始めたが、それがすむと、急に真面目まじめになつて、敬太郎の口を抑えるような手つきをした。

「おかしいが本当です。どうせ常識以下に飛び離れた経験をするくらいの僕だから、不中用やぐぎにやあ違ないが本当です。——もつともあなた見たいに学のあるものが聞きやあ全く嘘うそのような話さね。だが田川さん、世の中には大風に限らず随分面白い事がたくさんあるし、またあなたなんざあその面白い事にぶつかろうぶつかろうと苦勞して御出おいでなさる御様子だが、大学を卒業しちゃもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思いますからね。よしんば自分でいくら身を落すつもりでかかっても、まさか親の敵討かたきうちじやなしね、そう真剣に自分の位地いぢを棄すてて漂浪ひょうろうするほどの物数奇ものずきも今の世にはありませんからね。第一傍はたがそ

うさせないから大丈夫です」

敬太郎は森本のこの言葉を、失意のようにもまた得意のようにも聞いた。そうして腹の中で、なるほど常調じょうちょう以上の変つた生活は、普通の学士などには送れないかも知れないと考えた。ところがそれを自分にさえ抑おさえたい気がするので、わざと抵抗するような語気で、

「だって、僕は学校を出たには出たが、いまだに位置などは無いんですぜ。あなたは位置位置あきあきつてしきりに云うが。——實際位置の奔走にも厭あき々してしまつた」と投げ出すように云つた。すると森本は比較げんしゆく的嚴肅な顔をして、

「あなたのは位置がなくなつてある。僕のは位置があつて無い。それだけが違うんです」と若いものに教える態度で答えた。けれども敬太郎にはこの御籤おみくじめいた言葉がさほどの意義を齎もたらさな

かつた。二人は少しの間煙草たばこを吹かして黙っていた。

「僕もね」とやがて森本が口を開いた。「僕もね、こうやって三年越、鉄道の方へ出ているが、もう厭いやになつたから近々きんきん罷めようと思うんです。もつとも僕の方で罷めなけりや向うで罷めるだけなんだからね。三年越と云やあ僕にしちや長い方でさあ」

敬太郎は罷めるが好かろうとも罷めないが好かろうとも云わなかつた。自分が罷めた経験も罷められた閱歴もないので、他の進退などはどうでも構わないような気がした。ただ話が理に落ちて面白くないという自覚だけあつた。森本はそれと察したか、急に調子を易かえて、世間話を快活に十分ほどした後で、あと「いやどうも御馳走ごちそうでした。——とにかく田川さん若いうちの事ですよ、何をやるのも」と、あたかも自分が五十ぐらいの老人のようなことを云つて歸つて行つた。

それから一週間ばかりの間、田川は落ちついて森本と話す機会を有^もたなかつたが、二人共同じ下宿に^{まれ}いるのだから、朝か晩に彼の姿を認めない事はほとんど稀であつた。顔を洗う所などで落ち合う時、敬太郎は彼の着ている黒襟^{くろえり}の掛つたドテラが常に目についた。彼はまた襟開^{えりあき}の広い新調の背広^{せびろ}を着て、妙な洋杖^{ステツキ}を突いて、役所から帰るとよく出て行つた。その洋杖が土間の瀬戸物製の傘入^{かさいれ}に入れてあると、ははあ先生今日は宅^{うち}に^{かど}出入^{でいり}した。するとその洋杖^{ステツキ}思いながら敬太郎は常に下宿の門を出入した。す^うるとその洋杖^{ステツキ}がちやんと例の所に立ててあるのに、森本の姿が不意に見えなくなつた。

一日二日はつい気がつかずに過ぎたが、五日目ぐらいになつても、まだ森本の影が見えないので、敬太郎けいたろうはようやく不審の念を起し出した。給仕に来る下女に聞いて見ると、彼は役所の用でどこかへ出張したのだそうである。固もとより役人である以上、いつ出張しないとも限らないが、敬太郎は平生からこの男を相そうして、何でも停車場ステーションの構内で、貨物の発送係ぐらいを勤めてゐるに違ないと判じていたものだから、出張と聞いて少し案外な心持がした。けれども立つ時すでに五六日と断つて行つたのだから、今日か翌日あしたは帰るはずだと下女に云われて見ると、なるほどそうかとも思つた。ところが予定の時日が過ぎてても、森本の変な洋杖が依然として傘入の中にあるのみで、当人のドテラ姿はいっこう洗面所かみへ現われなかつた。

しまいに宿の神さんかみが来て、森本さんから何か御音信おたよりがござ

いましたかと聞いた。敬太郎は自分の方で下へ聞きに行こうと思つていたところだと答えた。神さんは多少心元ない色を梟ふくろのような丸い眼の中に漂うちよわせて出て行つた。それから一週間ほど経たつても森本はまだ帰らなかつた。敬太郎も再び不審を抱いだき始めた。帳場の前を通る時に、まだですかとわざと立ち留つて聞く事さえあつた。けれどもその頃は自分がまた思い返して、位置の運動を始め出した出花でばななので、自然その方にばかり頭を専領される日が多いため、これより以上立ち入つて何物をも探る事をあえてしなかつた。実を云うと、彼は森本の予言通り、衣食の計はかりごとのために、好奇家の権利を放棄したのである。

すると或晩主人がちよつと御邪魔をしても好いかと断わりながら障子しょうじを開けて這入はいつて来た。彼は腰から古めかしい煙草入たばこ入れを取り出して、その筒つつを抜く時ぽんという音をさせた。それか

ら銀の煙管きせるに刻草きざみを詰めて、濃い煙を巧者に鼻の穴から迸ほとばし
 せた。こうゆつくり構える彼の本意を、敬太郎は判然はつきり向うから
 そうと切り出されるまで覺さとらずに、どうも変だとばかり考えて
 いた。

「実は少し御願があつて上つたんですが」と云つた主人はやや
 小声になつて、「森本さんのいらつしやる所をどうか教えて頂く
 訳に参りますまいか、けつしてあなたに御迷惑のかかるような
 事は致しませんから」と藪やぶから棒につけ加えた。

敬太郎はこの意外の質問を受けて、しばらくは何という挨拶あいさつ
 も口へ出なかつたが、ようやく、「いつたいどう云う訳なんです」
 と主人の顔を覗のぞき込んだ。そうして彼の意味を讀もうとしたが、
 主人は煙管が詰つたと見えて、敬太郎の火箸ひばしで雁首がんくびを掘つてい
 た。それが済んでから羅宇らうの疎通をぷつぷつ試した上、そろそ

ろと説明に取りかかった。

主人の云うところによると、森本は下宿代が此家ここに六カ月ばかり滞とどつているのだそうである。が、三年越ことししいる客ではあるし、遊んでいる人じゃなし、此年ことしの末にはどうかするからという当人の言訳を信用して、別段催促もしなかったところへ、今度の旅行になった。家うちのものは固もとより出張とばかり信じていたが、その日限にちげんが過ぎていくら待っても帰らないのみか、どこからも何の音信たよりも来ないので、しまいにとうとう不審を起した。それで一方に本人の室へやを調べると共に、一方に新橋へ行つて出張先を聞き合せた。ところが室の方は荷物もそのまま、彼のおつた時分と何の変りもなかったが、新橋の答はまた案外であつた。出張したとばかり思っていた森本は、先月限り罷やめられていたそうである。

「それであなは平生森本さんと御懇意の間柄でいらつしやるんだから、あなたに伺つたら多分どこに御出おいでか分るだろうと思つて上つたような訳で。けつしてあなたに森本さんの分をどうのこうのと申し上げるつもりではないのですから、どうか居所だけ知らして頂けますまいか」

敬太郎はこの失踪者しつそうしやの友人として、彼の香かんばしからぬ行為に立ち入った関係でもあるかのごとく主人から取扱われるのをはなはだ迷惑に思つた。なるほど事実をいえば、ついこの間まである意味の嘆賞たんしょうを懷ふところにして森本に近づいていたには違ちがないが、こんな實際問題にまで秘密の打ち合せがあるように見做みなされては、未来を有もつ青年として大いなる不面目だと感じた。

正直な彼は主人の疇違かんちがいを腹の中で怒おこった。けれども怒る前にまず冷たい青大将でも握らせられたような不気味さを覚えた。あおだいしよう
この妙に落ちつき払はつて古風な煙草入たばこいれから刻きざみを撮つまみ出しては雁首がんくびへ詰める男の誤解は、正解と同じような不安を敬太郎に与えたのである。彼は談判に伴なう一種の芸術のごとく巧なみに煙管きせるを扱かう人であつた。敬太郎は彼の様子をしばらく眺ながめていた。そうしてただ知らないというよりほかに、向うの疑惑を晴らす方法がないのを残念に思つた。はたして主人は容易に煙草入を腰へ納めなかつた。煙管を筒へ入れて見たり出して見たりした。そのたびに例の通りぽんぽんという音がした。敬太郎はしまいにどうしてもこの音を退治たいじてやりたいような気がし出した。

「僕はね、御承知の通り学校を出たばかりでまだ一定の職業もな

にもない貧書生だが、これでも少しは教育を受けた事のある男だ。森本のような浮浪の徒とといっしよに見られちゃ、少し体面にかかわる。いわんや後暗うしろくらい関係でもあるように邪推して、いくら知らないと言つても執濃しつこく疑つてゐるのは怪けしからんじゃないか。君がそういう態度で、二年もいる客に対する気ならそれで好い。こつちにも料簡りょうけんがある。僕は過去二年の間君のうちに厄介になつてゐるが、一カ月でも宿料しゆくりようを滞とどおらした事があるかい」

主人は無論敬太郎の人格に対して失礼に当るような疑を毛頭抱いだいていないつもりであるという事を繰り返して述べた。そうして万一森本から音信でもあつて、彼の居所が分つたらどうぞ忘れずに教えて貰もらいたいと頼んだ末、もしさつき聞いた事が敬太郎の氣に障さわつたら、いくらでも詫あやまるから勘弁してくれと言つた。

敬太郎は主人の煙草入たばこいれを早く腰に差させようと思つて、単に宜よろしいと答えた。主人はようやく談判の道具を角帯かくおびの後へしまひ込んだ。室へやを出る時の彼の様子に、別段敬太郎を疑うぐる気色けしきも見えなかつたので、敬太郎は怒つてやつて好い事をしたと考えた。

それからしばらく経つと、森本の室に、いつの間にか新らしい客が這入はいつた。敬太郎は彼の荷物を主人がどう片づけたかについて不審を抱いだいた。けれども主人がかの煙草入を差して談判に来て以来、森本の事はもう聞くまいと決心したので、腹の中はともかく、上部うわべは知らん顔をしていた。そうして依然としてできるようなまたできないような地位を、元ほど焦燥あせらない程度ながらも、まず自分のやるべき第一の義務として、根氣に狩かり歩あるいていた。

或る晩もその用で内幸町まで行つて留守を食つたのでやむを得ずまた電車で引き返すと、偶然向う側に黄八丈の裨天で赤ん坊を負つた婦人が乗り合せているのに気がついた。その女は眉毛の細くて濃い、首筋の美しくできた、どつちかと云えば粹な部類に属する型だったが、どうしても裨天負をするという柄ではなかった。と云つて、背中の子はたしかに自分の子に違ないと敬太郎は考えた。なおよく見ると前垂の下から格子縞か何かの御召が出ているので、敬太郎はますます変に思った。外面は雨なので、五六人の乗客は皆傘をつぼめて杖にしていた。女は黒蛇目であつたが、冷たいものを手に持つのが厭だと思へて、彼女はそれを自分の側に立て掛けておいた。その畳んだ蛇の目の先に赤い漆で加留多と書いてあるのが敬太郎の眼に留つた。

この黒人だか素人だか分らない女と、私生児だか普通の子だ

か怪しい赤ん坊と、濃い眉まゆを心持八の字に寄せて俯目勝ふしめがちな白い顔と、御召おめしの着物と、黒蛇の目に鮮あざやかな加留多という文字とが互違たがいちがいに敬太郎の神経を刺戟しげきした時、彼はふと森本といつしよになつて子まで生んだという女の事を思い出した。森本自身の口から出た、「こういうと未練があるようでおかしいが、顔質かおだちは悪い方じゃありませんでした。眉毛まゆえの濃い、時々八の字を寄せて人に物を云う癖のある」といったような言葉をぼつぽつ頭の中で憶おもい起しながら、加留多と書いた傘の所有主もちぬしを注意した。すると女はやがて電車を下りて雨の中に消えて行つた。後に残つた敬太郎は一人森本の顔や様子を心に描きつつ、運命が今彼をどこに連れ去つたらうかと考え考え下宿へ歸つた。そうして自分の机の上に差出人の名前の書いてない一封の手紙を見出した。

好奇心に駆^かられた敬太郎^{けいたろう}は破るようにこの無名氏の書信^{ひら}を披^{ひら}いて見た。すると西洋^{せいよう}罫紙^{けいし}の第一行目に、親愛なる田川君として下に森本よりとあるのが何より先に入^いった。敬太郎はすぐまた封筒を取り上げた。彼は視線の角度を幾通りにも変えて、そこに消印の文字を読もうと力^{つと}めたが、肉が薄いのでどうしても判断がつかなかった。やむを得ず再び本文に立ち帰^{かへ}つて、まずそれから片づける事にした。本文にはこうあつた。

「突然消えたんで定めて驚ろいたでしょう。あなたは驚ろかないにしても、雷^{らい}獣^{じゅう}とそうしてズク（森本は平生下宿の主人夫婦を、雷獣とそうしてズクと呼んでいた。ズクは耳ズクの略である）彼ら両人は驚ろいたに違^{ちが}ない。打ち明けた御話をする、と、

実は少し下宿代を滞^{とどこ}おらしていたので、話をしたら雷獣とそうしてズクが面倒をいうだろうと思つて、わざと断らずに、自由行動を取りました。僕の室^{へや}に置いてある荷物を始末したら——行李^{こり}の中には衣類その他がすっかり這^{はい}入つていますから、相当の金になるだろうと思うんです。だから兩人にあなたから右を売るなり着るなりしろとおつしやつていただきました。もつとも彼雷獣は御承知のごとき曲^{くせもの}者故僕の許諾を待たずして、とつくの昔にそう取計つているかも知れない。のみならず、こつちからそう穩便^{おんべん}に出ると、まだ残つている僕の尻を、あなたに拭つて貰いたいなどと、とんでもない難題を持ちかけるかも知れません。あなたが、それにはけつして取り合つちやいけません。あなたのように高等教育を受けて世の中へ出たての人はとかく雷獣^{はい}輩が食物にしたがるものですから、その辺^{へん}はよく御注意なされない

といけません。僕だつて教育こそないが、借金を踏んじや善く
ないくらいの事はまさかに心得ています。来年になればきつと
返してやるつもりです。僕に意外な経歴が数々あるからと云つ
て、あなたにこの点まで疑われては、せつかくの親友を一人失
くしたも同様、はなはだ遺憾の至だから、どうか雷獣ごときも
ののために僕を誤解しないように願います」

森本は次に自分が今大連で電気公園の娯楽がかりを勤めてい
る由よしを書いて、来年の春には活動写真買入の用向を帯びて、是
非共出京するはずだから、その節は御地で久しぶりに御目にか
かるのを今から楽たのしみにして待つているとつけ加えていた。そうし
てその後あとへ自分が旅行した満洲地方の景況をさも面白そうに一
口ぐらふいちょういずつ吹聴ふいちょうしていた。中で最も敬太郎を驚ろかしたのは、
長春ちやうしゆんとかにある博打場ばくちばの光景で、これはかつて馬賊の大將をし

たというさる日本人の経営に係るものだが、そこへ行つて見ると、何百人と集まる汚ない支那人が、折詰しやうぎのようにぎつしり詰つて、血眼ちまなこになりながら、一種の臭氣しゆうきを吐き合っているのだそうである。しかも長春の富豪が、慰み半分なぐさわざと垢あかだらけな着物を着て、こつそりここへ出入しゆつにゆうするといふんだから、森本だつてどんな真似まねをしたか分らないと敬太郎は考えた。

手紙の末段には盆栽ぼんさいの事が書いてあつた。「あの梅の鉢ひつは動坂どうざかの植木屋で買ったので、幹はそれほど古くないが、下宿の窓などに載のせておいて朝夕眺あさゆうながめるにはちょうど手頃へやのものです。あれを献上けんじようするからあなたの室むろへ持つていらつしやい。もつとも雷獸らいじゆうとそうしてズクは兩人共きわ極めて不風流故ゆえ、床の間の上へ据すえたなり放つておいて、もう枯らしてしまつたかも知れません。それから上り口の土間の傘入かさいれに、僕の洋杖ステツキが差さつてゐるはず

です。あれも価格から云えばけっして高く踏めるものではありませんが、僕の愛用したものだから、記念のため是非あなたに進上したいと思います。いかな雷獣とそうしてズクもあの洋杖をあなたが取ったって、まさか故障は申し立てますまい。だからけっして御遠慮なさらずと好い。取って御使いなさい。——満洲ことに大連ははなはだ好い所です。あなたのような有為の青年が発展すべき所は当分ほかに無いでしょう。思い切つて是非いらつしやいませんか。僕はこつちへ来て以来満鉄の方にもだいぶ知人ができたから、もしあなたが本当に来る気なら、相当の御世話はできるつもりです。ただしその節は前もつてちよつと御通知を願います。さよなら」

敬太郎は手紙を畳んで机の抽出へ入れたなり、主人夫婦へは森本の消息について、何事も語らなかつた。洋杖は依然として、

傘入の中に差さっていた。敬太郎は出入でいりの都度つど、それを見るたびに一種妙な感に打たれた。

停留所

一

敬太郎けいたろうに須永すながという友達があつた。これは軍人の子でありながら軍人が大嫌だいきらで、法律を修めおさながら役人にも会社員にもなる気のない、至つて退嬰主義たいえいしゆぎの男であつた。少くとも敬太郎にはそう見えた。もつとも父はよほど以前に死んだとかで、今では母とたつた二人ぎり、淋さみしいような、また床ゆかしいような生活を

送っている。父は主計官としてだいぶ好い地位にまで昇つた上、
 元来が貨殖かしよくの道に明らかな人であつただけ、今では母子共衣食おやことも
 の上に不安の憂うれいを知らない好い身分である。彼の退嬰主義も半なか
 ばはこの安泰な境遇に慣なれて、奮闘の刺戟しげきを失つた結果とも見
 られる。というものは、父が比較的立派な地位にいたせいにか、
 彼には世間体せけんていの好いばかりでなく、實際ためになる親類があつ
 て、いくらでも出世の世話をしてやろうというのに、彼は何だ
 かだと手前勝手ばかり並べて、今もつてぐずぐずしているのを
 見ても分る。

「そう贅沢ぜいたくばかり云つてちやもつたいない。厭いやなら僕に譲るが
 いい」と敬太郎は冗談半分に須永を強請せびることもあつた。する
 と須永は淋さびしそうなまた気の毒そうな微笑を洩もらして、「だって
 君じゃいけないんだから仕方がないよ」と断るのが常であつた。

断られる敬太郎は冗談にせよ好い心持はしなかった。おれはおれでどうかするという気概も起して見た。けれども根が執念深くない性質だから、これしきの事で須永に対する反抗心などが永く続きようはずがなかった。その上身分が定まらないので、気の落ちつく背景を有たない彼は、朝から晩まで下宿の一と間にじつと坐っている苦痛に堪えなかった。用がなくつても半日は是非出て歩るいた。そうしてよく須永の家を訪問れた。一つはいつ行つても大抵留守の事がないので、行く敬太郎の方でも張合があつたのかも知れない。

「糊口も糊口だが、糊口より先に、何か驚嘆に価する事件に会いたいと思つてゐるが、いくら電車に乗つて方々歩いても全く駄目だね。攫徒にさえ会わない」などと云うかと思うと、「君、教育は一種の権利かと思つていたら全く一種の束縛だね。いくら

学校を卒業したって食うに困るようじゃ何の権利かこれあらんやだ。それじゃ位地いちはどうでもいいから思う存分勝手な真似まねをして構わないかというのと、やつぱり構うからね。厭いやに人を束縛するよ教育が」と忌々いまいましそうに嘆息する事がある。須永は敬太郎のいずれの不平に対しても余り同情がないらしかった。第一彼の態度からしてが本当に真面目まじめなのだか、またはただ空焦燥からはしやぎに焦燥いでいるのか見分がつかなかったのだろう。ある時須永はあまり敬太郎がこういうような浮ずつた事ばかり言い募つるので、「それじゃ君はどんな事がして見たいのだ。衣食問題は別として」と聞いた。敬太郎は警視庁の探偵見たような事がして見たいと答えた。

「じゃするが好いじゃないか、訳ないこつた」
「ところがそうは行かない」

敬太郎は本気になぜ自分に探偵ができないかという理由を述べた。元来探偵なるものは世間の表面から底へ潜る^{もぐ}社会の潜水夫のようなものだから、これほど人間の不思議を攫^{つか}んだ職業はたんとあるまい。それに彼らの立場は、ただ他の暗黒面^{ひと}を観察するだけで、自分と墮落してかかる危険性を帯びる必要がないから、なおの事都合がいいには相違ないが、いかんせんその目的がすでに罪惡の暴露^{ばくろ}にあるのだから、あらかじめ人を陥^{おとし}れようとする成心の上に打ち立てられた職業である。そんな人の悪い事は自分にはできない。自分はただ人間の研究者^{いな}否人間の異常なる機関^{からくり}が暗い闇夜^{やみよ}に運転する有様を、驚嘆の念をもって眺^{なが}めていたい。——こういうのが敬太郎の主意であつた。須永は逆^{さか}らずに聞いていたが、これという批判の言葉も放たなかつた。それが敬太郎には老成と見えながらその実平凡なのだとしか受

取れなかつた。しかも自分を相手にしないような落ちつき払つた風のあるのを悪く思つて別れた。けれども五日と経たないうちにまた須永の宅へ行きたくなつて、表へ出ると直神田行の電車に乗つた。

二

須永はもとの小川亭即ち今の天下堂という高い建物を目標に、

須田町の方から右へ小さな横町を爪先上りに折れて、二三度不

規則に曲つた極めて分り悪い所にいた。家並の立て込んだ裏通

りだから、山の手と違つて無論屋敷を広く取る余地はなかつた

が、それでも門から玄関まで二間ほど御影の上を渡らなければ、

格子先の電鈴に手が届かないくらいの一構であつた。もともとから

自分の持家もちいえだったのを、一時親類の某なにがしに貸したなり久しく過ぎたところへ、父が死んだので、無人ぶにんの活計くわくしには場所も広さも恰好かつこうだろうという母の意見から、駿河台の本宅を売払するがだいつてここへ引移つたのである。もつともそれからだいぶ手を入れた。ほとんど新築したも同然さとかつて須永が説明して聞かせた時に、敬太郎けいたろうはなるほどそうかと思つて、二階の床柱や天井板てんじょういたを見廻した事がある。この二階は須永の書斎にするため、後から継つぎ足したので、風が強く吹く日には少し揺れる気味はあるが、ほかにこれと云つて非の打ちようのない綺麗きれいに明かな四畳六畳二間ふたまたつづきの室へやであつた。その室に坐すわっていると、庭に植えた松の枝と、手斧目ちようなめの付いた板塀いたべいの上の方と、それから忍び返しが見えた。縁てすりに出て手摺から見下した時、敬太郎は松の根に一面と咲いた鷺草さぎそうを眺めて、あの白いものは何だと須永に聞いた事もあつた。

彼は須永を訪問してこの座敷に案内されるたびに、書生と若旦那の区別を判然と心に呼び起さざるを得なかった。そうしてこゝろ小ぢんまり片づいて暮している須永を輕蔑けいべつすると同時に、閑静ながら余裕よゆうのあるこの友の生活を羨うらやみもした。青年があんなでは駄目だと考えたり、またあんなにもなつて見たいと思つたりして、今日も二つの矛盾からでき上つた斑まだらな興味を懷ふところに、彼は須永を訪問したのである。

例の小路こうじを二三度曲折して、須永の住居すまつている通りの角まで来ると、彼より先に一人の女が須永の門を潜くぐつた。敬太郎はただ一目ひとめその後姿を見ただけだったが、青年に共通の好奇心と彼に固有の浪漫趣味ロマンしゅみとが力を合せて、引き摺ずるように彼を同じ門前に急がせた。ちよつと覗のぞいて見ると、もう女の影は消えていた。例の通り紅葉もみじを引手ひきてに張り込んだ障子しょうじが、閑静しまに閉つて

いるだけなのを、敬太郎は少し案外にかつ物足らず眺めていた
 が、やがて沓脱くつぬぎの上に脱ぎ捨てた下駄げたに氣をつけた。その下駄
 はもちろん女ものであつたが、行儀よく向うむきに揃そろっている
 だけで、下女が手をかけて直した迹あとが少しも見えない。敬太郎
 は下駄の向むきと、思つたより早く上あがつてしまつた女の所作しよさとを繼つ
 ぎ合あわして、これは取次を乞わずに、独ひとりで勝手に障子を開けて
 這入はいつた極きわめて懇意の客だろうと推察した。でなければ家うちのも
 のだが、それでは少し変である。須永の家は彼と彼の母と仲働なかばたら
 きと下女の四人暮よつたりしである事を敬太郎はよく知つていたのであ
 る。

敬太郎は須永の門前にしばらく立つていた。今這入つた女の
 動静をそつと塀の外から窺うかがうというよりも、むしろ須永とこの
 女がどんな文あやに二人の浪漫ロマンを織つてゐるのだろうと想像するつ

もりであつたが、やはり聞耳ききみみは立てていた。けれども内はいつもの通りしんとしていた。艶めいた女なまの声どころか、咳嗽せき一つ聞えなかつた。

「いいなすけ
許嫁かな」

敬太郎はまず第一にこう考えたが、彼の想像はそのくらいで落ちつくほど、訓練を受けていなかった。——母は仲働を連れて親類へ行つたから今日は留守である。飯焚めしたきは下女部屋に引き下がっている。須永と女とは今差向いで何か私語ささやいている。——はたしてそうだとするといつものように格子戸こうしどをがらりと開けて頼むと大きな声を出すのも変なものである。あるいは須永も母も仲働もいっしょに出たかも知れない。おさんはきつと昼寝ひるねをしている。女はそこへ這入はいつたのである。とすれば泥棒である。このまま引返してはすまない。——敬太郎は狐憑きつねつきのように

のそりと立っていた。

三

すると二階の障子しょうじがすうと開いて、青い色の硝子瓶ガラスびんを提さげた須永すながの姿が不意に縁側えんがわへ現われたので敬太郎けいたろうはちよつと吃驚びっくりした。

「何をしているんだ。落し物でもしたのかい」と上から不思議そうに聞きかける須永を見ると、彼は咽喉のどの周囲まわりに白いフラネルを捲まいていた。手に提さげたのは含嗽劑がんそうざいらしい。敬太郎は上を向いて、風邪かぜを引いたのかとか何とか二三言葉を換かわしたが、依然として表に立ったまま、動こうともしなかった。須永はしまいに這入れと云った。敬太郎はわざと這入っていいかと念を

入れて聞き返した。須永はほとんどその意味を覺らない人のごとく、軽く首肯いたぎり障子の内に引き込んでしまった。

階段を上る時、敬太郎は奥の部屋で微かに衣摺の音がするよう

な気がした。二階には今まで須永の羽織つていたらしい黒八丈

の襟の掛つたどてらが脱ぎ捨ててあるだけで、ほかに平生と變つ

たところはどこにも認められなかった。敬太郎の性質から云つ

ても、彼の須永に対する交情から云つても、これほど気にかか

る女の事を、率直に切り出して聞けないはずはなかったのだが、

今までにどこか罪な想像を逞ましくしたという疚ましさもあり、

また面と向つてすぐとは云い悪い皮肉な覷を付けた自覚もある

ので、今しがた君の家へ這入った女は全体何者だと無邪気に尋

ねる勇氣も出なかった。かえつて自分の先へ先へと走りたがる

心を押し隠すような風に、

「空想はもう当分やめだ。それよりか口の方が大事だからね」と云つて、兼かねて須永から聞ういてゐる内幸町うちさいわいちやうの叔父さんという人に、一応そういう方の用向で会つておきたいから紹介してくれと真面目まじめに頼んだ。叔父というのは須永の母の妹の連合つれあいで、官吏から実業界へ這入つて、今では四つか五つの会社に関係を有もつてゐる相当な位地の人であつたが、須永はその叔父の力を藉かりてどうしようという料簡りようけんもないと見えて、「叔父がいろいろ云つてくれるけれども、僕は余進あんまりまないから」と、かつて敬太郎に話した事があつたのを、敬太郎は覚えていたのである。

須永は今朝すでにその叔父に会うはずであつたが、咽喉のどを痛めたため、外出を見合せたのだそうで、四五日内には大抵行けるだろうから、その時には是非話して見ようと答えたあとで、「叔父も忙からだがしい身体だしね、それに方々から頼まれるようだから

ら、きつとは受合われないが、まあ会つて見たまえ」と念のためだか何だかつけ加えた。余り望を置き過ぎられては困るというのだろうと敬太郎は解釈したが、それでも会わないよりは増しだぐらいに考えて、例に似ず宜しく頼む氣になった。が、口で頼むほど腹の中では心配も苦勞もしていなかった。

元來彼が卒業後相當の地位を求めするために、腐心し運動し奔走し、今もなおしつゝあるのは、当人の公言するごとく佯りなき事實ではあるが、いまだに成効の曙光を拝まないと云つて、さも苦しそうな声を出して見せるうちには、少なくとも五割方の懸値が籠つていた。彼は須永のような一人息子ではなかったが、（妹が片づいて、）母一人残つているところは両方同じであつた。彼は須永のように地面家作の所有主でない代りに、国に少し田地を有つていた。固より大した穀高になるといふほど

のものでもないが、俵ひょうがいくらというきまつた金に毎年替えられるので、二十や三十の下宿代に窮する身分ではなかった。その上女親の甘いにつけ込んで、自分で自分の身を喰うような臨時費を請求した事も今までに一度や二度ではなかった。だから位地位地と云つて騒ぐのが、全くの空騒からさわぎでないにしても、郷党ほうゆうだの朋友だのまたは自分だのに対する虚栄心に煽あおられている事はたしかであつた。そんなら学校にいるうちもつと勉強して好い成績でも取つておきそうなものなのに、そこが浪漫家ロマンかだけあつて、学課はなるべく怠けよう怠けようと心がけて通して来た結果、すこぶる鮮あざやかならぬ及第をしてしまったのである。

それで約一時間ほど須永^{すなが}と話す間にも、敬太郎^{けいたろう}は位地とか衣食とかいう苦しい問題を自分と進んで持ち出しておきながら、やつぱり先刻^{さつき}見た後姿^{うしろすがた}の女の事が気に掛つて、肝心^{かんじん}の世渡りの方には口先ほど真面目^{まじめ}になれなかった。一度下座敷^{したざしき}で若々しい女の笑い声が聞えた時などは、誰か御客が来ているようだねと尋ねて見ようかしらんと考えたくらいである。ところがその考えている時間が、すでに自然をぶち壊^{こわ}す道具になつて、せつかくの間が間外^{まはづ}れになろうとしたので、とうとう口へ出さずにやめてしまった。

それでも須永の方ではなるべく敬太郎の好奇心に媚^こびるような話題を持ち出した氣でいた。彼は自分の住んでいる電車の裏通りが、いかに小さな家と細い小路^{こうじ}のために、賽^{さい}の目^めのように区切られて、名も知らない都会人士の巢を形づくっているうち

に、社会の上層に浮き上らない戯曲がほとんど戸ごとに演ぜられていると云うような事実を敬太郎に告げた。

まず須永の五六軒先には日本橋辺の金物屋の隠居の妾がいる。

その妾が宮戸座とかへ出る役者を情夫にしている。それを隠居

が承知で黙っている。その向う横町に代言だか周旋屋だか分ら

ない小綺麗な格子戸作りの家があつて、時々表へ女記者一名、女

コック一名至急入用などという広告を黒板へ書いて出す。そこ

へある時二十七八の美しい女が、襷を取った紺綾の長いマン

トをすぼりと被つて、まるで西洋の看護婦という服装をして来

て職業の周旋を頼んだ。それが其家の主人の昔し書生をしてい

た家の御嬢さんなので、主人はもちろん妻君も驚ろいたという

話がある。次に背中合せの裏通りへ出ると、白髪頭で廿ぐらい

の妻君を持った高利貸がいる。人の評判では借金の抵当に取つ

た女房だそうである。その隣りの博奕打ばくちうちが、大勢同類を寄せて、互に血眼ちまなこを擦り合っている最中に、ねんね子で赤ん坊を負おぶったかみさんが、勝負で夢中になつてゐる亭主を迎むかえに来る事がある。かみさんが泣きながらどうかいっしょに帰つてくれというと、亭主は帰るには帰るが、もう一時間ほどして負けたものを取り返してから帰るという。するとかみさんはそんな意地を張れば張るほど負けるだけだから、是非今帰つてくれと縋すがりつくように頼む。いや帰らない、いや帰れといつて、往来の氷る夜中에서도四隣あたりの眠ねむりを驚ろかせる。……

須永の話をだんだん聞いているうちに、敬太郎はこういう実地小説のはびこる中に年来住み慣れて来た須永もまた人の見ないような芝居をこつそりやつて、口を拭ぬぐつてすましているのかも知れないという気が強くなつて来た。固もとよりその推察の裏に

は先刻^{さつぎ}見た後姿の女が薄い影を投げていた。「ついでに君の分も聞こうじゃないか」と切り込んで見たが、須永はふんと云つて薄笑いをしたただけであつた。その後で簡単に「今日は咽喉^{のど}が痛いから」と云つた。さも小説は有^もつてゐるが、君には話さないのだと云わんばかりの挨拶^{あいさつ}に聞えた。

敬太郎が二階から玄関へ下りた時は、例の女下駄がもう見えなかつた。歸つたのか、下駄箱へしまわしたのか、または氣を利^きかして隠したのか、彼にはまるで見当^{けんとう}がつかかなかつた。表へ出るや否や、どうい^{りよう}料簡^{けん}か彼はすぐ一軒の煙草屋^{たばこや}へ飛び込んだ。そうしてそこから一本の葉巻を銜^{くわ}えて出て來た。それを吹かしながら須田町まで來て電車に乘ろうとする途端^{とたん}に、喫煙御断りという社則を思い出したので、また万世橋の方へ歩いて行つた。彼は本郷の下宿へ歸るまでこの葉巻を持たすつもりで、ゆつくり

ゆつくり足を運ばせながらなお須永の事を考えた。その須永は
 けっしていつものように単独には頭の中へは這入^{はい}つて来なかつ
 た。考えるたびにきつと後姿の女がちらちら跟^ついて来た。しま
 いに「本郷台町の三階から遠眼鏡^{とおめがね}で世の中を覗^{のぞ}いていて、浪漫的^{ロマンてき}
 探険なんて気の利いた真似^{まね}ができるものか」と須永から冷笑^{ひや}か
 されたような心持がし出した。

五

彼は今日^{こんにち}まで、俗にいう下町生活に昵懇^{なじみ}も趣味も有^もち得ない
 男であつた。時たま日本橋の裏通りなどを通つて、身を横にし
 なければ潜^{くぐ}れない格子戸^{こうしど}だの、三和土^たの上から訳^{わけ}もなくぶら下
 がっている鉄灯籠^{かなどうろう}だの、上^あり框^{がまち}の下を張り詰めた綺麗^{きれい}に光る竹

だの、杉だか何だか日光ひが透とおつて赤く見えるほど薄うすつぺらな障子しょうじの腰だのを眼にするたびに、いかにもせせこましそうな心持になる。こう万事がきちりと小さく整のつてかつ光ひかりつていられては窮屈きうくつでたまらないと思う。これほど小ぢんまりと几帳面きちようめんに暮らして行く彼らは、おそらく食後に使う楊枝ようじの削り方けずまで氣にかけているのではなからうかと考える。そうしてそれがことごとく伝説的の法則に支配されて、ちやうど彼らの用いる煙草盆たばこぼんのように、先祖代々順々に拭ふき込まれた習慣しゅうぐんを笠かさに、恐るべく光ひかりっているのだらうと推察する。須永すながの家うちへ行いつて、用もない松まつへ大事だいじそうな雪除ゆきよけをした所や、狭い庭を馬鹿丁寧ばかていねいに枯松葉こしょうえで敷ふきつめた景色けしきなどを見る時ですら、彼は繊細な江戸式の開花ふところの懷ふところに、ぽうと育かつた若旦那わかだんなを聯想れんそうしない訳に行いかなかつた。

第一須永が角帶かくおびをきゆうと締しめてきちりと坐る事からが彼には

変であつた。そこへ長唄ながうたの好きだとかいう御母おつかさんが時々出て来て、滑すべつこい癖くせにアクセントの強い言葉で、舌触したざわりの好い愛嬌あいぎょうを振りかけてくれる折などは、昔から重詰じゅうづめにして蔵の二階へしまつておいたものを、今取り出して来たという風に、出来合できあい以上の旨さうまがあるので、紋切形もんぎりがたとは無論思わないけれども、幾代いくだいもかかつて辞令の練習を積んだ巧みが、その底に潜ひそんでいるとしか受取れなかつた。

要するに敬太郎けいたろうはもう少し調子外れちようしはずの自由なものが欲しかつたのである。けれども今日きょうの彼は少くとも想像の上において平生の彼とは違つていた。彼は徳川時代の湿しめっぽい空氣がいまだに漂ただよつてゐる黒い蔵造くらづくりの立ち並ぶ裏通に、親譲りの家を構えて、敬ちゃん御遊びなという友達を相手に、泥棒ごつこや大將かきがらちようごつこをして成長したかつた。月に一遍ずつ蠣殻町すいてんぐうさまの水天宮様

と深川の不動様へ御参りをして、護摩ごまでも上げたかった。（現に須永は母の御供をしてこういう旧弊きゅうへいな真似まねを当り前のごとくやっている。）それから鉄無地の羽織てつむじでも着ながら、歌舞伎を当世とうせいに崩くずして往来へ流した匂においのする町内を恍惚こうこつと歩きたかった。そうして習慣に縛しばられた、かつ習慣を飛び超こえた艶めかしい葛藤かつとうでもそこに見出したかった。

彼はこの時たちまち森本の二字を思い浮かべた。するとその二字の周囲にある空想が妙に色を変えた。彼は物好ものずきにも自ら進みずかんでこの後うしろ暗ぐらい奇人に握手を求めた結果として、もう少しでとんだ迷惑を蒙こうむるところであつた。幸いに下宿の主人が自分の人格を信じたからいいようなものの、疑ぐろうとすればどこまでも疑ぐられ得る場合なのだから、主人の態度いかに依よつては警察ぐらいへ行かなければならなかつたのかも知れない。と、

こう考えると、彼の空中に編み上げる勝手な浪漫が急に意味を失つて、醜みにい想像からでき上つた雲の峰同様に、意味もなく崩れてしまった。けれどもその奥に口髭くちひげをだらしなく垂らしたふたえまぶち二重瞼の瘡やせぎすの森本の顔だけは粘ねばり強く残つていた。彼はその顔を愛したいような、侮あなごりたいような、また憐あわれみたいような心持になつた。そうしてこの凡庸ぼんような顔の後に解すべからざる怪しい物がぼんやり立つているように思った。そうして彼が記念かたみにくれると云つた妙な洋杖ステツキを聯想れんそうした。

この洋杖は竹の根の方を曲げて柄えにした極きわめて単簡たんかんのものだが、ただ蛇へびを彫つてあるところが普通の杖つえと違つていた。もつとも輸輸出向によく見るように蛇の身をぐるぐる竹に巻きつけた毒々しいものではなく、彫つてあるのはただ頭だけで、その頭が口を開けて何か呑のみかけているところを握にぎりにしたものであつた。

けれどもその呑みかけているのが何であるかは、握りの先が丸く滑つこく削られているので、蛙だか鶏卵だか誰にも見当がつかなかった。森本は自分で竹を伐つて、自分でこの蛇を彫つたのだと云つていた。

六

敬太郎は下宿の門口を潜るとき何より先にまずこの洋杖に眼をつけた。というよりも途すがらの聯想が、硝子戸を開けるや否や、彼の眼を瀬戸物の傘入の方へ引きつけたのである。実をいうと、彼は森本の手紙を受取った当座、この洋杖を見るたびに、自分にも説明のできない妙な感じがしたので、なるべく眼を触れないように、出入の際視線を逸らしたくらいである。と

ころがそうすると今度はわざと見ないふりをして傘入の傍そばを通
 るのが苦になつてきて、極めて軽微きわな程度ではあるけれどもこ
 の変な洋杖におのずと祟たたられたと云う風になつて、しまった。
 彼自身もついには自分の神経を不思議に思い出した。彼は一種
 の利害關係から、過去に溯さかのぼる嫌疑けんぎを恐れて、森本の居所もま
 たその言伝ことづても主人夫婦に告げられないという弱味を有もっている
 には違ちがないが、それは良心の上にどれほどの曇くもりもかけなかった。
 記念かたみとして上げるとわざわざ云つて来たものを、快よく貰もらい受
 ける勇氣の出ないのは、他ひとの好意を空むなしくする点において、面白
 くないにきまつているが、これとても苦になるほどではない。
 ただ森本の浮世の風にあたる運命が近いうちに終りを告げると
 する。(おそろくはのたれ死じにという終りを告げるのだらう。)そ
 の憐あわれな最期さいごを今から予想して、この洋杖が傘入の中に立つて

いるとする。そうして多能な彼の手によつて刻きざまれた、胴から下のない蛇の首が、何物かを吞もうとして吞まず、吐こうとして吐かず、いつまでも竹の棒の先に、口を開あいたまま喰く付ついているとする。——こういう風に森本の運命とその運命を黙つて代表している蛇の頭とを結びつけて考えた上に、その代表者たる蛇の頭を毎日握つて歩くべく、近い内にのたれ死をする人から頼まれたとすると、敬太郎はその時に始めて妙な感じが起るのである。彼は自分でこの洋杖を傘入の中から抜き取る事でもできず、また下宿の主人に命じて、自分の目の届かない所へ片づけさせる訳にも行かないのを大袈裟おおげさではあるが一種の因果いんがのようかつけいに考えた。けれども詩で染めた色彩と、散文で行く活計かつけいとはだいぶ一致しないところもあつて、實際を云うと、これがために下宿を変えて落ちついた方が楽だと思ふほど彼は洋杖わざわいに災さ

れていなかったのである。

今日も洋杖ステッキは依然として傘入の中に立っていた。鎌首げたぼこは下駄箱

の方を向いていた。敬太郎はそれを横に見たなり自分の室へやに上つ

たが、やがて机の前に坐つて、森本にやる手紙を書き始めた。ま

ずこの間向うから来た音信たよりの礼を述べた上、なぜ早く返事を出

さなかつたかという弁解を二三行でもいいからつけ加えたいと

思ったが、それを明らさまに打ち開けては、君のような漂浪者ヴァガボンド

を知己もに有つ僕の不名誉を考えると、書信の往復などはする気

になれなかつたからだとても書くよりほかに仕方がないので、

そこは例の奔走に取り紛れまぎと簡単な一句でごまかしておいた。

次に彼が大連で好都合な職業にありついた祝いの言葉をちよつ

と入れて、その後あとへだんだん東京も寒くなる時節柄、満洲まんしゅうの霜しも

や風はさぞ凌しのぎ悪にくいだろう。ことにあなたの身体からだではひどく応こた

えるに違ちがないから、是非用心して病氣に罹からないようになさいと優しい文句を数行綴すぎようつた。敬太郎から云うと、実にここが手紙を出す主意なのだから、なるべく自分の同情が先方へ徹するよううまに旨くかつ長く、そうして誰が見ても実意の籠こもっているように書きたかつたのだけれども、読み直して見ると、やつぱり普通の人が普通時候の挨拶あいさつに述べる用語以外に、何の新らしいところもないので、彼は少し失望した。と云つて、固々もともと恋人に送る艶書えんしよほど熱烈な真心まごころを籠こめたものでないのは覚悟の前である。それで自分は文章が下手だから、いくら書き直したつて駄目だくらいの口実の下に、そこはそのままにして前さきへ進んだ。

森本が下宿へ置き去りにして行つた荷物の始末については義理にも何とか書き添えなければすまなかつた。しかしその処置のつけ方を亭主に聞くのは厭^{いや}だし、聞かなければ委細の報道はできるはずはなし、敬太郎^{けいたろう}は筆の先を宙に浮かしたまま考えていたが、とうとう「あなたの荷物は、僕から主人に話して、どうでも彼の都合の宜^いいように取り計らわせろとの御依頼でしたが、あなたの千里眼の通り、僕が何にも云わない先に、雷獣^{らいじゅう}の方で勝手に取計つてしまつたようですからさよう御承知を願います。梅の盆栽^{ぼんさい}を下さるという事です、これは影も形も見えないようですから、頂きません。ただ御礼だけ申し述べておきます。それから」とつづけておいて、また筆を休めた。

敬太郎はいよいよ洋杖^{ステツキ}のところへ来たのである。根が正直な男だから、あの洋杖はせつかくの御覚召^{おぼしめし}だから、ちようだいして

毎日散歩の時突いて出ますなどと空々しい嘘は吐けず、と言つて御親切はありがたいが僕は貰いませんとはなおさら書けず。仕方がないから、「あの洋杖はいまだに傘入の中に立っています。持主の帰るのを毎日毎夜待ち暮しているごとく立っています。雷獣もあの蛇の頭へは手を触れる事をあえてしません。僕はあの首を見るたびに、彫刻家としてのあなたの手腕に敬服せざるを得ないです」と好加減な御世辞を並べて、事実を暈す手段とした。

状袋へ名宛を書くときに、森本の名前を思い出そうとしたが、どうしても胸に浮ばないので、やむを得ず大連電気公園内娯楽掛り森本様とした。今までの関係上主人夫婦の眼を憚からなければならぬ手紙なので、下女を呼んでポストへ入れさせる訳にも行かなかつたから、敬太郎はすぐそれを自分の袂の中に蔵

した。彼はそれを持って夕食後散歩かたがた外へ出かける気で寒い梯子段はしごだんを下まで降り切ると、須永すながから電話が掛った。

今日内幸町から従妹いとこが来ての話に、叔父は四五日内に用事で大阪へ行くかも知れないそうだから、余り遅くなつてはと思つて、立つ前に会つて貰もらえまいかと電話で聞いて見たら、宜よろしいという返事だから、行く気ならなるべく早く行つた方がよからう。もつとも電話の上に咽喉のどが痛いので、詳しい話はできなかったから、そのつもりでいてくれというのが彼の用向であつた。敬太郎は「どうもありがとう。じやなるべく早く行くようにするから」と礼を述べて電話を切つたが、どうせ行くなら今夜にでも行つて見ようという気が起つたので、再び三階へ取つて返してこの間拵こしらえたセルの袴はかまを穿はいた上、いよいよ表へ出た。

曲り角へ来てポストへ手紙を入れる事は忘れなかつたけれど

も、^{かんじん}肝心の森本の安否はこの時すでに敬太郎の胸に、ただ微^{かす}かな火^{ほと}氣^{とぼり}を残すのみであつた。それでも状袋が郵便函の口を滑^{すべ}つて、すくと底へ落ちた時は、受取人の一週間以内に封を披^{ひら}く様を想見して、満^{まん}更^{ざら}悪い心持もしまいと思つた。

それから電車へ乗るまではただ一直線にすたすた歩いた。考も一直線に内幸町の方を向いていたが、電車が明^み神^{ようじん}下へ出る時分、何気なく今しがた電話口で須永から聞いた言葉を、頭の内^{うち}で繰り返して見ると、覚えはつと思うところが出て来た。須永は「今日内幸町からイトコが来て」とたしかに云つたが、そのイトコが彼の叔父さんの子である事は疑うまでもない。しかしその子が男であるか女であるかは不完全な日本語のまるで關係しないところである。

「どつちだろう」

敬太郎は突然氣にし始めた。もしそれが男だとすれば、あの後姿の女についての手がかりにはならない。したがって女は彼の好奇心を徒らに刺戟いたずらしただけで、ちつとも動いて来ない。しかしもし女だとすると、日といい時刻といい、須永の玄関から上り具合といい、どうも自分より一足先へ這入はいったあの女らしい。想像と事実を継ぎ合わせる事に巧みな彼は、そうと確かめないうちに、てつきりそうときめてしまった。こう解釈した時彼は、今まで泡立あわだっていた自分の好奇心に幾分の冷水を注さしたような満足を覚えると共に、予期したよりも平凡な方角に、手がかりが一つできたと言うつまらなさをも感じた。

彼は小川町まで来た時、ちよつと電車を下りても須永すながの門口かどぐちまで行つて、友の口から事實を確かめて見たいくらいに思ったが、単純な好奇心以外にそんな立ち入った詮議せんぎをすべき理由をどこにも見出し得ないので、我慢してすぐ三田線に移つた。けれども真直まっすぐに神田橋を抜けて丸の内を疾駆する際にも、自分は今須永の従妹いとこの家に向つて走りつつあるのだという心持は忘れなかつた。彼は勧業銀行の辺あたりで下りるはずのところを、つい桜田本郷町まで乗り越して驚ろいてまた暗い方へ引き返した。淋さびしい夜であつたが尋ねる目的の家はすぐ知れた。丸い瓦斯ガスに田口たぐちと書いた門の中を覗のぞいて見ると、思つたより奥深かまえそうな構であつた。けれども實際は砂利を敷いた路みちが往来から筋違すじかいに玄関を隠しているのと、正面を遮さえぎる植込がこんもり黒ずんで立っているのとで、幾分いかにか厳めしい景氣を夜陰に添えたままで、門内に

這入^{はい}つたところでは見付^{みつき}ほど手広^{すまい}な住居でもなかつた。

玄関^{せいやうまが}には西洋擬^{がい}いの硝子戸^{ガラスど}が二枚閉^たててあつたが、頼^{たの}むといつ

ても、電鈴^{ベル}を押しても、取次^{とりご}がなかなか出て来ないので、敬太^{けいたろう}郎

はやむを得ずしばらくその傍^{そば}に立つて内の様子を窺^{うか}がつてい

た。すると、どこからかようやく足音が聞こえ出して、眼の前

の擦硝^{すりガラス}子がぱつと明るくなつた。それから庭下駄^{にわげた}で三和土^{たたく}を踏

む音が二足三足したと思うと、玄関の扉^あが片方開いた。敬太郎

はこの際取次の風采^{ふうさい}を想望するほどの物数奇^{ものずき}もなく、全く漫然

と立^たつていただけであるが、それでも緋^{かすり}の羽織^{はおり}を着た書生か、

双子^{ふたご}の綿入^{わたいり}を着た下女が、一応御辞儀をして彼の名刺を受取る

事とのみ期待していたのに、今戸^{いま}を半分開けて彼の前に立つた

のは、思いも寄らぬ立派な服装^{なり}をした老紳士であつた。電氣の

光を背中に受けているので、顔は判然^{はつきり}しなかつたが、白縮緬^{しろちりめん}の

帯だけはすぐ彼の眼に映じた。その瞬間にすぐこれが田口とい
 う須永の叔父さんだろうという感じが敬太郎の頭に働いた。け
 れども事が余り意外なので、すぐ挨拶あいさつをする余裕よゆうも出ず少しは
 あっけに取られた気味で、ぼんやりしていた。その上自分を
 はなはだ若く考えている敬太郎には、四十代だろうが五十代だろ
 うが乃至ないし六十代だろうがほとんど区別のない一様いちようの爺さんに見
 えるくらい、彼は老人に対して親しみのない男であつた。彼は
 四十五と五十五を見分けてやるほどの同情心を年長者に対して
 有もたなかつたと同時に、そのいずれに向つても慣れないうちは
 異人種のような無気味ぶきみを覚えるのが常なので、なおさら迷まどひつ
 いたのである。しかし相手は何も気にかからない様子で、「何
 か用ですか」と聞いた。丁寧ていねいでもなければ軽蔑けいべつでもない至つて
 無雑作むざうさなその言葉つきが、少し敬太郎の度胸を回復させたので、

彼はようやく自分の姓名を名乗ると共に手短かく来意を告げる機会を得た。すると年嵩としかさな男は思い出したように、「そうそうさつきいちどろう先刻市蔵（須永の名）から電話で話がありました。しかし今夜おいで御出になるとは思いませんでしたよ」と云った。そうして君そう早く来たつていけないという様子がその裏に見えたので、敬太郎は精一杯言訳せいいつぱいをする必要を感じた。老人はそれを聞くでもなし聞かぬでもなしといった風に黙つて立つていたが、「そんならまたいらつしやい。四五日うちにちよつと旅行しますが、その前に御目にかかれる暇さえあれば、御目にかかっても宜ようござんす」と云った。敬太郎は篤あつく礼を述べてまた門を出たが、暗い夜よの中で、礼の述べ方がちと馬鹿丁寧過ぎたと思つた。

これはずっと後あとになつて、須永の口から敬太郎に知れた話であるが、ここの主人は、この時玄関に近い応接間で、たった一

人碁盤ごばんに向つて、白石と黒石を互違たがいちがいに並べながら考え込んでいたのだそうである。それは客と一石いつせきやった後の引続きとして、是非共ある問題を解決しなければ気がすまなかつたからであるが、肝心かんじんのところでは敬太郎がさも田舎者いなかものらしく玄関を騒がせるものだから、まずこの邪魔を追つ払つた後でというつもりになつて、じれつたさの余り自分と取次に出たのだという。須永にこの顛末てんまつを聞かされた時に、敬太郎はますます自分の挨拶あいさつが丁寧ていねい過ぎたような気がした。

九

中なか一日置いちにちいて、敬太郎けいたろうは堂々と田口へ電話をかけて、これからすぐ行つても差支さしつかえないかと聞き合せて。向うの電話口へ出

たものは、敬太郎の言葉つきや話しぶりの比較的横風おうふうなところからだいぶ位地の高い人とでも思つたらしく、「どうぞ少々御待ち下さいまし、ただいま主人の都合をちよつと尋ねますから」と丁寧な挨拶をして引き込んだが、今度返事を伝えるときは、「ああ、もしもし今ね、来客中で少し差支えるそうです。午後の一時頃来るなら来ていただきたいという事です」と前よりは言葉がよほど粗末ぞんざいになつていた。敬太郎は、「そうですか、それでは一時頃上りますから、どうぞ御主人に宜しくよろ」と答えて電話を切つたが、内心は一種厭いやな心持がした。

十二時かつきりに午飯ひるめしを食うつもりで、あらかじめ下女に云いつけておいた膳ぜんが、時間通り出て来ないので、敬太郎は騒々しく鳴る大学の鐘に急せぎ立てられでもするように催促おとといをして、できるだけ早く食事を済ました。電車の中では一昨日の晩会つ

た田口の態度を思い浮べて、今日もまたああいう風に無雑作むぞうさな取扱を受けるのか知らん、それとも向うで会うというくらいだから、もう少しは愛嬌あいぎょうのある挨拶でもしてくれるか知らんと考えなどした。彼はこの紳士の好意で、相当の地位さえ得られるならば、多少腰を曲かめて窮屈な思をするぐらいは我慢するつもりであつた。けれども先刻電話の取次に出たもののように、五分と経たたないうちに、言葉使いを悪い方に改められたりすると、もう不愉快になつて、どうかそいつがまた取次に出なければいいかと思う。その癖くせ自分のかけ方の自分としては少し横風過ぎた事にはまるで気がつかない性質たであつた。

小川町の角で、斜はすに須永すながの家へ曲まがる横町を見た時、彼ははつと例の後姿の事を思い出して、急に日蔭ひかげから日向ひなたへ想像を移した。今日も美しい須永の従妹いとこのいる所へ訪問に出かけるのだ

と自分で自分に教える方が、億劫おつくうな手数てかずをかけて、好い顔もしない爺じいさんに、衣食みちの途を授けて下さいと泣なきつきに行くのだと意識するよりも、敬太郎に取つては遙はるかに麗うらちかであつたからである。彼は須永の従妹いとこと田口の爺さんを自分勝手に親子ときめておきながらどこまでも二人を引き離して考えていた。この間の晩田口と向き合つて玄関先に立つた時も、光線の具合で先方さきの人品は判然はつきり分らなかつたけれども、眼鼻だちの輪廓りんかくだけで評したところが、あまり立派な方でなかつた事は、この爺さんの第一印象として、敬太郎の胸に夜目よめにも疑うたがなく描かれたのである。それでいて彼はこの男の娘なら、須永との関係はどうあるうとも、器量きりようはあまりいい方じやあるまいという気がどこにも起らなかつた。そこで離れていて合い、合つていて離れるような日向日蔭ひなたひかげの裏表を一枚にした頭を彼は田口家に対して抱いだいて

いたのである。それを互違にくり返した後、あと彼は田口の門前に立った。するとそこに大きな自働車ぎよしやが御者を乗せたまま待つていたので、少し安からぬ感じがした。

玄関へ掛つて名刺を出すと、小倉こくらの袴はかまを穿はいた若い書生がそれを受取つて、「ちよつと」と云つたまま奥へ這入はいつて行つた。

その声うしろすがたが確かに先刻電話口で聞いたのに違ないので、敬太郎は彼の後姿を見送りながら厭いやな奴やつだと思つた。すると彼は名刺を持つたまままた現われた。そうして「御氣の毒ですが、ただいま来客中ですからまたどうぞ」と云つて、敬太郎の前に突立つたつていた。敬太郎も少しむつとした。

「先程電話で御都合を伺つたら、今客があるから午後一時頃来いという御返事でしたが」

「実はさっきの御客がまだ御帰りにならないで、御膳おぜんなどが出

て混雑ごたごたしているんです」

落ちついて聞きさえすれば満更無理もない言訳なのだが、電話以後この取次しやくが癪さわに障さわっている敬太郎には彼の云い草がいかにも氣に喰くわなかつた。それで自分の方から先せんを越すつもりか何かで、「そうですか、たびたび御足労でした。どうぞ御主人へよろしく」と平仄ひようそくの合わない捨台詞すてぜりふのような事を云った上、何だこんな自動車がと云わぬばかりにその傍そばを擦すり抜けて表へ出た。

十

彼はこの日必要な会見を都合よく済すました後あと、新らしく築地に世帯を持った友人の所へ廻まわつて、須永すながと彼の従妹いとことそれから

彼の叔父に当る田口とを想像の糸で巧みに継ぎ合せつつある
いちぶしじゅう 一部始終を御馳走に、晩まで話し込む氣でいたのである。けれ
ども田口の門を出て日比谷公園の傍に立つた彼の頭には、そんな
よゆう 余裕はさらになかった。後姿を見ただけではあるが、在所をす
でに突き留めて、今その人の家を尋ねたのだという陽気な心持
は固よりなかった。位置を求めにここまで来たという自覚はな
おなかった。彼はただ屈辱を感じた結果として、腹を立ててい
ただけである。そうして自分を田口のような男に紹介した須永
こそこの取扱に対して当然責任を負わなくてはならないと感じ
ていた。彼は帰りがけに須永の所へ寄つて、逐一顛末を話した
上、存分文句を並べてやろうと考えた。それでまた電車に乗つ
て一直線に小川町まで引返して来た。時計を見ると、二時には
まだ二十分ほど間があつた。須永の家の前へ来て、わざと往来

から須永須永と二声ばかり呼んで見たが、いるのかいないのか二階の障子しょうじは立て切ったままついに開あかなかつた。もつとも彼は体裁家ていさいやで、平生からこういう呼び出し方を田舎者いなかものらしいといつて厭いやがつていたのだから、聞こえても知らん顔をしているのはなからうかと思つて、敬太郎けいたろうは正式に玄関の格子口こうしぐちへかかつた。けれども取次に出た仲働なかばたらきの口から「午少ひるし過に御出ましになりました」という言葉を聞いた時は、ちよつと張合が抜けて少しの間黙つて立つていた。

「風邪かぜを引いていたようでしたが」

「はい、御風邪を召していらつしやいましたが、今日はだいぶ好いからとおつしやつて、御出かけになりました」

敬太郎は帰ろうとした。仲働は「ちよつと御隠居さまに申し上げますから」といって、敬太郎を格子のうちに待たしたまま

奥へ這入^{はい}った。と思うと襖^{ふすま}の陰から須永の母の姿が現われた。背の高い面長^{おもなが}の下町風に品^{ひん}のある婦人であつた。

「さあどうぞ。もうそのうち帰りましようから」

須永の母にこう云い出されたが最後、江戸慣^{えどな}れない敬太郎はど
うそれを断つて外へ出ていいか、いまだにその心得がなかつた。
第一^{だいち}どこで断る隙間もないように、調子の好い文句がそれから
それへとずるずる彼の耳へ響いて来るのである。それが世間体^{せけんてい}
の好い御世辞^{おせじ}と違つて、引き留められているうちに、上つては
迷惑だろうという遠慮がいつの間にか失^なくなつて、つい氣の毒
だから少し話して行こうという氣になるのである。敬太郎は云
われるままにとうとう例の書齋へ腰をおろした。須永の母が御
寒いでしようと云つて、仕切りの唐紙^{からかみ}を締^しめてくれたり、さあ
御手をお出しなさいと云つて、佐倉^{さくら}を埋^いけた火鉢^{ひばち}を勧めてくれ

たりするうちに、一時昂奮こうふんした彼の気分はしだいに落ちついて来た。彼はシキとかいう白い絹あきたふぎへ秋田蓑あきたふぎを一面に大きく摺すつた襖ふすまの模様だの、唐桑からくわらしくてらてらした黄色い手焙てあぶりだのを眺ながめて、このしとやかで能弁な、人を外そらす事を知らないと言った風の母と話をした。

彼女の語るところによると、須永は今日矢来やらいの叔父うちの家へ行つたのだそうである。

「じゃついでだから帰りに小日向こびなたへ廻つて御寺参りをして来ておくれって申しましたら、御母さんは近頃無精ぶしよくになつたようですね、この間も他ひとに代理をさせたじゃありませんか、年を取つたせいかしらなんて悪口を云い云い出て参りましたが、あれもねあなた、せんだつて中じゅうから風邪を引いて咽喉のどを痛めておりますので、今日も何なら止した方がいいじゃないかととめて見ました

が、やつぱり若いものは用心深いようでもどこか我無しやらで、年寄の云う事などにはいつさい無頓着でございますから……」

須永の留守へ行くと、彼の母は唯一の楽みのようにこういう調子で^{せがれ}俵の話をするのが常であつた。敬太郎の方で須永の評判でも持ち出そうものなら、いつまでもその問題の後へ喰付いて来て、容易に話頭を改めないのが例になつていた。敬太郎もそれにはだいぶ慣れているから、この際も向うのいう通りをただふんふんとおとなしく聞いて、一段落の来るのを待つていた。

十一

そのうち話がいつか^{かんじん}肝心の須永を^{すなが}逸れて、矢来^その叔父という人の方へ移つて行つた。これは内幸町と違つて、この御母さん^{おつか}

の實の弟に當る男だそうで、一種の贅沢屋ぜいたくやのように敬太郎けいたろうは須永から聞いていた。外套がいとうの裏は襦子しゆすでなくては見つともなくて着られないと云つたり、要いりもしないのに古渡りこわたの更紗玉さらさだまとか号して、石だか珊瑚さんごだか分らないものを愛玩あいがんしたりする話はいまだに覚えていた。

「何にもしないで贅沢ぜいたくに遊んでいられるくらい好い事はないんだから、結構な御身分ですね」と敬太郎が云うのを引き取るように母は、「どうしてあなた、打ち明けた御話が、まあどうにかこうにかやつて行けるというまでで、樂だの贅沢だのという段にはまだなかなかなのでございますからいけません」と打ち消した。

須永の親戚に當る人の財力が、さほど敬太郎に關係のある訳でもないので、彼はそれなり黙つてしまった。すると母は少し

でも談話の途切れるのを自分の過失でもあるように、すぐ言葉^{ことば}を継いだ。

「それでも妹婿^{いもむすこ}の方は御蔭^{おかげ}さまで、何だかだって方々の会社へ首を突っ込んでおりますから、この方はまあ不自由なく暮しておる模様でございますが、手前共や矢来の弟^{おとこ}などになりますと、云^いわば、浪人^{ろうにん}同様に、昔に比^{くら}べたら、尾羽うち枯らさないばかりの体^{てい}たらくだつて、よく弟ともそう申しては笑うこつてございますよ」

敬太郎は何となく自分の身の上を顧^{かえり}みて氣恥かしい思をした。幸^{さいわい}にさきがすらすら喋^{しゃべ}舌^{しやべ}つてくれるので、こつちに受け答^{とこ}をする文句を考える必要がないのをせめてもの得として聞き続けた。「それにね、御承知の通り市蔵がああいう引つ込思案の男だもんでござんすから、私もただ学校を卒業させただけでは、全く心

配が抜けませんので、まことに困り切ります。早く氣に入つた嫁でも貰つて、年寄に安心でもさせてくれるようにおしなと申しますと、そう御母さんの都合のいいようにばかり世の中は行きやしませんで、てんで相手にしないんでございますよ。そんなら世話をしてくれる人に頼んで、どこへでもいいから、務つとめにでも出る氣になればまだしも、そんな事にはまたまるで無頓着むとんじやくであなた……」

敬太郎はこの点において實際須永が横着過おうちやくすぎると平生ふだんから思つていた。「余計な事です、少し目上の人から意見でもして上げるようにしたらどうでしょう。今御話の矢来の叔父さんからでも」と全く年寄に同情する氣で云つた。

「ところがこれがまた大の交際嫌そうばんの変人でございまして、忠告どころか、何だ銀行へ這入はいつて算盤そろばんなんかパチパチ云わすなん

て馬鹿があるもんかと、こうでございますから頭から相談にも何にもなりません。それをまた市蔵が嬉うれしがりますので。矢来やらいの叔父の方が好きだとか気が合うとか申しちやよく出かけます。今日なども日曜じゃあるし御天氣は好しするから、内幸町の叔父が大阪へ立つ前にちよつとあちらへ顔でも出せばいいのでございますけれども、やつぱり矢来へ行くんだって、とうとう自分の好きな方へ参りました」

敬太郎はこの時自分が今日何のために馳かけ込むようにこの家を襲おそつたかの原因について、また新らしく考え出した。彼は須永の顔を見たら随分過激な言葉を使つてもその不都合を責めた上、僕はもう二度とあすこの門は潜くぐらないつもりだから、そう思つてくれたまえぐらいの台詞せりふを云つて帰る氣でいたのに、肝心かんじんの須永は留守るすで、事情も何も知らない彼の母から、逆さかさにいろ

いろな話をしかけられたので、怒おこつてやろうという気は無論抜けてしまったのである。が、それでも行きがかり上、田口と会見を遂とげ得なかつた顛末てんまつだけは、一応この母の耳へでも構わなから入れておく必要があるだろう。それには話の中に内幸町へ行くとか行かないとかが問題になっている今が一番よからう。——こう敬太郎は思った。

十二

「実はその内幸町の方へ今日私も出たんですが」と云い出すと、自分の息子の事ばかり考えていた母は、「おやそうでございましてか」とやつと気がついてすまないという顔つきをした。この間から敬太郎けいたろうが躍起やつきになつて口をさが探している事や、探しあぐ

んで須永すながに紹介を頼んだ事や、須永がそれを引き受けて内幸町の叔父に会えるように周旋した事は、須永の傍そばにいる母として彼女かのおんなのことごとく見たり聞いたりしたところであるから、行き届いた人なら先方さきで何も云い出さない前に、こつちからどんな模様ですぐらいは聞いてやるべきだとも思つたのだろう。こゝう觀察した敬太郎は、この一句を前置に、今までの成行を残らず話そうと力つとめにかかつたが、時々相手から「そうでございますとも」とか、「本当にまあ、間の悪い時にはね」とか、どつちにも同情したような間投詞が出るので、自分がむかつ腹ばらを立てあくたいて悪体を吐いた事などは話のうちから綺麗きれいに抜いてしまった。須永の母は氣の毒という言葉は何遍もくり返した後あとで、田口を弁護するようにこんな事を云つた。――

「そりやあ実のところ忙しい男なので。妹いもとなどもああして一つ家

に住んでおりますようなものの、——何でござんしょう。——

おちおち落々話のできるのはおそらく一週間に一日もございますまい。

私が見かねて要作さんようさくいくら御金が儲もうかるたつて、そう働ら

て身体からだを壊しちや何にもならないから、たまには骨休めをなさ

いよ、身体が資本もとじやありませんかと申しますと、おいらもそ

う思つてゐるんだが、それからそれへと用が湧わいてくるんで、傍そば

から掬しやくい出さないと、用が腐くちまうから仕方がないなんて

笑つて取り合いませんので。そうかと思うとまた妹や娘に今日

はこれから鎌倉へ伴つれて行く、さあすぐ支度をしろつて、まる

で足元から鳥が立つように急せぎ立てる事もございますが……」

「御嬢さんがおありなのですか」

「ええ二人おります。いずれも年頃でございますから、もうそ

ろそろどこかへ片づけるとか婿むこを取るとかしなければなりません

まいが」

「そのうちの一人の方が、須永君のところへ御出になる訳でもないんですか」

母はちよつと口籠くちごもつた。敬太郎もただ自分の好奇心を満足さ

せるためにあまり立ち入った質問をかけ過ぎたと気がついた。何とかして話題を転じようと考えているうちに、相手の方で、

「まあどうなりますか。親達の考もございましょうし。当人達とうにんたち

の存じ寄りもしかと聞糺きぎただして見ないと分りませんし。私ばかり

でこうもしたい、ああもしたいといくら熱急思やきもきつてもこればかり

りは致し方がございせん」と何だか意味のありそうな事を云つ

た。一度退ひきかけた敬太郎の好奇心はこの答でまた打ち返して

来そうにしたが、善よくないという克己心こつきしんにすぐ抑えられた。

母はなお田口の弁護をした。そんな忙がしい身体からだだから、時

によると心にもない約束違ひなどをする事もあるが、いったん引き受けた以上は忘れる男ではないから、まあ旅行から帰るまで待って、緩ゆるくり会つたら宜よろかろうという注意とも慰藉いしやともつかない助言じよごんも与えた。

「矢来のはおつても会わん方で、これは仕方がございませんが、内幸町のはいなくても都合さえつけば馳かけて帰つて来て会うといった風の性質たぢでございますから、今度旅行から帰つて来さえすれば、こつちから何とも云つてやらないでも、向うできつと市蔵のところへ何とか申して参りますよ。きつと」

こう云われて見ると、なるほどそういう人らしいが、それはこつちがおとなしくしていればこそで、先刻さつきのようにふんぷん怒つてはとうてい物にならないにきまり切っている。しかし今更いまさらそれを打ち明ける訳には行かないので、敬太郎はただ黙つてい

た。須永の母はなお「あんな顔はしておりますが、見かけによらない実意のある剽軽者ひょうきんものでございますから」と云つて一人で笑つた。

十三

剽軽者という言葉は田口の風采ふうさいなり態度なりに照り合わせて見て、どうも敬太郎けいたろうの腑ふに落ちない形容であつた。しかし實際を聞いて見ると、なるほど当つているところもあるように思われた。田口は昔むかしある御茶屋へ行つて、姉さんこの電気灯は熱ほてり過ぎるね、もう少し暗くしておくれと頼んだ事があるそうだ。下女が怪訝けげんな顔をして小さい球と取り換えましようかと聞くと、いいえさ、そこをちよいと捻ねじつて暗くするんだと真面目まじめに云い

つけるので、下女はこれは電気灯のない田舎いなかから出て来た人に違ないと見て取ったものか、くすくす笑いながら、旦那電気はランプと違って捻ひねったって暗くはなりませんよ、消えちまうだけですから。ほらねとぱちツと音をさせて座敷を真暗にした上、またぱつと元通りに明るくするかと思うと、大きな声でばあと云った。田口は少しも悄然しよげずに、おやおやまだ旧式を使ってるね。見つともないじゃないか、ここの家うちにも似合わないこつた。早く会社の方へ改良を申し込んでおくといい。順番に直してくれるから。ときももつともらしい忠告を与えたので、下女もとうとう真まに受け出して、本当にこれじゃ不便ね、だいち点つけつ放ばなしで寝る時なんか明る過ぎて、困る人が多いでしょうからときも感心したらしく、改良に賛成したそうである。ある時用事が出来て門司もじとか馬関ばかんとかまで行つた時の話はこれよりもよほど

念が入っている。いっしょに行くべきはずのAという男に差支さしつかえが起つて、二日ばかり彼は宿屋で待ち合あわしていた。その間のたいくつまぎ退屈紛れに、彼はAを一つ担かついでやろうと巧たくらんだ。これは町を歩いている時、一軒の写真屋の店先でふと思いついた悪戯いたづらで、彼はその店から地方ところの芸者の写真を一枚買ったのである。その裏へA様と書いて、手紙を添えた贈物のように拵こしらえた。その手紙は女を一人雇つて、充分の時間を与えた上、できるだけAの心を動かすように艶めなまかしく曲くねらしたもので、誰が貰もらつても嬉しうれい顔をするに足るばかりか、今日の新聞を見たら、明日あしたここへ御着のはずだと出ていたので、久しぶりにこの手紙を上げるんだから、どうか読みしだい、どこそこまで来ていただきたいと書いたなかなか安くないものであつた。彼はその晩自分でこの手紙をポストへ入れて、翌日配達の時またそれを自分で受取つた

なり、Aの来るのを待ち受けた。Aが着いても彼はこの手紙をなかなか出さなかつた。力めて真面目な用談についての打合せなどを大事らしくし続けて、やつと同じ食卓で晚餐の膳に向つた時、突然思い出したように袂の中からそれを取り出してAに与えた。Aは表に至急親展とあるので、ちよつと箸を下に置く
と、すぐ封を開いたが、少し読み下すと同時に包んである写真を
抜いて裏を見るや否や、急に丸めるように懐へ入れてしまった。
何か急の用でもできたのかと聞くと、いや何というばかりで、
不得要領にまた箸を取つたが、どこことなくそわそわした様子で、
まだ段落のつかない用談をそのままに、少し失礼する腹が痛い
からと云つて自分の部屋に帰つた。田口は下女を呼んで、今か
ら十五分以内にAが外出するだろうから、出るときは車が待つ
てでもいたように、Aが何にも云わない先に彼を乗せて馳け出

して、その思わく通りどこの何という家の門うちかどへおろすようにし
 ると云いつけた。そうして自分はAより早く同じ家へ行つて、
 主婦かみさんを呼ぶや否や、今おれの宿の提灯ちようちんを点けた車に乗つて、これ
 この男が来るから、来たらすぐ綺麗きれいな座敷へ通して、叮嚀ていねいに取
 扱つて、向うで何にも云わない先に、御連様おつれさまはとうから御待兼おまちかねで
 ございますと云つたなり引き退がつて、すぐおれのところへ知
 らせてくれと頼んだ。そうして一人で煙草たばこを吹かして腕組をし
 ながら、事件の経過を待つていた。すると万事が旨い具合うまに予
 定の通り進行して、いよいよ自分の出る順が来た。そこでAの
 部屋の傍そばへ行つて間の襖ふすまを開けながら、やあ早かつたねと挨拶あいさつ
 すると、Aは顔の色を変えて驚ろいた。田口はその前へ坐り込
 んで、実はこれこれだと残らず自分の悪戯いたずらを話した上、「担かついだ
 代りに今夜は僕おれが奢おごるよ」と笑いながら云つたんだという。

「こういう飄氣ひょうけた真似まねをする男なんでございますから」と須永の母も話した後あとでおかしそうに笑った。敬太郎はあの自働車はまさか悪戯いたづらじゃなかったろうと考えながら下宿へ帰った。

十四

自動車事件以後敬太郎けいたろうはもう田口の世話になる見込はないものと諦あきらめた。それと同時に須永すながの従弟いとこと仮定された例の後姿うしろすがたの正体も、ほぼ発端ほったんの入口に当たる浅いところではたりと行きとまったのだと思うと、その底にはがゆいようなまた煮切にえきらないような不愉快があつた。彼は今日こんにちまで何一つ自分の力で、先へ突き抜けたという自覚を有もつていなかった。勉強だろが、運動だろが、その他何事に限らず本氣にやりかけて、貫ぬき

終おほせた試ためしがなかった。生れてからたつた一つ行けるところまで行つたのは、大学を卒業したくらいなものである。それすら精を出さずにとぐろばかり巻きたがつているのを、向むこうで引き摺ずり出してくれたのだから、途中で動けなくなつた間まだる怠ださのない代りには、やつとの思いで井戸を掘り抜いた時の晴せい々せいした心持も知らなかつた。

彼はぼんやりして四五日過ぎた。ふと学生時代に学校へ招待したある宗教家の談話を思い出した。その宗教家は家庭にも社会にも何の不満もない身分なのに、自みづから進んで坊主になつた人で、その当時の事情を述べる時に、どうしても不思議でたまらないからこの道に入つて見たと云つた。この人はどんな朗らかに透すき徹とほるような空の下に立つても、四方から閉じ込められているような気がして苦しかったのだそうである。樹を見ても家

を見ても往来を歩く人間を見ても鮮かに見えながら、自分だけあざや硝子張の箱の中に入れられて、外の物と直じかに続いていない心持が絶えずして、しまいには窒息ちっそくするほど苦しくなつて来るんだという。敬太郎はこの話を聞いて、それは一種の神経病に罹かかつていたのではなからうかと疑つたなり、今日まで氣にもかけずにいた。しかしこの四五日ぼんやり屈託くつたくしているうちによくよく考えて見ると、彼自身が今までに、何一つ突き抜いて痛快だという感じを得た事のないのは、坊主にならない前のこの宗教家の心にどこか似た点があるようである。もちろん自分のは比較にならないほど微弱で、しかも性質がまるで違つているから、この坊さんのようにえらい勇断をする必要はない。もう少し奮発きぱして氣張きぱる事さえ覚えれば、当つても外はずれても、今よりはまだ痛快に生きて行かれるのに、今日こんにちまでついぞそこに心を用い

る事をしなかつたのである。

敬太郎は一人でこう考えて、どこへでも進んで行こうと思つたが、また一方では、もうすつぽ^{あと}抜けの後の祭のような気がして、何という当も^{あて}なくまた三四日^{さんよつか}ぶらぶらと暮した。その間に有楽座へ行つたり、落語を聞いたり、友達と話したり、往来を歩いたり、いろいろやつたが、いずれも薬缶頭^{やかんあたま}を攫^{つか}むと同じ事で、世の中は少しも手に握れなかつた。彼は碁^ごを打ちたいのに、碁を見せられるという感じがした。そうして同じ見せられるなら、もう少し面白い波瀾曲折^{はらんきよくせつ}のある碁が見たいと思つた。

すると直須永^{すぐ}と後姿の女との関係が想像された。もともと頭の中でむやみに色沢^{つや}を着けて奥行^{おくゆき}のあるように組み立てるほどの関係でもあるまいし、あつたところが他の事を余計なおせつかいだと、自分で自分を嘲^{あざ}けりながら、ああ馬鹿らしいと思う後^{あと}

から、やつぱり何かあるだろうという好奇心が今のうちにちよ
いちよいと閃めいて来るのである。そうしてこの道をもう少し
辛抱強く先へ押して行ったら、自分が今まで経験した事のない
浪漫的な或物にぶつかるかも知れないと考え出す。すると田口
の玄関で怒つたなり、あの女の研究まで投げてしまった自分の
短気を、自分の好奇心に釣り合わない弱味だと思い始める。

職業についても、あんな些細な行違のために愛想づかしをた
とい一句でも口にして、自分と田口の敷居を高くするはずでは
なかったと思う。あれでできるともできないとも、まだ方かたのつ
かない未来を中途半端に仕切ってしまった。そうして好んで煮
きらない思いに悩んでいる姿になってしまった。須永の母の保
証するところでは、田口という老人は見かけに寄らない親切気
のある人だそうだから、あるいは旅行から帰って来た上で、また

改めて会つてくれないとも限らない。が、こつちからもう一遍
 会見の都合を問い合せたりなどして、常識のない馬鹿だと輕蔑さげす
 まれてもつまらない。けれどもどの道突き抜けた心持をしつか
 り捕つかまえるためには馬鹿と云われるまでも、そこまで突っかけ
 て行く必要があるだろう。——敬太郎は屈託しながらもいろい
 ろ考えた。

十五

けれども身の一大事を即座に決定するといふ非常な場合と
 違つて、敬太郎けいたろうの思案には屈託うちの裏に、どこか呑気のんきなものがふ
 わふわしていた。この道をとどのつまりまで進んで見ようか、
 またはこれぎりやめにして、さらに新らしいものに移る支度を

しようか。問題は煎じつめるまでもなく当初から至極簡単にで
 き上つていたのである。それに迷うのは、一度籤を引き損なつ
 たが最後、もう浮ぶ瀬はないという非道い目に会うからではな
 くつて、どつちに転んでも大した影響が起らないため、どうでも
 好いという怠けた心持がいつしらず働らくからである。彼は眠
 い時に本を読む人が、眠氣に抵抗する努力を厭いながら、文字
 の意味を判明頭に入れようと試みるごとく、呑氣の懷で決断の
 卵を温めている癖に、ただ旨く孵化らない事ばかり苦にしてい
 た。この不決断を逃れなければという口実の下に、彼は暗に自
 分の物数奇に媚びようとした。そうして自分の未来を売卜者の
 八卦に訴えて判断して見る氣になつた。彼は加持、祈祷、御封、
 虫封じ、降巫の類に、全然信仰を有つほど、非科学的に教育さ
 れてはいなかつたが、それ相当の興味は、いずれに対しても昔

から今日^{こんにち}まで失わずに成長した男である。彼の父は方位^{ほうい}九星^{きゅうせい}に詳しい神経家であつた。彼が小学校へ行く時分の事であつたが、ある日曜日に、彼の父は尻^{はし}を端折^{はしよ}つて、鋏^{くわ}を担^かついだまま庭へ飛び下りるから、何をするのかと思つて、後^{あと}から跟^ついて行こうとすると、父は敬太郎に向つて、御前はそこにいて、時計を見ていろ、そうして十二時が鳴り出したら、大きな声を出して合図^{あひづ}をしてくれ、すると御父さんがあの乾^{いぬい}に当る梅の根っこを掘り始めるからと云いつけた。敬太郎は子供心にまた例の家相だと思つて、時計がちゃんと鳴り出すや否や命令通り、十二時ですよと大きな声で叫んだ。それで、その場は無事に済んだが、あれほど正確に鋏^{くわ}を下ろすつもりなら、肝心^{かんじん}の時計が狂つていないようにあらかじめ直しておかなくてはならないはずのだのと敬太郎は父の迂闊^{うかつ}をおかしく思つた。学校の時計と自分の家^{うち}

のとはその時二十分近く違っていたからである。ところがその後摘草ごつみくさに行つた帰りに、馬に蹴けられて土堤どてから下へ転がり落ちた事がある。不思議に怪我けがも何もしなかったのを、御祖母おばあさんが大層喜んで、全く御地藏様が御前の身代りに立つて下さつた御蔭おかげだこれ御覧ごらんと云つて、馬の繋つないであつた傍そばにある石地藏の前に連れて行くと、石の首がぼくりと欠けて、涎掛よだれかけだけが残っていた。敬太郎の頭にはその時から怪しい色をした雲が少し流れ込んだ。その雲が身体からだの具合や四辺あたりの事情で、濃くなつたり薄くなつたりする変化はあるが、成長した今日こんにちに至るまで、いまだに抜け切らずにいた事だけはたしかである。

こういう訳わけで、彼は明治の世に伝わる面白い職業の一つとして、いつでも大道占だいいちうらないの弓張提灯ゆみはりぢようちんを眺めていた。もつとも金を払ぜいつて笠竹ちくの音を聞くほどの熱心はなかったが、散歩のついで

に、寒い顔を提灯の光に映した女などが、悄然^{しよんぼり}そこに立っているのを見かけると、この暗い影を未来に投げて、思案に沈んでいる憐^{あわ}れな人に、易者^{えきしや}がどんな希望と不安と畏怖^{いふ}と自信とを与えるだろうという好奇心に惹^ひかされて、面白半分、そつと傍へ寄つて、陰の方から立聞^{たちきき}をする事がしばしばあつた。彼の友の某^{なにがし}が、自分の脳力に悲観して、試験を受けようか学校をやめようかと思^{わづら}い煩^{わづら}っている頃、ある人が旅行のついでに、善光寺如来^{ぜんこうじにょらい}の御神籤^{おみくじ}をいただき第五十五の吉というのを郵便で送つてくれたら、その中に雲散^{くもさん}じて月重ねて明らかなり、という句と、花発^{ひら}いて再び重栄^{ちやうえい}という句があつたので、物は試しだからまあ受けて見ようと云つて、受けたら綺麗^{きれい}に及第した時、彼は興に乗つて、方々の神社で手当りしだい御神籤をいただき廻つた事さえある。しかもそれは別にこれという目的なしにいただいた

のだから彼は平生でも、優に売卜者うらないしやの顧客とくいになる資格を充分具えていたに違ない。その代り今度のような場合にも、どこか慰さみがてらに、まあやつて見ようという浮氣がだいぶ交つていた。

十六

敬太郎けいたろうはどこの占うらない者しやに行つたものかと考えて見たが、あいにくだこという当あてもなかった。白山はくさんの裏とか、芝公園の中とか、銀座何丁目とか今までに名前を聞いたのは二三軒あるが、むやみに流行はやるのは山師やましらしくつて行く氣にならず、と云つて、自分で嘘うそと知りつつ出鱈目でたらめを強しいてもっともらしく述べる奴やつはなお不都合であるし、できるならば余り人の込み合わない家うちで、

閑静な髯を生やした爺さんが奇警な言葉で、簡潔にすばすと道い破やぶつてくれるのがどこかにいれればいいがと思つた。そう思いながら、彼は自分の父がよく相談に出かけた、郷里くにの一本寺いっぽんじの隠居の顔を頭の中に描えがき出した。それからふと気がついて、考えるんだかただ坐っているんだか分らない自分の様子が馬鹿しくなつたので、とにかく出てそこいらを歩いてるうちに、運命が自分を誘い込むような占うらない者の看板しゃにぶつかるだろうという漠然ぼくぜんたる頭に帽子を載のせた。

彼は久しぶりに下谷くるまぎの車坂へ出て、あれから東へ真直まっすぐに、寺の門ふつしやだの、仏師屋ぶつしやだの、古臭ふるくさい生薬屋きぐすりやだの、徳川時代のがらくたを埃ほこりといつしよに並べた道具屋だのを左右に見ながら、わざと門跡もんぜきの中を抜けて、奴鰻やつこうなぎの角へ出た。

彼は小供の時分よく江戸時代の浅草を知っている彼の祖父じいさ

さんから、しばしば観音様の繁華を耳にした。仲見世だの、奥山
 だの、並木だの、駒形だの、いろいろ云つて聞かされる中には、
 今の人があまり口にしない名前さえあつた。広小路に菜飯と
 田楽を食わせるすみ屋という洒落た家があるとか、駒形の御堂
 の前の綺麗な縄暖簾を下げた鱈屋は昔しから名代なものだとか、
 食物の話もだいぶ聞かされたが、すべての中で最も敬太郎の頭
 を刺戟したものは、長井兵助の居合拔と、脇差をぐいぐい呑
 で見せる豆蔵と、江州伊吹山の麓にいる前足が四つで後足が六
 つある大蟻の干し固めたのであつた。それらには蔵の二階の長
 持の中にある草双紙の画解が、子供の想像に都合の好いような
 説明をいくらでも与えてくれた。一本歯の下駄を穿いたまま、
 小さい三宝の上に曲がんだ男が、襷がけで身体よりも高く反り
 返った刀を抜こうとするとするところや、大きな蝦蟆の上に胡坐をか

いて、児雷也じらいやが魔法か何か使っているところや、顔より大きそうな天眼鏡てんがんきょうを持った白い髯まげの爺おやさんが、唐机とうづくえの前に坐まつて、平突へいつくばったちよん髯まげを上から見下みおろすところや、大抵の不思議なものはみんな絵本から抜け出して、想像の浅草に並んでいた。こういう訳で敬太郎の頭に映る観音の境内けいだいには、歴史的に妖嬌ようぎょう陸離りくりたる色彩が、十八間の本堂を包んで、小供の時から常に陽炎かげろつていたのである。東京へ来てから、この怪しい夢は固もとより手痛く打ち崩くずされてしまったが、それでも時々は今でも観音様の屋根に鵲こうの鳥とりが巢ねを食くっているだろうぐらいの考こうにふらふらとなる事がある。今日も浅草へ行ったらどうかなるだろうという料簡りょうけんが暗あんに働はたらいて、足あしが自おのずとこつちに向いたのである。しかしルナパークの後うしろから活動写真の前へ出た時は、こりや占うらない者しやなどのいる所ではないと今更いまさらのようにその雑沓ざつとろに驚ろいた。せ

めて御賓頭おびんずる顱なでも撫なでて行こうかと思つたが、どこにあるか忘
 れてしまったので、本堂あがへ上つて、魚河岸うおがしの大提灯おおぢやうちんと頼政よりまさの鶴ねえを
 退治たいじている額かみなりもんだけ見てすぐ雷門かみなりもんを出た。敬太郎の考えではこれ
 から浅草橋へ出る間には、一軒や二軒の易者はあるだろう。も
 し在あつたら何でも構わないから入る事にしよう。あるいは高等
 工業の先を曲つて柳橋の方へ抜けて見ても好いなどと、まるで
 時分どきに恰好かつこうな飯屋めしやでも探す気で歩いていた。ところがいざ
 探すととなると生憎あいにくなもので、平生ふだんは散歩さえすればいたるところ
 ろに神易しんえきの看板うらないがぶら下つている癖に、あの広い表通りに門戸
 を張つてゐる卜者うらないはまるで見当らなかつた。敬太郎はこの企図くわだて
 もまた例によつて例のごとく、突き抜けずに中途でおしまいに
 なるのかも知れないと思つて少し失望しながら蔵前くらまえまで来た。
 するとやつとの事で尋ねる商売うちの家が一軒あつた。細長い堅木

の厚板に、身の上判断と割書わりがきをした下に、文銭ぶんせん占うらないと白い字で彫つて、そのまた下に、漆うるしで塗つた真赤まっかな唐辛子とうがらしが描かいてある。この奇体な看板がまず敬太郎の眼を惹ひいた。

十七

よく見るとこれは一軒の生薬屋きぐすりやの店を仕切つて、その狭い方へこざつぱりした差掛様さしかけのものを作つたので、中に七色唐辛子なないろとうがらしの袋を並べてあるから、看板の通りそれを売る傍らかたわ、占うらないを見る趣向きうに違ちがない。敬太郎けいたろうはこう觀察くわさつして、そつと餡転餅屋あんころもちやに似た差掛の奥のぞを覗のぞいて見ると、小作りこづくな婆さんがたつた一人裁縫しごをしていた。狭い室へや一つの住居すまいとしか思われぬのに、肝心かんじんの易者の影も形も見えないから、主人は他行中たぎようちゆうで、細君が留守番を

しているところかとも思つたが、店先の構造から推すと、奥は生薬屋の方と続いているかも知れないので、一概に留守と見切みきりをつける訳にも行かなかつた。それで二三歩先へ出て、薬種店の方を覗のぞくと、八ツ目鰻めうなぎの干したのも釣るしてなければ、大きな亀の甲も飾つてないし、人形の腹をがらん胴にして、五色の五臓を外から見えるように、腹の中の棚たなに載のせた古風の装飾もなかつた。一本寺いっぽんじの隠居に似た髯ひげのある爺おやさんは固もとより坐つていなかった。彼は再び立ち戻つて、身の上判断文銭ぶんせん占うらないという看板のかかつた入口から暖簾のれんを潜くぐつて内へ入つた。裁縫しやうとをしていた婆おばさんは、針の手をやめて、大きな眼鏡めがねの上から睨にらむように敬太郎を見たが、ただ一口、占うらないですかと聞いた。敬太郎は「ええちよつと見て貰もらいたいんだが、御留守おるすのようですね」と云つた。すると婆おばさんは、膝ひざの上のやわらか物を隅すみの方へ片づ

けながら、御上りなさいと答えた。敬太郎は云われる通り素直に上つて見ると、狭いけれども居心地の悪いほど汚れた室ではなかつた。現に畳などは取り替え立てでまだ新らしい香がした。婆さんは煮立つた鉄瓶の湯を湯呑に注いで、香煎を敬太郎の前に出した。そうして昔は薬箱でも載せた棚らしい所に片づけてあつた小机を取りおろしにかかつた。その机には無地の羅紗がかけてあつたが、婆さんはそれをそのまま敬太郎の正面に据えて、そうして再び故の座に帰つた。

「占ないは私がするのです」

敬太郎は意外の感に打たれた。この小さい丸髻に結つた。黒繻子の襟のかかつた着物の上に、地味な縞の羽織を着た、一心に縫物をしている、純然家庭的の女が、自分の未来に横たわる運命の予言者であらうとは全く想像のほかにあつたのである。

その上彼はこの婦人の机の上に、筮竹ぜいちくも算木さんぎも天眼鏡てんがんきょうもないのを不思議なに眺めた。婆さんは机の上に乗っている細長い袋の中からちやらちやらと音をさせて、穴の開いた錢ぜにを九つ出した。敬太郎は始めてこれが看板に「文錢占ない」とある文錢なるものだろうと推察したが、さてこの九枚の文錢が、暗い中で自分を操あやつっている運命の糸と、どんな関係を有もっているか、固より想像し得るはずがないので、ただそこに鑄出いだされた模様と、それがしまつてあつた袋とを見比べるだけで、何事も云わずにいた。袋は能装束のうしょうぞくの切れ端か、懸物かけものの表具の余りで拵こしらえたらしく、金の糸が所々に光っているけれども、だいぶ古いものと見えて、手擦てずれと時代のため、派手な色を全く失っていた。

婆さんは年寄に似合わない白い纖麗きやしやな指で、九枚の文錢を三枚みけたずつ三列に並べたが、ひよつと顔を上げて、「身の上を御覽で

すか」と聞いた。

「さあ一生涯いっしょうがいのの事を一度に聞いておいても損はないが、それよりか今ここでどうしたらいいか、その方をきめてかかる方には僕には大切らしいから、まあそれを一つ願おう」

婆さんはそうですかと答えたが、それで御年はとまた敬太郎の年齢を尋ねた。それから生れた月と日を確認した。その後でむなざんよう胸算用でもする案排あんばいしきで、指を折って見たり、ただ考かんがえたりしていたが、やがてまた綺麗きれいな指で例の文銭を新らしく並べ更かえた。敬太郎は表に波が出たり、あるいは文字が現われたりして、三枚が三列に続く順序と排列を、深い意味でもあるような眼つきをして見守っていた。

婆さんはしばらく手を膝ひざの上に載のせて、何事も云わずに古い錢ぜにの面をじつと注意していたが、やがて考えの中心点が明快纏はつきりまとまったという様子をして、「あなたは今迷っていらつしやる」と云い切つたなり敬太郎けいたろうの顔を見た。敬太郎はわざと何も答えなかつた。

「進もうかよそうかと思つて迷つていらつしやるが、これは御損ですよ。先へ御出おでになつた方が、たとい一時は思わしくないようでも、末始終御為すえしじゅうですから」

婆さんは一区限ひとくぎりつけると、また口を閉じて敬太郎の様子を窺うかがつた。敬太郎は始めからだだ先方のいう事をふんふん聞くだけにして、こちらでは喋舌しゃべらないつもりに、腹の中できめてかかつたのであるが、婆さんのこの一言いちげんに、ぼんやりした自分の頭が、

相手の声に映つてちらりと姿を現わしたような気がしたので、
ついその刺戟しげきに應じて見たくなつた。

「進んでも失敗しくじるような事はないでしようか」

「ええ。だからなるべくおとなしくして。短気を起さないようにね」

これは予言ではない、常識があらゆる人に教える忠告に過ぎないと思つたけれども婆さんの態度に、これという故意わざとらしい点も見えないので、彼はなお質問を続けた。

「進むつてどつちへ進んだものでしょう」

「それはあなたの方がよく分つていらつしやるはずですがね。
私はただ最少もうし先まで御出おでなさい、そのほうが御為だからと申し上げるまでです」

こうなると敬太郎も行きがかり上そうですかと云つて引込ひっこむ

訳に行かなくなつた。

「だけれども道が二つ有るんだから、その内でどつちを進んだらよかろうと聞くんです」

婆さんはまた黙つて文銭ぶんせんの上を眺ながめていたが、前よりは重苦しい口調で、「まあ同おんなじですネ」と答えた。そうして先刻裁縫さつきしぎとをしていた時に散らばした糸屑いとくずを拾つて、その中から紺こんと赤の絹糸のかなり長いのを択より出して、敬太郎の見ている前で、それを綺麗きれいに繕より始めた。敬太郎はただ手持無沙汰てもちぶさたの徒事いたずらとばかり思つて、別段意にも留とどめなかつたが、婆さんは丹念にそれを五六寸の長さに繕より上げて、文銭の上に載のせた。

「これを御覧なさい。こう繕り合わせると、一本の糸が二筋の糸で、二筋の糸が一本の糸になるじゃありませんか。そら派手はでな赤と地味な紺こんが。若い時にはとかく派手の方へ派手の方へと

駆け出してやり損そこない勝がちのものです、あなたのは今のところ
この縫糸よりいとみたように丁度ちやうど好い具合に、いっしょに絡からまり合つて
いるようですから御仕合せです」

絹糸たとえの喩たとえは何とも知らず面白かつたが、御仕合せですと云わ
れて見ると、嬉しいよりもかえつておかしい心持の方が敬太郎
を動かした。

「じゃこの紺糸じみちで地道じみちを踏んで行けば、その間にちらちら派手
な赤い色が出て来ると云うんですね」と敬太郎は向うの言葉を
呑み込んだような尋ね方をした。

「そうですそうなるはずですよ」と婆さんは答えた。始めから敬
太郎は占いちごんないの一言で、是非共右か左へ片づけなければならな
いとまで切せつに思いつめていた訳でもなかったけれども、これだ
けで帰るのも少し物足りなかつた。婆さんの云う事が、まるで

自分の胸とかけ隔たつた別世界の消息なら、固より論はないが、意味の取り方ではだいぶ自分の今の身の上に、応用の利く点もある。敬太郎はそこに微かな未練を残した。

「もう何にも伺がう事はありませんか」

「そうですね。近い内にちよつとした事ができるかも知れませんか」

「災難ですか」

「災難でもないでしょうが、気をつけないとやり損ないます。そうしてやり損なえばそれつきり取り返しがつかない事です」

十九

敬太郎の好奇心は少し鋭敏になった。

「全体どんな性質たちの事ですか」

「それは起つて見なければ分りません。けれども盗難どなんだの水難だのではないようです」

「じゃどうして失敗しくじらない工夫をして好いか、それも分らないでしょうね」

「分らない事ありませんが、もし御望みなら、もう一遍うち占うらないを立て直して見て上げても宜ようござんす」

敬太郎は、では御頼み申しますと云わない訳に行かなかつた。

婆きやさんはまた纖細きやしやな指先を小器用に動かして、例の文錢を並べ

更かえた。敬太郎から云えば先せんの並べ方も今度の並べ方も大抵似

たものであるが、婆さんにはそこに何か重大の差別があるものと見えて、その一枚を引つくり返すにも軽率に手は下さなかつた。ようやく九枚をそれぞれ念入に片づけた後あとで、婆さんは敬

太郎に向つて「大体分りました」と云つた。

「どうすれば好いんですか」

「どうすればつて、占ないには陰陽の理で大きな形が現われるだけだから、実地は各自がその場に臨んだ時、その大きな形に合わして考えるほかありませんが、まあこうです。あなたは自分のようなまた他人ひとのような、長いようなまた短かいような、出るようなまた這入はいるようなものを待っていていらつしやるから、今度事件が起つたら、第一にそれを忘れないようになさい。そうすれば旨うまく行きます」

敬太郎は煙けむに巻かれざるを得なかつた。いくら大きな形が陰陽の理で現われたにしたところで、これじゃ方角さえ立たない霧きりのようなものだから、たとい嘘うそでも本当でも、もう少し切りつめた応用の利くところを是非云わせようと思つて、二三押問

答をして見たが、いつこう埒が明かなかつた。敬太郎はとうとうこの禅坊主の寝言に似たものを、手拭に包んだ懷炉のごとく懷中させられて表へ出た。おまけに出がけに七色唐辛子を二袋買つて袂へ入れた。

翌日彼は朝飯の膳に向つて、煙の出る味噌汁碗の蓋を取つたとき、たちまち昨日の唐辛子を思い出して、袂から例の袋を取り出した。それを十二分に汁の上に振りかけて、ひりひりするのを我慢しながら食事を済ましたが、婆さんの云わゆる「陰陽の理によつて現われた大きな形」と頭の中に呼び起して見ると、まだ漠然と瓦斯のごとく残つていた。しかし手のつけようのない謎に気を揉むほど熱心な占ない信者でもないのです、彼はどうかそれを解釈して見たいと焦心る苦悶を知らなかつた。ただその分らないところに妙な趣があるので、忘れないうちに、婆

さんの云った通りを紙片かみぎれに書いて机ひきだしの抽出へ入れた。

もう一遍田口じよぐちに会う手段を講じて見る事の可否は、昨日きのうすで

に婆さんの助言じよげんで断定されたものと敬太郎は解釈した。けれど

も彼は占ないを信じて動くのではない、動こうとする矢先へ婆さ

んが動く縁をつけてくれたに過ぎないのだと思つた。彼は須永すなが

へ行つて彼の叔父がすでに大阪から歸つたかどうか尋ねて見よ

うかと考えたが、自動車事件の記憶がまだ新たに彼の胸を圧迫

しているので、足を運ぶ勇氣がちよつと出なかつた。電話もこ

の際利用しにくかつた。彼はやむを得ず、手紙で用を弁ずる事

にした。彼はせんだつて須永の母に話したとほぼ同様の顛末てんまつを

簡略に書いた後で、田口がもう旅行から歸つたかどうかを聞き

合わせて、もし歸つたなら御多忙中はなはだ恐れ入るけれども、

都合して会つてくれる訳には行くまいか、こつちはどうせ閑ひまな

身体^{からだ}だから、いつでも指定されて時日に出られるつもりだがと、この間の権幕^{けんまく}は、綺麗^{きれい}に忘れたような口ぶりを見せた。敬太郎はこの手紙を出すと同時に、須永の返事を明日にも予想した。ところが二日立つても三日立つても何の挨拶^{あいさつ}もないので、少し不安の念に悩まされ出した。なまじい売卜者^{うらないしや}の言葉などに動かされて、恥^かを搔^かいてはつまらないという後悔^{まじ}も交った。すると四日目の午前になつて、突然田口から電話口へ呼び出された。

二十

電話口へ出て見ると案外にも主人の声で、今直来^{すぐ}る事ができるかという簡単な問い合わせであつた。敬太郎^{けいたろう}はすぐ出ますと答えたが、それだけで電話を切るのは何となくぶつきらばう過

ぎて愛嬌あいぎょうが足りない気がするので、少し色を着けるために、須永すなが
 君から何か御話でもございましたかと聞いて見た。すると相手
 は、ええ市蔵から御希望を通知して来たのですが、手数てかずだから
 直接に私の方で御都合を伺いました。じゃ御待ち申しますか
 ら、直どうぞ。と云つてそれなり引込ひっこんでしまった。敬太郎は
 また例の袴はかまを穿はきながら、今度こそ様子が好きそうだと思つた。
 それからこの間買つたばかりのなかおれ中折を帽子掛から取ると、未来
 に富んだ顔に生氣みなを漲みなぎらして快豁かいかつに表へ出た。外には白い霜しも
 を一度に摧くだいた日が、木枯こからしにも吹き捲まくられずに、穩おだやかな
 往来をおつとりと一面に照らしていた。敬太郎はその中を突切つつき
 る電車の上で、光を割さいて進むような感じがした。

田口の玄関はこの間と違つて蕭条ひっそりしていた。取次とりつぎに袴を着
 けた例の書生が現われた時は、少しきまりが悪かつたが、まさ

かせんだつては失礼しましたとも云えないので、素知らぬ顔をして叮嚀^{ていねい}に來意を告げた。書生は敬太郎を覚えていたのか、いないのか、ただはあと云つたなり名刺を受取つて奥へ這入^{はい}つたが、やがて出て来て、どうぞこちらへと応接間へ案内した。敬太郎は取次の揃^{そろ}えてくれた上靴^{スリッパ}を穿^はいて、御客らしく通るには通つたが、四五脚ある椅子のどれへ腰をかけていいかちよつと迷つた。一番小さいのにさえきめておけば間違はあるまいという謙遜^{けんそん}から、彼は腰の高い肱懸^{ひじかけ}も裝飾もつかない最も輕そうなのを択^よつて、わざと位置の悪い所へ席を占めた。

やがて主人が出て來た。敬太郎は使い慣れない切口上を使つて、初対面の挨拶^{あいさつ}やら会見の礼やらを述べると、主人は輕くそれを聞き流すだけで、ただはあはあと挨拶^{あいさつ}した。そうしていくら区切が來ても、いつこう何とも云つてくれなかつた。彼は主

人の態度に失望するほどでもなかったが、自分の言葉がそう思う通り長く続かないのに弱った。一応頭の中にある挨拶を出し切ってしまうと、後はそれぎり、手持無沙汰てもちぶさたと知りながら黙らなければならなかった。主人は巻簾入まきたばこいれから敷島しきしまを一本取つて、あとを心持敬太郎のいる方へ押しやつた。

「市蔵からあなたの御話しは少し聞いた事もあります、いつたいどういう方を御希望なんですか」

実を云うと、敬太郎には何という特別の希望はなかった。ただ相当の位置さえ得られればとばかり考えていたのだから、こう聞かれるとぼんやりした答よりほかにできなかつた。

「すべての方面に希望を有もっています」

田口は笑い出した。そうして機嫌きげんの好い顔つきをして、学士かすの数のこんなに殖ふえて来た今日こんにち、いくら世話をする人があるう

とも、そう最初から好い地位が得られる訳のものでないという事情を懇^{ねん}ごろに説いて聞かせた。しかしそれは田口から改めて教わるまでもなく、敬太郎のとうから痛切に承知しているところであつた。

「何でもやります」

「何でもやりますつたつて、まさか鉄道の切符切もできないでしょう」

「いえできます。遊んでるよりはましですから。将来の見込のあるものなら本当に何でもやります。第一遊んでいる苦痛を逃^{のが}れるだけでも結構です」

「そう云う御考ならまた私の方でもよく気をつけておきましよう。直^{すぐ}という訳にも行きますまいが」

「どうぞ。——まあ試しに使つて見て下さい。あなたの御家^{おうち}の

——と云つちや余り変ですが、あなたの私事^{わたくしごと}にでもいいから、ちよつと使つて見て下さい」

「そんな事でもして見る氣がありますか」

「あります」

「それじゃ、ことに依ると何か願つて見るかも知れません。いつでも構いませんか」

「ええなるべく早い方が結構です」

敬太郎はこれで会見を切り上げて、朗らかな顔をして表へ出た。

二十一

穏^{おだ}やかな冬の日がまた二三日続いた。敬^{けいたろう}太郎は三階^{へや}の室から、

窓に入る空と樹と屋根瓦やねがわらを眺ながめて、自然を橙色だいだいいろに暖ためるおとなしいこの日光が、あたかも自分のために世の中を照らしているような愉快を覚えた。彼はこの間の会見で、自分に都合の好い結果が、近い内にわが頭の上に落ちて来るものと固く信ずるようになった。そうしてその結果がどんな異様の形を装よそおつて、彼の前に現われるかを、彼は最も楽しんで待ち暮らした。彼が田口に依頼した仕事のうちには、普通の依頼者の申し出い以上のもので含んでいた。彼は一定の職業から生ずる義務を希望したばかりでなく、刺戟しげきに充みちた一時性の用事をも田口から期待した。彼の性質として、もし成効の影が彼を掠かすめて閃ひらめくならば、おそらく尋常の雑務とは切り離された特別の精彩を帯びたものが、卒然彼の前に投げ出されるのだらうぐらいに考えた。そんな望を抱いて、彼は毎日美しい日光に浴していたのである。

る。

すると四日ばかりして、また田口から電話がかかった。少し頼みたい事ができたが、わざわざ呼び寄せるのも気の毒だし、電話では手間が要^いつてかえつて面倒になるし、仕方がないから、速達便で手紙を出す事にしたから、委細^{いさい}はそれを見て承知してくれ。もし分らない事があつたら、また電話で聞き合^あわしてもいいという通知であつた。敬太郎はぼんやり見えていた遠眼鏡^{とのおめがね}の度がぴたりと合つた時のように愉快な心持がした。

彼は机の前を一寸^{いっすん}も離れずに、速達便の届くのを待つていた。

そうしてその間絶えず例の想像を逞^{たく}ましくしながら、田口のいわゆる用事なるものを胸の中で組み立てて見た。そこにはいつか須永^{すなが}の門前で見た後姿の女が、ややともすると断わりなしに入り込んで来た。ふと気がついて、もつと實際的のものであるべ

きはずだと思ふと、その時だけは自分で自分の空想を叱るよう
にしては、彼はもどかしい時を過ごした。

やがて待ち焦れた^{こが}状袋が彼の手に落ちた。彼はすつと音をさ
せて、封を裂いた。息も継^つがずに巻紙の端^{はし}から端までを一気に
読み通して、思はずあつという微^{かす}かな声を揚げた。与えられた
彼の用事は待ち設けた空想よりもなお浪漫的^{ロマンチック}であつたからであ
る。手紙の文句は固^{もと}より簡単で用事以外の言葉はいつさい書い
てなかつた。今日四時と五時の間に、三田方面から電車に乗つ
て、小川町の停留所で下りる四十恰好^{かっこう}の男がある。それは黒の
中折^{なかおれ}に霜降^{しもふり}の外套^{がいとう}を着て、顔の面長^{おもなが}い背の高い、瘡^やせぎすの紳
士で、眉^{まゆ}と眉の間に大きな黒子^{ほくろ}があるからその特徴を目標^{めじるし}に、
彼が電車を降りてから二時間以内の行動を探偵して報知しろと
いうだけであつた。敬太郎は始めて自分が危険なる探偵小説中

に主要の役割を演ずる一個の主人公のような心持がし出した。同時に田口が自己の社会的利害を護るために、こんな暗がりの所作をあえてして、他日の用に、他の弱点を握っておくのではなからうかと云う疑を起した。そう思つた時、彼は人の狗に使われる不名誉と不徳義を感じて、一種苦悶の膏汗を腋の下に流した。彼は手紙を手にしたまま、じつと眸を据えたなり固くなつた。しかし須永の母から聞いた田口の性格と、自分が直に彼に会つた時の印象とを纏めて考えて見ると、けつしてそんな人の悪そうな男とも思われないので、たとい他人の内行に探りを入れるにしたところで、必ずしもそれほど下品な料簡から出るとは限らないという推断もついて見ると、いったん硬直になつた筋肉の底に、また温たかい血が通い始めて、徳義に逆らう吐気なしに、ただ興味という一点からこの問題を面白く眺める余裕

もできてきた。それで世の中に接触する経験の第一着手として、
 ともかくも田口から依頼された通りにこの仕事をやり終おせて見
 ようという気になった。彼はもう一度とくと田口の手紙を読み
 直した。そうしてそこに書いてある特徴と条件だけで、はたし
 て満足な結果が実際に得られるだろうかどうかを確かめた。

二十二

田口から知らせて来た特徴のうちで、本当にその人の身を離
 れないものは、眉まゆと眉の間の黒子ほくろだけであるが、この日の短か
 い昨今の、四時とか五時とかいう薄暗い光線もとの下で、乗降のりおりに忙
 がしい多数の客の中うちから、指定された局部の一点を目標めじるしに、こ
 れだと思あやまう男を過あやまちなく見つけ出そうとするのは容易の事では

ない。ことに四時と五時の間と云えば、ちょうど役所の退^ひける
刻限なので、丸の内からただ一筋の電車を利用して、神田橋を
出る役人の数^{かず}だけでも大したものである。それにほかと違つて
停留所が小川町だから、年の暮に間もない左右の見世先に、幕
だの楽隊だの、蓄音機だのを飾るやら具^{そな}えるやらして、電灯以
外の景気を点^つけて、不時の客を呼び寄せる混雑も勘定^{かんじよう}に入れな
ければなるまい。それを想像して事の成否を考えて見ると、と
うてい一人の手際^{てぎわ}ではという覚束^{おぼつか}ない心持が起つて来る。けれ
どもまた尋ね出そうとするその人が、霜降^{しもふり}の外套^{がいとう}に黒の中折^{なかおれ}と
いう服装^{いでたち}で電車を降りるときまつて見れば、そこにまだ一縷^{いちる}の
望があるようにも思われる。無論霜降の外套だけでは、どんな
恰好^{かつこう}にしろ手がかりになり様^{よう}はずがないが、黒の中折^{なかおれ}を被^{かぶ}つて
いるなら、色変りよりほかに用いる人のない今日^{こんにち}だから、すぐ

眼につくだろう。それを目宛めあてに注意したらあるいは成功しないとも限るまい。

こう考えた敬太郎は、ともかくも停留所まで行つて見る事だという氣になった。時計を眺ながめると、まだ一時を打ったばかりである。四時より三十分前に向むへ着くとしたところで、三時頃から宅うちを出ればたくさんなのだから、まだ二時間の猶予ゆうよがある。彼はこの二時間を最も有益に利用するつもりで、じつとしたまま坐まつていた。けれどもただ眼の前に、美土代町みとしろぢようと小川町が、丁字ていじになつて交叉さしている三つ角の雑沓ざつとうが入り乱れて映るだけで、これと云つて成功を誘いざなうに足る上分別じようぶんべつは浮ばなかつた。彼の頭は考えれば考えるほど、同じ場所に吸いついたなりまるで動くことを知らなかつた。そこへ、どうしても目指す人には会えまいという掛念けねんが、不安を伴つて胸の中をざわつかせた。敬

太郎はいつその事時間が来るまで外を歩きつづけに歩いて見ようかと思つた。そう決心をして、両手を机の縁ふちに掛けて、勢よく立ち上がるとうする途端とたんに、この間浅草で占うらないの婆さんから聞いた、「近い内に何か事があるから、その時にはこういうものを忘れないようにしろ」という注意を思い出した。彼は婆さんのその時の言葉を、解すべからざる謎なぞとして、ほとんど頭の外へ落してしまつたにもかかわらず、参考のためわざわざ書きつけにして机の抽出ひきだしに入れておいた。でまたその紙片かみぎれを取り出して、自分のようひとで他人ひとのような、長いようで短かいような、出るようはいで這入はいるようなという句を飽あかず眺ながめた。初めのうちは今まで通りとうてい意味のあるはずがないとしか見えなかつたが、だんだん繰り返して読むうちに、辛抱強く考えさえすれば、こういう妙な特性もを有もつたものがあるいは出て来る

かも知れないという氣になつた。その上敬太郎は婆さんに、自分を持つてゐるんだから、いざという場合に忘れないようになさいと注意されたのを覚えていたので、何でも好い、ただ身のまわり周囲の物から、自分のよう^{ひと}で他人のよう^{ひと}な、長いよう^{ひと}で短かいよう^{ひと}な、出るよう^{ひと}で這入るよう^{はい}なものを探しあてさえすれば、比較的狭い範囲内で、この問題を解決する事ができる訳になつて、存外早く片がつくかも知れないと思ひ出した。そこでわが自由になるこれから先の二時間を、全くこの謎^{なぞ}を解くための二時間として大切に利用しよう^{ひと}と決心した。

ところがまず眼の前の机、書物、手拭^{てぬぐい}、座蒲団^{ざぶとん}から順々に進行して行李鞆靴下^{こうりかばんくつした}までいったが、いつかうそれらしい物に出合わないうちに、とうとう一時間経つてしまつた。彼の頭は焦燥^{いらだ}つと共に乱れて來た。彼の觀念は彼の室^{へや}の中を駆け廻^かつて落ちつ

けないので、制するのにも聞かずに、戸外へ出て縦横に走った。やがて彼の前に、霜降しもふりの外套がいとうを着た黒の中折を被かぶった背の高い瘠やせぎすの紳士が、彼のこれから探そうというその人の權威を具そなえて、ありありと現われた。するとその顔がたちまち大連にいる森本の顔になった。彼はだらしない髯ひげを生はやした森本の容貌ようぼうを想像の眼で眺ながめた時、突然電流に感じた人のようであつと云つた。

二十三

森本の二字はとうから敬太郎けいたろうの耳に変な響を伝える媒介なかだちとなつていたが、この頃ではそれが一層高じて全然一種の符徴ふちように変化してしまつた。元からこの男の名前さえ出ると、必ず例の洋杖ステッキ

を聯想れんそうしたものだ、洋杖が二人を繋つなぐ縁に立っていると解釈しても、あるいは二人の中を割さく邪魔に挟はさまっていると見做みなしても、とにかく森本とこの竹の棒の間にはある距離へだたりがあつて、そう一足飛いっそくとびに片方から片方へ移る訳に行かなかつたのに、今ではそれが一つになつて、森本と云えば洋杖、洋杖と云えば森本というくらい劇はげしく敬太郎の頭を刺戟しげきするのである。その刺戟を受けた彼の頭に、自分の所有のようなまた森本の所有のような、持主のどつちとも片づかないという觀念が、熱ほてつた血に流されながら偶然浮び上つた時、彼はああこれだと叫んで、乱れ逃げる黒い影の内から、その洋杖だけをうんと捕つかまえたのである。

「自分のような他人ひとのような」と云つた婆さんの謎なぞはこれで解けたものと信じて、敬太郎は一人嬉しがつた。けれどもまだ「長

いような短かいような、出るような這入るような」というところまでは考えて見ないので、彼はあまる二カ条の特性をも等しくこの洋杖の中から探し出そうという料簡で、さらに新たな努力を鼓舞してかかった。

始めは見方一つで長くもなり短かくもなるくらいの意味かも知れないと思つて、先へ進んで見たが、それでは余り平凡過ぎて、解釈がついたもつかないも同じ事のような心持がした。そこでまた後戻りをして、「長いような短かいような」という言葉を幾度か口の内でもくり返しながら思索した。が、容易に解決のできる見込は立たなかつた。時計を見ると、自由に使つていい二時間のうちで、もう三十分しか残つていない。彼は表裏と間違えて袋の口へ這入り込んだ結果、好んで行き悩みの状態に悶えてゐるのでは無かろうかと、自分で自分の判断を危ぶみ出し

た。出端でのない行きどまりに立つくらいなら、もう一遍引き返して、新らしい途みちを探す方がましだとも考えた。しかしこう時間が逼せまっているのに、初手しよてから出直しては、とても間に合うはずがない、すでにここまで来られたという一部分の成功を縁喜えんぎにして、是非先へ突き抜ける方が順当だとも考えた。これがよからうあれがよからうと右左に思い乱れている中に、彼の想像はふと全体としての杖つえを離れて、握りに刻まれた蛇へびの頭に移った。その瞬間に、鱗うろこのぎらぎらした細長い胴と、匙さしの先に似た短かい頭とを我知らず比較して、胴のない鎌首かまくびだから、長くなければならないはずだのに短かく切られている、そこがすなわち長いような短かいような物であると悟った。彼はこの答案を稲妻いなずまのごとく頭の奥に閃ひらめかして、得意の余り踴躍こおどりした。あとに残った「出るような這入はいるような」ものは、大した苦勞もな

く約五分の間に解けた。彼は鶏卵たまごとも蛙かえるとも何とも名状しがた
い或物が、半ば蛇なかの口に隠れ、半ば蛇の口から現われて、呑のみ
尽されもせず、逃のがれ切りもせず、出るとも這入るとも片のつか
ない状態を思い浮かべて、すぐこれだと判断したのである。

これで万事が綺麗きれに解決されたものと考えた敬太郎は、躍り上
るように机の前を離れて、時計の鎖を帯に絡からんだ。帽子は手に
持ったまま、袴はかまも穿はかずはに室へやを出ようとしたが、あの洋杖ステッキをどう
して持つて出たものだろうかという問題がちよつと彼を躊躇ちゆうちよさ
した。あれに手を触れるのは無論、たとい傘入かさいれから引き出した
ところで、森本が置き去りにして行つてからすでに久しい今日こんにち
となつて見れば、主人に断わらないにしろ、咎とがめられたり怪し
まれたりする氣遣きづかいはないにきまつているが、さて彼らが傍そばにい
ない時、またおるにしても見ないうちに、それを提さげて出よう

とするには相当の思慮か準備が必要になる。迷信のはびこる家庭に成長した敬太郎は、呪禁まじないに使う品物を（これからその目的に使うんだという料簡りようけんがあつて）手に入れる時には、きつと人の見ていない機会を偷ぬすんでやらなければ利きかないという言い伝えを、郷里くににいた頃、よく母から聞かされていたのである。敬太郎は宿の上り口の正面にかけてある時計を見るふりをして、二階の梯子段はしごだんの中途まで降りて下の様子を窺うかがった。

二十四

主人は六畳の居間に、例の通り大きな瀬戸物の丸火鉢まるひばちを抱かかえ込んでいた。細君の姿はどこにも見えなかった。敬太郎が梯子けいたろう段の途中で、及び腰をして、硝子越ガラスごしに障子しょうじの中を覗のぞいてみると、

主人の頭の上で忽然呼鈴が烈しく鳴り出した。主人は仰向いて番号を見ながら、おい誰かいはいかねと次の間へ声をかけた。敬太郎はまたそろそろ三階の自分の室へ帰つて来た。

彼はわざわざ戸棚を開けて、行李の上に投げ出してあるセルの袴を取り出した。彼はそれを穿くとき、腰板を後に引き摺つて、室の中を歩き廻つた。それから足袋を脱いで、靴下に更えた。これだけ身装を改めた上、彼はまた三階を下りた。居間を覗くと細君の姿は依然として見えなかった。下女もそこにはいなかった。呼鈴も今度は鳴らなかった。家中ひっそり閑としていた。ただ主人だけは前の通り大きな丸火鉢に靠れて、上り口の方を向いたなりじつと坐っていた。敬太郎は段々を下まで降り切らない先に、高い所から斜に主人の丸くなつた背中を見て、これはまだ都合が悪いと考えたが、ついに思い切つて上り

口へ出た。主人は案の上あんじょう、「御出かけで」と挨拶あいさつした。そうして例いつもの通り下女を呼んで下駄箱げたばこにしまつてある履物はきものを出させようとした。敬太郎は主人一人の眼を掠かすめるのにさえ苦心して、いたところだから、この上下女に出られては敵かなわないと思つて、いや宜よろしいと云いながら、自分で下駄箱の垂たれを上げて、早速靴を取りおろした。旨うまい具合に下女は彼が土間へ降り立つまで出て来なかつた。けれども、亭主は依然としてこつちを向いてゐた。

「ちよつと御願ですがね。室の机の上に今月の法学協会雑誌があるはずだが、ちよつと取つて来てくれませんか。靴はを穿はいてしまつたんで、また上あがるのが面倒だから」

敬太郎はこの主人に多少法律の心得があるのを知つて、わざとこう頼んだのである。主人は自分よりほかのものでは到底とても弁

じない用事なので、「はあようがす」と云つて氣きさくに立つてはしごはしごだんのぼ梯子段を上つて行つた。敬太郎はそのひまに例の洋杖を傘入かさいれから抽ぬき取つたなり、抱だき込むように羽織の下へ入れて、主人の座に帰らないうちにそつと表へ出た。彼は洋杖の頭の曲つた角かどを、右の腋わきの下に感じつつ急ぎ足に本郷の通まで来た。そこでいったん羽織の下から杖つえを出して蛇へびの首をじつと眺ながめた。そうして袂たもとの手帛ハンケチで上から下まで綺麗きれいに埃ほこりを拭いた。それから後は普通の杖のように右の手に持つて、力任せに振り振り歩いた。電車の上では、蛇の頭へ両手を重ねて、その上に顚あじを載のせた。そうしてやつと今一段落ついた自分の努力を顧かえりみて、ほつと一息吐ついた。同時にこれから先指定された停留所へ行つてからの成否がまた気にかかり出した。考えて見ると、これほど骨を折つて、偷ぬすむように持ち出した洋杖が、どうすれば眉まゆと眉の間の黒子ほくろを

見分ける必要品になるのか、全く彼の思量のほかにあつた。彼はただ婆さんに云われた通り、自分のような他人ひとのような、長いような短かいような、出るような這入はいるようなものを、一生懸命に探し当てて、それを忘れないで携たずさえているというまでであつた。この怪しげに見えて平凡な、しかもむやみに軽い竹の棒が、寝かそうと起こそうと、手に持とうと袖そでに隠そうと、未知の人を探す上に、はたして何の役に立つか知らんと疑ぐつた時、彼はちよつとの間ま、瘡ざやくを振り落した人のようにけろりとして、車内を見廻さつきわした。そうして頭の毛穴から湯気の立つほど業ごうを煮やした先刻さつきの努力を気恥かしくも感じた。彼は自分で自分の所作しよさを紛まぎらす為ために、わざと洋杖を取り直して、電車の床ゆかを」とんと軽く叩たたいた。

やがて目的の場所へ来た時、彼はとりあえず青年会館の手前

から引き返して、小川町の通へ出たが、四時にはまだ十五分ほど間がある^まので、彼は人通りと電車の響きを横切つて向う側へ渡つた。そこには交番があつた。彼は派出所の前に立つてゐる巡查と同じ態度で、赤いポストの傍^{そば}から、真直に南へ走る大通りと、緩い弧線を描いて左右に廻り込む広い往来とを眺^{なが}めた。これから自分の活躍すべき舞台面を一応こういう風に検分した後で、彼はすぐ停留所の所在を確かめにかかった。

二十五

赤い郵便^{ポスト}函から五六間東へ下^{くだ}ると、白いペンキで小川町停留所と書いた鉄の柱がすぐ彼の眼に入^いつた。ここにさえ待つていれば、たとい混雑に取り紛^{まぎ}れて注意人物を見失うまでも、刻限に

自分の部署に着いたという強味はあると考えた彼は、これだけの安心を胸に握った上、また目標の鉄の柱を離れて、四辺の光景を見廻した。彼のすぐ後には蔵造の瀬戸物屋があつた。小さい盃のたくさん並んだのを箱入にして額のように仕立てたのがその軒下にかかつていた。大きな鉄製の鳥籠に、陶器でできた餌壺をいくつとなく外から括りつけたのも、そこにぶら下がっていた。その隣りは皮屋であつた。眼も爪も全く生きた時のまに残した大きな虎の皮に、緋羅紗の縁を取ったのがこの店の重なる装飾であつた。敬太郎は琥珀に似たその虎の眼を深く見つめて立つた。細長くって真白な皮でできた襟巻らしいものの先に、豆狸のような顔が付着しているのも滑稽に見えた。彼は時計を出して時間を計りながら、また次の店に移った。そうして瑪瑙で刻った透明な兎だの、紫水晶でできた角形の印材だの、

翡翠^{ひすい}の根懸^{ねかけ}だの孔雀石^{くじやくせき}の緒締^{おじめ}だの、金の指輪^{さしわ}やリンクスと共に、美しく並んでいる宝石商^{がらすまじ}の硝子窓^{のぞ}を覗いた。

敬太郎はこうして店から店を順々に見ながら、つい天下堂の前を通り越して唐木細工^{からぎざいく}の店先まで来た。その時後^{うしろ}から来た電車が、突然自分の歩いてゐる往来の向う側でとまったので、もしやという心から、筋違^{すじかい}に通を横切つて細い横町の角にある唐物屋^{とうぶつや}の傍^{そば}へ近寄ると、そこにも一本の鉄の柱に、先刻^{さつき}のと同じような、小川町停留所という文字が白く書いてあつた。彼は念のためこの角^{かど}に立つて、二三台の電車を待ち合わせた。すると最初には青山というのが来た。次には九段新宿というのが来た。が、いずれも万世橋^{まんせいばし}の方から真直^{まっすぐ}に進んで来るので彼はようやく安心した。これでよもやの懸念^{けねん}もなくなつたから、そろそろ元の位地に帰ろうというつもりで、彼は足の向^{むき}を更^かえにかかつた途端^{とたん}

に、南から来た一台がぐるりと美土代町^{みとしろちよう}の角を回転して、また敬太郎の立っている傍でとまった。彼はその電車の運転手の頭の上に黒く掲げられた巢鴨^{すがも}の二字を読んだ時、始めて自分の不注意に気がついた。三田方面から丸の内を抜けて小川町で降りるには、神田橋の大通りを真直^{まつすぐ}に突き当って、左へ曲つても今敬太郎の立っている停留所で降りられるし、また右へ曲つても先刻^{さつき}彼の検分しておいた瀬戸物屋の前で降りられるのである。そうして両方とも同じ小川町停留所と白いペンキで書いてある以上は、自分がこれから後^{あと}を跟^つけようという黒い中折の男は、どっちへ降りるのだから、彼にはまるで見当^{けんとう}がつかない事になるのである。眼を走らせて、二本の赤い鉄柱の距離^{みちのり}を目分量で測つて見ると、一町には足りないくらいだが、いくら眼と鼻の間だからと云つて、一方だけを専門にしてさえ覚束^{おぼつか}ない彼の監視力に

対して、両方共手落なく見張り終^おせる手際を要求するのは、どれほど自分の敏腕を高く見積^すりたい今の敬太郎にも絶対の不可能であつた。彼は自分の住居^{すま}つてゐる地理上の關係から、常に本郷三田間を連絡する電車にばかり乗つてゐたため、巢鴨方面から水道橋を通つて同じく三田に続く線路の存在に、今が今まで気がつかずにいた自己の迂闊^{うかつ}を深く後悔した。

彼は困却の余りふと思いついた窮策^{きやうさく}として、須永^{すなが}の助力でも借りに行こうかと考えた。しかし時計はもう四時七分前に逼^{せま}つていた。ついこの裏通に住^{つま}んでゐる須永だけれども、門前まで駈けつける時間と、かい摘^{つま}んで用事を呑^のみ込ます時間を勘定に入ればとても間に合いそうにない。よしそのくらいの間^まは取れるとしたところで、須永に一方の見張りを頼む以上は、もし例の紳士が彼のゐる方へ降りるならば、何かの手段で敬太郎に

合図をしなければならぬ。それもこの人込の中だから、手を挙げたり手帛ハンケチを振るぐらいではちよつと通じかねる。紛れまぎもなく敬太郎に分らせようとするには、往来を驚ろかすほどな大きな声で叫ぶに限ると云つてもいいくらいなものだが、そう云う突飛とつぴなよほどな場合でも体裁ていさいを重んずる須永のような男にできるはずがない。万一我慢してやつてくれたところで、こつちから駆かけて行く間には、肝心かんじんの黒の中折帽なかおれぼうを被かぶつた男の姿は見えなくなつてしまわないとも云えない。——こう考えた敬太郎はやむを得ないから運を天に任せてどつちか一方の停留所だけ守ろうと決心した。

決心はしたようなものの、それでは今立っている所を動かないための横着と同じ事になるので、わざと成效せいこうを度外に置いて仕事にかかった不安を感じずにはいられなかった。彼は首を延ばすようにして、また東の停留所を望んだ。位地のせいむきか、向の具合か、それとも自分が始終乗降のりおりに慣れている訳か、どうもそちらの方が陽気に見えた。尋ねる人も何だか向で降りそうな心持がした。彼はもう一度見張るステーションを移そうかと思いつながら、なおかつ決しかねてしばらく躊躇ちゅうちよしていた。するとそこへ江戸川行の電車が一台来てずるずるとまった。誰も降者おりてがないのを確かめた車掌は、一分と立たないうちにまた車を出そうとした。敬太郎けいたろうは錦町へ抜ける細い横町を背にして、眼の前の車台にはほとんど気のつかないほど、ここにいようかあつちへ行こうかと迷っていた。ところへ後の横町から突然馳かけ出

して来た一人の男が、敬太郎を突き除^のけるようにして、ハンド
 ルへ手をかけた運転手の台へ飛び上った。敬太郎の驚ろきがま
 だ回復しないうちに、電車はがたりと云う音を出してすでに動
 き始めた。飛び上がった男は硝子戸^{ガラスド}の内へ半分身体^{からだ}を入れなが
 ら失敬しましたと云った。敬太郎はその男と顔を見合せた時、
 彼の最後の視線が、自分の足の下に落ちたのを注意した。彼は
 敬太郎に当^{ひようし}った拍子に、敬太郎の持つていた洋杖^{ステッキ}を蹴^け飛ばして、
 それを持主の手から地面の上へ振り落さしたのである。敬太郎
 は直^{すぐこ}曲^まんで洋杖を拾い上げようとした。彼はその時蛇^{へび}の頭が偶
 然^{ひがしむき}東向^{ひがしむき}に倒れているのに気がついた。そうしてその頭の恰好^{かつこう}を
 何となしに、方角を教える指標^{フィンガーポスト}のように感じた。

「やっぱり東が好かろう」

彼は早足に瀬戸物屋の前まで帰って来た。そこで本郷三丁目

と書いた電車から降りる客を、一人残らず物色する気で立つた。彼は最初の二三台を親の敵でも覗うように怖い眼つきで吟味した後、少し心に余裕ができるに連れて、腹の中がだんだん気丈になつて来た。彼は自分の眼の届く広場を、一面の舞台と見做して、その上に自分と同じ態度の男が三人いる事を発見した。その一人は派出所の巡査で、これは自分と同じ方を向いて同じように立っていた。もう一人は天下堂の前にいるポイントマンであつた。最後の一人は広場の真中に青と赤の旗を神聖な象徴のごとく振り分ける分別盛りの中年者であつた。そのうちでいつ出て来るか知れない用事を期待しながら、人目にはさも退屈そうに立っているものは巡査と自分だろうと敬太郎は考えた。

電車は入れ代り立ち代り彼のの前にとまつた。乗るものは無理にも窮屈な箱の中に押し込もうとする、降りるものは権柄づく

で上から伸^のしかかつて来る。敬太郎はどこの何物とも知れない男女^{なんによ}が聚^{あつ}まつたり散^{いつぶんじ}つたりするため、自分の前で無作法に演じ出す一分時の争を何度となく見た。けれども彼の目的とする黒の中折の男はいくら待つても出て来なかつた。ことに依ると、もうとうに西の停留所から降りてしまつたものではなからうかと思うと、こうして役にも立たない人の顔ばかり見つめて、眼のちらちらするほど一つ所に立つてゐるのは、随分馬鹿氣た所作^{しよさ}に見えて来る。敬太郎は下宿の机の前で熱に浮かされた人のように夢中で費やした先刻^{さつき}の二時間を、充分^{すな}須永と打ち合せをして彼の援助を得るために利用した方が、遙^{はる}かに常識に適^{かな}つた遣口^{やりぐち}だと考え出した。彼がこの苦^{にが}い氣分を痛切に嘗^なめさせられる頃から空はだんだん光を失なつて、眼に映る物の色が一面に蒼^{あお}く沈んで来た。陰鬱^{いんうつ}な冬の夕暮を補なう瓦斯^{ガス}と電氣の光がぼつぽ

つそこの店硝子みせガラスを彩いろどり始めた。ふと気がついて見ると、敬太郎から一間ばかりの所に、廂髪ひさしがみに結いった一人の若い女が立っていた。電車の乗降のりおりが始まるたびに、彼は注意の余波なごりを自分の左右に払っていたつもりなので、いつどちから歩き寄ったか分らない婦人を思わぬ近くに見た時は、何より先にまずその存在に驚ろかされた。

二十七

女は年に合あわして地味なコートを引き摺ずるように長く着きていた。敬太郎けいたろうは若い人の肉を飾る華麗はなやかな色をその裏に想像した。女はまたわざとそれを世間から押し包むようにして立っていた。襦袢じゆばんの襟えりさえ羽二重はふたえの襟卷えりまきで隠かくしていた。その羽二重の白いの

が、夕暮の逼るに連れて、空気から浮き出して来るほかに、女
 は身の周囲に何といつて他の注意を惹くものを着けていなかった。
 けれども時節柄に頓着なく、当人の好尚を示したこの一色
 が、敬太郎には何よりも際立つて見えた。彼は光の抜けて行く
 寒い空の下で、不調和な異なる物に出逢った感じよりも、煤けた
 往来に冴々しい一点を認めた気分になつて女の頸の辺を注意し
 た。女は敬太郎の視線を正面に受けた時、心持身体の向を変え
 た。それでもなお落ちつかない様子をして、右の手を耳の所ま
 で上げて、鬢から洩れた毛を後へ掻きやる風をした。固より女
 の髪は綺麗に揃つていたのだから、敬太郎にはこの挙動が実の
 ない科としてのみ映つたのだが、その手を見た時彼はまた新た
 な注意を女から強いられた。

女は普通の日本の女性のように絹の手袋を穿めていなかった。

きちりと合う山羊やぎの革製きやしゃので、華奢きやしゃな指をつつましやかに包んでいた。それが色の着いた蠟ろうを薄く手の甲に流したと見えるほど、肉と革がしつくりくつついたなり、一筋の皺しわも一分の弛いちぶみも余していなかった。敬太郎は女の手を上げた時、この手袋が女の白い手頸てくびを三寸も深く隠しているのに気がついた。彼はそれぎり眼を転じてまた電車に向った。けれども乗降のりおりの一混雑よゆうが済んで、思う人が出て来ないと、また心に二三分の余裕よゆうができるので、それを利用しようと待ち構えるほどの執着はなかったにせよ、電車の通り越した相間相間あいまには覚さとられないくらいさの視力を使つて常に女の方を注意していた。

始め彼はこの女を「本郷行」か「亀沢町行」に乗るのだろうと考えていた。ところが両方の電車が一順廻つて来て、自分の前に留つても、いっこう乗る様子がないので、彼は少々変に思つ

た。あるいは無理に込み合っている車台に乗って、押し潰され
そんな窮屈を我慢するよりも、少し時間の浪費を忖えた方が差
引得になるという主義の人かとも考えて見たが、満員という札
もかけず、一つや二つの空席は充分ありそうなのが廻つて来て
も、女は少しも乗る素振を見せないので、敬太郎はいよいよ変
に思った。女は敬太郎から普通以上の注意を受けていると覺つ
たらしく、彼が少しでも手足の態度を改めると、雨の降らな
いうちに傘を広げる人のように、わざと彼の觀察を避ける準備
をした。そうして故意に反対の方を見たり、あるいは向うへ二
三步あるき出したりした。それがため、妙に遠慮深いところの
できた敬太郎はなるべく露骨に女の方を見るのを慎しんでいた。
がしまいにふと気がついて、この女は不案内のため、自分の勝
手で好い加減にきめた停留所の前に来て、乗れもしない電車を

いつまでも待つてゐるのではなからうかと思つた。それなら親切に教えてやるべきだという勇氣が急に起つたので、彼は逡巡^{しゅんじゆん}する氣色^{けしき}もなく、真正面に女の方を向いた。すると女はふいと歩き出して、二三間先の宝石商の窓際まで行つたなり、あたかも敬太郎の存在を認めぬもののごとくに、そこで額^{まじ}を窓硝子^{ガラス}に着けるように、中に並べた指環だの、帶留だの枝珊瑚^{えださんご}の置物だのを眺め^{なが}始めた。敬太郎は見ず知らずの他人に入らざる好意^{こうい}立をして、かえつて自分と自分の品位を落したのを馬鹿らしく感じた。

女の容貌^{ようぼう}は始めから大したものではなかつた。真向^{まむき}に見るとそれほどでもないが、横から眺めた鼻つきは誰の目にも少し低過ぎた。その代り色が白くて、晴々^{はればれ}しい心持のする眸^{ひとみ}を有つていた。宝石商の電灯は今硝子越^{ガラスごし}に彼女の鼻^{かのおんな}と、豊^{ふつ}くらした頬の

一部分と額とを照らして、斜^{はす}かけに立っている敬太郎の眼に、光と陰とから成る一種妙^{りんかく}な輪廓を与えた。彼はその輪廓と、長いコートに包まれた恰好^{かつこう}のいい彼女の姿とを胸に収めて、また電車の方に向った。

二十八

電車がまた二三台来た。そうして二三台共また敬太郎^{けいたろう}の失望をくり返さして東へ去った。彼は成功を思い切った人のごとくに帯の下から時計を出して眺めた。五時はもうとうに過ぎていた。彼は今更^{いまさら}気がついたように、頭の上に被^{かぶ}さる黒い空を仰いで、苦^{にが}々しく舌打^{したうち}をした。これほど骨を折って網を張った中へかからない鳥は、西の停留所から平気で逃げたんだと思うと、

他^{ひと}を騙^{だま}すためにわざわざ拵^{こし}らえた婆さんの予言も、大事そうに
 持つて出た竹の洋杖^{ステツキ}も、その洋杖が与えてくれた方角の暗示も、
 ことごとく忌々^{いまいま}しさの種になった。彼は暗い夜を欺^{あざ}むいて眼先
 にちらちらする電灯の光を見廻して、自分をその中心に見出した
 時、この明るい輝きも必竟^{ひつきよう}自分の見残した夢の影なんだろうと
 考えた。彼はそのくらい興^きを覚^さましながらまだそのくらい寝惚^{ねぼ}
 けた心持を失わずに立っていたが、やがて早く下宿へ帰って正
 氣の人間になろうという覚悟をした。洋杖は自分の馬鹿^{あざ}を嘲^{あざ}け
 る記念^{かたみ}だから、帰りがけに人の見ていない所で二つに折つて、
 蛇の頭も鉄の輪の突がねもめちやめちやに、万世橋から御茶の
 水へ放り込んでやろうと決心した。

彼はすでに動こうとして一歩足を移しかけた時、また先刻^{さつき}の
 若い女の存在に気がついた。女はいつの間にか宝石商の窓を離

れて、元の通り彼から一間ばかりの所に立っていた。背が高いので、手足も人尋常ひとなみより恰好かつこうよく伸びたところを、彼は快よく始めから眺めたのだが、今度はことにその右の手が彼の心を惹ひいた。女は自然のままにそれをすらりと垂れたなり、まるで他の注意を予期しないでいたのである。彼は素直に調子の揃そろつた五本の指と、しなやかな革かわで堅く括くくられた手頸てくびと、手頸の袖口の間から微かすかに現われる肉の色を夜の光で認めた。風の少ない晩であつたが、動かないで長く一所に立ち尽すものに、寒さは辛つらく当つた。女は心持ち顫あごを襟巻の中に埋うずめて、俯目勝ふしめがちにじつとしていた。敬太郎は自分の存在をわざと眼中に置かないようなこの眼遣めづかいの底に、かえつて自分が氣にかかつているらしい反証を得たと信じた。彼が先刻から蚤取眼で、黒の中折帽を被かぶつた紳士を探している間、この女は彼と同じ鋭どい注意を集めて、

觀察の矢を絶えずこつちに射^いがけていたのではなからうか。彼
 はある男を探偵しつつ、またある女に探偵されつつ、一時間余^{あまり}
 をここに過^すごしたのではなからうか。けれどもどこの何物とも
 知れない男の、何をするか分らない行動を、何のために探るの
 だか、彼には何らの考^{かんがえ}がなかつたごとく、どこの何物とも知れ
 ない女から何を仕出^しかすか分らない人として何のために自分が
 覘^{ねら}われるのだか、そこへ行くとやはりまるで要領を得なかつた。
 敬太郎はこつちで少し歩き出して見せたら向うの様子がもつと
 鮮明に分るだろうという氣になつて、そろりそろりと派出所の
 後を西の方へ動いて行つた。もちろん女に勘づかれないために、
 彼は振向いて後を見る動作を固く憚^{はば}かつた。けれどもいつまで
 も前ばかり見て先へ行つては、肝心^{かんじん}の目的を達する機会がないの
 で、彼は十間ほど来たと思ふ時分に、わざと見たくもない硝子窓^{ガラスまじど}

を覗^{のぞ}いて、そこに飾つてある天鷲^{びろうど}絨の襟^{えり}の着いた女の子のマン
トを眺^{なが}める風をしながら、そつと後^{うしろ}を振り向いた。すると女は
自分の背後にいるどころではなかった。延び上つてもいろいろ
な人が自分を追越すように後^{あと}から後から来る陰になつて、白い
襟^{えり}巻も長いコートもさらに彼の眼に入らなかった。彼はそのま
ま前へ進む勇氣があるかを自分に疑ぐつた。黒い中折の帽子を
被つた人の事なら、定刻の五時を過ぎた今だから、断念しても
それほど遺憾はないが、女の方はどんなつまらない結果に終
ろうとも、最少^{もう少し}し觀察していたかつた。彼は女から自分が探偵
されていると云う疑念を逆に投げ返して、こつちから女の行動
を今しばらく注意して見ようという物^{もの}数奇^{かずき}を起した。彼は落し
物を拾いに帰る人の急ぎ足で、また元の派出所近く来た。そこ
の暗い陰に身を寄せるようにして窺^{うかが}うと、女は依然としてじつ

と通りの方を向いて立っていた。敬太郎の戻った事にはまるで気がついていない風に見えた。

二十九

その時敬太郎けいたろうの頭に、この女は処女だろうか細君だろうかという疑ひが起った。女は現代多数の日本婦人にあまねく行いわれるひさしに結いっているで、その辺の区別は始めから不分明ふぶんみょうだったのである。が、いよいよ物陰に来て、半なか後ぼうしろになったその姿を眺めた時は、第一番にどっちの階級に属する人だろうという問題が、新たに彼を襲おそつて来た。

見かけからいうとあるいは人に嫁よめいだ経験はるがありそうにも思われる。しかし身体からだの発育が尋常より遥かに好いからことによ

れば年は存外取っていないのかも知れない。それならなぜあんな地味な服装つくりをしているのだろう。敬太郎は婦人の着る着物の色や縞柄しまがらについて、何をいう権利も有もたない男だが、若い女ならこの陰鬱いんうつな師走しわすの空気を跳ね返すように、派出はでな色を肉の上に重ねるものだらゐの漠ぼつとした観察はあつたのである。彼はこの女が若々しい自分の血に高い熱を与える刺戟しげき性の文あやをどこにも見せていないのを不思議に思つた。女の身に着けたものの中うちで、わずかに人の注意を惹くのは頸くびの周囲まわりを包む羽二重はふたえの襟巻だけであるが、それはただ清いと云う感じを起す寒い色に過ぎなかつた。あとは冬枯の空と似合つた長いコートですぽりと隠かくしていた。

敬太郎は年に合あわして余りに媚こびる氣分を失い過ぎたこの衣服なりを再び後うしろから見て、どうしてもすでに男を知つた結果だと判じ

た。その上この女の態度にはどこか大人びた落ちつきがあつた。おとな 彼はその落ちつきを品性と教育からのみ来た所得とは見倣し得なかつた。み 家庭以外の空氣に触れたため、初々しい羞恥が、手帛ういうい はにかみに振りかけた香水の香かのように自然と抜けてしまったのではなからうかと疑ぐつた。そればかりではない、この女の落ちつきの中には、落ちつかない筋肉の作用が、身体全体からだの運動となつたり、眉まゆや口の運動となつて、ちよいちよい出て来るのを彼は先刻さつき目撃した。最も鋭敏に動くものはその眼であらうと彼は疾とくに認めていた。けれどもその鋭敏に動こうとする眼を、強しいて動かすまいと力つとめる女の態度もまた同時に認めない訳に行かなかつた。だからこの女の落ちつきは、自分で自分の神経を殺しているという自覺ともに伴ともなつたものだとは彼は勘定かんていしていた。ところが今後うしろから見た女は身体といい気分といい比較的沈静

して両方の間に旨く調子が取れているように思われた。彼女は
 先刻と違つて、別段姿勢を改ためるでもなく、そろそろ歩き出
 すでもなく、宝石商の窓へ寄り添うでもなく、寒さを凌ぎかね
 る風情もなく、ほとんど閑雅とでも形容したい様子を、一
 段高くなつた人道の端に立つていた。傍には次の電車を待ち合
 せる人が二三散らばつていた。彼らは皆向うから来る車台を見
 つめて、早く自分の傍へ招き寄せたい風に見えた。敬太郎が立
 ち退いたので大いに安心したらしい彼女は、その中で最も熱心
 に何かを待ち受ける一人となつて、筋向うの曲り角をじつと注
 意し始めた。敬太郎は派出所の陰を上へ廻つて車道へ降りた。
 そうしてペンキ塗の交番を楯に、巡査の立つてゐる横から女の
 顔を覗かうように見た。そうしてその表情の変化にまた驚ろかさ
 れた。今まで後姿を眺めて物陰にいた時は、彼女を包む一色の

目立たないコートと、その背の高さと、大きな^{ひさがみ}廂髪とを材料に、想像の国でむしろ自由過ぎる結論を弄^{もて}あそんだのだが、こうして彼女の知らない間に、その顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新らしい人に始めて出逢ったような気がしない訳に行かなかつた。要するに女は先刻より大變若く見えたのである。切に何物かを待ち受けているその眼もその口も、ただ生々^{いきいき}した一種華^{はな}やかな^{きよく}気色に充^みちて、それよりほかの表情は毫^{ごう}も見当らなかつた。敬太郎はそのうちに処女の無邪気ささえ認めた。

やがて女の見つめている方角から一台の電車が弓なりに曲つた線路を、ぐるりと緩^{ゆる}く廻転して來た。それが女のいる前^{すべ}で滑るようにとまつた時、中から二人の男が出た。一人は紙で包んだボール箱のようなものを提^さげて、すたすた巡査の前を通り越して人道へ飛び上がったが、一人は降りると直^{すぐ}に女の前に行つ

て、そこに立ちどまつた。

三十

敬太郎けいたろうは女の笑い顔をこの時始めて見た。唇の薄い割に口の大きいのをその特徴の一つとして彼は最初から眺ながめていたが、美しく歯を露むき出しに現あらわして、潤沢うるおいの饒ゆたかな黒い大きな眼を、上下うえしたの睫まつげの触れ合うほど、共に寄せた時は、この女から夢にも予期しなかつた印象が新たに彼の頭に刻まれた。敬太郎は女の笑い顔に見惚みとれると云うよりもむしろ驚ろいて相手の男に視線を移した。するとその男の頭の上に黒い中折なかおれが乗っているのに気がついた。外套がいとうは判切霜降はつきりしもふりとは見分けられなかつたが、帽子と同じ暗い光を敬太郎の眸ひとみに投げた。その上背は高かつた。

瘡^{やせ}ぎすでもあつた。ただ年齢^{とし}の点に至ると、敬太郎にはとかくの判断を下しかねた。けれどもその人が寿命^{どもり}の度盛^{さか}の上において、自分とは遙^{はる}か隔^{へだ}たつた向うにいる事だけはたしかなので、彼はこの男を躊躇^{ちゆうちよ}なく四十恰好^{がっこう}と認めた。これだけの特点を前後なくほとんど同時に胸に入れ得た時、彼は自分が先刻^{さつき}から馬鹿を尽してつけ覘^{ねら}つた本人がやつと今電車を降りたのだと断定しない訳に行かなかつた。彼は例刻の五時がとうの昔^{むか}しに過ぎたのに、妙な酔興^{すいきよう}を起して、やはり同じ所にぶらついていて自分を仕合せだと思つた。その酔興を起させるため、自分の好奇心を釣りに若い女が偶然出て来てくれたのをありがたく思つた。さらにその若い女が自分の探す人を、自分よりも倍以上の自信と忍耐をもつて、待ち終^{おほ}せたのを幸運の一つに数えた。彼はこ^{エックス}のXという男について、田口のために、ある知識を供給する事

ができると共に、同じ知識がYワイという女に関する自分の好奇心を幾分か満足させ得るだろうと信じたからである。

男と女はまるで敬太郎の存在に気がつかなかつたと見えて、前後左右に遠慮する気色けしきもなく、なお立ちながら話していた。女は始終微笑を洩もらす事をやめなかつた。男も時々声を出して笑つた。二人が始めて顔を合わせた時の挨拶あいさつの様子から見ても彼らはけつして疎遠な間柄ではなかつた。異性を繋つなぎ合わせるように、その実両方の仲を堰せく、慇懃いんぎんな男女間なんによかんの礼義は彼らのどちらにも見出す事ができなかつた。男は帽子の縁ふちに手をかける面倒さえあえてしなかつた。敬太郎はその鰐つばの下にあるべきはずの大きな黒子ほくろを面と向つて是非突き留めたかつた。もし女がいなかつたならば肉の上に取り残されたこの異様な一点を確かめるために、彼はつかつかと男の前へ進んで行つて、何でも

好いから、ただ口から出任せの質問をかけたかも知れない。それだけでなく、直ちに彼の傍へ近寄つて、満足の行くまでその顔を覗き込んだらう。この際そう云う大胆な行動を妨たげるものは、男の前に立っている例の女であつた。女が敬太郎の態度を悪く疑ぐつたかどうかは問題として、彼の挙動に不審を抱いた様子は、同じ場所に長く立ち並んだ彼の目に親しく映じたところである。それを承知しながら、再びその視線の内に、自分の顔を無遠慮に突き出すのは、多少紳士的でない上に、嫌疑の火の手をわざと強くして、自分の目的を自分で打ち毀すと同じ結果になる。

こう考えた敬太郎は、自然の順序として相應の機会が廻つて来るまでは、黒子の有る無しを見届けるだけは差し控えた方が得策だろうと判断した。その代り見え隠れに二人の後を跟けて、

でき得るならば断片的でもいいから、彼らの談話を小耳に挟はさもうと覚悟した。彼は先方の許諾を待たないで、彼らの言動を、ひそかに我胸に畳み込む事の徳義的価値について、別に良心の相談を受ける必要を認めなかった。そうして自分の骨折から出る結果は、世故せこに通じた田口によつて、必ず善意に利用されるものとただ淡泊たんぱくに信じていた。

やがて男は女を誘いざななう風をした。女は笑いながらそれを拒こばむように見えた。しまいに半ばなか向き合つていた二人が、肩と肩を揃そろえて瀬戸物屋の軒端のきば近く歩き寄つた。そこから手を組み合わせないばかりに並んで東の方へ歩き出した。敬太郎は二三間早足に進んで、すぐ彼らの背後まで来た。そうして自分の歩調を彼らと同じ速度に改ためた。万一女に振り向かれても、疑惑を免まぬかれるために、彼はけつして彼らの後姿には眼を注がなかつ

た。偶然前後して天下の往来を同じ方角に行くもののごとくに、故意とあらぬ方を見て歩いた。

三十一

「だつて余まりだわ。こんなに人を待たしておいて」

敬太郎の耳に入つた第一の言葉は、女の口から出たこういう

意味の句であつたが、これに対する男の答は全く聞き取れなかつ

た。それから五六間行つたと思う頃、二人の足が急に今までの

歩調を失つて、並んだ影法師がほとんど敬太郎の前に立ち塞がり

そうにした。敬太郎の方でも、後から向うに突き当らない限り

は先へ通り抜けなければ跋が悪くなつた。彼は二人の後戻りを

恐れて、急に傍にあつた菓子屋の店先へ寄り添うように自分を

片づけた。そうしてそこに並んでゐる大きな硝子壺ガラスつぼの中のビスケットを見つめる風をしながら、二人の動くのを待った。男はがいとう外套の中へ手を入れるように見えたが、それが済むと少し身体からだを横にして、下向きに右手で持ったものを店の灯ひに映した。男の顔の下に光るものが金時計である事が、その時敬太郎に分つた。

「まだ六時だよ。そんなに遅かあない」

「遅いわあなた、六時なら。あたし妾もう少しで帰かいるところよ」

「どうも御氣の毒さま」

二人はまた歩き出した。敬太郎も壺入つぼいりのビスケットを見棄すて

てその後あとに従がった。二人は淡路町あわじちようまで来てそこから駿河台下するがだいした

へ抜ける細い横町を曲った。敬太郎も続いて曲ろうとすると、

二人はその角にある西洋料理屋へ入った。その時彼はその門口かどぐち

から射す強い光を浴びた男と女の顔を横から一眼見た。彼らが停留所を離れる時、二人連れ立ってどこへ行くだろうか、敬太郎にはまるで想像もつかなかったのだが、突然こんな家へ入いられて見ると、何でもない所だけに、かえって案外の感に打たれざるを得なかった。それは宝亭たからていと云つて、敬太郎の元から知っている料理屋で、古くから大学へ出入でいりをする家であつた。近頃普請ふしんをしてから新らしいペンキの色を半分電車通りに曝さらして、斜はすかけに立ち切られたような棟むねを南向に見せているのを、彼は通り掛りに時々注意した事がある。彼はその薄青いペンキの光る内側で、額に仕立てたミュンヘン麦酒ビールの広告写真を仰ぎながら、肉刀ナイフと肉叉フォークを凄まじく闘むかわした数度すどの記憶さえ有もつていた。

二人の行先については、これという明らかな希望も予期も無

かつたが、少しは紫がむらさきかつた空氣の匂う迷路メーズの中に引き入れられるかも知れないくらいの感じが暗あんに働らいてこれまで後を跟つけて来た敬太郎には、馬鈴薯じゃがいもや牛肉を揚げる油の臭においが、台所からふんぷん往来へ溢あふれる西洋料理屋は余りに平凡らしく見えた。けれども自分のとても近寄れない幽玄な所へ姿を隠して、それぎり出て来ないよりは、遥はるかに都合が好いと考え直した彼は、二人の身体が、誰にでも近寄る事のできる、普通の洋食店のペンキの奥に囲われているのをむしろ心丈夫だと覺さとつた。幸い彼はこのくらいな程度の家で、冬空の外氣に刺戟しげきされた食欲みを充たすに足るほどの財布を懷中あとしていた。彼はすぐ二人の後を追おつてその二階へ上のぼろうとしたが、電灯の強く往来へ射さす門口かどぐちまで来た時、ふと氣がついた。すでに女から顔を覺えられた以上、ほとんど同時に一つ二階へ押し上あつては不味まずい。ひよつとする

とこの人は自分を跟^つけて来たのだという疑惑を故意^{ことさら}先方に与える訳になる。

敬太郎は何気ない振をして、往来へ射す光を横切ったまま、黒い小路^{こうじ}を一丁ばかり先へ歩いた。そうしてその小路の尽きる坂下からまた黒い人となつて、自分の影法師を自分の身体^{からだ}の中へ畳み込んだようにひっそりと明るい門口まで帰つて来た。それからその門^{かど}を潜^{くぐ}つた。時々来た事があるので、彼はこの家^{うち}の勝手をほぼ承知していた。下には客を通す部屋がなくつて、二階と三階だけで用を弁じているが、よほど込み合わなければ三階へは案内しない、大抵は二階で済むのだから、上^{あが}つて右の奥か、左の横にある広間を覗^{のぞ}けば、大抵二人の席^{へや}が見えるに違ない、もしそこにいなかったら表の方の細長い室^{へや}まで開^あけてやろうぐらいの考で、階段^{はしごだん}を上りかけると、白服^{ボーイ}の給仕が彼を案内

すべく上り口に立っているのに気がついた。

三十二

敬太郎けいたろうは手に持った洋杖ステッキをそのままに段々を上り切ったので、給仕は彼の席を定める前に、まずその洋杖を受取った。同時にこちらへと云いながら背中を向けて、右手の広間へ彼を案内した。彼は給仕の後から自分の洋杖がどこに落ちつくかを一目見届けた。するとそこに先刻注意した黒の中折帽なかおれぼうが掛っていた。霜降らしい外套がいたうも、女の着ていた色合のコートも釣るしてあった。給仕がその裾すそを動かして、竹の洋杖を突込んだ時、大きな模様を抜いた羽二重はふたえの裏が敬太郎の眼にちらついた。彼は蛇へびの頭がコートの裏に隠れるのを待つて、そらにその持主の方に眼を

転じた。幸いに女は男と向き合つて、入口の方に背中ばかりを見せていた。新らしい客の来た物音に、振り返りたい気があつても、ぐるりと廻るのが、いったん席に落ちついた品位を崩す^{くずす}おそれがある^{おそれ}ので、必要のない限り、普通の婦人はそういう動作を避けたがるだろうと考えた敬太郎は、女の後姿を眺めながら、ひとまず安堵^{あんど}の思いをした。女は彼の推察通りはたして後^{うしろ}を向かなかつた。彼はその間^まに女の坐っているすぐ傍^{そば}まで行つて背中合せに第二列の食卓につこうとした。その時男は顔を上げて、まだ腰もかけず向^{むき}も改ためない敬太郎を見た。彼の食卓の上には支那めいた鉢^{はち}に植えた松と梅の盆栽^{ぼんさい}が飾りつけてあつた。彼の前にはスー^{すー}プの皿があつた。彼はその中に大きな匙^{さじ}を落したなり敬太郎と顔を見合せたのである。二人の間に横^{よこた}わる六尺に足らない距離は明らかな電灯が隈^{くま}なく照らしていた。卓上に掛

けた白い布がまたこの明るさを助けるように、潔いさぎいい光を四方の食卓テーブルから反射していた。敬太郎はこういう都合のいい条件の具備した室で、男の顔を満足するまで見た。そうしてその顔の眉まゆと眉の間に、田口から通知のあつた通り、大きな黒子ほくろを認めた。

この黒子ほくろを別にして、男の容貌ようぼうにこれと云つた特異な点はなかつた。眼も鼻も口も全く人並であつた。けれども離れ離れに見ると凡庸ぼんような道具そうが揃そろつて、面長おもながな顔の表にそれぞれの位地を占めた時、彼は尋常以上に品格のある紳士としか誰の目にも映らなかつた。敬太郎と顔を合せた時、スープの中に匙さじを入れたまま、啜すする手をしばらくやめた態度などは、どこかにむしろ氣高い風を帯びていた。敬太郎はそれなり背中を彼の方に向けて自分の席に着いたが、探偵という文字に普通付着している意味

を心のうちで考え出して、この男の風采態度ふうさいたいどと探偵とはとても釣り合わない性質のものだという気がした。敬太郎から見ると、この人は探偵してしかるべき何物をも彼の人相の上に有もつていなかったのである。彼の顔の表に並んでいる眼鼻口のいずれを取つても、その奥に秘密を隠そうとするには、余りにできが尋常過ぎたのである。彼は自分の席へ着いた時、田口から引き受けたこの宵よいの仕事に対する自分の興味が、すでに三分の一ばかり蒸発したような失望を感じた。第一こんな性質たちの仕事を田口から引き受けた徳義上の可否さえ疑がわしくなった。

彼は自分の注文を通したなり、ポカンとして麵麩パンに手も触れずふにいた。男と女は彼らの傍そばに坐つた新らしい客に幾分か遠慮の気味で、ちよつとの間話まを途切らした。けれども敬太郎の前に暖められた白い皿が現われる頃から、また少し調子づいたと

見えて、二人の声が互違^{たがいちがい}に敬太郎の耳に入^いった。――

「今夜はいけないよ。少し用があるから」

「どんな用？」

「どんな用って、大事な用さ。なかなかそう安くは話せない用だ」

「あら好くつてよ。妾^{あたし}ちゃん^{ひと}と知^しつてゐるわ。――さんざつばら他^{ひと}を待^{まち}たした癖^{くせ}に」

女は少し拗^すねたような物の云い方をした。男は四^{あたり}辺^へに遠慮する風で、低く笑った。二人の会話はそれぎり静かになった。やがて思い出したように男の声がした。

「何しろ今夜は少し遅いから止そうよ」

「ちつとも遅かないわ。電車に乗って行きやあ直^{じき}じゃありませんか」

女が勧めている事も男が躊躇ちゆうちよしている事も敬太郎にはよく解つた。けれども彼らがどこへ行くつもりなのだか、その肝心かんじんな目的地になると、彼には何らの観念もなかった。

三十三

もう少し聞いている内にはあるいはあたりがつくかも知れないと思つて、敬太郎けいたろうは自分の前に残された皿の上の肉刀ナイフと、その傍に転がった赤い仁参にんじんの一切ひときれを眺ながめていた。女はなお男を強しいる事をやめない様子であつた。男はそのたびに何とかとか云つて逃のがれていた。しかし相手を怒おこらせまいとする優しい態度はいつも変らなかつた。敬太郎の前に新らしい肉と青豌豆あおえんどうが運ばれる時分には、女もとうとう我がを折り始めた。敬太郎は心の

内で、女がどこまでも剛情を張るか、でなければ男が好加減いかげんに降参するか、どつちかになればいいかと、ひそかに祈つていたのだから、思つたほど女の強くないのを発見した時は少なからず残念な気がした。せめて二人の間に名を出す必要のないものとして略されつつあつた目的地だけでも、何かの機会はすみに小耳に挟はさんでおきたかつたが、いよいよ話が纏まとまらないとなると、男女なんによの問答は自然ほかへ移らなければならないので、当分その望みも絶えてしまった。

「じゃ行かなくつてもいいから、あれをちようだい」と、やがて女が云い出した。

「あれつて、ただあれじゃ分らない」

「ほらあれよ。こないだの。ね、分つたでしょう」

「ちつとも分らない」

「失敬ね、あなたは。ちゃんと分つてゐる癖に」

敬太郎はちよつと振り向いて後うしろが見たくなつた。その時階段はしごだんを踏む大きな音が聞こえて、三人ばかりの客がどやどやと一度に上あがつて来た。そのうちの一人はカーキ色の服に長靴を穿はいた軍人であつた。そうして床ゆかの上を歩く音と共に、腰に釣るした剣をがちやがちや鳴らした。三人は上つて左側の室へやへ案内された。この物音が例の男と女の会話を攪かき乱したため、敬太郎の好奇心もちらつく剣の光が落ちつくまで中途に停止していた。

「この間見せていただいたものよ。分つて」

男は分つたとも分らないとも云わなかつた。敬太郎には無論想像さえつかなかつた。彼は女がなぜ淡泊たんぱくに自分の欲しいというものの名を判切はつきり云つてくれないかを恨うらんだ。彼は何とはなしにそれが知りたかつたのである。すると、

「あんなもの今ここに持つてゐるもんかね」と男が云つた。

「誰もここに持つてゐるつて云やしないわ。ただちようだいって云うのよ。今度こんだでいいから」

「そんなに欲しけりややつてもいい。が……」

「あッ嬉しい」

敬太郎はまた振り返つて女の顔が見たくなつた。男の顔もついでに見ておきたかつた。けれども女と一直線になつて、背中合せに坐つてゐる自分の位置を考えると、この際そんな盲動は慎つつしまなければならぬので、眼のやりどころに困るといふ風で、ただ正面をぽかんと見廻した。すると勝手の上あがり口くちの方から、給仕ボーイが白い皿を二つ持つて入つて来て、それを古いのと引き更かえに、二人の前へ置いて行つた。

「小鳥だよ。食べないか」と男が云つた。

「妾^{あたし}もうたくさん」

女は焼いた小鳥に手を触れない様子であつた。その代り暇の
 できた口を男よりは余計動かした。二人の問答から察すると、
 女の男にくれと逼^{せま}つたのは珊瑚樹^{さんごじゆ}の珠^{たま}か何からしい。男はこ
 ういう事に精通しているという口調^{くちよう}で、いろいろな説明を女に与
 えていた。が、それは敬太郎には興味もなければ、解りもしな
 い好事家^{こうずか}の嬉^{うれ}しがる知識に過ぎなかつた。練物^{ねりもの}で作つたのへ指
 先の紋^{もん}を押しつけたりして、時々^{うま}旨くごまかした贗物^{がんぶつ}があるが、
 それは手障^{てざわ}りがどこかざらざらするから、本当の古渡^{こわた}りとは直^{すぐ}
 区別^{くべつ}できるなどと叮嚀^{ていねい}に女に教えていた。敬太郎は前後を綜合^{あとしぎ}
 わして、何でもよほど貴^{たつ}とい、また大変珍らしい、今時^{すべあ}そう容易^{たやす}
 くは手に入らない時代のついた珠^{たま}を、女が男から貰^{もら}う約束をし
 たという事が解つた。

「やるにはやるが、御前あんなものを貰つて何にする氣だい」
 「あなたこそ何になさるの。あんな物を持つて、男の癖に」

三十四

しばらくして男は「御前御菓子を食べるかい、菓物くだものにするかい」と女に聞いた。女は「どっちでも好いわ」と答えた。彼らの食事がようやく終りに近づいた合図とも見られるこの簡単な問答が、今までうつかりと二人の話に釣り込まれていた敬太郎けいたろうに、たちまち自分の義務を注意するように響いた。彼はこの料理屋を出た後の二人の行動をも観察する必要があるものとして、自分で自分の役割を作っていたのである。彼は二人と同時に二階を下りる事の不得策を初めから承知していた。後おくれて席を立つ

にしても、巻煙草を一本吸わない先に、夜と人と、雑沓と暗闇ざつとうくらやみの中に、彼らの姿を見失なうのはたしかであつた。もし間違ひなく彼らの影を踏んで後から喰付あたくついて行こうとするなら、どうしても一足先へ出て、相手に氣のつかない物陰か何かで、待ち合せるよりほかに仕方がないと考えた。敬太郎は早く勘定を済ましておくに若くしはないという氣になつて、早速給仕ボーイを呼んでビルを請求した。

男と女はまだ落ちついて話していた。しかし二人の間に何となくきまつた題目も起らないので、それを種に意見や感情の交換とりやりも始まる機会おきはなく、ただだらしのない雲のようにそれからそれへと流れて行くだけに過ぎなかつた。男の特徴に数えられた眉まゆと眉の間の黒子ほくろなども偶然女の口に上のぼつた。

「なぜそんな所に黒子なんぞができたんでしよう」

「何も近頃になつて急にできやしまいし、生れた時からあるんだ」

「だけどき。見つともなくなつて、そんな所ところにあつて」

「いくら見つともなくつても仕方がないよ。生れつきだから」

「早く大学へ行つて取つて貰うといいわ」

敬太郎はこの時指洗フィンガーボール碗の水に自分の顔の映るほど下を向いて、

両手で自分の米嚙こめかみを隠すように抑おさえながら、くすくすと笑つた。

ところへ給仕が釣銭を盆に乘せて持つて来た。敬太郎はそつと

立つて目立たないように階段はしごの上り口あがくちまでおとなしく足を運ぶ

と、そこに立つていた給仕が大きな声で、「御立さつきあち」と下へ知

らせた。同時に敬太郎は先刻給仕に預けた洋杖ステッキを取つて来るの

を忘れた事に気がついた。その洋杖はいまだに室へやの隅すみに置いて

ある帽子掛の下に突き込まれたまま、女の長いコートすその裾に隠さ

れていた。敬太郎は室の中にいる男女を憚はばかるように、抜き足で後戻りをして、静かにそれを取り出した。彼が蛇の頭を握つた時、すべすべした羽二重はぶたえの裏と、柔かい外套がいとうの裏が、優しく手の甲に触れるのを彼は感じた。彼はまた爪先で歩かないばかりに気をつけて階段の上まで来ると、そこから急に調子を変えて、とん、とん、とんと刻み足きざあしに下へ駆け下りた。表へ出るや否や電車通を直ぐ向うへ横切つた。その突き当りに、大きな古着屋のような洋服屋のような店があるので、彼はその店の電灯の光を後うしろにして立つた。こうしてさえいれば料理店から出る二人が大通りを右へ曲ろうが、左へ折れようが、または中川の角に添れんじやくちようつて連雀町の方へ抜けようが、あるいは門かどからすぐ小路伝こうじいに駿河台下するがだいしたへ向おうが、どっちへ行こうと見逃みのがす氣遣きづかいはないと彼は心丈夫に洋杖ステッキを突いて、目指す家の門口かどぐちを見守つていた。

彼は約十分ばかり待った後で、注意の焼点しょうてんになる光の中に、いつこう人影が射さないので不審に思い始めた。やむを得ず二階を眺ながめてその窓だけ明るくなった奥を覗のぞくように、彼らの早く席を立つ事を祈った。そうして待ち草臥くたびれた眼を移すことに、屋根の上に広がる黒い空を仰いだ。今まで地面の上を照らしている人間の光ばかりに欺あざむかれて、まるでその存在を忘れていたこの大きな夜は、暗い頭の上で、先刻さつきから寒そうな雨を醸かもしていたらしく、敬太郎の心を佗わびしがらせた。ふと考えると、今までは自分に遠慮してただの話をしていた二人が、自分の立つたのを幸いに、自分の役目として是非聞いておかなければならないような肝心かんじんの相談でもし始めたのではなからうか。彼はこの疑惑と共に黒い空を仰ぎながら、そのうちに二人の向き合った姿をありありと認めた。

彼はあまり注意深く立ち廻つて、かえつて洋食店の門を早く出過ぎたのを悔くやんだ。けれども二人が彼に氣兼きがねをする以上は、たとい同じ席にいつまでも根が生えたように腰を据すえていたところで、やつぱり普通の世間話よりほかに聞く訳には行かないのだから、よし今まで坐すわつたまま動かないものと仮定しても、その結果は早く席を立つたと、ほぼ同じ事になるのだと思うと、彼は寒いのを我慢しても、同じ所に見張っているより仕方なかつた。すると帽子の廂ひさしへ雨が二雫ふたしずくほど落ちたような氣がするので、彼はまた仰向あおもむいて黒い空を眺めた。闇やみよりほかに何も眼を遮さえぎらない頭の上は、彼の立っている電車通と違つて非常

に静であつた。彼は頬ほおの上に一滴いつてきの雨を待ち受けるつもりで、
久しく顔を上げたなり、恰好かつこうさえ分らない大きな暗いものを見
つめてゐる間あいだに、今にも降り出すだろうという掛念けねんをどこかへ
失なつて、こんな落ちついた空の下にいる自分が、なぜこんな
落ちつかない真似まねを好んでやるのだろうと偶然考へた。同時に
すべての責任が自分の今突ついてゐる竹の洋杖ステツキにあるような気が
した。彼は例のごとく蛇へびの頭を握はつて、寒さに対する鬱憤うつぶんを晴
らすごとくに、二三度それを烈はげしく振つた。その時待ち侘ひびた
人の影法師そろが揃そろつて洋食店の門口を出た。敬太郎けいたろうは何より先に
女の細長い頸くびを包む白い襟巻えりまきに眼をつけた。二人はすぐと大通
りへ出て、敬太郎の向う側を、先刻とは反対の方角に、元來た
道へ引き返しにかかつた。敬太郎も猶予ゆうよなく向うへ渡つた。彼
らは緩ゆるい歩調で、賑にぎやかに飾つた店先を軒のきごとに覗のぞくように足

を運ばした。後うしろから跟ついて行く敬太郎は是非共二人に釣り合つた歩き方をしなければならぬので、その遅過ぎるのがだいぶ苦になった。男は香かの高い葉巻を銜くわえて、行く行く夜の中へ微かな色を立てる煙を吐いた。それが風の具合で後うしろから従がう敬太郎の鼻を時々快ろよく侵おかした。彼はその香においを嗅かぎ嗅かぎ鈍のろい足並を我慢して実直にその跡を踏んだ。男は背が高いので後うしろから見ると、ちよつと西洋人のように思われた。それには彼の吹かしている強い葉巻が多少錯覚さつかくを助けた。すると聯想れんそうがたちまち伴侶つれの方に移うつつて、女が旦那だんなから買もつて貰もらつた革かわの手袋を穿はめている洋妾らしやめんのように思われた。敬太郎がふとこゝういう空想を起して、おかしいと思ひながらも、なお一人で興を催している

と、二人は最前待ち合あわした停留所の前まで来てちよつと立ちどまつたが、やがてまた線路を横切つて向側へ越した。敬太郎

も二人のする通りを真似た。^{まね}すると二人はまた美土代町の角を
 こちらから反対の側へ渡った。敬太郎もつづいて同じ側へ渡つ
 た。二人はまた歩き出して南へ動いた。角から半町ばかり来る
 と、そこにも赤く塗った鉄の柱が一本立っていた。二人はその
 柱の傍^{そば}へ寄つて立つた。彼らはまた三田線を利用して南へ、帰
 るか、行くか、する人だとこの時始めて気がついた敬太郎は、
 自分も是非同じ電車へ乗らなければなるまいと覚悟した。彼ら
 は申し合せたように敬太郎の方を顧みた。^{かえり}固^{もと}より彼のいる方か
 ら電車が横町を曲つて来るからではあるが、それにしても敬太
 郎は余り好い心持はしなかった。彼は帽子の鰐^{つば}をひっくり返し
 て、ぐつと下へおろして見たり、手で顔を撫^なでて見たり、なる
 べく軒下へ身を寄せて見たり、わざと変な見当^{けんとう}を眺^{なが}めて見たり
 して、電車の現われるのをつらく待ち侘^わびた。

間もなく一台来た。敬太郎はわざと二人の乗った後から這入つて、嫌疑を避けようと工夫した。それでしばらく後の方にぐずぐずしていると、女は例の長いコートの裾を踏まえないばかりに引き摺つて車掌台の上に足を移した。しかしあとから直続くと思つた男は、案外上る気色もなく、足を揃えたまま、両手を外套の隠袋に突き差し立っていた。敬太郎は女を見送りに男がわざわざここまで足を運んだのだという事にようやく気がついた。実をいうと、彼は男よりも女の方に余計興味を持っていたのである。男と女がここで分れるとすれば、無論男を捨てて女の先途だけを見届けたかった。けれども自分が田口から依頼されたのは女と関係のない黒い中折帽を被つた男の行動だけなので、彼は我慢して車台に飛び上がるのを差し控えた。

女は車台に乗った時、ちよつと男に目礼したが、それぎり中へ這入^{はい}ってしまった。冬の夜^よの事だから、窓硝子^{まどガラス}はことごとく締め切つてあつた。女はことさらにそれを開けて内から首を出すほどの愛嬌^{あいぎよう}も見せなかつた。それでも男はのっそり立つて、車の動くのを待つていた。車は動き出した。二人の間に挨拶^{あいさつ}の交換^{やりとり}がもう必要でないと認めたごとく、電力は急いで光る窓を南^{みな}の方^{かた}へ運び去つた。男はこの時口に銜^{くわ}えた葉巻を土の上に投げた。それから足の向を変えてまた三ツ角の交叉点^{けいたろう}まで出ると、今度は左へ折れて唐物屋^{とうぶつや}の前でとまつた。そこは敬太郎^{けいたろう}が人に突き当られて、竹の洋杖^{ステッキ}を取り落した記憶の新らしい停留所であつた。彼は男の後^{あと}を見え隠れにここまで跟^ついて来て、また見

たくもない唐物屋の店先に飾つてある新柄しんがらの襟飾ネクタイだの、絹帽シルクハットだの、変りかわ縞じまの膝掛ひざかけだのを覗のぞき込みながら、こう遠慮をするようでは、探偵の興きも覚めるだけだと考えた。女がすでに離れた以上、自分の仕事に飽あきが来たと云つてはすまないが、前同様ぜんであるべき窮屈の程度が急に著るしく感ぜられてならなかった。彼の依頼されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られているのだから、もうこれで偵察の役目は済んだものとして、下宿へ帰つて寝ようかとも思つた。

そこへ男の待つてゐる電車が来たと見えて、彼は長い手で鉄の棒を握るや否いなや瘡やせた身体からだを体ていよくとまり切らない車台の上に乗せた。今まで躊躇ちゆうちよしていた敬太郎は急にこの瞬間を失なつてはという氣が出たので、すぐ同じ車台に飛び上つた。車内はそれほど込みあつていなかったので、乗客は自由に互の顔を見

合う余裕を充分持つていた。敬太郎は箱の中に身体を入れると同時に、すでに席を占めた五六人から一度に視線を集められた。そのうちには今坐^{すわ}ったばかりの中折の男のも交^{まじ}つていたが、彼の敬太郎を見た眼のうちには、おやという認識はあつたが、つけ^{ねら}覘^{ねら}われているなという疑惑はさらに現われていなかった。敬太郎はようやく伸び伸びした心持になつて、男と同じ側を択^よつて腰を掛けた。この電車でどこへ連れて行かれる事かと思つて軒先を見ると、江戸川行と黒く書いてあつた。彼は男が乗り換えさえすれば、自分も早速降りるつもりで、停留所へ来るごとに男の様子を窺^{うか}がった。男は始終隠袋^{しじゅうかくし}へ手を突き込んだまま、多くは自分の正面かわが膝^{ひざ}の上かを見ていた。その様子を形容すると、何にも考えずに何か考え込んでいると云う風であつた。ところが九段下へかかった頃から、長い首を時々伸ばして、あ

る物を確かめたいように、窓の外を覗き出した。敬太郎もついでに釣り込まれて、見悪い外を透かすように眺めた。やがて電車の走る響の中に、窓硝子にあたつて擡ける雨の音が、ぽつりぽつりと耳元でし始めた。彼は携えている竹の洋杖を眺めて、この代りに雨傘を持つて来ればよかつたと思ひ出した。

彼は洋食店以後、中折を被つた男の人柄と、世の中にまるで疑をかけていないその眼つきとを注意した結果、この時ふと、

こんな窮屈な思ひをして、いらざる材料を集めるよりも、いつそ露骨にこつちから話しかけて、当人の許諾を得た事実だけを

田口に報告した方が、今更遅蒔のようでも、まだ気が利いてい

やしないかと考えて、自分で自分を彼に紹介する便法を工夫し

始めた。そのうち電車はとうとう終点まで来た。雨はますます

烈しくなつたと見えて、車がとまるとぎあという音が急に彼の

耳を襲^{おそ}つた。中折の男は困つたなと云いながら、外套^{がいとう}の襟^{えり}を立てて洋袴^{ズボン}の裾^{すそ}を返した。敬太郎は洋杖を突きながら立ち上つた。男は雨の中へ出ると、直寄^{すぐ}つて来る俥引^{くるまひき}を捕まえた。敬太郎も後^{おく}れないように一台雇つた。車夫は梶棒^{かじぼう}を上げながら、どちらへと聞いた。敬太郎はあの車の後^{あと}について行けと命じた。車夫はへいと云つてむやみに馳^かけ出した。一筋道を矢来^{やらい}の交番の下まで来ると、車夫は又梶棒をとめて、旦那どっちへ行くんですと聞いた。男の乗つた車はいくら幌^{ほろ}の内から延び上つても影さえ見えなかった。敬太郎は車上に洋杖を突つ張つたまま、雨の音のする中で方角に迷つた。

報告

眼が覚めると、自分の住み慣れた六畳に、いつもの通り寝ている自分が、敬太郎には全く変に思われた。昨日の出来事はすべて本当のようでもあった。また纏まりのない夢のようでもあった。もつと綿密に形容すれば、「本当の夢」のようでもあった。酔った気分で町の中に活動したという記憶も伴なっていた。それよりか、酔った気分が世の中に充ち充ちていたという感じが一番強かった。停留所も電車も酔った気分には充ちていた。宝石商も、革屋も、赤と青の旗振りも、同じ空気に酔っていた。薄青いペンキ塗の洋食店の二階も、そこに席を占めた眉の間に黒子のある紳士も、色の白い女も、ことごとくこの空気に包まれて

いた。二人の話しに出て来る、どこにあるか分らない所の名も、男が女にやる約束をした珊瑚さんごの珠たまも、みんな陶然とうぜんとした一種の気分を帯びていた。最もこの気分みに充ちて活躍したものは竹のステッキ洋杖であつた。彼がその洋杖を突いたまま、幌ほろを打つ雨の下で、方角に迷つた時の心持は、この気分の高潮に達した幕前の一区切ひとくぎりとして、ほとんど狐から取り憑つかれた人の感じを彼に与えた。彼はその時店の灯ひで佗わびしく照らされたびしょ濡ぬれの往来と、坂の上に小さく見える交番と、その左手にぼんやり黒くうつる木立とを見廻して、はたしてこれが今日の仕事の結末かと疑ぐつた。彼はやむを得ず車夫に梶棒かじぼうを向け直させて、思いも寄らない本郷へ行けと命じた事を記憶していた。

彼は寝ながら天井てんじょうを眺ながめて、自分に最も新らしい昨日の世界を、幾順となく眼の前に循環させた。彼は二日酔ふつかよひの眼と頭をもつ

て、蚕かいこの糸を吐くようにそれからそれへと出てくるこの記念の
 画えを飽あかず見つめていたが、しまいには眼先に漂ただようふわふわ
 した夢うるさの蒼蠅ささに堪たえなくなつた。それでも後あとから後からと向
 うで独ひとり勝手がってに現われて来るので、彼は正氣でありながら、何
 かに魅入られたのではなからうかと云う疑さえ起した。彼はこ
 の浅い疑かんれんに關聯して、例の洋杖を胸に思い浮べざるを得なかつ
 た。昨日の男も女も彼の眼には絵を見るほど明らかであつた。
 容貌ようぼうは固もとより服なり装から歩きつきに至るまでことごとく記憶の鏡
 に判切はつきりと映つた。それでいて二人とも遠くの国にいるような
 心持がした。遠くの国にいながら、つい近くにあるものを見る
 ように、鮮あざやかな色と形を備えて眸ひとみを侵おかして來た。この不思議
 な影響が洋杖から出たかも知れないという神経を敬太郎はどこ
 かに持つていた。彼は昨夕ゆうバ法外な車賃を貪かどぐちばられて、宿の門口

を潜^{くぐ}つた時、何心なくその洋杖を持つたまま自分の室^{へや}まで帰つて来て、これは人の目に触れる所に置くべきものでないという顔をして、寝る前に、戸棚^{とだな}の奥の行李^{こうり}の後へ投げ込んでしまつたのである。

今朝^{けさ}は蛇^{へび}の頭にそれほどの意味がないようにも思われた。ことにこれから田口に逢つて、探偵の結果を報告しなければならぬと云う實際問題の方が頭に浮いて来ると、なおさらさういふ感じが深くなつた。彼は一日の午後から宵^{よい}へかけて、妙に一種の空氣に酔わされた氣分で活動した自覺はたしかにあるが、いざその活動の結果を、普通の人間が処世上に利用できるやうに、筋の立つた報告に纏^{まと}める段になると、自分の引き受けた仕事は成効^{せいこう}しているのか失敗しているのかほとんど分らなかつた。したがって洋杖^{ステッキ}の御蔭^{おかげ}を蒙^{こうむ}っているのか、いないのかも判然し

なかつた。床の中で前後をくり返した敬太郎には、まさしくその御蔭を蒙っているらしくも見えた。またけつしてその御蔭を蒙っていないようにも思われた。

彼はともかくも二日酔の魔を払い落してからの事だと決心して、急に夜着よぎを剥はぐつて跳ね起きた。それから洗面所へ下りて氷るほど冷めたい水で頭をざあざあ洗った。これで昨日きのうの夢を髪の毛の根本から振り落して、普通の人間に立ち還つたような気になれたので、彼は景気よく三階の室へやに上のぼった。その窓を潔いさぎよく明け放した彼は、東向に直立して、上野の森の上から高く射す太陽の光を全身に浴びながら、十遍ばかり深呼吸をした。こう精神作用を人間並に刺戟しげきした後で、彼は一服しながら、田口へ報告すべき事柄の順序や条項について力つとめて實際的に思慮めぐを回らした。

突きとめて見ると、田口の役に立ちそうな種はまるで上がつていないようにも思われるので、敬太郎は少し心細くなつて来た。けれども先方では今朝にも彼の報告を待ち受けているように気が急せくので、彼はさつそく田口家へ電話を掛けた。これから直行すぐつていいかと聞くと、だいぶ待たした後あとで、差支さしつかえないという答が、例の書生の口を通して来たので、彼は猶予ゆうよなく内幸町へ出かけた。

田口の門前には車が二台待っていた。玄関にも靴と下駄げたが一つずつあった。彼はこの間と違って日本間の方へ案内された。そこは十畳ほどの広い座敷で、長い床に大きな懸物かけものが二幅掛かつ

ていた。湯呑ゆのみのような深い茶碗ちやわんに、書生が番茶を一杯汲くんで出した。桐きりを剝くった手焙てあぶりも同じ書生の手で運ばれた。柔かい座蒲団ざぶとんも同じ男が勧めてくれただけで、女はいつさい出て来なかつた。敬太郎は広い室の真中に畏かしこまって、主人の足音の近づくのを窮屈に待った。ところがその主人は用談が果てないと見えて、いつまで待ってもなかなか現われなかつた。敬太郎はやむを得ず茶色になつた古そうな懸物かけものの価額ねだんを想像したり、手焙てあぶりの縁ふちを撫なで廻したり、あるいは袴はかまの膝ひざへきちりと両手を乗せて一人改たまって見たりした。すべて自分の周囲まわりがあまり綺麗きれいに調ととのつてい

るだけに、居心地が新らし過ぎて彼は容易に落ちつけなかつたのである。しまいに違棚ちがいだなの上にある画帖がじようらしい物を取りおろしてみようかと思つたが、その立派な表紙が、これは装飾だから手を触れちゃいけないと断ことわるように光るので、彼はついに手を

出しかねた。

こう敬太郎の神経を悩ました主人は、彼をやや小一時間も待たした後で、あとようやく応接間から出て来た。

「どうも長い間御待たせ申して。——客がなかなか帰らないものだから」

敬太郎はこの言訳に対して適當と思うような挨拶をあいさつ一口と、それに添えた叮嚀ていねいな御辞儀おじぎを一つした。それからすぐ昨日きのうの事を云い出そうとしたが、何をどう先に述べたら都合がいいか、この場に臨んで急にまた迷い始めたうちに、切り出す機を逸してしまった。主人はまた冒頭からさも忙がしそうに声も身体からだも取り扱あっている癖に、どこか腹の中に余裕よゆうの貯蔵庫でもあるように、けつして周章あわてて探偵の結果を聞きたがらなかつた。本郷では氷が張るかとか、三階では風が強くなるだろうとか、下

宿にも電話があるのかとか、調子は至極面白そうだけれども、その実つまらない事ばかり話の種にした。敬太郎は向うの間に従つて主人の満足する程度にわが答えを運んでいたが、相手はこんな無意味な話を進めて行くうちに、暗に彼の様子を注意しているらしかった。そこまでは彼もぼんやり気がついた。しかし主人がなぜそんな注意を自分に払うのか、その訳はまるで解らなかつた。すると、

「どうです昨日は。旨く行きまきしたか」と主人が突然聞き出した。こう聞かれるだろうぐらいの腹は始めから敬太郎にもあつたのだが、正直に答えれば、「どうですか」という他を馬鹿にした生返事になるので、彼はちよつと口籠つた後、

「そうです御通知のあつた人だけはやつと探し当てました」と答えた。

「眉間みけんに黒子ほくろがありましたか」

敬太郎は少し隆起した黒い肉の一点を局部に認めたと答えた。

「衣服なりもこつちから云つて上げた通りでしたか。黒の中折なかおれに、

霜降しもふりの外套がいとうを着て」

「そうです」

「それじゃ大抵間違はないでしょう。四時と五時の間に小川町

で降りたんですね」

「時間は少し後おくれたようです」

「何分ぐらい」

「何分か知りませんが、何でも五時よつぽど過すぎのようでした」

「よつぽど過すぎ。よつぽど過ならそんな人を待っていないなくても好

いじゃありませんか。四時から五時までの間と、わざわざ時間を切つて通知して上げたくらいだから、五時を過ぎればもうあ

なたの義務はすんだも同然じゃないですか。なぜそのまま帰つて、その通り報知しないんです」

今まで穏やかに機嫌よく話していた長者から突然こう手厳しくやりつけられようとは、敬太郎は夢にも思わなかった。

三

敬太郎は今まで下町出の旦那を眼の前に描いていた。それが突然規律づくめの軍人として彼を威圧して来た時、彼はたちまち心の中心を狂わした。友達に対してなら云い得る「君のためだから」という言葉も挨拶も有っていたのだが、この場合にはそれがまるで役に立たなかった。

「ただ私の勝手で、時間が来てもそこを動かなかつたのです」

敬太郎がこう答えるか答えないうちに、田口は今のきつとした態度をすぐ崩くずして、

「そりや私わたしのために大変都合が好かつた」と機嫌きげんの好い調子で受けたが、「しかしあなたの勝手と云うのは何です」と聞き返した。敬太郎は少し逡巡しゆんじゆんした。

「なにそりや聞かないでも構いません。あなたの事だから。話したくなければ話さないでも差支さしつかえない」

田口はこう云つて、自分の前に引きつけた手提煙草盆てさげたばこぼんの抽出ひきだしを開けると、その中から角つのでできた細長い耳搔みみかきを捜さがし出した。

それを右の耳の中に入れて、さも痒かゆそうに搔かき廻した。敬太郎は見ないふりをしてわざと自分を見ているような、また耳だけに気を取られているような、田口の蹙面しかめつらを薄気味悪く感じた。

「実は停留所に女が一人立っていたのです」と彼はとうとう自

白してしまった。

「年寄ですか、若い女ですか」

「若い女です」

「なるほど」

田口はただ一口こう云つただけで、何とも後を継いでくれなかつた。敬太郎も頓挫したなり言葉を途切らした。二人はしばらく差向いのまま口を聞かずにいた。

「いや、若かろうが年寄だろうが、その婦人の事を聞くのはよくなかつた。それはあなただけに関係のある事なんでしょうから、止しにしましょう。私の方じゃただ顔に黒子のある男について、研究の結果さえ伺がえばいいんだから」

「しかしその女が黒子のある人の行動に始終入り込んでくるのです。第一女の方で男を待ち合っていたのですから」

「はあ」

田口はちよつと思ひも寄らぬという顔つきをしたが、「じゃその婦人はあなたの御知合でも何でもないのですね」と聞いた。敬太郎は固^{もと}より知合だと答える勇氣を有^もたなかつた。きまりの悪い思ひをしても、見た事も口を利^きいた事もない女だと正直に云わなければならなかつた。田口はそうですかと、穩^{おだや}かに敬太郎の返事を聞いただけで、少しも追窮する氣色^{けしき}を見せなかつたが、急に摧^{くだ}けた調子になつて、

「どんな女なんです。その若い婦人と云うのは。器量からいうと」と興味に充^みちた顔を提煙草盆^{さげたばこぼん}の上に出した。

「いえ、なに、つまらない女なんです」と敬太郎は前後の行^いきがかかり上答えてしまつて、實際頭の中でもつまらないような氣がした。これが相手と場合しだいでは、うん器量はなかなか好

い方だぐらいは固より云い兼ねなかつたのである。田口は「つまらない女」という敬太郎の判断を聞いて、たちまち大きな声を出して笑った。敬太郎にはその意味がよく解らなかつたけれども、何でも頭の上で大濤おおなみが崩れたような心持がして、幾分か顔が熱くなつた。

「よござんす、それで。——それからどうしました。女が停留所で待ち合わしているところへ男が来て」

田口はまた普通の調子に戻つて、真面目まじめに事件の経過を聞くとした。実をいうと敬太郎は自分がこれから話す顛末てんまつを、どうして握る事ができたかの苦心談を、まず冒頭に敷衍ふえんして、二つある同じ名の停留所の迷った事から、不思議な謎なぞの活いきて働らく洋杖ステッキを、どう抱かかえ出して、どう利用したかに至るまでを、自分の手柄てがらのなるべく重く響くように、詳しく述べたかつたの

であるが、会うや否や四時と五時とのいきさつでやられた上に、勝手に見張りの時間を延ばした原因になる例の女が、原因にも何にもならない見ず知らずの女だったりした不味いところがあるので、自分を広告する勇氣は全く抜けていた。それで男と女が洋食屋へ入ってから以後の事だけをごく淡泊り話して見ると、宅を出る時自分が心配していた通り、少しも捕まえどころのない、あたかも灰色の雲を一握り田口の鼻の先で開いて見せたと同じような貧しい報告になった。

四

それでも田口は別段厭な顔も見せなかった。落ちついた腕組をしまいまで解かずに、ただふんとか、なるほどとか、それか

らとか云う繋ぎつなの言葉を、時々敬太郎けいたろうのために投げ込んでくれるだけであつた。その代り報告の結末が来ても、まだ何か予期しているように、今までの態度を容易に変えなかつた。敬太郎は仕方なしに、「それだけです。実際つまらない結果で御氣の毒です」と言訳をつけ加えた。

「いやだ**い**ぶ参考になりました。どうも御苦勞でした。なかなか骨が折れたでしよう」

田口のこの挨拶あいさつの中に、大した感謝の意を含んでいない事は無論であつたが、自分が馬鹿に見えつつある今の敬太郎にはこれだけの愛嬌あいぎょうが充分以上に聞こえた。彼は辛うじて恥を搔かかずにすんだという安心をこの時ようやく得た。同時に垂味たるみのできた気分が、すぐ田口に向いて働らきかけた。

「いつたいあの人は何なんですか」

「さあ何でしようか。あなたはとう鑑定しました」

敬太郎の前には黒の中折を被^{なかおれ}つて、襟開^{えりあき}の広い霜降^{しもふり}の外套^{がいとう}を

着^二た男の姿がありありと現われた。その人の様子といい言葉遣^{ことばづか}

いといい歩きつきといい、何から何まで判切^{はつきり}見えたには見えた

が、田口に対する返事は一口も出て来なかつた。

「どうも分りません」

「じゃ性質はどんな性質でしよう」

性質なら敬太郎にもほぼ見当^{けんとう}がついていた。「穏^{おだ}やかな人らし

く思いました」と観察の通りを答えた。

「若い女と話しているところを見て、そう云うんじやありませんか」

こう云つた時、田口の唇^{くちびる}の角に薄笑の影がちらついているのを認めた敬太郎は、何か答えようとした口をまた塞^{ふさ}いでしまつ

た。

「若い女には誰でも優しいものですよ。あなただつて満更経験まんざらのない事でもないでしょう。ことにあの男と来たら、人一倍そうなのかも知れないから」と田口は遠慮なく笑い出した。けれども笑いながらちゃんと敬太郎の上に自分の眼を注いでいた。敬太郎は傍で自分を見たらさぞ気の利かない愚物ぐぶつになっているんだろうと考えながらも、やっぱり苦しい思いをして田口と共に笑わなければならなかった。

「じゃ女は何物なんでしょう」

田口はここで観察点を急に男から女へ移した。そうして今度は自分の方で敬太郎にこういう質問を掛けた。敬太郎はすぐ正直に「女の方は男よりもなお分り悪いにくです」と答えてしまった。

「素人しろうとだか黒人くろうとだか、大体の区別さえつきませんか」

「さよう」と云いながら、敬太郎はちよつと考がえて見た。革の
手袋だの、白い襟えりまき卷だの、美くしい笑い顔だの、長いコートだ
の、続々記憶の表面に込み上げて来たが、それを綜括すべくくつたところ
でどこからもこの問に応ぜられるような要領は得られなかつ
た。

「割合に地味なコートを着て、革の手袋を穿はめていましたが……」
女の身に着けた品物うちの中で、特に敬太郎の注意を惹ひいたこの
二点も、田口には何の興味も与えないらしかった。彼はやがて
真面目まじめな顔をして、「じゃ男と女の関係について何か御意見はあ
りませんか」と聞き出した。

敬太郎は先刻さつき自分の報告とどこおが滞りなく済んだ証拠しょうこに、御苦勞ごくろうさ
まと云う謝辞あとさえ受けた後で、こう難問が續発しようとは毫も
思いがけなかった。しかも窮しているせいか、それが順をおつ

てだんだんむずかしい方へ競り上^{あが}つて行くように感ぜられてならなかった。田口は敬太郎の行きづまった様子を見て、再び同じ問をほかの言葉で説明してくれた。

「例えば夫婦だとか、兄弟^{きょうだい}だとか、またはただの友達だとか、情婦^{いろう}だとかですね。いろいろな関係があるうちで何だと思ひますか」

「私も女を見た時に、処女だろうか細君だろうかと考えたんですが……しかしどうも夫婦じゃないように思ひます」

「夫婦でないにしてもですね。肉体上の関係があるものと思ひますか」

敬太郎の胸にもこの疑は最初から多少萌さないでもなかった。

改ためて自分の心を解剖して見たら、彼ら二人の間に秘密の關係がすでに成立しているという假定が遠くから彼を操つて、それがために偵察の興味が一段と鋭どく研ぎ澄まされたのかも知れなかった。肉と肉の間に起るこの關係をほかにして、研究に価する交渉は男女の間に起り得るものでないと主張するほど彼は理論家ではなかったが、暖たかい血を有つた青年の常として、この觀察点から男女を眺めるときに、始めて男女らしい心持が湧いて来るとは思っていたので、なるべくそこを離れずに世の中を見渡したかったのである。年の若い彼の眼には、人間という大きな世界があまり判切分らない代りに、男女という小さな宇宙はかく鮮やかに映つた。したがって彼は大抵の社会的關係を、できるだけこの一点まで切落して楽しんでいた。停留所で逢つ

た二人の關係も、敬太郎の氣のつかない頭の奥では、すでにこういう一對いっついの男女として最初から結びつけられていたらしかった。彼はまたその背後に罪惡を想像して要もないのに恐れを抱いだくほどの道德家でもなかった。彼は世間並な道義心の所有者としてありふれた人間の一人であつたけれども、その道義心は彼の空想力と違つて、いざという場合にならなければ働かないのを常とするので、停留所の二人を自分に最も興味のある男女關係に引き直して見ても、別段不愉快にはならずすんだのである。彼はただ年齢としの上において二人の相違の著るしいのを疑ぐつた。が、また一方ではその相違がかえつて彼の眼に映ずる「男女の世界」なるものの特色を濃く示しているようにも見えた。

彼の二人に対する心持は知らず知らずの間にこう弛ゆるんでいた

のだが、いよいよそうかと正式に田口から質問を掛けられて見ると、断然とした返答は、責任のあるなしにかかわらず、纏まとまつた形となつて頭の中には現われ悪にくかつた。それでこう云つた。

「肉体上の関係はあるかも知れませんが、無いかも分りません」
 田口はただ微笑した。そこへ例の袴はかまを穿はいた書生が、一枚の名刺を盆のに載せて持つて来た。田口はちよつとそれを受取つたまま、「まあ分らないところが本当でしょう」と敬太郎に答えたが、すぐ書生の方を見て、「応接間へ通しておいて……」と命令した。先刻さつきからよほど窮していた矢先だから、敬太郎はこの来客を好い機しおに、もうここで切り上げようと思つて身繕みづくらいにかかると、田口はわざわざ彼の立たない前にそれを遮さへぎつた。そうして敬太郎の辟易へきえきするのに頓着とんじやくなくなお質問を進行させた。

そのうちで敬太郎の明瞭^{めいりょう}に答えられるのはほとんど一カ条もなかったので、彼は大学で受けた口答試験の時よりもまだ辛い^{つら}思いをした。

「じゃこれぎりにしますが、男と女の名前は分りましたろう」

田口の最後と断^{ことわ}つたこの問に対しても、敬太郎は固^{もと}より満足な返事を有^もつていなかった。彼は洋食店で二人の談話に注意を払う間にも何々さんとか何々子とかあるいは御何^{おなに}とかいう言葉がきつとどこかへ交^{まじ}つて来るだろうと心待^まちに待っていたのだが、彼らは特にそれを避ける必要でもあるごとくに、御互の名はもちろん、第三者の名もけつして引合にさえ出さなかったのである。

「名前も全く分りません」

田口はこの答を聞いて、手焙^{てあぶり}の胸に当てた手を動かしながら、

拍子ひょうしを取るように、指先で桐の縁きりふちを敲たたき始めた。それをしばらくくり返した後あとで、「どうしたんだか余あんまり要領を得ませんね」と云ったが、直言すぐ葉を継いで、「しかしあなたは正直だ。そこがあなたの美点だろう。分らない事を分ったように報告するよりもよっぽど好いかも知れない。まあ買えばそこを買うんですね」と笑い出した。敬太郎は自分の觀察が、はたして実用に向かなかつたのを発見して、多少わが迂闊うかつに恥じ入る氣も起つたが、しかしわずか二三時間の注意と忍耐と推測では、たとい自分より十層倍行き届いた人間に代理を頼んだところで、田口を満足させるような結果は得られる訳のものでないと固く信じていたから、この評価ほに対してそれほど苦痛も感じなかった。その代り正直と賞められた事も大した嬉うれしさにはならなかった。このくらいの正直さ加減は全くの世間並に過ぎないと彼には見え

たからである。

六

敬太郎けいたろうは先刻さつきから頭の上らない田口の前で、たった一言ひとことで好いから、思い切った自分の腹をずばりと云つて見たいと考えていたが、ここで云わなければもう云う機会はあるまいという気がこの時ときふと萌もした。

「要領を得ない結果ばかりで私もはなはだ御氣の毒に思つてゐるんですが、あなたの御聞きになるような立ち入った事が、あれだけの時間で、私のような迂闊うかつなものに見極みぎわめられる訳はないと思います。こういうと生意氣に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後あとなんか跟つけるより、直じかに会つて聞きた

い事だけ遠慮なく聞いた方が、まだ手数料が省けて、^{てかず}そうして動かない確かなところが分りやしないかと思うのです」

これだけ云った敬太郎は、定めて世故に長けた相手から笑われるか、冷かされる事だろうと考えて田口の顔を見た。すると田口は案外にもむしろ真面目な態度で「あなたにそれだけの事が解っていましたか。感心だ」と云った。敬太郎はわざと答を控えていた。

「あなたのいう方法は最も迂闊のようで、最も簡便なまた最も正当な方法ですよ。そこに気がついていれば人間として立派なものです」と田口が再びくり返した時、敬太郎はますます返答に窮した。

「それほどの考がちゃんとおあるあなたに、^{かんがえ}あんなつまらない仕事を御頼申したのは私が悪かった。^{わたし}人物を見損なつたのも同然な

んだから。が、市蔵があなたを紹介する時に、そう云いましたよ。あなたは探偵のやるような仕事に興味を有^もつておいでだつて。それでね、ついとんでもない事を御願^よいして。止^よしやあよかつた……」

「いえ須^す永君^{なが}にはそう云う意味の事をたしかに話した覚えがあります」と敬太郎は苦^{おも}しい思^いをして答えた。

「そうでしたか」

田口は敬太郎の矛盾をこの一句で切り棄^すてたなり、それ以上に追窮^ぐする愚^ぐをあえてしなかつた。そうして問題をすぐ改めて見せた。

「じゃどうでしょう。黙つて後ななどを跟^すけずに、あなたのいう通り尋常に玄関からかかつて行つちや。あなたにそれだけの勇氣がありますか」

「無い事ありません」

「あんなに跟け廻した後で」

「あんなに跟け廻したって、私はあの人達の不名誉になるような観察はけっしてしていないつもりです」

「ごもつともだ。そんなら一つ行つて御覧なさい。紹介するか
ら」

田口はこう云いながら、大きな声を出して笑つた。けれども敬太郎にはこの申し出が万更まんざらの冗談じようだんとも思えなかつたので、彼は紹介状たずさを携りえて本当に眉間みけんの黒子ほくろと向き合つて話して見ようかという料簡りようけんを起した。

「会いますから紹介状を書いて下さい。私はあの人と話して見たい気がしますから」

「宜いいでしょう。これも経験の一つだから、まあ会つて直じかに研

究して御覧なさい。あなたの事だから田口に頼まれてこの間の晩後あとを跟つけましたぐらいきつと云うでしょう。しかしそれは構かまわない。云いたければ云つても宜ようござんす。私わたしに遠慮えんりょは要いらないから。それからあの女との関係もですね、あなたに勇氣さえあるなら聞いて御覧なさい。どうです、それを聞くだけの度胸どくちゆうがあなたにありますか」

田口はここでちよつと言葉を切らして敬太郎の顔を見たが、答の出ないうちにまた自分から話を続けた。

「だが両方とも口へ出せるように自然が持ちかけて来るまでは、聞いても話してもいけませんよ。いくら勇氣があつたつて、常識しやうじきのない奴やつだと思おもわれるだけだから。それどころじゃない、あの男はただでさえ随分あ会くい悪い方ほうなんだから、そんな事をむやみに喋しゃべろうものなら、直帰すぐつてくれぐらい云い兼ねないです

よ。紹介をして上げる代りには、そこいらはよく用心しないとね……」

敬太郎は固^{もと}より畏^{かしこ}まりましたと答えた。けれども腹の中ではなかおれ黒の中折の男を田口のように見る事がどうしてもできなかった。

七

田口は硯箱^{すずりばこ}と巻紙を取り寄せて、さらさらと紹介状を書き始めた。やがて名宛^{なあて}を認め終ると、「ただ通り一遍^{もんごん}の文言^{もんごん}だけ並べておいたらそれで好いでしょう」と云いながら、手焙^{てあぶり}の前に翳^{かざ}した手紙を敬太郎に読^{けいたろう}んで聞かせた。その中には書いた本人の自白したごとく、これといって特別の注意に値^{あた}する事は少しも出て来なかつた。ただこの者は今年大学を卒業したばかりの法

学士で、ことによると自分が世話をしなければならぬ男だから、どうか会って話をしてやってくれとあるだけだった。田口は異存のない敬太郎の顔を見届けた上で、すぐその巻紙をぐるぐると巻いて封筒へ入れた。それからその表へ松本恒三様と大きく書いたなり、わざと封をせずに敬太郎に渡した。敬太郎は真面目^{まじめ}になつて松本恒三様の五字を眺^{なが}めたが、肥^{ふと}つた締^{しま}りのない書体で、この人がこんな字を書くかと思うほど拙^{せつ}らしくできていた。

「そう感心していつまでも眺^{なが}めていちやあいけない」

「番地が書いてないようすが」

「ああそうか。そいつは私^{わたし}の失念だ」

田口は再び手紙を受け取つて、名宛の人の住所と番地を書き入れてくれた。

「さあこれなら好いでしよう。不味く^{まず}つて大きなところは土橋^{どばし}のおおずしりゅうの大寿司流とでも云うのかな。まあ役に立ちさえすればよからう、我慢なさい」

「いえ結構です」

「ついでに女の方へも一通書きましようか」

「女も御存じなのですか」

「ことによると知ってるかも知れません」と答えた田口は何だか意味のありそうに微笑した。

「御差支^{おさしつかえ}さえなければ、おついでに一本書いていただいても宜^{よろ}しゅうございます」と敬太郎も冗談^{じょうだん}半分に頼んだ。

「まあ止した方が安全でしょうね。あなたのような年の若い男を紹介して、もし間違でもできると責任問題だから。浪漫^{ローマン}——何とか云うじやありませんか、あなたのような人の事を。私^{わたし}や学問が

ないから、今頃流行^{はや}るハイカラな言葉を直^す忘れちまつて困るが、何とか云いましたつけね、あの、小説家の使う言葉は。……」

敬太郎はまさかそりやこう云う言葉でしようと教える気にもなれなかつた。ただエへへと馬鹿みたように笑っていた。そうして長居をすればするほど、だんだん非道^{ひど}く冷かされそうなので、心の内では、この一段落がついたら、早く切り上げて帰ろうと思つた。彼は田口のくれた紹介状を懐^{ふところ}に収めて、「では二三日内^{うち}にこれを持って行つて参りましたよう。その模様でまた伺^{うかが}う事に致しますから」と云いながら、柔^{やわら}かい座蒲団^{ざぶとん}の上を滑^{すべ}り下りた。田口は「どうも御苦労でした」と叮嚀^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}したただけで、ロマンチックもコスメチックもすっかり忘れてしまったという顔つきをして立ち上つた。

敬太郎は帰り途に、今会つた田口と、これから会おうという

松本と、それから松本を待ち合わせた例の恰好かつこうのいい女とを、合せたり離したりしてしきりにその関係を考えて。そうして考えれば考えるほど一歩ずつ迷宮メイズの奥に引き込まれるような面白味を感じた。今日田口きょうぐちでの獲物えものは松本という名前だけであるが、この名前がいろいろに錯綜さくそうした事実を自分のために締め括くくつている妙な囊ふくろのように彼には思えるので、そこから何が出るか分らないだけそれだけ彼には楽みが多かった。田口の説明によると、近寄にく悪い人のようにも聞こえるが、彼の見たところでは田口より数倍話しがしやすそうであつた。彼は今日田口から得た印象のうちに、人を取扱う点にかけてなるほど老練だという嘆美たんびの声を見出した上、人物としてもどこか偉そうに思われる点が、時々彼の眼を射るようにちらちら輝やいたにもかかわらず、その前に坐すわつてゐる間、彼は始終何物にか縛しばられて自由に動けな

い窮屈な感じを取り去る事ができなかつた。絶えず監視の下にもと置かれたようなこの状態は、一時性のものでなくつて、いくら面会の度数を重ねても、けつして薄らぐ折はなかうとまで彼には見えたくらいである。彼はこういう風に氣のおける田口と反対の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られそうにない、話し声その物のうちにすでに懐かし味の籠こもつたような松本を想像してやまなかつた。

八

翌朝よくあささつそく支度をして松本に会いに行こうと思つているとあいにく寒い雨が降り出した。窓を細目に開けて高い三階から外を見渡した時分には、もう世の中が一面に濡ぬれていた。屋根瓦やねがわら

に徹とおるような佗わびしい色をしばらく眺ながめていた敬太郎けいたろうは、田口の紹介状を机の上に置いて、出ようか止そうかとちよつと思案したが、早く会つて見たいという氣が強強く起るので、とうとう机の前を離れた。そうして豆腐屋らっばの喇叭らっばが、陰氣な空氣を割さいて鋭鋭どく往来に響く下の方へ降りて行つた。

松本うちの家は矢来やらいなので、敬太郎はこの間の晚狐きつねにつままれたと同じ思いをした交番下けしきの景色を想像しつゝ、そこへ来ると、坂下と坂上が両方共二股ふたまたに割れて、勾配こうばいのついた真中まなかだけがいびつに膨ふくれているのを発見した。彼は寒はかい雨の袴はかまの裾すそに吹きかけるのも厭いとわずに足を留めて、あの晩車夫が梶棒かじぼうを握つたまま立往生をしたのはこのへんだらうと思いう所を見廻した。今日も同じように雨がざあざあ落ちて、彼の踏んでゐる土は地下の鉛管まで腐れ込むほど濡れていた。ただ昼だけに周囲は暗いながら

も明るので、立ちどまつた時の心持はこの間とはまるで趣が違つていた。敬太郎は後の方に高く黒ずんでいる目白台の森と、右手の奥に朦朧と重なり合つた水稻荷の木立を見て坂を上つた。それから同じ番地の家の何軒でもある矢来の中をぐるぐる歩いた。始めのうちは小さい横町を右へ折れたり左へ曲つたり、濡れた枳殻の垣を覗いたり、古い椿の生い被さつてゐる墓地らしい構の前を通つたりしたが、松本の家は容易に見当らなかつた。しまいに尋ねあぐんで、ある横町の角にある車屋を見つけて、その若い者に聞いたら、何でもない事のようにすぐ教えてくれた。

松本の家はこの車屋の筋向うを這入つた突き当りの、竹垣に囲われた綺麗な住居であつた。門を潜ると子供が太鼓を鳴らし、聞かぬ音が聞こえた。玄関へかかつて案内を頼んでもその太鼓

の音は毫ごうもやまなかつた。その代り四辺あたりは森閑しんかんとして人の住んでいる臭においさえしなかつた。雨に鎖とざされた家の奥いへから現われた十六七の下女は、手を突いて紹介状を受取つたなり無言のまま引つ込んだが、しばらくしてからまた出て来て、「はなはだ勝手を申し上げてすみませんでございですが、雨の降らない日においてを願えますまいか」と云つた。今まで就職運動のため諸方へ行つて断ことわられつけている敬太郎にも、この断り方だけは不思議に聞こえた。彼はなぜ雨が降つては面会に差支さしかえるのか直反すぐ問したくなつた。けれども下女に議論を仕かけるのも一種変な場合なので、「じゃ御天氣の日に伺がえば御目にかかれるんですね」と念晴ねんぱらしに聞き直して見た。下女はただ「はい」と答えただけであつた。敬太郎は仕方なしにまた雨の降る中へ出た。ざあと云う音が急に烈はげしく聞こえる中に、子供の鳴らす太鼓が

まだどんどんと響いていた。彼は矢来の坂を下りながら変な男があつたものだという観念を数度くり返した。田口がただでさえ会い悪いと云つたのは、こんなところを指すのではなからうかとも考えた。その日は家へ帰つても、気分が中止の姿勢に余儀なく据えつけられたまま、どの方角へも進行できないのが苦痛になつた。久しぶりに須永の家へでも行つて、この間からの顛末を茶話に半日を暮らそうかと考えたが、どうせ行くなら、今の仕事に一段落つけて、自分にも見当の立つた筋を吹聴するのでなくては話しばいもしないので、ついに行かずじまいにしてしまった。

翌日は昨日と打って變つて好い天気になつた。起き上る時、あらゆる濁を雨の力で洗い落したように綺麗に輝やく蒼空を、眩ゆそうに仰ぎ見た敬太郎は、今日こそ松本に会えると喜こん

だ。彼はこの間の晩行李こうり うしろの後に隠しておいた例の洋杖ステツキを取り出して、今日は一つこれを持って行つて見ようと考がえた。彼はそれを突いて、また矢来やらいの坂を上りながら、昨日の下女が今日も出て来て、せつかくですが今日は御天氣過ぎますから、も少し曇つた日においで下さいましと云つたらどんなものだろうと想像した。

九

ところが昨日と違つて、門を潜くぐつても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかった。玄関にはこの前目に着かなかつた衝立ついたてが立っていた。その衝立には淡彩たんさいの鶴がたつた一羽佇たたずんでいるだけで、姿見のように細長いその格好かっこうが、普通の寸法と違つて

いる意味で敬太郎の注意を促^{うな}がした。取次には例の下女が現われたには相違ないが、その後から遠慮のない足音をどんどん立てて二人の小供が衝立の影まで来て、珍らしそうな顔をして敬太郎を眺^{なが}めた。昨日に比べるとこれだけの変化を認めた彼は、最後にどうぞという案内と共に、硝子戸^{ガラスド}の締^しまつている座敷へ通った。その真中にある金魚鉢のように大きな瀬戸物の火鉢^{ひばち}の両側に、下女は座蒲団^{ざぶとん}を一枚ずつ置いて、その一枚を敬太郎の席とした。その座蒲団は更紗^{さらざ}の模様を染めた真丸の形をしたものなので、敬太郎は不思議そうにその上へ坐^{すわ}った。床^{とこ}の間には刷毛^{はけ}でがしと粗末^{ぞんざい}に書いたような山水^{さんすい}の軸^{じく}がかかっていた。敬太郎はどこが樹でどこが巖^{いわ}だか見分のつかない画を、軽蔑^{けいべつ}に値する装飾品のごとく眺^{なが}めた。するとその隣りに銅鑼^{どら}が下^{さが}つていて、それを叩^{たた}く棒まで添えてあるので、ますます変った室^{へや}だ

と思つた。

すると間の襖あひふすまを開けて隣座敷から黒子ほくろのある主人が出て来た。

「よくおいでです」と云つたなり、すぐ敬太郎の鼻の先に坐つ

たが、その調子はけつして愛嬌あいぎょうのある方ではなかつた。ただど

こかおつとりしているので、相手に余り重きを置かないところ

が、かえつて敬太郎に楽な心持を与えた。それで火鉢一つを境

に、顔と顔を突き合わせながら、敬太郎は別段氣がつまる思も

せずにいられた。その上彼はこの間の晩、たしかに自分の顔を

ここの主人に覚えられたに違ないと思ひ込んでいたにもかかわ

らず、今会つて見ると、覚えているのだから、いないのだから、平

然としてそんな素振そぶりは、口にも色にも出さないので、彼はなお

さらきがね氣兼ねの必要を感じなくなつた。最後に主人は昨日雨天のた

め面会を謝絶した理由も言訳ことわりも一言も述べなかつた。述べたく

なかったのか、述べなくつても構わないと認めていたのか、それすら敬太郎にはまるで判断がつかなかった。

話は自然の順序として、紹介者になった田口の事から始まった。「あなたはこれから田口に使つて貰おうというのでしたね」というのを冒頭に、主人は敬太郎の志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。それから彼のいまだかつて考えた事もない、社会観とか人生観とかいうこむずかしい方面の問題を、時々持ち出して彼を苦しめた。彼はその時心のうちで、この松本という男は世に著^{あら}われない学者の一人なのではなからうかと疑ぐつたくらい、妙な理窟^{りくつ}をちらちらと閃^{ひら}めかされた。そればかりでなく、松本は田口を捕^{つか}まえて、役には立つが頭のなっていない男だと罵^{のの}しつた。

「第一^{だいち}ああ忙^{いそ}がしくしていちや、頭の中に組織立^{かんがえ}つた考^{かんが}のでき

る閑ひまがないから駄目です。あいつの脳と来たら、年ねんが年中摺鉢ねんじゅうすりばちの中で、播木すりこぎに攪かき廻まわされてる味噌みそ見たようなもんでね。あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」

敬太郎にはなぜこの主人が田口に対してこうまで悪体あくたいを吐つくのかさっぱり訳が分らなかつた。けれども彼の不思議に感じたのは、これほどの激語を放つ主人の態度なり口調なりに、毫ごうも毒々しいところだの、小悪こにくらしい点だのの見えない事であつた。彼の罵ののしる言葉は、人を罵ののしつた経験を知らないような落ちつきを具そなえた彼の声を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する気になれなかつた。ただ一種変つた人だという感じが新たに刺戟しげきを受けるだけであつた。

「それでいて、碁ごを打つ、謡うたを謡うたう。いろいろな事をやる。もつともいずれも下手糞へたくそなんですが」

「それが余裕よゆうのある証拠しょうこじゃないでしようか」

「余裕よゆうつて君。——僕は昨日きのう雨が降るから天氣の好い日に来てくれつて、あなたを断わつたでしよう。その訳は今云う必要もないが、何しろそんなわがままな断わり方が世間にあると思いますか。田口だったらそう云う断り方はけつしてできない。田口が好んで人に会うのはなぜだと云つて御覧。田口は世の中に求めるところのある人だからです。つまり僕のような高等遊民こうとうゆうみんでないからです。いくら他ひとの感情を害したつて、困りやしないという余裕がないからです」

十

「実は田口さんからは何にも伺がわずに参つたのですが、今御

使いになつた高等遊民という言葉は本当の意味で御用いなので
すか」

「文字通りの意味で僕は遊民ですよ。なぜ」

松本は大きな火鉢ひばちの縁ふちへ両脇りょうひじを掛けて、その一方の先にある
拳骨げんこつを顎あごの支えにしなから敬太郎けいたろうを見た。敬太郎は初対面の客
を客と感じていないらしいこの松本の様子に、なるほど高等遊
民の本色ほんしよくがあるらしくも思った。彼は煙草道楽たばこと見えて、今日
は大きな丸い雁首がんくびのついた木製の西洋パイプを口から離さずに、
時々思い出したような濃い煙を、まだ火の消えていない証拠そばとし
て、狼煙のろしのごとくぱっぱと揚げた。その煙が彼の顔の傍そばでい
つの間にか消えて行く具合が、どこにも締りしまを設ける必要を認
めていないらしい彼の眼鼻と相待つて、今まで経験した事のな
い一種静かな心持を敬太郎に与えた。彼は少し薄くなりかかつ

た髪を、頭の真中から左右へ分けているので、平たい頭がなおの事尋常に落ちついて見えた。彼はまた普通世間の人が着ないような茶色の無地の羽織を着て、同じ色の上足袋うわたびを白の上に重ねていた。その色がすぐ坊主の法衣ころもを聯想れんそうさせるところがまた変に特別な男らしく敬太郎の眼に映った。自分で高等遊民だとな乗るものに会ったのはこれが始めてではあるが、松本の風采ふうさいなり態度なりが、いかにもそう云う階級の代表者らしい感じを、少し不意を打たれた気味の敬太郎に投げ込んだのは事実であつた。

「失礼ながら御家族は大勢でいらつしやいますか」

敬太郎は自みづから高等遊民と称する人に対して、どういう訳かまずこういう問がかけて見たかつた。すると松本は「ええ子供がたくさんいます」と答えて、敬太郎の忘れかけていたパイ

プからぱつと煙を出した。

「奥さんは……」

「妻は無論います。なぜですか」

敬太郎は取り返しをつかない愚^ぐな問を出して、始末に行かなくなつたのを後悔した。相手がそれほど感情を害した様子を見せないにしろ、不思議そうに自分の顔を眺めて、解決を予期している以上は、何とか云わなければすまない場合になつた。

「あなたのような方が、普通の人間と同じように、家庭的に暮して行く事ができるかと思つてちよつと伺つたまでです」

「僕が家庭的に……。なぜ。高等遊民だからですか」

「そう云う訳でも無いんですが、何だかそんな心持がしたからちよつと伺がつたのです」

「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」

敬太郎はもう何も云う事がなくなつてしまつた。彼の頭腦の中では、返事に行き詰いとくちまつた困却と、ここで問題を変えようとする努力と、これを緒口いとくちに、革かわの手袋を穿はめた女の關係を確かめたい希望が三ついつしよに働らくので、元からそれほど秩序の立つていない彼の思想になおさら暗い影を投げた。けれども松本はそんな事にまるで注意しない風で、困つた敬太郎の顔を平氣に眺ながめていた。もしこれが田口であつたなら手際てぎわよく相手を打ち据すえる代りに、打ち据えるとすぐ向うから局面を変えてくれて、相手に見苦しい立ち往生などはけつしてさせない鮮あざやかな腕うでを有もつてゐるのにと敬太郎は思つた。氣はおけないが、人を取扱かう点はかにおいて、全く冴さえた熟練を欠いてゐる松本の前で、敬太郎は図はからず二人の相違を認めたような氣がしてゐると、松本は偶然「あなたはそういう問題を考へて見た事がない

ようですね」と聞いてくれた。

「ええまるで考えていません」

「考える必要はありませんね。一人で下宿している以上は。けれどもいくら一人だって、広い意味での男対女の問題は考えるでしょう」

「考えると云うよりむしろ興味があるといった方が適当かも知れません。興味なら無論あります」

十一

二人は人間として誰しも利害を感じるこの問題についてしばらく話した。けれども年齒としの違だか段の違だか、松本の云う事は肝心かんじんの肉を抜いた骨組だけを並べて見せるようで、敬太郎けいたろうの

血の中まで這入り込んで来て、共に流れなければやまないほどの切実な勢をまるで持つていなかった。その代り敬太郎の秩序立たない断片的の言葉も口を出るとすぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹らないらしかつた。

こんな縁遠い話をしている中で、ただ一つ敬太郎の耳に新しく響いたのは、露西亞の文学者のゴーリキとかいう人が、自分の主張する社会主義とかを實行する上に、資金の必要を感じて、それを調達のため細君同伴で亜米利加へ渡つた時の話であつた。その時ゴーリキは大変な人気を一身に集めて、招待やら驪迎やらに忙殺されるほどの景気のうちに、自分の目的を苦もなく着々と進行させつつあつた。ところが彼の本国から伴れて来た細君というのが、本当の細君でなくて単に彼の情婦に過ぎないという事実がどこからか曝露した。すると今まで狂熱に達していた

彼の名声が、たちまちどさりと落ちて、広い新大陸に誰一人として彼と握手するものが無くなってしまったので、ゴースキはやむを得ずそのまま亜米利加を去った。というのが筋であつた。「露西亞と亜米利加ではこれだけ男女関係なんによの解釈が違ふんです。ゴースキのやりくちは露西亞ならほとんど問題にならないくらい些細さいさいな事件なんでしょうがね。下らない」と松本は全く下らなそうな顔をした。

「日本はどつちでしょう」と敬太郎は聞いて見た。

「まあ露西亞派でしょうね。僕は露西亞派でたくさんだ」と云つて、松本はまた狼煙のろしのような濃い煙をぱつと口から吐いた。

ここまで来て見ると、この間の女の事を尋ねるのが敬太郎に取つて少しも苦にならないような気がし出した。

「せんだつての晩神田の洋食店で私はあなたに御目にかかった

と思うんですが」

「ええ会いましたね。よく覚えています。それから帰りにも電車の中で会ったじゃありませんか。君も江戸川まで乗ったようだが、あすこいらに下宿でもしているんですか。あの晩は雨が降って困ったでしょう」

松本ははたして敬太郎を記憶していた。それを初めから口に出すでもなく、今になってようやく気がついたふりをするでもなく、話してもよし話さないでもよしと云った風の態度が、無邪気から出るのか、度胸から出るのか、または鷹揚おうような彼の生れつきから出るのか、敬太郎にはちよつと判断しかねた。

「御伴おつれがおありのようでしたが」

「ええ別嬪べっぴんを一人伴つれていました。あなたはたしか一人でしたね」

「一人です。あなたも御帰りには御一人じゃなかったですか」

「そうです」

ちよつとはきはき進んだ問答はここへ来てぴたりととまつてしまった。松本がまた女の事を云い出すかと思つて待つていると、「あなたの下宿は牛込ですか、小石川ですか」とまるで無関係の問を敬太郎はかけられた。

「本郷です」

松本は臍ふに落ちない顔をして敬太郎を見た。本郷に住んでゐる彼が、なぜ江戸川の終点まで乗つたのか、その説明を聞きたいと云わぬばかりの松本の眼つきを見た時、敬太郎は面倒だからここで一つ心持よく万事を打ち明けてしまおうと決心した。もし怒おこられたら、詫あやまるだけで、詫あやまつて聞かれなければ、御辞儀おじぎを叮嚀ていねいにして帰れば好かろうと覚悟をきめた。

「実はあなたの後を跟あとけてわざわざ江戸川まで来たのです」と云って松本の顔を見ると、案外にも予期したほどの変化も起らないので、敬太郎はまず安心した。

「何のために」と松本はほとんどいつものような緩ゆるい口調で聞き返した。

「人から頼まれたのです」

「頼まれた？ 誰に」

松本は始めて、少し驚いた声の中に、並より強いアクセントを置いて、こう聞いた。

十二

「実は田口さんに頼まれたのです」

「田口とは。田口要作ようさくですか」

「そうです」

「だって君はわざわざ田口の紹介状を持って僕に会いに来たんじゃありませんか」

こう一句一句問いつめられて行くよりは、自分の方で一と思いに今までの経過を話してしまう方が楽な気がするので、敬太郎けいたろうは田口の速達便を受取つて、すぐ小川町の停留所みはりへ見張に出た冒険の第一節目から始めて、電車が江戸川の終点に着いた後の雨の中の立往生に至るまでの顛末てんまつを包まず打ち明けた。固もとよりただ筋の通るだけを目的に、誇張は無論布衍ふえんの煩わしさもできない限り避けたので、時間がそれほどかからなかったせい、松本は話の進行している間一口も敬太郎を遮さへぎらなかつた。話が済んでからも、直すぐとは声を出す様子は見えなかつた。敬太郎は

主人のこの沈黙を、感情を害した結果ではなからうかと推察して、怒り出されないうちに早く詫^{あや}まるに越した事はないと思ひ定めた。すると主人の方から突然口を利^きき始めた。

「どうもけしからん奴だね、あの田口という男は。それに使われる君もまた君だ。よつぽどの馬鹿だね」

こういつた主人の顔を見ると、呆^{あき}れ返っている風は誰の目にも着くが、怒気を帯びた様子は比較的どこにも現われていないので、敬太郎はむしろ安心した。この際馬鹿と呼ばれるぐらいの事は、彼に取って何でもなかつたのである。

「どうも悪い事をしました」

「詫まつて貰いたくも何ともない。ただ君が御氣の毒だから云うのですよ。あんな者に使われて」

「それほど悪い人なんですか」

「いつたい何の必要があつて、そんな愚^ぐな事を引き受けたので
す」

物数^{ものずき}奇から引き受けたという言葉は、この場合どうしても敬
太郎の口へは出て来なかつた。彼はやむを得ず、衣食問題の必
要上どうしても田口に頼らなければならぬ事情があるので、
面白くないとは知りながら、つい承諾したのだという風な答を
した。

「衣食に困るなら仕方がないが、もう止した方がいいですよ。
余計な事じゃありませんか、寒いのに雨に降られて人の後^{あと}を跟^つ
けるなんて」

「私も少し懲^こりました。これからはもうやらないつもりです」
この述懐を聞いた松本は何とも云わず、ただ苦笑^{にがわら}いをしてい
た。それが敬太郎には軽蔑^{けいべつ}の意味にも憐愍^{れんみん}の意味にも取れるの

で、彼はいずれにしてもはなはだ肩身の狭い思をした。

「あなたは僕に対してすまん事をしたような風をしているが、実際そうなのですか」

根本義に溯^{さかの}ぼつたらそれほど感じていない敬太郎もこう聞かれると、行がかり上そうだと思わざるを得なかった。またそう答えざるを得なかった。

「じゃ田口へ行つてね。この間僕の伴^つれていた若い女は高等淫売^{こうとういんばい}だつて、僕自身がそう保証したと云つてくれたまえ」

「本当にそういう種類の女なんですか」

敬太郎はちよつと驚ろかされた顔をしてこう聞いた。

「まあ何でも好いから、高等淫売だと云つてくれたまえ」

「はあ」

「はあじゃいけない、たしかにそう云わなくっちゃ。云えます

か、君」

敬太郎は現代に教育された青年の一人として、こういう意味の言葉を、年長者の前で口にする無遠慮を憚^{はば}かるほどの男ではなかった。けれども松本が強^しいてこの四字を田口の耳へ押し込もうとする奥底には、何か不愉快なある物が潜^{ひそ}んでいるらしく思われるので、そう軽々しい調子で引き受ける氣も起らなかった。彼が挨拶^{あいさつ}に困つてむずかしい顔をしていると、それを見た松本は、「何、君心配しないでもいいですよ。相手が田口だもの」と云つたが、しばらくしてやつと氣がついたように、「君は僕と田口との關係をまだ知らないんでしたね」と聞いた。敬太郎は「まだ何にも知りません」と答えた。

「その關係を話すと、君が田口に向つてあの女の事を高等淫売だと云う勇氣が出で悪くなるだけだからつまり僕には損になるんだが、いつまで罪もない君を馬鹿にするのも氣の毒だから、聞かして上げよう」

こういう前置を置いた上、松本は田口と自分が社会的にどう交渉しているかを説明してくれた。その説明は最も簡単にすむだけに最も敬太郎を驚けろかした。それを一言でいうと、田口と松本は近い親類の間柄だったのである。松本に二人の姉があつて、一人が須永すながの母、一人が田口の細君、という互の縁続きを始めて吞のみ込んだ時、敬太郎は、田口の義弟に当る松本が、叔父という資格で、彼の娘と時間を極きめて停留所で待ち合わせた上、ある料理店で会食したという事実を、世間の出来事のうち

で最も平凡を極めたものの一つのように見た。それを込み入つた文でも隠しているように、一生懸命に自分の燃やした陽炎かげろうを散らつかせながら、後あとを追おっかけて歩いたのが、さもさも馬鹿馬鹿しくなつて来た。

「御嬢さんは何でまたあすこまで出張でばつていたんですか。ただ私を釣るためなんですか」

「何須永へ行つた帰りなんです。僕が田口で話していると、あの子が電話をかけて、四時半頃あすこで待ち合せているから、ちよつと帰りに降りてくれというんです。面倒だから止そうと思つたけれども、是非何とかとかいいうから、降りたところがね。今朝けさ御父さんから聞いたら、叔父さんが御歳暮おせいぼに指環ゆびわを買つてやると云つていたから、停留所で待ち伏せをして、逃にがさないようにいっしょに行つて買つて貰えと云われたから先刻さつきからこ

こで待つていたんだつて、人の知りもしないのに、一人で勝手な請求を持ち出してなかなか動かない。仕方がないから、まあ西洋料理ぐらいでごまかしておこうと思つて、とうとう宝亭へ連れ込んだんです。——実に田口という男は篋棒べらぼうだね。わざわざそれほどの手数てかずをかけて、何もそんな下らない真似まねをするにも当たらないじゃないか。騙だまされた君よりもよっぽど田口の方が篋棒ですよ」

敬太郎には騙された自分の方が遙はるかに愚物ぐぶつに思われた。そうと知つたら、探偵の結果を報告する時にも、もう少しは手加減が出来たものと、自おのずから赧あかい顔もしなければならなかつた。

「あなたはまるで御承知ない事なんです」

「知るものかね、君。いくら高等遊民だつて、そんな暇の出るはずがないじゃありませんか」

「御嬢さんはどうでしょう。多分御存じなんだろうと思います
が」

「そうさ」と云つて松本はしばらく思案していたが、やがて判切はつきりした口調で、「いや知るまい」と断言した。「あの箆棒へらぼうの田口に、
一つ取柄とりえがあると云えば云われるのだが、あの男はね、いくら
悪戯いたずらをしても、その悪戯をされた本人が、もう少して恥を搔かき
そうな際きわどい時になると、ぴたりととめてしまうか、または自
分がその場へ出て来て、当人の体面にかかわらない内に綺麗きれいに
始末をつける。そこへ行くと箆棒へらぼうには違ちがないが感心なところが
あります。つまりやりかたは悪辣あくらつでも、結末には妙に温かい情
の籠こもった人間らしい点を見せて来るんです。今度の事でもおそ
らく自分一人で呑み込のみ込んでいるだけでしょう。君が僕の家うちへ来
なかつたら、僕はきつとこの事件を知らずに済むんだつたらう。

自分の娘にだって、君の馬鹿を証明するような策略を、始めから吹聴するほど無慈悲な男じゃない。だからついでに悪戯も止せばいいんだがね、それがどうしても止せないところが、要するに篋棒です」

田口の性格に対する松本のこういう批評を黙って聞いていた敬太郎は、自分の馬鹿な振舞を顧みる後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨むよりも、むしろ悪戯をした田口を頼もしいと思う心が、わが胸の裏で一番勝を制したのを自覚した。が、はたしてそういう人ならば、なぜ彼の前に出て話をしている間に、あんな窮屈な感じが起るのだろうという不審も自ずと萌さない訳に行かなかった。

「あなたの御話でだいぶ田口さんが解つて来たようですが、私はあの方の前へ出ると、何だか気が落ちつかなくつて変に苦し

い
です」

「そりや向うでも君に氣を許さないからさ」

十四

こう云われて見ると、田口が自分に氣を許していない眼遣めづかいや
ら言葉つきやらがありありと敬太郎けいたろうの胸に、疑うたがいもない記憶とし
て読まれた。けれども田口ほどの老巧のものに、何で学校を出
たばかりの青臭あおくさい自分が、それほど苦になるのか、敬太郎は全
く合点がてんが行かなかつた。彼は見た通りのままの自分で、誰の前
へ出ても通用するものと今まで固く己おのれを信じていたのである。
彼はただかような青年として、他ひとに憚はばかられたり氣をおかれた
りする資格さえないように自分を見縊みくびつていただけに、経験の

程度の違う年長者から、自分の思わく^{おも}と違う待遇を受けるのを
むしろ不思議に考え出した。

「私はそんな裏表のある人間と見えますかね」

「どうだか、そんな細かい事は初めて会っただけじゃ分らない
ですよ。しかしあつても無くつても、僕の君に対する待遇には
いっこう関係がないからいいじやありませんか」

「けれども田口さんからそう思われちゃ……」

「田口は君だからそう思うんじゃない、誰を見てもそう思うん
だから仕方がないさ。ああして長い間人を使つてゐるうちには、
だいぶ騙^{だま}されなくつちやならないからね。たまに自然そのまま
の美しい人間が自分の前に現われて来ても、やつぱり気が許
せないんです。それがああ云う人の因果^{いんが}だと思えばそれで好い
じやないか。田口は僕の義兄だから、こつと云うと変に聞えるが、

本来は美質なんです。けつして悪い男じゃない。ただああして何年となく事業の成功という事だけを重おもに眼中に置いて、世の中と闘かっているものだから、人間の見方が妙に片寄つて、こいつは役に立つだろうかとか、こいつは安心して使えるだろうかとか、まあそんな事ばかり考えているんだね。ああなると女に惚ほれられても、こりや自分に惚れたんだろうか、自分の持つている金に惚れたんだろうか、すぐそこを疑ぐらなくっちゃいられなくなるんです。美人でさえそうなんだから君見たいな野郎が窮屈な取扱を受けるのは当然だと思わなくっちゃいけない。そこが田口の田口たるところなんだから」

敬太郎はこの批評で田口という男が自分にも判切はつきり呑み込めたような気がした。けれどもこういう風に一々彼を肯うけがわせるほどの判断を、彼の頭てつに鉄椎てつで叩たたき込むように入れてくれる松本はそ

もそも何者だろうか、その点になると敬太郎は依然として茫漠ぼうぼくたる雲に対する思があつた。批評に上のらない前の田口でさえ、この男よりはかえつて活きた人間らしい気がした。

同じ松本について見ても、この間の晩神田の洋食屋で、田口の娘を相手にして珊瑚樹さんごじゆの珠たまがどうしたとかこうしたとか云つていた時の方が、よつぽど活きて動いていた。今彼の前に坐すわっているのは、大きなパイプを銜くわえた木像の霊が、口を利きくと同じような感じを敬太郎に与えるだけなので、彼はただその人の本体を髣髴ほうふつするに苦しむに過ぎなかつた。彼が一方では明瞭めいりような松本の批評に心服しながら、一方では松本の何者なるかをこういう風に考えつつ、自分は頭腦の悪い、直覺の鈍い、世間並以下の人物じゃあるまいかと疑り始めた時、この漠然ぼくぜんたる松本がまた口を開いた。

「それでも田口が篋棒べらぼうをやつてくれたため、君はかえつて仕合しあわせをしたようなものですね」

「なぜですか」

「きつと何か位置こしを拵こしらえてくれますよ。これなりで放つておきや田口でも何でもありやしない。それは責任を持つて受合つて上げて宜いい。が、つまらないのは僕だ。全く探偵のされ損だから」

二人は顔を見合せて笑つた。敬太郎が丸い更紗さらさの座蒲団ざぶとんの上から立ち上がった時、主人はわざわざ玄関まで送つて出た。そこに飾たつてあつた墨絵の鶴ついでの衝立ついでの前に、瘡やせた高い身体からだをしばらく佇たずまして、靴はを穿はく敬太郎の後姿うしろすがたを眺ながめていたが、「妙な洋杖ステッキを持っていますね。ちよつと拝見」と云つた。そうしてそれを敬太郎の手から受取つて、「へえ、蛇へびの頭だね。なかなか

旨^{うま}く刻^ほつてある。買ったんですか」と聞いた。「いえ素人^{しろうと}が刻つたのを貰^{もら}ったんです」と答えた敬太郎は、それを振りながらまた矢来^{やらい}の坂を江戸川の方へ下^{くだ}った。

雨の降る日

一

雨の降る日に面会を謝絶した松本の理由は、ついに当人の口から聞く機会を得ずに久しく過ぎた。敬太郎^{けいたろう}もそのうちに取り紛^{まぎ}れて忘れてしまった。ふとそれを耳にしたのは、彼が田口の世話で、ある地位を得たのを縁故に、遠慮なく同家^{しゅつにゆう}へ出入のでき

る身になつてからの事である。その時分の彼の頭には、停留所の経験がすでに新らしい匂いを失いかけていた。彼は時々須永すながからその話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかつた。須永はよく彼に向つて、なぜその前に僕の所へ来て打ち明けなかつたのだと詰問した。内幸町の叔父が人を担かつぐくらいの事は、母から聞いて知つてゐるはずだのにと窘たしなめる事もあつた。しまいには、君があんまり色氣があり過ぎるからだと言から戯かい出した。敬太郎はそのたびに「馬鹿云々」で通していたが、心の内ではいつも、須永の門前で見た後姿の女を思い出した。その女がとりも直さず停留所の女であつた事も思い出した。そうしてどこか遠くの方で気恥かしい心持がした。その女の名が千代子ちよこで、その妹の名が百代子ももよこである事も、今の敬太郎には珍らしい報知ではなかつた。

彼が松本に会つて、すべて内幕の消息を聞かされた後、田口
 へ顔を出すのは多少きまりの悪い思をするだけであつたにかか
 わらず、顔を出さなければ締め括りがつかないという行きがか
 りから、笑われるのを覚悟の前で、また田口の門を潜つた時、田
 口ははたして大きな声を出して笑つた。けれどもその笑の中に
 は己れの機略に誇る高慢の響よりも、迷つた人を本来の路に返
 してやつた喜びの勝利が聞こえているのだと敬太郎には解釈さ
 れた。田口はその時訓戒のためだとか教育の方法だとかいった
 風の、恩に着せた言葉をいっさい使わなかつた。ただ悪意でし
 た訳でないから、怒つてはいけなさと断わつて、すぐその場で
 相当の位置を拵らえてくれる約束をした。それから手を鳴らし
 て、停留所に松本を待ち合わせていた方の姉娘を呼んで、これ
 が私の娘だとわざわざ紹介した。そうしてこの方は市さんの御

友達だよと云つて敬太郎を娘に教えていた。娘は何でこういう人に引き合されるのか、ちよつと解かいしかねた風をしながら、極めてよそよそしく叮嚀ていねいな挨拶あいさつをした。敬太郎が千代子という名を覚えたのはその時の事であつた。

これが田口の家庭に接触した始めての機会になつて、敬太郎はその後ごも用事なり訪問なりに縁を藉かりて、同じ人の門を潜る事が多くなつた。時々は玄関脇の書生部屋へ這入はいつて、かつて電話で口を利きき合つた事のある書生と世間話うちむきさえした。奥へも無論通る必要が生じて来た。細君に呼ばれて内向の用を足す場合もあつた。中学校へ行く長男から英語の質問を受けて窮する事も稀まれではなかつた。出入でいりの度数がこう重なるにつれて、敬太郎が二人の娘に接近する機会も自然多くなつて来たが、一種間まの延びた彼の調子と、比較的引き締しまつた田口の家風と、差向い

で坐る時間の欠乏とが、容易に打ち解けがたい境遇に彼らを置き去りにした。彼らの間に取り換わされた言葉は、無論形式だけを重んずる堅苦しいものではなかったが、大抵は五分とかからない当用に過ぎないので、親しみはそれほど出る暇がなかった。彼らが公然と膝^{ひざ}を突き合わせて、例になく長い時間を、遠慮^{まじ}の交らない談話に更^ふかしたのは、正月半ば^{なか}の歌留多会^{かるたかい}の折であつた。その時敬太郎は千代子から、あなた随分鈍^{のろ}いのねと云われた。百代子からは、あたしあなたと組むのは厭^{いや}よ、負けるにきまつてるからと怒^{おこ}られた。

それからまた一カ月ほど経^たつて、梅の音信^{たより}の新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の午後を、久しぶりに須永の二階で暮した時、偶然遊びに来ていた千代子に出逢^{であ}つた。三人してそれからそれへと纏^{まと}まらない話を続けて行くうちに、ふと松本の評判が千代

子の口に上つた。^{のぼ}

「あの叔父さんも随分變つてゐるのね。雨が降ると一しきりよく御客を断わつた事があつてよ。今でもそうかしら」

二

「実は僕も雨の降る日に行つて断られた一人^{いちにん}なんだが……」と敬太郎^{けいたろう}が云い出した時、須永^{すなが}と千代子は申し合せたように笑ひ出した。

「君も随分運の悪い男だね。おおかた例の洋杖^{ステツキ}を持つて行かなかつたんだろう」と須永は調戲^{からか}い始めた。

「だって無理だわ、雨の降る日に洋杖なんか持つて行けつたつて。ねえ田川さん」

この理攻め^{りぎ}の弁護を聞いて、敬太郎も苦笑した。

「いつたい田川さんの洋杖つて、どんな洋杖なの。わたしちよつと見たいわ。見せてちょうだい、ね、田川さん。下へ行つて見て来ても好くつて」

「今日は持つて来ません」

「なぜ持つて来ないの。今日はあなたそれでも好い御天気よ」
「大事な洋杖だから、いくら好い御天気でも、ただの日には持つて出ないんだとき」

「本当？」

「まあそんなものです」

「じゃ旗日^{はたひ}にだけ突いて出るの」

敬太郎は一人で二人に当っているのが少し苦しくなった。この次内幸町へ行く時は、きつと持つて行つて見せるという約束

をしてようやく千代子の追窮を逃れた。その代り千代子からな
ぜ松本が雨の降る日に面会を謝絶したかの原因を話して貰う事
にした。――

それは珍らしく秋の日の曇った十一月のある午過であつた。
千代子は松本の好きな雲丹を母からことづかつて矢来へ持つて
来た。久しぶりに遊んで行こうかしらと云つて、わざわざ乗つ
て来た車まで返して、緩くり腰を落ちつけた。松本には十三に
なる女を頭に、男、女、男と互違に順序よく四人の子が揃つてい
た。これらは皆二つ違いに生れて、いずれも世間並に成長しつ
つあつた。家庭に華やかな匂を着けるこの生き生きした裝飾物
の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子を、指環に嵌めた真
珠のように大事に抱いて離さなかつた。彼女は真珠のように透
明な青白い皮膚と、漆のように濃い大きな眼を有つて、前の年

の雛ひなの節句の前の宵よいに松本夫婦の手に落ちたのである。千代子は五人のうちで、一番この子を可愛かわいがつていた。来るたんびにきつと何か玩具おもちゃを買つて来てやつた。ある時は余り多量に甘いものをあてがつて叔母から怒おこられた事さえある。すると千代子は、大事そうに宵子を抱いて縁側えんがわへ出て、ねえ宵子さんと云つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑いながら、何だね喧嘩けんかでもしやまいしと云つた。松本は、御前そんなにその子が好きなら御祝いの代りに上げるから、嫁に行くとき持つておいでと調戲からかつた。

その日も千代子は坐ると直宵子すぐを相手にして遊び始めた。宵子は生れてからついぞ月代さかやきを剃そつた事がないので、頭の毛が非常に細く柔やわらかに延びていた。そうして皮膚の青白いせいか、その髪の色が日光に照らされると、潤沢うるおいの多い紫むらさきを含んでぴかぴ

か縮れ上つていた。「宵子さんかんかん結いつて上げましょう」と云つて、千代子は鄭寧ていねいにその縮れ毛に櫛くしを入れた。それから乏しい片鬢かたびんを一束割さいて、その根元に赤いリボンくを括りつけた。宵子の頭は御供おそなえのように平らに丸く開いていた。彼女は短かい手をやつとその御供の片隅かたすみへ乗せて、リボンの端はじを抑えながら、母のいる所までよたよた歩いて来て、イボンイボンと云つた。母がああ好くかんかんが結なえましたねと賞ほめると、千代子は嬉うれしそうに笑いながら、子供の後姿を眺ながめて、今度は御父さんの所へ行つて見せていらつしやいと指図さしずした。宵子はまた足元の危ない歩きつきをして、松本の書斎の入口まで来て、四つ這ばいになつた。彼女が父に礼をするときには必ず四つ這になるのが例であつた。彼女はそこで自分の尻をできるだけ高く上げて、御供のような頭を敷居から二三寸の所まで下げて、またイボンイ

ボンと云った。書見をちよつとやめた松本が、ああ好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頸くびを下げたまま、ちいちいと答えた。ちいちいと云うのは、舌の廻らない彼女の千代子を呼ぶ常の符徴ふちようであつた。後うしろに立つて見ていた千代子は小さい唇くちびるから出る自分の名前を聞いて、また嬉しそうに大きな声で笑つた。

三

そのうち子供がみんな学校から帰つて来たので、今まで赤いリボンに占領されていた家庭が、急に幾色かの華はなやかさを加えた。幼稚園へ行く七つになる男の子が、巴ともえの紋もんのついた陣太鼓じんたいこのようなものを持って来て、宵子よいこさん叩たたかして上げるからおい

でと連れて行つた。その時千代子は巾着きんちやくのような恰好かっこうをした赤い毛織けいしの足袋たびが廊下を動いて行く影を見つめていた。その足袋たびの紐ひもの先には丸い房がついていて、それが小さいな足を運ぶたびにぱつぱつと飛んだ。

「あの足袋はたしか御前が編あんでやったのだったね」

「ええ可愛かわいらしいわね」

千代子はそこへ坐つて、しばらく叔父と話していた。そのうちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思うと、それが見る音を立てて、空坊主からぼうずになつた梧桐ごとうをしたたか濡ぬらし始めた。松本も千代子も申し合せたように、硝子越ガラスごしの雨の色を眺めて、手焙てあぶりに手を翳かざした。

「芭蕉ばしやうがあるもんだから余計音がするのね」

「芭蕉はよく持つものだよ。この間から今日は枯れるか、今日

は枯れるかと思つて、毎日こうして見ているがなかなか枯れない。山茶花さざんかが散つて、青桐あおぎりが裸になつても、まだ青いんだからなあ」

「妙な事に感心するのね。だから恒三つねぞうは閑人ひまじんだつて云われるのよ」

「その代り御前の叔父さんには芭蕉の研究なんか死ぬまでできっこない」

「したかないわ、そんな研究なんか。だけど叔父さんは内の御父さんよりか全く学者ね。わたし本当に敬服しててよ」

「生意氣なまいき云うな」

「あら本当よあなた。だつて何を聞いても知つてゐるんですもの」
二人がこんな話をしていると、ただいまかたこの方が御見えになりましたと云つて、下女が一通の紹介状のようなものを持つて

来て松本に渡した。松本は「千代子待っておいで。今にまた面白い事を教えてやるから」と笑いながら立ち上った。

「厭いやよまたこないだみたいにな、西洋煙草たばこの名なんかたくさん覚えさせちや」

松本は何にも答えずに客間の方へ出て行つた。千代子も茶の間へ取つて返した。そこには雨に降り込められた空の光を補なうため、もう電氣灯が点つていた。台所ではすでに夕飯ゆうめしの支度を始めたと見えて、瓦斯ガス七輪が二つとも忙がしく青い燄ほのおを吐いていた。やがて小供は大きな食卓に二人ずつ向い合せて坐つた。宵子だけは別に下女がついて食事をするのが例になつてゐるので、この晩は千代子がその役を引受けた。彼女は小さい朱塗の椀わんと小皿に盛つた魚肉とを盆の上に載のせて、横手にある六疊へ宵子連れ込んだ。そこは家のものうちの着更きがえをするために多く用

いられる室へやなので、箆たんすが二つと姿見が一つ、壁から飛び出したように据すえてあつた。千代子はその姿見の前に玩具おもちゃのような椀と茶碗を載せた盆を置いた。

「さあ宵子さん、まんまよ。御待遠おまちどおさま」

千代子が粥かゆを一匙ひとさじずつ掬すくつて口へ入れてやるたびに、宵子は旨おいしい旨おいしいだの、ちようだいちようだいのいろいろな芸を強しいられた。しまいに自分一人で食たべると云つて、千代子の手から匙を受け取つた時、彼女はまた丹念たんねんに匙の持ち方を教えた。宵子は固もとより極きわめて短かい単語よりほかに発音できなかつた。そう持つのではないと叱おそなえられると、きつと御供おそなえのような平たい頭を傾かしげて、こう？　こう？　と聞き直した。それを千代子が面白がつて、何遍もくり返さしているうちに、いつもの通りこう？　と半分言いかけて、心持横にした大きな眼で千代子を見

上げた時、突然右の手に持った匙を放り出して、千代子の膝の
前に俯伏うつぶせになった。

「どうしたの」

千代子は何の気もつかずに宵子を抱だき起した。するとまるで
眠った子を抱えたように、ただ手応てじたいがぐたりとしただけなので、
千代子は急に大きな声を出して、宵子さん宵子さんと呼んだ。

四

宵子よいこはうとうと寝入ねいった人のように眼を半分閉じて口を半分
開けたまま千代子の膝ひざの上に支えられた。千代子は平手でその
背中を二三度叩たたいたが、何の効目ききめもなかった。

「叔母さん、大変だから来て下さい」

母は驚ろいて箸と茶碗を放り出したなり、足音を立てて這入つて来た。どうしたのと云いながら、電灯の真下で顔を仰向あおむけにして見ると、唇くちびるにもう薄く紫の色が注さしていた。口へ掌てのひらを当てがつても、呼吸いきの通う音はしなかった。母は呼吸こきゅうの塞つまつたような苦しい声を出して、下女に濡手拭ぬれてぬぐいを持つて来させた。それを宵子の額のに載せた時、「脈みやくはあつて」と千代子に聞いた。千代子はすぐ小さい手頸てくびを握つたが脈はどこにあるかまるで分らなかつた。「叔母さんどうしたら好いでしよう」と蒼あおい顔をして泣き出した。母は茫然ぼうぜんとそこに立つて見ている小供に、「早く御父さんを呼んでいらつしやい」と命じた。小供は四人とも客間の方へ馳かけ出した。その足音が廊下の端はずれで止まつたと思うと、松本が不思議ふふそうな顔をして出て来た。「どうした」と云いながら、蔽おい被かぶさるように細君と千代子の上から宵子を覗のぞき込んだが、一目

見ると急に眉を寄せた。

「医者……」

医者は時を移さず来た。「少し模様が変です」と云つてすぐ注射をした。しかし何の効能もなかった。「駄目でしょうか」という苦しく張りつめた問が、固く結ばれた主人の唇を洩れた。そうして絶望を怖れる怪しい光に充ちた三人の眼が一度に医者の上に据えられた。鏡を出して瞳孔を眺めていた医者は、この時宵子の裾を捲つて肛門を見た。

「これでは仕方ありません。瞳孔も肛門も開いてしまつていますから。どうも御気の毒です」

医者はこう云つたがまた一筒の注射を心臓部に試みた。固よりそれは何の手段にもならなかった。松本は透き徹るような娘の肌に針の突き刺される時、自から眉間を陰しくした。千代子

は涙をぼろぼろ膝の上に落した。

「病因は何でしょう」

「どうも不思議です。ただ不思議というよりほかに云いようがないようです。どう考えても……」と医者は首を傾むけた。「辛子湯からしゆでも使わして見たらどうですか」と松本は素人料簡しろうとりようけんで聞いた。「好いでしょう」と医者はすぐ答えたが、その顔には毫ごうも奨励しょうれいの色が出なかつた。

やがて熱い湯を盥たらひへ汲くんで、湯氣の濛々もうもうと立つ真中へ辛子からしを一袋あ空けた。母と千代子は黙つて宵子の着物を取り除のけた。医者は熱湯の中へ手を入れて、「もう少し注水うめましょう。余り熱いと火傷やけどでもなさるといけませんから」と注意した。

医者いしやの手に抱だき取られた宵子は、湯の中に五六分浸ひけられていた。三人は息を殺して柔らかな皮膚の色を見つめていた。「も

う好いでしよう。余あまり長くなると……」と云いながら、医者
は宵子を鹽たらいから出した。母はすぐ受取つてタオルで鄭寧ていねいに拭い
て元の着物を着せてやつたが、ぐたぐたになつた宵子の様子に、
ちつとも前と変りがないので、「少しの間このまま寝かしておい
てやりましょう」と恨めうらしそうに松本の顔を見た。松本はそれ
がよかろうと答えたまま、また座敷の方へ取つて返して、来客
を玄関に送り出した。

小さい蒲団ふとんと小さい枕がやがて宵子のために戸棚とだなから取り出
された。その上に常の夜の安らかな眠に落ちたとしか思えない
宵子の姿を眺ながめた千代子は、わつと云つて突伏つづつした。

「叔母さんおばさんとんだ事をしました……」

「何も千代ちゃんちやんがした訳じゃないんだから……」

「でもあたしが御飯ごはんを喫たべさしていたんですから……叔父さん

にも叔母さんにもまことにすみません」

千代子は途切とぎれ途切とぎれの言葉で、先刻さつき自分が夕飯ゆうめしの世話をしていた時の、平生ふだんと異ならない元気な様子を、何遍もくり返して聞かした。松本は腕組をして、「どうもやっぱり不思議だよ」と云ったが、「おい御仙おせん、ここへ寝かしておくのは可哀かわいそうだから、あつちの座敷へ連れて行つてやろう」と細君うなを促がした。千代子も手を貸した。

五

手頃な屏風びやうぶがないので、ただ都合の好い位置を択よつて、何の囲かこいもない所へ、そつと北枕に寝かした。今朝方けさがたおもちゃ玩弄おもちゃにしていた風船玉を茶の間から持つて来て、御仙がその枕元に置いてやつ

た。顔へは白い晒し木綿きめんをかけた。千代子は時々それを取り除のけて見ては泣いた。「ちよつとあなた」と御仙が松本を顧かえりみて、「まるで観音様かんのんさまのように可愛かわいい顔をしています」と鼻を詰らせた。松本は「そうか」と云つて、自分の坐っている席から宵子の顔を覗のぞき込んだ。

やがて白木の机の上に、檯しきみと線香立と白団子が並べられて、蠟燭ろうそくの灯ひが弱い光を放った時、三人は始めて眠から覚さめない宵子と自分達が遠く離れてしまったという心細い感じに打たれた。彼らは代る代る線香を上げた。その煙の香においが、二時間前とは全く違う世界に誘いざない込まれた彼らの鼻を断えず刺戟しげきした。ほかの子供は平生の通り早く寝かされた後に、咲子あとしといふ十三になる長女だけが起きて線香の側そばを離れなかつた。

「御前おねも御寝よ」

「まだ内幸町からも神田からも誰も来ないのね」

「もう来るだろう。好いから早く御寝」

咲子は立つて廊下へ出たが、そこで振り回^{かえ}つて、千代子を招いた。千代子と同じく立つて廊下へ出ると、小さな声で、怖^{こわ}いからいつしよに便所^{はばかり}へ行つてくれろと頼んだ。便所には電灯が点^つけてなかつた。千代子は燐^{マツチ}寸を擦^すつて雪洞^{ぼんぼり}に灯^ひを移して、咲子といつしよに廊下を曲^まつた。帰りに下女部屋を覗^{のぞ}いて見ると、飯^{めしたき}焚^{でいり}が出入の車夫と火鉢^{ひばち}を挟^{はさ}んでひそひそ何か話していた。千代子にはそれが宵子の不幸を細かに語っているらしく思われた。ほかの下女は茶の間で来客の用意に盆を拭いたり茶碗を並べたりしていた。

通知を受けた親類のものがそのうち二三人寄つた。いずれまた来るからと云つて帰つたのもあつた。千代子は来る人ごとに

宵子の突然な最後をくり返しくり返し語った。十二時過から御仙は通夜つやをする人のために、わざと置火燵おきごたつを拵こしらえて室へやに入れたが、誰もあたるものはなかった。主人夫婦は無理に勧められて寢室へ退しりぞいた。その後あとで千代子は幾度か短かくなつた線香の煙を新らしく継ついだ。雨はまだ降りやまなかつた。夕方芭蕉ばしやうに落ちた響はもう聞こえない代りに、亜鉛トタン葺ふの廂ひさしにあたる音が、非常に淋しくて悲しい点滴てんてきを彼女の耳に絶えず送つた。彼女は
この雨の中で、時々宵子の顔に当てた晒さらしを取つては啜泣すすりなきをして
いるうちに夜が明けた。

その日は女がみんなして宵子の経帷子きようかたびらを縫きつた。百代子ももよこが新たに内幸町から来たのと、ほかに懇意うちの家の細君が二人ほど見えたので、小さい袖そでや裾すそが、方々の手に渡つた。千代子は半紙すずりと筆と硯すずりとを持って廻つて、南無阿弥陀仏なむあみだぶつという六字を誰にも

一枚ずつ書かした。「市いっさんも書いて上げて下さい」と云つて、
須永すながの前へ来た。「どうするんだい」と聞いた須永は、不思議そ
うに筆と紙を受取つた。

「細かい字で書けるだけ一面に書いて下さい。後あとから六字ずつ
を短冊形たんざくがたに剪きつて棺かんの中へ散らしにして入れるんですから」

皆みんなな畏かしこまつて六字の名号みょうごうを認したためた。咲子は見ちや厭いやよと

云いながら袖屏風そでびょうぶをして曲りくねつた字を書いた。十一になる

男の子は僕は仮名で書くよと断わつて、ナムアミダブツと電報
のようにいくつも並べた。午過ひるすぎになつていよいよ棺に入れると

き松本は千代子に「御前着物を着換かさしておやりな」と云つた。

千代子は泣きながら返事もせず、冷たい宵子を裸にして抱だき
起した。その背中には紫色の斑点が一面に出ていた。着換が済

むと御仙が小さい珠数じゆずを手にかけてやつた。同じく小さい編笠あみがさ

と藁草履わらぞうりを棺に入れた。昨日きのうの夕方まで穿はいていた赤い毛糸の足袋たびも入れた。その紐ひもの先につけた丸い珠たまのぶらぶら動く姿がすぐ千代子の眼に浮んだ。みんなのくれた玩具おもちゃも足や頭の所へ押し込んだ。最後に南無阿弥陀仏なんぶくの短冊たんざくを雪のように振りかけた上へ蓋ふたをして、白綸子しろりんずの被おひをした。

六

友引ともびきは善よくないという御仙おせんの説で、葬式を一日延ばしたため、家うちの中は陰気な空気うちの裡に常よりは賑にぎわった。七つになる嘉吉かきちという男の子が、いつもの陣太鼓じんたいこを叩たたいて叱あられた後、そつと千代子の傍そばへ来て、宵子よいこさんはもう帰って来ないのと聞いた。須永すながが笑いながら、明日あしたは嘉吉さんも焼場へ持つて行つて、宵

子さんといつしよに焼いてしまうつもりだと調戯うと、嘉吉は

そんなつもりなんか僕厭いやだぜと云いながら、大きな眼をくるく

るさせて須永を見た。咲子さきこは、御母さんわたしも明日御葬式に

行きたいわと御仙にせびつた。あたしもねと九つになる重子しげこが

頼んだ。御仙はようやく気がついたように、奥で田口夫婦と話

をしていた夫を呼んで、「あなた、明日いらしつて」と聞いた。

「行くよ。御前も行つてやるが好い」

「ええ、行く事にきめてます。小供には何を着せたらいいでしょ

う」

「紋付もんつきでいいじゃないか」

「でも余あんまり模様が派手だから」

「袴はかまを穿はけばいいよ。男の子は海軍服でたくさんだし。御前は

黒紋付だろう。黒い帯は持つてるかい」

「持つてます」

「千代子、御前も持つてゐるなら喪服を着て供ともに立つておやり」

こんな世話を焼いた後で、松本はまた奥へ引返した。千代子もまた線香を上げに立った。棺かんの上を見ると、いつの間にか綺麗きれいな花環はなわが載せてあつた。「いつ来たの」と傍そばにいる妹の百代に聞いた。百代は小さな声で「先刻さつき」と答えたが、「叔母さんが小供のだから、白い花だけでは淋さみしいって、わざと赤いのを交まぜさしたんですって」と説明した。姉と妹はしばらくそこに並んで坐つていた。十分ばかりすると、千代子は百代の耳に口を付けて、「百代さんあなた宵子さんの死顔を見て」と聞いた。百代は「ええ」と首肯うなずいた。

「いつ」

「ほら先刻さつき御棺に入れる時見たんじゃないの。なぜ」

千代子はそれを忘れていた。妹がもし見ないと云つたら、二人で棺の蓋ふたをもう一遍開けようと思つたのである。「御止しなさいよ、怖こわいから」と云つて百代は首をふつた。

晩には通夜僧つやそうが来て御経を上げた。千代子が傍で聞いてみると、松本は坊さんを捕まえて、三部経さんぶきようがどうだの、和讃わさんがどうだのという変な話をしていた。その会話の中には親鸞上人しんらんしようにんと蓮如上人れんによしようにんという名がたびたび出て来た。十時少し廻つた頃、松本は菓子と御布施おふせを僧の前に並べて、もう宜よろしいから御引取下さいと断ことわつた。坊さんの帰つた後あとで御仙がその理由わけを聞くと、「何坊さんも早く寝た方が勝手だあね。宵子だつて御経なんか聴くのは嫌きらだよ」とすましていた。千代子と百代子は顔を見合せて微笑した。

あくる日は風のない明らかな空の下に、小さいな棺が静かに

動いた。みちばた路端の人はそれを何か不可思議のものであるかのようもくそうに目送した。松本は白張しらはりの提灯ちようちんや白木しらぎの輿こしが嫌だと云つて、宵子の棺を喪車に入れたのである。その喪車の周囲ぐるりに垂れた黒い幕が揺れるたびに、白綸子しろりんずの覆おいをした小さな棺の上に飾つた花環がちらちら見えた。そこいらに遊んでいた子供が駆け寄つて来て、珍らしそうに車を覗のぞき込んだ。車と行き逢つた時、脱帽して過ぎた人もあつた。

寺では読経どきようも焼香も形式通り済んだ。千代子は広い本堂に坐つている間、不思議に涙も何も出なかつた。叔父叔母の顔を見てもこれといつて憂うれいに鎖とぎされた様子は見えなかつた。焼香の時、重子こうが香こうをつまんで香炉かうろの裏うちへ燂くべるのを間違えて、灰を一撮ひとつかみ取つて、抹香まつこうの中へ打ち込んだ折には、おかしくなつて吹き出したくらいである。式が果ててから松本と須永と別に一二人棺

につき添つて火葬場へ廻つたので、千代子はほかのものといつしよにまた矢来^{やらい}へ歸つて来た。車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しいくらい悲しかった昨日^{きのう}一昨日^{おととい}の気分の方が、清くて美くしい物を多量に含んでいたらしく考えて、その時味わつた痛烈な悲哀をかえつて恋しく思つた。

七

骨上^{こつあげ}には御仙^{おせん}と須永^{すなが}と千代子とそれに平生^{ふだん}宵子^{よいこ}の守をしていた清^{きよ}という下女^{きよ}がついて都合^{ようたり}四人で行つた。柏木^{かしわぎ}の停車場^{ステーション}を下りると二丁^{うち}ぐらいな所を、つい気がつかずに宅^{うち}から車に乗つて出たので時間はかえつて長くかかった。火葬場の経験は千代子に取つて生れて始めてであつた。久しく見^けず^{しき}にいた郊外^{けしき}の景色

も忘れ物を思い出したように嬉しかつた。眼に入るものは青い
麦畠むぎばたけと青い大根畠ときわぎと常磐木の中に赤や黄や褐色を雑多に交ぜた
森の色であつた。前へ行く須永は時々後を振り返つて、穴八幡あなはちまん
だの諏訪すわの森もりだのを千代子に教えた。車が暗いだらだら坂へ来
た時、彼はまた小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子の
ために指ゆびさした。それには弘法大師こうぼうだいし千五十年くようとう供養塔きざうと刻んであつ
た。その下に熊笹くまざさの生い茂つた吹井戸を控えて、一軒の茶見世
が橋の袂たもとをさも田舎路いなかみちらしく見せていた。折々坊主になりかけ
た高い樹の枝の上から、色の変つた小さい葉が一つずつ落ちて
来た。それが空中で非常に早くきりきり舞う姿が鮮あざやかに千代
子の眼を刺戟しげきした。それが容易に地面の上へ落ちずに、いつま
でも途中でひらひらするものも、彼女には眼新らしい現象であつ
た。

火葬場は日当りの好い平地ひらちに南を受けて建てられているので、車を門内に引き入れた時、思ったより陽気な影が千代子の胸に射した。御仙が事務所の前で、松本ですがと云うと、郵便局の受付口みたような窓の中に坐っていた男が、鍵かぎは御持ちでしょうねと聞いた。御仙は変な顔をして急に懐ふところや帯の間を探り出した。

「とんだ事をしたよ。鍵を茶の間の用筆筒ようだんすの上へ置いたなり……」
「持つて来なかったの。じゃ困るわね。まだ時間があるから急いで市いちさんに取つて来て貰うと好いわ」

二人の問答を後の方で冷淡に聞いていた須永は、鍵なら僕が持つて来ているよと云つて、冷たい重いものを袂たもとから出して叔母に渡した。御仙がそれを受付口へ見せている間に、千代子は須永を窘たしなめた。

「市さん、あなた本当に悪らしい方ね。^{にく}持つてるなら早く出して上げればいいのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭がぼんやりしているから忘れるんじゃないやありませんか」

須永はただ微笑して立っていた。

「あなたのような不人情な人はこんな時にはいつそ来ない方がいいわ。宵子さんが死んだって、涙一つ零す^{こぼ}じやなし」

「不人情なんじゃない。まだ子供を持った事がないから、親子の情愛がよく解らないんだよ」

「まあ。よく叔母さんの前でそんな呑気^{のんき}な事が云えるのね。じゃあたしなんかどうしたの。いつ子供持った覚^{おぼえ}があつて」

「あるかどうか僕は知らない。けれども千代ちゃんも女だから、おおかた男より美しくいい心を持つてるんだろう」

御仙は二人の口論を聞かない人のように、用事を済ますとす

ぐ待合所の方へ歩いて行つた。そこへ腰をかけてから、立つて
いる千代子を手招きした。千代子はすぐ叔母の傍へ来て座に着
いた。須永も続いて這入つて来た。そうして二人の向側にある
涼み台みたようなものの上に腰をかけた。清もおかけと云つて
自分の席を割いてやつた。

四人が茶を呑んで待ち合っている間に、骨上の連中が二三組
見えた。最初のは田舎染みた御婆さんだけで、これは御仙と千
代子の服装に対して遠慮でもしたらしく口数を多く利かなかつ
た。次には尻を絡げた親子連が来た。活潑な声で、壺を下さい
と云つて、一番安いのを十六銭で買つて行つた。三番目には散髪
に角帯を締めた男とも女とも片のつかない盲者が、紫の袴を穿
いた女の子に手を引かれてやつて来た。そうしてまだ時間はあ
るだらうねと念を押して、袂から出した巻煙草を吸い始めた。

須永はこの盲者の顔を見ると立ち上つてぷいと表へ出たぎりな
 かなか返つて来なかつた。ところへ事務所のものが御仙の傍へ
 来て、用意が出来ましたからどうぞと促うながしたので、千代子は
 須永を呼びに裏手へ出た。

八

真鍮しんちゆうの掛札に何々殿と書いた並等なみとうの竈かまを、薄気味悪く左右に見
 て裏へ抜けると、広い空地あきちの隅すみに松薪まつまきが山のように積んであつ
 た。周囲まわりには綺麗きれいな孟宗藪もうそうやぶが蒼々と茂つていた。その下が麦畠むぎばたけ
 で、麦畠の向うがまた岡続きに高く蜿蜒うねうねしているので、北側の
 眺めながめはことに晴々はればれしかつた。須永すながはこの空地の端はしに立つて広い
 眼界をぼんやり見渡していた。

「市さん、もう用意ができたんですつて」

須永は千代子の声を聞いて黙ったまま帰つて来たが、「あの竹藪は大変みごとだね。何だか死人の膏が肥料になつて、ああ生々延びるような気がするじゃないか。ここにできる筈はきつと旨いよ」と云つた。千代子は「おお厭だ」と云い放にして、さつさとまた並等を通り抜けた。宵子の竈は上等の一号というので、扉の上に紫の幕が張つてあつた。その前に昨日の花環が少し凋みかけて、台の上に静かに横たわつていた。それが昨夜宵子の肉を焼いた熱氣の記念のように思われるので、千代子は急に息苦しくなつた。御坊が三人出て来た。そのうちの一番年を取つたのが「御封印を……」と云うので、須永は「よし、構わないから開けてくれ」と頼んだ。畏まつた御坊は自分の手で封印を切つて、かちやりと響く音をさせながら錠を抜いた。黒

い鉄の扉が左右へ開くと、薄暗い奥の方に、灰色の丸いものだの、黒いものだの、白いものだの、形を成さない一塊ひとかたまりとなつて朧おぼろげ氣に見えた。御坊は「今出しましょう」と断つて、レールを二本前の方に継つぎ足しておいて、鉄の環かんに似たものを二つ棺台の端はしにかけたかと思うと、いきなりがらがらという音と共に、かの形を成さない一塊の焼残やけのこりが四人の立つている鼻の下へ出て来た。千代子はそのなかで、例の御供おそなえに似てふつくらと膨ふくらんだ宵子の頭蓋骨ずがいこつが、生きていた時そのままの姿で残っているのを認めて急に手帛ハンケチを口に銜くわえた。御坊はこの頭蓋骨と頬骨と外に二つ三つの大きな骨を残して、「あとは綺麗きれいに篩ふるつて持つて参りましょう」と云つた。

よつたり　めいめいきぼし
四人は各自木箸と竹箸を一本ずつ持つて、台の上の白骨はっこつを思い思いに拾つては、白い壺つぼの中へ入れた。そうして誘い合せた

ように泣いた。ただ須永だけは蒼白い顔をして口も利かず鼻も鳴らさなかつた。「齒は別になさいますか」と聞きながら、御坊が小器用に齒を拾い分けてくれた時、顎をくしゃくしゃと潰してその中から二三枚扱ひ出したのを見た須永は、「こうなるとまるで人間のような気がしないな。砂の中から小石を拾い出すと同じ事だ」と独言のように云つた。下女が三和土の上にぽたぽたと涙を落した。御仙と千代子は箸を置いて手帛を顔へ当てた。車に乗るとき千代子は杉の箱に入れた白い壺を抱いてそれを膝の上に載せた。車が馳け出すと冷たい風が膝掛と杉箱の間から吹き込んだ。高い櫓が白茶けた幹を路の左右に並べて、彼らを送り迎えるごとくに細い枝を揺り動かした。その細い枝が遙か頭の上で交叉するほど繁く両側から出ているのに、自分の通る所は存外明るいのを奇妙に思つて、千代子は折々頭を上げて

は、遠い空を眺めた。^{なが}宅へ着いて遺骨を仏壇の前に置いた時、すぐ寄つて来た小供が、蓋を開けて見せてくれというのを彼女は断然拒絶した。

やがて家内中同じ室で昼飯の膳に向つた。「こうして見ると、まだ子供がたくさんいるようだが、これで一人もう欠けたんだね」と須永が云い出した。

「生きてる内はそれほどにも思わないが、逝かれて見ると一番惜しいようだね。ここにゐる連中のうちで誰か代りになればいいと思うくらいだ」と松本が云つた。

「非道いわね」と重子が咲子に耳語いた。

「叔母さんまた奮発して、宵子さんと瓜二つのような子を拵えてちょうだい。可愛がつて上げるから」

「宵子と同じ子じゃいけないでしょう、宵子でなくつちや。御

茶碗や帽子と違って代りができたつて、亡くしたのを忘れる訳
にや行かないんだから」

「己おれは雨の降る日に紹介状を持って会いに来る男が厭いやになつた」

須永の話

一

敬太郎けいたろうは須永すながの門前うしろすがたで後姿うしろすがたの女を見て以来、この二人を結び
つける縁えんの糸を常に想像した。その糸には一種夢のような匂においが
あるので、二人を眼の前に、須永としまた千代子として眺ながめる時
には、かえつてどこかへ消えてしまふ事が多かつた。けれども

彼らが普通の人間として敬太郎の肉眼に現実の刺戟しげきを与えない折々には、失なわれた糸がまた二人の中を離すべからざる因果いんがのごとくに繋つないだ。田口の家うちへ出入でいりするようになってからも、須永と千代子の関係については、一口でさえ誰からも聞いた事はなし、また二人の様子を直じかに觀察しても尋常の従兄弟いとこ以上は何物も仄ほめいていなかったには違ちがないが、こういう当初からの聯想れんそうに支配されて、彼の頭のどこかに、二人を常に一對いっついの男女なんによとして認める傾きを有もっていた。女の連添つれそわなない若い男や、男の手を組まない若い女は、要するに敬太郎から見れば自然を損そこなつた片輪に過ぎないので、彼が自分の知る彼らを頭のうちでかように組み合わせたのは、まだ片輪の境遇にまごついている二人に、自然が生みつけた通りの資格を早く与えてやりたいという道義心の要求から起つたのかも知れなかった。

それはこむずかしい理窟りくつだから、たといどんな要求から起ろうと敬太郎のために弁ずる必要はないが、この頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社会との矛盾に、ちよつと首を捻ひねつたのは事實に相違なかつた。彼はその話を書生の佐伯さえぎから聞いたのである。もつとも佐伯のようなものが、まだ事の纏まとまらない先から、奥の委くわしい話を知ろうはずがなかつた。彼はただ漠然ぼくぜんとした顔の筋肉をいつもより緊張させて、何でもそんな評判ですと云うだけであつた。千代子を貰う人の名前も無論分らなかつたが、身分の実業家である事はたしかに思われた。

「千代子さんは須永君の所へ行くのだとばかり思っていたが、そうじゃないのかね」

「そうも行かないでしょう」

「なぜ」

「なぜって聞かれると、僕にも明瞭めいりょうな答はでき悪いにくんですが、ちよつと考えて見てもむずかしそうですね」

「そうかね、僕はまたちようど好い夫婦だと思つてゐるがね。親類じゃあるし、年だつて五つ六つ違ならおかしかなしさ」

「知らない人から見るとちよつとそう見えるでしょうがね。裏面にはいろいろ複雑な事情もあるようですから」

敬太郎は佐伯の云わゆる「複雑な事情」なるものを根掘り葉掘り聞きたくなつたが、何だか自分を門外漢扱いにするような彼の言葉が癪しゃくに障さわるのと、たかが玄関番の書生から家庭の内幕を聞き出したと云われては自分の品格にかかわるのと、最後には、口ほど詳しい事情を佐伯が知つてゐる氣遣きづかいがないのとで、それぎりその話はやめにした。そのおりついでながら奥へ行つ

て細君に挨拶をしてしばらく話したが、別に平生と何の変る様子もないので、おめでとうございますと云う勇氣も出なかった。

これは敬太郎が須永の宅で矢来の叔父さんの家にあつた不幸を千代子から聞いたつい二三日前の事であつた。その日彼が久しぶりに須永を訪問したのも、実はその結婚問題について須永の考えを確かめるつもりであつた。須永がどこの何人と結婚しよう、と、千代子がどこの何人に片づこうと、それは敬太郎の關係するところではなかつたが、この二人の運命が、それほど容易く右左へ未練なく離れ離れになり得るものか、または自分の想像した通り幻しに似た糸のようなものが、二人にも見えない縁となつて、彼らを冥々のうちに繋ぎ合せているものか。それともこの夢で織つた帯とでも形容して然るべきちらちらするものが、ある時は二人の眼に明らかに見え、ある時は全たく切れて、

彼らをばらばらに孤立させるものか、——そこいらが敬太郎には知りたかつたのである。固^{もと}よりそれは単なる物数奇^{ものずき}に過ぎなかつた。彼は明らかにそうだと自覚していた。けれども須永に對してなら、この物数奇を満足させても無礼に当らない事も自覚していた。そればかりかこの物数奇を満足させる権利がある^とまで信じていた。

二

その日は生憎^{あいにく}千代子に妨たげられた上、しまいには須永^{すなが}の母さえ出て来たので、だいぶ長く坐っていたにもかかわらず、立ち入った話はいつさい持ち出す機会がなかつた。ただ敬太郎^{けいたろう}は偶然にも自分の前に並んだ三人が、ありのままの今の姿で、現

に似合わしい夫婦と姑しゅうとめになり終おせているという事にふと思い及んだ時、彼らを世間並の形式で纏まとめるのは、最も容易い仕事のように考えて歸った。

次の日曜がまた幸いな暖かい日和ひよりをすべての勤め人ひとに恵んだので、敬太郎は朝早くから須永を尋ねて、郊外に誘いざなおうとした。無精ぶしようでわがままな彼は玄関先まで出て来ながら、なかなか応じそうにしなかったのを、母親が無理に勧めてようやく靴を穿はかした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通りどっちへでも動く人であつた。その代りいくら相談をかけても、ある判切はつきりした方角へ是非共足を運ばなければならぬと主張する男ではなかつた。彼と矢来の松本といつしよに出ると、二人とも行先を考えずに歩くので、一致してとんでもない所へ到着する事がままあつた。敬太郎は現にこの人の母の口からその例を聞かさ

れたのである。

この日彼らは両国から汽車に乗つて鴻こうの台だいの下まで行つて降りた。それから美しくしい広い河に沿つて土堤どての上をのそのそ歩いた。敬太郎は久しぶりに晴々はればれした好い気分になつて、水だの岡だの帆ほかけ船ぶねだのを見廻した。須永も景色けしきだけは賞ほめたが、まだこんな吹き晴らしの土堤などを歩く季節じゃないと云つて、寒いのに伴つれ出した敬太郎を恨うらんだ。早く歩けば暖たかくなると出張した敬太郎はさつさと歩き始めた。須永は呆あきれたような顔をして跟ついて来た。二人は柴又しばまたの帝釈天たいしやくてんの傍そばまで来て、川かわ甚じんという家うちへ這入はいつて飯を食つた。そこで詔あつらえた鰻うなぎの蒲焼かばやきが甘あまたるくて食えないと云つて、須永はまた苦い顔をした。先刻さつきから二人の気分が熟しないので、しんみりした話をする余地が出て来ないのを苦しがつていた敬太郎は、この時須永に「江戸つ

子は贅沢ぜいたくなものだね。細君を貰うときにもそう贅沢を云うかね」と聞いた。

「云えれば誰だつて云うさ。何も江戸つ子に限りあしない。君みたような田舎いなかものだつて云うだろう」

須永はこう答えて澄ましていた。敬太郎は仕方なしに「江戸つ子は無愛嬌ぶあいぎようなものだね」と云つて笑い出した。須永も突然おかしくなつたと見えて笑い出した。それから後あとは二人の気分と同じように、二人の会話も円満に進行した。敬太郎が須永から「君もこの頃はだいぶ落ちついて来たようだ」と評されても、彼は「少し真面目まじめになつたかね」とおとなしく受けるし、彼が須永に「君はますます偏窟へんくつに傾くじゃないか」と調戯からかつても、須永は「どうも自分ながら厭いやになる事がある」と快よく己おのれの弱点を承認するだけであつた。

こういう打ち解けた心持で、二人が差し向いに互の眼の奥を
みとお見透して恥ずかしがらない時に、千代子の問題が持ち出された
 のは、その真相を聞こうとする敬太郎に取つて偶然の仕合せで
 あつた。彼はまず一週間ほど前耳にした彼女が近いうちに結婚
 するといふ噂うわさを皮切かわきりに須永を襲おそつた。その時須永は少しも昂奮こうふん
 した様子を見せなかつた。むしろいつもより沈んだ調子で、「ま
 た何か縁談が起りかけているようだね。今度は旨うまく纏まとまればい
 いが」と答えたが、急に口調くちようを更かえて、「なに君は知らない事だ
 が、今までもそう云う話は何度もあつたんだよ」とさも陳腐ちんぷ
 しそうに説明して聞かせた。

「君は貰もらう気はないのかい」

「僕が貰うように見えるかね」

話しはこんな風に、御互で引き摺ずるようにしてだんだん先へ

進んだが、いよいよ際^{きわ}どいところまで打ち明けるか、さもなければ題目を更^かえるよりほかに仕方がないという点まで押しつめられた時、須永はとうとう敬太郎に「また洋杖^{ステツキ}を持って来たんだね」と云つて苦笑した。敬太郎も笑いながら縁側^{えんがわ}へ出た。そこから例の洋杖を取つてまた這入つて来たが、「この通りだ」と蛇^{へび}の頭を須永に見せた。

三

須^す永^{なが}の話は敬太郎^{けいたろう}の予期^{よき}したよりも遙^{はる}かに長かつた。――

僕の父は早く死んだ。僕がまだ親子の情愛をよく解しない子供^{こども}の頃に突然死んでしまった。僕は子がないから、自分の血を分けた温^{あた}たかい肉の塊^{かたまり}りに対する情^{なさけ}は、今でも比較的薄いかも

知れないが、自分を生んでくれた親を懐かしいと思う心はその後だ**いぶ**発達した。今の心をその時分持っていたならと考える事も稀**まれ**ではない。一言**いちごん**でいうと、当時の僕は父にははなはだ冷淡だったのである。もつとも父もけつして甘い方ではなかった。今の僕の胸に映る彼の顔は、骨の高い血色の勝**すぐ**れない、親しみの薄い、厳格な表情に充**み**ちた肖像に過ぎない。僕は自分の顔を鏡の裏**うち**に見るたんびに、それが胸の中に収めた父の容貌と大變似ているのを思い出しては不愉快になる。自分が父と同じ厭**いや**な印象を、傍**はた**の人に与えはしまいかと苦に病んで、そこで気が引けるばかりではない。こんな陰鬱**いんうつ**な眉や額**まゆ**が代表するよりも、まだましな温たかい情愛を、血の中に流している今の自分から推して、あんなに冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙を貯**たくわ**えていたのではなからうかと考えると、父の記念**かたみ**とし

て、彼の悪い上皮うわかわだけを覚えてるのが、子としていかにも情ない心持がするからである。父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介やっかいにならなくっちゃならないぞ。知ってるか」と云った。僕は生れた時から母の厄介になつていたのだから、今更改いまざいためて父からそれを聞かされるのを妙に思った。黙つて坐つていると、父は骨ばかりになつた顔の筋を無理に動かすようにして、「今のように腕白じゃ、御母さんも構つてくれないぞ。もう少しおとなしくしないと」と云つた。僕は母が今まで構つてくれたんだからこのままの僕でたくさんだという気が充分あつた。それで父の小言こごとをまるで必要のない余計な事のように考えて病室を出た。

父が死んだ時母は非常に泣いた。葬式が出る間際まぎわになつて、僕は着物を着換えさせられたまま、手持無沙汰てもちぶさただから、一人縁側えんがわ

へ出て、蒼い空を覗き込むように眺めていると、白無垢を着た母が何を思ったか不意にそこへ出て来た。田口や松本を始め、供に立つものはみんな向の方で混雑していたので、傍には誰も見えなかった。母は突然自分の坊主頭へ手を載せて、泣き腫らした眼を自分の上に据えた。そうして小さい声で、「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今まで通り可愛がつて上げるから安心なさいよ」と云つた。僕は何とも答えなかった。涙も落さなかった。その時はそれですんだが、両親に対する僕の記憶を、生長の後に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人のこの時の言葉であるという感じがその後しだいに強く明らかになつて来た。何の意味もつける必要のない彼らの言葉に、僕はなぜ厚い疑惑の裏打をしなければならぬのか、それは僕自身に聞いて見てもまるで説明がつかなかった。時々母に

向つて直に問じかい糺ただして見たい氣も起つたが、母の顔を見ると急に勇氣が摧くじけてしまふのが例つねであつた。そうして心の中うちのどこかで、それを打ち明けたが最後、親しい母子おやこが離れ離れになつて、永久今の睦むつましさに戻る機會はないと僕に耳語ささやくものが出て來た。それでなくても、母は僕の真面目まじめな顔を見守つて、そんな事があつたつけかねと笑いに紛まぎらしそうなので、そう剥はぐらかされた時の残酷な結果を予想すると、とても口へ出された義理じゃないと思ひ直しては黙つていた。

僕は母に対してけつして柔順な息子むすこではなかつた。父の死ぬ前に枕元へ呼びつけられて意見されただけあつて、小さいうちからよく母に逆さからつた。大きくなつて、女親だけになおさら優しくしてやりたいという分別ができた後あとでも、やつぱり彼女の云う通りにはならなかつた。この二三年はことに心配ばかりか

けていた。が、いくら勝手を云い合つても、母子は生れて以来の母子で、この貴たつとい観念を傷つけられた覚おぼえは、重手おもてにしる浅手あさでにしる、まだ経験した試しがないという考えから、もしあの事を云い出して、二人共後悔の癍痕はんこんを遺のこさなければすまない瘡きずを受けたなら、それこそ取返しおぼえのつかない不幸だと思つていた。この畏怖いふの念は神経質に生れた僕の頭で拵こしらえるのかも知れないとも疑うたぐつて見た。けれども僕にはそれが現在よりも明らかな未来として存在している事が多かった。だから僕はあの時の父と母の言葉を、それなり忘れてしまふ事ができなかつたのを、今でも情なく感ずるのである。

父と母の間はどれほど円満であつたか、僕には分らない。僕はまだ妻を貰^{さい}つた経験がないから、そう云う事を口にする資格はないかも知れないが、いかな仲の善^いい夫婦でも、時々は氣不味い思をしあうのが人間の常だろうから、彼らだつて永く添つてゐるうちには面白くない汚点^{しみ}を双方の胸の裏^{うら}に見出しつつ、世間も知らず互も口にしない不満を、自分一人苦^{にが}く味わつて我慢した場合もあつたのだらうと思う。もつとも父は疳癰^{かんぺき}の強い割に陰性な男だつたし、母は長唄^{ながうた}をうたう時よりほかに、大きな声の出せない性分^{たち}なので、僕は二人の言い争^い争^いそう現場を、父の死ぬまでいまだかつて目撃した事がなかつた。要するに世間から云えば、僕らの宅^{うち}ほど静かに整^{とと}のつた家庭は滅多^{めった}に見当らなかつたのである。あのくらい他の悪口を露骨にいう松本の叔父でさえ、今だにそう認^まめて間違^{まちが}ないものと信じ切つてゐる。

母は僕に対して死んだ父を語るごとに、世間の夫のうちで最も完全に近いものののように説明してやまない。これは幾分か僕の腹の底に濁ったまま沈んでいる父の記憶を清めたいための弁護とも思われる。または彼女自身の記憶に時間の布巾ふきんをかけてだんだん光沢つやを出すつもりとも見られる。けれども慈愛みに充ちた親としての父を僕に紹介する時には、彼女の態度が全く一変する。平生僕が目まのあたりに見ているあの柔和にやうわな母が、どうしてこう真面目まじめになれるだろうと驚ろくくらい、厳肅きしやうな氣象で僕を打ち据すえる事さえあった。が、それは僕が中学から高等学校へ移る時分の昔である。今はいくら母に強請せびって同じ話をくり返して貰もらつても、そんな気高い気分にはとてもなれない。僕的情操はその頃から学校を卒業するまでの間に、近頃の小説に出る主人公のように、まるで荒み果すさてたのだろう。現代の空気に

中毒した自分を呪のろいたくなると、僕は時々もう一遍で好いから、母の前でああ云う崇高な感じに触れて見たいという望のぞみを起すが、同時にその望みがとても遂とげられない過去の夢であるという悲しみも湧わいて来る。

母の性格は吾々われわれが昔から用い慣れた慈母という言葉で形容さえすれば、それで尽きている。僕から見ると彼女はこの二字のために生れてこの二字のために死ぬと云つても差支さしつかえない。まことに気の毒であるが、それでも母は生活の満足をこの一点にのみ集注しているのだから、僕さえ充分の孝行ができれば、これに越こした彼女の喜よろこびはないのである。が、もしその僕が彼女の意に背く事が多かつたら、これほどの不幸はまた彼女に取つてけつしてない訳になる。それを思うと僕は非常に心苦しい事がある。思い出したからここでちよつと云うが、僕は生れてからの一

人息子ではない。子供の時分に妙ちゃんという妹と毎日遊んだ事を覚えてゐる。その妹は大きな模様のある被布を平生着て、人形のように髪を切り下げていた。そうして僕の事を常に市蔵ちゃん市蔵ちゃんと呼んでゐると云つて、兄さんとはけつして呼ばなかつた。この妹は父の亡くなる何年前かに実扶的里亜で死んでしまつた。その頃は血清注射がまだ發明されない時分だったので、治療も大變に困難だつたのだらう。僕は固より実扶的里亜と云う名前さえ知らなかつた。宅へ見舞に來た松本に、御前も実扶的里亜かと調戲からかわれて、うんそうじゃないよ僕軍人だよと答えたのを今だに忘れずにゐる。妹が死んでから当分はむずかしい父の顔がだいぶ優しく見えた。母に向つて、まことに御前には氣の毒な事をしたといった顔がことに穩おだやかだつたので、小供ながら、ついその時の言葉まで小さい胸に刻みつけておいた。しかし母

がそれに対してどう答えたかは全く知らない。いくら思い出そうとしても思い出せないところをもつて見ると、初はじめから覚えなかつたのだらう。これほど鋭敏に父を観察する能力を、小供の時から持っていた僕が、母に対する注意に欠けていたのも不思議である。人間が自分よりも余計に他ひとを知りたがる癖のあるものだとすれば、僕の父は母よりもよほど他人らしく僕に見えていたのかも分らない。それを逆に云うと、母は観察に陋あたしいほど僕に親しかつたのである。——とにかく妹は死んだ。それからの僕は父に対しても母に対しても一人息子であつた。父が死んで以後の今の僕は母に対しての一人息子である。

だから僕は母をできるだけ大事にしなければすまない。が、
実際は同じ原因がかえつて僕をわがままにしている。僕は去年
学校を卒業してから今日まで、まだ就職という問題についてた
だの一日も頭を使つた事がない。出た時の成績はむしろ好い方
であつた。席次を目安に人を採る今の習慣を利用しようと思え
ば、随分友達を羨ましがらせる位置に坐り込む機会もないでは
なかつた。現に一度はある方面から人選の依託を受けた某教授
に呼ばれて意向を聞かれた記憶さえ有つている。それなのに僕
は動かなかつた。固より自慢でこう云う話をするのではない。
真底を打ち明ければむしろ自慢の反対で、全く信念の欠乏から
来た引込み思案なのだから不愉快である。が、朝から晩まで氣
骨を折つて、世の中に持て囃されたところで、どこがどうした
んだという横着は、無論断わる時からつけ纏つていた。僕は時

めくために生れた男ではないと思う。法律などを修め^{おさ}ないで、植物学か天文学でもやつたらまだ性^{しょう}に合つた仕事为天から授かるかも知れないと思う。僕は世間に対してははなはだ氣の弱い癖に、自分に対しては大変辛抱の好い男だからそう思うのである。

こういう僕のわがままをわがままなりに通してくれるものは、云うまでもなく父が遺^{のこ}して行つたわずかばかりの財産である。もしこの財産がなかったら、僕はどんな苦しい思をしても、法学士の肩書を利用して、世間と戦かわなければならぬのだと考えると、僕は死んだ父に対して改ためて感謝の念を捧げたくなると同時に、自分のわがままはこの財産のためにやつと存在を許されているのだからよほど腰の坐^{すわ}らないあさはかなものに違ないと推断する。そうしてその犠牲にされている母が一層氣

の毒になる。

母は昔堅氣むかしかたぎの教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるの

が子たるものの第一の務つとめだというような考えを、何より先に抱

いている。しかし彼女のあ家名を揚げるというのは、名譽の意味

か、財産の意味か、權力の意味か、または徳望の意味か、そこ

へ行くと全く何の分別もない。ただ漠然ぼくぜんと、一つが頭の上に落

ちて来れば、すべてその他が後あとを追つて門前に輻湊ふくそうするぐらい

に思っている。しかし僕はそういう問題について、何事も母に

説明してやる勇氣がない。説明して聞かせるには、まず僕の見

識でもつとものと認めた家名の揚げ方をした上でないと、僕にそ

の資格ができないからである。僕はいかなる意味においても家

名を揚げ得る男ではない。ただ汚けがさないだけの見識を頭に入れ

ておくばかりである。そうしてその見識は母に見せて喜こんで

貰^{もら}えるどころか、彼女とはまるでかけ離れた縁のないものなのだから、母も心細いだろう。僕も淋しい。

僕が母にかける心配の数あるうちで、第一に挙げなければならぬのは、今話した通りの僕の欠点である。しかしこの欠点を矯^ためずに母と不足なく暮らして行かれるほど、母は僕を愛していてくれるのだから、ただすまないと思う心を失なわずに、このままで押せば押せない事もないが、このわがままよりもつと鋭^{ひそ}い失望を母に与えそうなので、僕が私^{ひそ}かに胸を痛めているのは結婚問題である。結婚問題と云うより僕と千代子を取り巻く周囲の事情と云った方が適当かも知れない。それを説明するには話の順序としてまず千代子の生れない当時^{さかの}に溯^{さかの}ぼる必要がある。その頃の田口はけっして今ほどの幅利^{はばき}でも資産家でもなかった。ただ将来見込のある男だからと云うので、父が母の

妹に当るあの叔母を嫁にやるように周旋したのである。田口はいもと固より僕もとの父を先輩として仰いでいた。なにかにつけて相談もしたり、世話にもなつた。両家の間に新らしく成立したこの親しい関係が、月と共に加速度をもつて円満に進行しつつある際に千代子が生れた。その時僕の母はどう思ったものか、大きくなつたらこの子を市蔵の嫁にくれまいかと田口夫婦に頼んだのだそうである。母の語るところによると、彼らはその折快おりよく母の頼みを承諾したのだと云う。固より後から百代が生まれる、吾一ごいちという男の子もできる、千代子もやろうとすればどこへでもやられるのだが、きつと僕にやらなければならぬほど確かに母に受合つたかどうか、そこは僕も知らない。

とにかく僕と千代子の間には両方共物心のつかない当時からすでにこういう絆きずながあつた。けれどもその絆は僕ら二人を結びつける上においてすこぶる怪しい絆であつた。二人は固もとより天に上る雲雀あがひばりのごとく自由に生長した。絆を縋なつた人でさえ確しかとその端はしを握はつてゐる気ではなかつたのだらう。僕は怪しい絆という文字を奇縁という意味でここに使う事のできないのを深く母のために悲しむのである。

母は僕の高等学校に這入はいつた時分それとなく千代子の事を仄ほのめかした。その頃の僕に色氣のあつたのは無論である。けれども未来の妻さいという観念はまるで頭に無かつた。そんな話に取り合あう落ちつきさえ持つてゐなかつた。ことに子供の時からいっしょに遊んだり喧嘩けんかをしたり、ほとんど同じ家に生長したと違

わなない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためかはなはだ平凡に見えて、異性に対する普通の刺戟しげきを与えるに足りなかつた。これは僕の方ばかりではあるまい、千代子もおそらく同感だろうと思う。その証拠しやうこには長い交際の前後を通じて、僕ははまだかつて男として彼女から取り扱かわれた経験を記憶する事ができない。彼女から見た僕は、怒おころうが泣なこうが、科しなをしようが色眼を使おうが、常に変らない従兄いとこに過ぎないのである。もつともこれは幾分か、純粹な気象きしやうを受けて生れた彼女の性情からも出るのです、そこになるとまた僕ほど彼女を知り抜いてゐるものはないのだが、単にそれだけでああ男女なんによの牆壁しやうへきが取り除のけられる訳のものではあるまい。ただ一度……しかしこれは後で話す方が宜よかろうと思う。

母は自分のいう事に耳を借さなかつた僕を羞恥家はにかみやと解釈して、

再び時期を待つものごとくに、この問題を懷ふところに収めた。羞恥は僕といえども否定する勇氣がない。しかし千代子に意があるから羞恥はにかんだのだと取つた母は、全くの反対を事実と認めたと同じ事である。要するに母は未来に對する準備という考から、僕ら二人をなるべく仲善く育て上げよう育て上げようと力つとめた結果、男女としての二人をしだいに遠ざからした。そうして自分では知らずにいた。それを知らなければならぬようにした僕は全く残酷であつた。

その日の事を語るのが僕には實際の苦痛である。母は高等学校時代に匂におわした千代子の問題を、僕が大学の二年になるまで、じつと懷だに抱いたまま一人で温あためていたと見えて、ある晩——春休みの頃の花の咲いたという噂うわさのあつたある日の晩——そつと僕の前に出して見せた。その時は僕もだいぶ大人おとならしくなつ

ていたので、静かにその問題を取り上げて、裏表から鄭寧^{ていねい}に吟味^{ぎんみ}する余裕^{よゆう}ができていた。母もその時にはただ遠くから匂わせるだけでなくて、自分の希望に正当の形式を与える事を忘れなかつた。僕は何心なく従妹^{いとこ}は血属だから厭^{いや}だと答えた。母は千代子の生れた時くれろと頼んでおいたのだから貰つたらいいだろうと云つて僕を驚ろかした。なぜそんな事を頼んだのかと聞くと、なぜでも私の好き^{わたし}な子で、御前も嫌^{きら}うはずがないからだ、赤ん坊には応用の利^きかないような挨拶^{あいさつ}をして僕を弱らせた。だんだんそこを押して見ると、しまいに涙ぐんで、実は御前のためではない、全く私のために頼むのだと云う。しかもどうしてそれが母のためになるのか、その理由はいくら聞いても語らない。最後に何でもかでも千代子は厭^{いや}かと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答えた。しかし当人も僕のところへ来る気はなし、田

口の叔父も叔母も僕にくれたくはないのだから、そんな事を申し込むのは止した方が好い、先方で迷惑するだけだからと教えた。母は約束だから迷惑しても構わない、また迷惑するはずがないと主張して、昔むかし田口が父の世話になつたり厄介やっかいになつたりした例を数え挙げた。僕はやむを得ないからこの問題は卒業するまで解決を着けずにおこうと云い出した。母は不安の裏うちに一縷いちるの望を現わした顔色をして、もう一遍とくと考えて見てくれと頼んだ。

こういう事情で、今まで母一人で懷ふところに抱だいていた問題を、その後のちは僕も抱かなければならなくなった。田口はまた田口流に、同じ問題を解かけしつつかあるのではなからうか。たとい千代子をほかへ縁づけるにしても、いざと云う場合には一応こちらの承諾を得る必要があるとすれば、叔父も気がかりに違いない。

七

僕は不安になった。母の顔を見るたびに、彼女を欺むあざいてその日その日を姑息こそくに送っているような気がしてすまなかった。一頃ひとしほは思い直してでき得るならば母の希望通り千代子を貰もらつてやりたいとも考えた。僕はそのためにわざわざ用もない田口の家へ遊びに行つてそれとなく叔父や叔母の様子を見た。彼らは僕の母の肉薄そふりに応ずる準備としてまえもつて僕を疎うとんずるような素振そふりを口にも挙動にもけつして示さなかった。彼らはそれほど浅薄なまた不親切な人間ではなかったのである。けれども彼らの娘の未来の夫として、僕が彼らの眼にいかに憐あわれむべく映じていたかは、遠き前から僕の見抜いていたところと、ちつとも

変化を来さないばかりか、近頃になつてますますその傾が著るかたむきしくなるように思われた。彼らは第一に僕の弱々しい体格と僕の蒼白あおしろい顔色とを婿むことして肯うけがわなかつた。もつとも僕は神経の鋭どく動く性質だから、物を誇大に考え過したり、要いらぬ僻ひがみを起して見たりする弊がよくあるので、自分の胸に収めた委くわしい叔父叔母の觀察を遠慮なくここに述べる非礼は憚はばかりたい。ただ一言で云うと、彼らはその当時千代子を僕の嫁にしようと明言したのである。少なくともやつてもいいぐらいには考えていたのだらう。が、その後彼らの社会に占め得た地位と、彼らとは背中合せに進んで行く僕の性格が、二重に実行の便宜を奪つて、ただ惚ぼけかかつた空むなしい義理の抜殻ぬけがらを、彼らの頭のどこかに置き去りにして行つたと思えば差支さしつかえないのである。

僕と彼らとはあらゆる人の結婚問題についても多くを語る機会を持たなかった。ただある時叔母と僕との間にこんな会話が取り換わされた。

「市さんもうそろそろ奥さんを探さなくっちゃなりませんね。姉さんはとうから心配しているようですよ」

「好いのがあつたら母に知らしてやって下さい」

「市さんにはおとなしくつて優しい、親切な看護婦みたような女がいいでしょう」

「看護婦みたような嫁はないかつて探しても、誰も来手きてはあるまいな」

僕が苦笑しながら、自ら嘲あざけるごとくこう云つた時、今まで向うの隅すみで何かしていた千代子が、不意に首を上げた。

「あたし行つて上げましょうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども両方共そこに意味のある何物をも認めなかった。叔母は千代子の方を振り向きもしなかった。そうして、「御前のようなむぎだしのがらがらした者が、何で市さんの氣に入るものかね」と云った。僕は低い叔母の声のうちに、窘たしなめるようなまた怖おそれるような一種の響を聞いた。千代子はただからからと面白そうに笑っただけであつた。その時百代子も傍そばにいた。これは姉の言葉を聞いて微笑しながら席を立つた。形式を具そなえない断りを云われたと解釈した僕はしばらくしてまた席を立つた。

この事件後僕は同じ問題に関して母の満足を買うための努力をますます屑くずよしとしなくなった。自尊心の強い父の子として、僕の神経はこういう点において自分でも驚ろくくらい過敏なのである。もちろん僕はその折の叔母に対してけつして感情を害

しはしなかつた。こつちからまだ正式の申し込みを受けていない叔母としては、ああよりほかに意向の洩らし方も無かつたのだらうと思う。千代子に至つては何を云おうが笑おうが、いつでも蟠まりのない彼女の胸の中を、そのまま外に表わしたに過ぎないと考えていた。僕はその時の千代子の言葉や様子から察して、彼女が僕のところへ来たがつていない事だけは、従前通りたしかに認めたが、同時に、もし差し向いで僕の母にしんみり話し込まれでもしたら、ええそういう訳なら御嫁に来て上げましよう、その場ですぐ承知しないとも限るまいと思つて、私かに掛念を抱いたくらいである。彼女はそう云う時に、平気で自分の利害や親の意思を犠牲に供し得る極めて純粹の女だと僕は常から信じていたからである。

意地の強い僕は母を嬉し^{うれ}がらせるよりもなるべく自我を傷け^{きずつ}ないようと祈った。その結果千代子が僕の知らない間に、母から説き落されてはと掛念して、暗にそれを防ぐ分別をした。母は彼女の生れ落ちた当初すでに僕の嫁ときめただけあつて、多くある姪^{めい}や甥^{おい}の中で、取り分け千代子を可愛^{かわい}がった。千代子も子供の時分から僕の家を生家のごとく心得て遠慮なく寝泊り^{ねとま}に來た。その縁故で、田口と僕の家が昔に比べると比較的疎^{うと}くなつた今日^{こんにち}でも、千代子だけは叔母さん叔母さんと云つて、生の親にでも逢いに來るような朗らかな顔をして、しげしげ出入^{でいり}をしていた。單純な彼女は、自分の身を^ま的に時々起る縁談をさえ、隠すところなく母に打ち明けた。人の好い母はまたそれを

素直に聞いてやるだけで、恨め^{うら}しい眼つき一つも見せ得なかつた。僕の恐れる懇談は、こういう関係の深い二人の間に、いつ起らないとも限らなかつたのである。

僕の分別というのはまずこの点に関して、当分母の口を塞^{ふさ}いでおこうとする用心に過ぎなかつた。ところがいざ改たまつて母にそれを切り出そうとすると、ただ自分の我^がを通すために、弱い親の自由を奪うのは残酷な子に違ないという心持が、どこにか萌^{きざ}すので、ついそれなりにしてやめる事が多かつた。もつとも年寄の眉^{まゆ}を曇らすのがただ情^{なさけ}ないばかりでやめたとも云われない。これほど親しい間柄でさえ今まで思い切つたところを千代子に打ち明け得なかつた母の事だから、たといこのままにしておいても、まあ当分は大丈夫だろうという考^{おさ}が、母に対する僕を多少抑えたのである。

それで僕は千代子に關して何という明瞭な所置も取らずに過ぎた。もつともこういう不安な状態で日を送った時期にも、まるで田口の家と打絶えた訳ではなかったたので、会には単に母の喜こぶ顔を見るだけの目的をもつて内幸町まで電車を利用した覺さえあつたのである。そういうある日の晩、僕は久しぶりに千代子から、習い立ての珍らしい手料理を御馳走するからと引止められて、夕飯の膳についた。いつも留守がちな叔父がその日はちようど内にいて、食事中例の氣作な話をし続けにしたため、若い人の陽気な笑い声が障子に響くくらい家の中が賑わつた。飯が済んだ後で、叔父はどういう考か、突然僕に「市さん久しぶりに一局やろうか」と云い出した。僕はさほど氣が進まなかつたけれどもせつかくだから、やりましようと思つて、叔父と共に別室へ退いた。二人はそこで二三番打つた。固より下手

と下手の勝負なので、時間のかかるはずもなく、碁石を片づけ
てもまだそれほど遅くはならなかった。二人は煙草たばこを吞みなが
らまた話を始めた。その時僕は適当な機会を利用してわざと叔
父に「千代子さんの縁談はまだ纏まとまりませんか」と聞いた。そ
れは固より僕が千代子に対して他意のないという事を示すため
であつた。がまた一方では、一日も早くこの問題の解決が着け
ば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考えたからである。す
ると叔父はさすがに男だけあつて、何の躊躇ちゆうちよもなくこう云つた。

「いやまだなかなかそう行きそうもない。だんだんそんな話を
持つて来てくれるものはあるが、何しろむずかしくつて弱る。
その上調べれば調べるほど面倒になるだけだし、まあ大抵のと
ころで纏まるなら纏めてしまおうかと思つてゐる。——縁談なん

てものは妙なものでね。今だから御前に話すが、実は千代子の生れたとき、御前の御母さんが、これを市蔵の嫁に欲しいってね——生れ立ての赤ん坊をだよ」

叔父はこの時笑いながら僕の顔を見た。

「母は本気でそう云ったんだそうです」

「本気さ。姉さんはまた正直な人だからね。実に好人だ。今でも時々真面目^{まじめ}になつて叔母さんにその話をするそうだ」

叔父は再び大きな声を出して笑つた。僕ははたして叔父がこう軽くこの事件を解釈しているなら、母のために少し弁じてやろうかと考えた。が、もしこれが世慣れた人の巧妙な覺^{さと}らせぶりだとすれば、一口でも云うだけが愚^{おろか}だと思い直して黙つた。叔父は親切な人でまた世慣れた人である。彼のこの時の言葉はどちらの眼で見ているのか、僕には今もつて解らない。ただ僕

がその時以来千代子を貰わない方へいよいよ傾いたのは事実である。

九

それから二カ月ばかりの間僕は田口の家へ近寄らなかつた。母さえ心配しなければ、それぎり内幸町へは足を向けずにすましたかも知れなかつた。たとい母が心配するにしても、単に彼女に対する掛念^{けねん}だけが問題なら、あるいは僕の氣^き随^{ずい}をいざという極点まで押し通したかも知れなかつた。僕はそんな風^三に生みつけられた男なのである。ところが二カ月の末になつて、僕は突然自分の片意地^{ひる}を翻^{ひる}がえさなければ不利だという事に気がついた。実を云うと、僕と田口と疎遠になればなるほど、母はあら

ゆる機会を求めて、ますます千代子と接触するように力め出したのである。そうしていつなんどき僕の最も恐れる直接の談判を、千代子に向つて開かないとも限らないように、漸々形勢を切迫させて来たのである。僕は思い切つて、この危機を一帳場先へ繰り越そうとした。そうしてその決心と共にまた田口の敷居を跨ぎ出した。

彼らの僕を遇する態度に固より変りはなかった。僕の彼らに対する様子もまた二カ月前の通りであつた。僕と彼らとは故のごとく笑つたり、ふざけたり、揚足の取りつくらをしたりした。要するに僕の田口で費やした時間は、騒がしいくらい陽気であつた。本当のところをいうと、僕には少し陽氣過ぎたのである。したがつて腹の中が常に空虚な努力に疲れていた。鋭どい眼で注意したら、どこかに偽の影が射して、本来の自分を醜く彩つ

ていたろうと思う。そのうちで自分の気分と自分の言葉が、半紙の裏表のようにぴたりと合った愉快を感じた覚おぼえがただ一遍ある。それは家例として年に一度か二度田口の家族が揃そろって遊びに出る日の出来事であつた。僕は知らずに奥へ通つて、千代子一人が閑静に坐っているのを見て驚ろいた。彼女は風邪かぜを引いたと見えて、咽喉のどに湿布をしていた。常にも似ない蒼い顔色あおも淋さびしく思われた。微笑しながら、「今日はあたし御留守居よ」と云つた時、僕は始めて皆出みんな払つた事に気がついた。

その日彼女は病気のせいかもしれないよりしんみり落ちついていた。僕の顔さえ見ると、きつと冷かし文句を並べて、どうしても悪口の云い合いを挑いどまなければやまない彼女が、一人ぼっちで妙に沈んでいる姿を見たとき、僕はふと可憐な心を起した。それで席に着くや否いなや、優しい慰藉いしやの言葉を口から出す気もな

く自おのずから出した。すると千代子は一種変な表情をして、「あなた今日は大変優しいわね。奥さんを貰もらったらしい風に優しくしてあげなくっちゃいけないわね」と云った。遠慮がなくて親しみだけ持っていた僕は、今まで千代子に対していくら無愛嬌ぶあいぎょうに振舞さしつかえっても差支さしつかえないものと暗あんに自みずから許ゆるしていたのだという事にこの時始めて気がついた。そうして千代子の眼うちの中にどこか嬉しそうな色の微かすかながら漂ただようのを認めて、自分が悪かつたと後悔した。

二人はほとんどいっしょに生長したと同じような自分達の過去を振り返った。昔の記憶を語る言葉が互くちびるの唇から当時を蘇よみがえらせる便たよりとして洩もれた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遙はるかに勝すぐれて、細かいところまで鮮あざやかに行き渡っているのに驚ろいた。彼女は今から四年前、僕が玄関に立ったまま袴はかまの綻ほころびを彼女

に縫わせた事まで覚えていた。その時彼女の使ったのは木綿糸もめんいとでなくて絹糸であつた事も知っていた。

「あたしあなたの描かいてくれた画えをまだ持つててよ」

なるほどそう云われて見ると、千代子に画を描えいてやつた覚おぼえがあつた。けれどもそれは彼女が十二三の時の事で、自分が田口に買つて貰つた絵具と紙を僕の前へ押しつけて無理矢理に描かかせたものである。僕の画道えふでにおける嗜好たしなみは、それから以後今日こんにちに至るまで、ついに画筆えふでを握つた試しがないのでも分るのだから、赤や緑の単純な刺戟しげきが、一通り彼女の眼に映つてしまえば、興味はそこに尽きなければならぬはずのものであつた。それを保存していると聞いた僕は迷惑そうに苦笑せざるを得なかつた。

「見せてあげましょうか」

僕は見ないでもいいと断つた。彼女は構わず立ち上がつて、自分の室から僕の画を納めた手文庫を持つて来た。

十

千代子はその中から僕の描いた画を五六枚出して見せた。それは赤い椿つばきだの、紫の東菊むらさきだの、色変りのダリヤだの、いずれも単純な花卉かきの写生に過ぎなかったが、要いらない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭いとわずに、細かく綺麗きれに塗り上げた手際は、今の僕から見るとほとんど驚ろくべきものであった。僕はこれほど綿密であつた自分の昔に感服した。

「あなたそれを描いて下すつた時分は、今よりよつぽど親切だつたわね」

千代子は突然こう云つた。僕にはその意味がまるで分らなかつた。画から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳を僕の上にじつと据^すえていた。僕はこういう訳でそんな事を云うのかと尋ねた。彼女はそれでも答えずに僕の顔を見つめていた。やがていつもより小さな声で「でも近頃頼んだつて、そんなに精出して描いては下さらないでしょう」と云つた。僕は描くとも描かないとも答えられなかつた。ただ腹の中で、彼女の言葉をもつともだと首肯^{うけが}つた。

「それでもよくこんな物を丹念にしまつておくね」

「あたし御嫁に行く時も持つてくつもりよ」

僕はこの言葉を聞いて変に悲しくなつた。そうしてその悲しい気分が、すぐ千代子の胸に伝^{こた}えそうなのがなお恐ろしかつた。僕はその刹那^{せつな}すでに涙の溢^{あふ}れそうな黒い大きな眼を自分の前に

想像したのである。

「そんな下らないものは持って行かないがいいよ」

「いいわ、持って行つたつて、あたしのだから」

彼女はこう云いつつ、赤い椿や紫の東菊を重ねて、また文庫の中へしまった。僕は自分の気分を変えるためわざと彼女にいつごろ嫁に行くつもりかと聞いた。彼女はもう直^{じき}に行くのだと答えた。

「しかしまだきまつた訳じゃないんだろう」

「いいえ、もうきまつたの」

彼女は明らかに答えた。今まで自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談^{いちじつ}が纏^{まと}まれば好いがと念じていた僕の心臓は、この答と共にどきんと音のする浪^{なみ}を打った。そうして毛穴^はから這^はい出すような膏汗^{あぶらあせ}が、背中と腋^{わき}の下を不意に襲^{おそ}つ

た。千代子は文庫を抱だいて立ち上つた。障子しょうじを開けると、上から僕を見下みおろして、「嘘うそよ」と一口判切云い切つたまま、自分の室へやの方へ出て行つた。

僕は動かんがえく考もなく故もとの席に坐つていた。僕の胸には忌々いまいましい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行く行かないが、僕にどう影響するかを、この時始めて實際に自覚する事のできた僕は、それを自覚させてくれた彼女の翻弄ほんろうに対して感謝した。僕は今まで気がつかずに彼女を愛していたのかも知れなかつた。あるいは彼女が気がつかないうちに僕を愛していたのかも知れなかつた。——僕は自分という正体が、それほど解り悪い怖こわいものなのだろうかと考えて、しばらく茫然ぼうぜんとしていた。するとあちらの方で電話がちりんちりと鳴つた。千代子が縁伝いに急ぎ足でやつて来て、僕にいつしよに電話をかけてくれと頼んだ。僕

にはいつしよにかけるという意味が呑み込めなかったが、すぐ立つて彼女と共に電話口へ行つた。

「もう呼び出してあるのよ。あたし声が嗄れて、咽喉が痛くて話ができないからあなた代理をしてちょうだい。聞く方はあたしが聞くから」

僕は相手の名前も分らない、また向うの話の通じない電話をかけるべく、前屈みになつて用意をした。千代子はすでに受話器を耳にあてていた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、ひとり彼女が占有するだけなので、僕はただ彼女の小声でいう挨拶を大きくして訳も解らず先方へ取次ぐに過ぎなかつた。それでも始の内は滑稽も構わず暇がかかるのも厭わず平気でやっていたが、しだいに僕の好奇心を挑発するような返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲んだまま、おいちよいとそれ

を御貸^{おかし}と声をかけて左手を真直^{まっすぐ}に千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑いながら否々^{いやいや}をして見せた。僕はさらに姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪おうとした。彼女はけっしてそれを離さなかった。取ろうとする取らせまいとする争が二人の間に起った時、彼女は手早く電話を切った。そうして大きな声をあげて笑い出した。――

十一

こういう光景がもし今より一年前に起ったならと僕はその後何遍もくり返しくり返し思った。そう思うたびに、もう遅過ぎる、時機はすでに去つたと運命から宣告されるような気がした。今からでもこういう光景を二度三度と重ねる機会^{つら}は捉まえられ

るではないかと、同じ運命が暗に僕を唆そそのかす日もあつた。なるほど二人の情愛を互いに反射させ合うためにのみ眼の光を使う手段を憚はばからなかつたなら、千代子と僕とはその日を基点として出立しても、今頃は人間の利害で割きく事のできない愛に陥おちいつていたかも知れない。ただ僕はそれと反対の方針を取つたのである。

田口夫婦の意向や僕の母の希望は、他人の入智慧いれぢえ同様に意味の少ないものとして、単に彼女と僕を裸にした生れつきだけを比較すると、僕らはとてもいっしょになる見込のないものと僕は平生から信じていた。これはなぜと聞かれても満足の行くように答弁ができないかも知れない。僕は人に説明するためになう信じているのでないから。僕はかつて文学好のある友達からダヌンチオと一少女の話を聞いた事がある。ダヌンチオという

のは今の以太利イタリアで一番有名な小説家だそうだから、僕の友達の主意は無論彼の勢力を僕に紹介するつもりだったのだろうが、僕にはそこへ引合に出された少女の方が彼よりも遙はるかに興味が多かつた。その話はこうである。――

ある時ダヌンチオが招待を受けてある会合の席へ出た。文学者を国家の装飾のようにもてはやす西洋の事だから、ダヌンチオはその席に群むらがるすべての人から多大の尊敬と愛嬌あいぎようをもつて偉人のごとく取扱かわれた。彼が満堂の注意を一身に集めて、衆人の間をあちこち徘徊はいかいしているうち、どういう機は会きか自分みのハンケチ手巾を足もとの下へ落した。混雑の際と見えて、彼は固もとより、傍はたのものもいっそうそれに気がつかずにいた。するとまだ年の若い美しい女が一人その手巾を床ゆかの上から取り上げて、ダヌンチオの前へ持つて来た。彼女はそれをダヌンチオに渡すつもりで、

これはあなたなのでしょうと聞いた。ダヌンチオはありがたいと答えたが、女の美しい器量に対してちよつと愛嬌あいぎょうが必要になつたと見えて、「あなたのにして持つていらつしやい、進上しますから」とあたかも少女の喜びを予想したような事を云つた。女は一口の答もせず黙つてその手巾を指先でつまんだまま暖炉ストーヴの傍そばまで行つていきなりそれを火の中へ投げ込んだ。ダヌンチオは別にしてその他の席に居合せたものはことごとく微笑を洩もらした。

僕はこの話を聞いた時、年の若い茶褐色の髪毛を有もつた以太利生れの美人を思い浮べるよりも、その代りとしてすぐ千代子の眼と眉まゆを想像した。そうしてそれがもし千代子でなくつて妹の百代子であつたなら、たとい腹の中はどうあらうとも、その場は礼を云つて快よく手巾を貰い受けたに違いあるまいと思つ

た。ただ千代子にはそれができないのである。

口の悪い松本の叔父はこの姉妹に渾名をつけて常に大蝦蟆と

小蝦蟆と呼んでいる。二人の口が唇の薄い割に長過ぎるところ

が銀貨入れの墓口だと云つては常に二人を笑わせたり怒らせた

りする。これは性質に関係のない顔形の話であるが、同じ叔父

が口癖のようにこの姉妹を評して、小墓はおとなしくつて好い

が、大墓は少し猛烈過ぎると云うのを聞いたたびに、僕はあの叔

父がどう千代子を觀察しているのだらうと考えて、必ず彼の眼

識に疑を挟さみたくなる。千代子の言語なり挙動なりが時に猛

烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野なところを内に蔵し

ているからではなくつて、余り女らしい優しい感情に前後を忘

れて自分を投げかけるからだと僕は固く信じて疑がわないので

ある。彼女の有っている善悪是非の分別はほとんど学問や経験

と独立している。ただ直覺的に相手を目当に燃え出すだけである。それだから相手は時によると稲妻いなずまに打たれたような思いをする。当りの強く烈はげしく来るのは、彼女の胸から純粹な塊かたまりが一度に多量に飛んで出るという意味で、刺とげだの毒だの腐蝕ふじよくざい剤だのを吹きかけたり浴びせかけたりするのはまるで訳が違ふ。その証拠にはたといどれほど烈はげしく怒おこられても、僕は彼女から清いもので自分の腸はらわたを洗われたような氣持のした場合が今までに何遍もあつた。氣高けだかいものに出会つたという感じさえ稀まれには起したくらいである。僕は天下の前になだ一人立つて、彼女はあらゆる女のうちでもっとも女らしい女だと弁護したいくらいに思っている。

これほど好く思っている千代子を妻さいとしてどこが不都合なのか。——実は僕も自分で自分の胸にこう聞いた事がある。その時理由わけも何もまだ考えない先に、僕はまず恐ろしくなった。そうして夫婦としての二人を長く眼前に想像するにたえなかった。こんな事を母に云ったら定めし驚ろくだらう、同年輩の友達に話してもあるいは通じないかも知れない。けれども強しいて沈黙のなかに記憶を埋うづめる必要もないから、それを自分だけの感想に止とどめないでここに自白するが、一口に云うと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。そうして僕は恐ろしい事だけ知った男なのである。だからただ釣り合わないばかりでなく、夫婦となればまさに逆にでき上るよりほかに仕方がないのである。

僕は常に考えている。「純粹な感情ほど美しいものはない。美しくしいものほど強いものはない」と。強いものが恐れないのは当たり前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪^たえられないだろう。その光は必ずしも怒^{いかり}を示すとは限らない。情^{なさけ}の光でも、愛の光でも、もしくは渴^{かつこう}仰^{よう}の光でも同じ事である。僕はきつとその光のために射^い竦^{すく}められるにきまつている。それと同程度あるいはより以上の輝くものを、返礼として彼女に与えるには、感情家として僕が余りに貧弱だからである。僕は芳烈な一樽の清酒を貰^{もら}つても、それを味わい尽くす資格を持たない下^げ戸^ことして、今日^{こんにち}まで世間から教育されて来たのである。

千代子が僕のところへ嫁に来れば必ず残酷な失望を経験しなければならぬ。彼女は美しくしい天^{てん}賦^ふの感情を、あるに任せて

惜おしげ気もなく夫の上に注つぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から予期するに違いない。年のいかないうち、學問の乏しい、見識の狭い点から見ると氣の毒と評しかして然るべき彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指さす事のできる権力か財力を攫つかまなくつては男子でないと考えている。單純な彼女は、たとい僕のところへ嫁に来て、やはりさう云う働きぶりを僕から要求し、また要求さえすれば僕にできるものとのみ思いつめている。二人の間に横たわる根本的の不幸はここに存在すると云つても差支さしかえないのである。僕は今云つた通り、妻さいとしての彼女の美くしい感情を、さう多量に受け入れる事のできない至くすつて燻くすぶつた性質たちなのだが、よし焼石に水を濺そそいだ時のように、それをことごとく吸い込んだところで、彼女

の望み通りに利用する訳にはとても行かない。もし純粹な彼女の影響が僕のどこかに表われるとすれば、それはいくら説明しても彼女には全く分らないところに、思いも寄らぬ形となつて発現するだけである。万一彼女の眼にとまつても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽二重はぶたえの足袋たびで包んだ僕の足よりもありがたがらないだろう。要するに彼女から云えば、美しいものを僕の上に永久浪費して、しだいしだいに結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。

僕は自分と千代子を比較することに、必ず恐れない女と恐れる男という言葉をくり返したくなる。しまいにはそれが自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小説にそのまま出ているような気を起す。この間講釈好きの松本の叔父から、詩と哲学の區別を聞かされて以来は、恐れない女と恐れる男というと、たち

まち自分に縁の遠い詩と哲学を想い出す。叔父は素人しらうと學問ながらこんな方面に興味を有もつているだけに、面白い事をいろいろ話して聞かしたが、僕を捕つかまえて「御前のような感情家は」と暗あんに詩人らしく僕を評したのは間違つてゐる。僕に云わせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思い切つた事のできずにぐずぐずしているのは、何より先に結果を考へて取越とりこし苦勞をするからである。千代子が風のごとく自由に振舞うのは、先の見えないほど強い感情が一度に胸に湧わき出るからである。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで、最も恐れない一人いちにんである。だから恐れる僕を輕蔑けいべつするのである。僕はまた感情という自分の重みでけつまずきそうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐あわれむのである。否時いなによると彼女のために戦慄せんりつするのである。

須永すながの話の末段は少し敬太郎けいたろうの理解力を苦しめた。事実を云
えば彼はまた彼なりに詩人とも哲学者とも云い得る男なの
かも知れなかつた。しかしそれは傍はたから彼を見た眼の評する言葉
で、敬太郎自身はけつしてどっちとも思つていなかつた。した
がつて詩とか哲学とかいう文字も、月の世界でなければ役に立
たない夢のようなものとして、ほとんど一顧あたいに値あたいしないくらい
に見限みかぎつていた。その上彼は理窟りくつが大嫌いだいきらであつた。右か左へ
自分の身体からだを動かさし得ないただの理窟は、いくら旨うまくできても
彼には用のない贗造紙幣がんぞうしへいと同じ物であつた。したがつて恐れる
男とか恐れない女とかいう辻占つじうらに似た文句を、黙つて聞いてい

るはずはなかったのだが、しつとりと潤^{うるお}った身の上話の続きとして、感想がそこへ流れ込んで来たものだから、敬太郎もよく解らないながら素直に耳を傾むけなければすまなかったのである。

須永もそこに気がついた。

「話が理窟^{りくつ}張^ばつてむずかしくなつて来たね。あんまり一人で調子に乗つて饒舌^{しゃべ}つているものだから」

「いや構^{かま}わん。大変面白い」

「ステツキ
洋杖^{きぎめ}の効果がありやしないか」

「どうも不思議にあるようだ。ついでにもう少し先まで話す事にしようじゃないか」

「もう無いよ」

須永はそう云い切つて、静かな水の上に眼を移した。敬太郎

もしばらく黙っていた。不思議にも今聞かされた須永の詩だか哲学だか分らないものが、形の判然はつきりしない雲の峰のように、頭の中に聳そびえて容易に消えそうにしなかった。何事も語らないで彼の前に坐すわっている須永自身も、平生の紋切形もんきりがたを離れた怪しい一種の人物として彼の眼に映じた。どうしてもまだ話の続きがあるに違ないと思つた敬太郎は、今の一番しまいの物語はいつごろの事かと須永に尋ねた。それは自分の三年生ぐらいの時の出来事だと須永は答えた。敬太郎は同じ関係が過去一年余りの間にどういう径路を取つてどう進んで、今はどんな解釈がついているかと聞き返した。須永は苦笑して、まず外へ出てからにしようと言つた。二人は勘定かんじようを済まして外へ出た。須永は先へ立つ敬太郎の得意に振り動かす洋杖の影を見てまた苦笑した。

柴又しばまたの帝釈天たいしゃくてんの境内けいだいに來た時、彼らは平凡な堂宇どううを、義理に

拝ませられたような顔をしてすぐ門を出た。そうして二人共汽車を利用してすぐ東京へ帰ろうという氣を起した。停車場へ来ると、間怠るまだこい田舎汽車の発車時間にはまだだいぶ間がまだあつた。二人はすぐそこにある茶店に入つて休息した。次の物語はその時敬太郎が前約を楯たてに須永から聞かして貰つたものである。

僕が大学の三年から四年に移る夏休みの出来事であつた。宅うちの二階に籠こもつてこの暑中をどう暮らしたら宜よかろうと思案していると、母が下から上あがつて来て、閑ひまになつたら鎌倉へちよつと行つて来たらどうだと云つた。鎌倉にはその一週間ほど前から田口たぐちのものが避暑に行つていた。元来叔父は余り海辺うみべを好まない性質たてなので、一家いっけのものは毎年輕井沢の別荘へ行くのを例にしていたのだが、その年は是非海水浴がしたいと云う娘達の希

望を容れて、材木座にある、ある人の邸宅を借り入れたのである。移る前に千代子が暇乞かたがた報知に来て、まだ行つては見ないけれども、山陰の涼しい崖の上に、二段か三段に建てた割合手広な住居だそうだから是非遊びに来いと母に勧めていたのを、僕は傍で聞いていた。それで僕は母にあなたこそ行つて遊んで来たら氣保養になつてよかろうと忠告した。母は懷から千代子の手紙を出して見せた。それには千代子と百代子の連名で、母と僕にいつしよに来るようにと、彼らの女親の命令を伝えるごとく書いてあつた。母が行くとすれば年寄一人を汽車に乗せるのは心配だから、是非共僕がついて行かなければならなかつた。変窟な僕からいうと、そう混雜した所へ二人で押しかけるのは、世話にならないにしても氣の毒で厭だつた。けれども母は行きたいような顔をした。そうしてそれが僕のために行

きたいような顔に見えるので僕はますます厭になつた。が、とどのつまりとうとう行く事にした。こう云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、また意地の弱い男なのである。

十四

母は内気な性分なので平生へいぜいから余り旅行を好まなかつた。昔風に重きをおかなければ承知しない厳格な父の生きている頃は外へもそうたびたびは出られない様子であつた。現に僕は父と母が娯楽の目的をもつていつしよに家を留守にした例を覚えていない。父が死んで自由が利きくようになってからも、そう勝手な時に好きな所へ行く機会は不幸にして僕の母には与えられな

かつた。一人で遠くへ行ったり、長く宅を空けたりする便宜を有たない彼女は、母子二人の家庭にこうして幾年を老いたのである。

鎌倉へ行こうと思い立つた日、僕は彼女のために一個の鞆を携えて直行の汽車に乗った。母は車の動き出す時、隣に腰をかけた僕に、汽車も久しぶりだねと笑いながら云った。そう云われた僕にも実は余り頻繁な経験ではなかった。新らしい氣分に誘われた二人の会話は平生よりは生々していた。何を話したか自分にもいつこう覚えのない事を、聞いたり聞かれたりして断続に任せているうちに車は目的地に着いた。あらかじめ通知をしてないので停車場には誰も迎に來ていなかったが、車を雇うとき某さんの別荘と注意したら、車夫はすぐ心得て引き出した。僕はしばらく見ないうちに、急に新らしい家の多くなつた砂道

を通りながら、松の間から遠くに見える畠中はたなかの黄色い花を美しく眺ながめた。それはちよつと見るとまるで菜種おむぎの花と同じ趣おもむきを具そなえた目新しいものであつた。僕は車の上で、このちらちらする色は何だろうと考え抜いた揚句あげく、突然唐茄子とうなすだと気がついたので独りひとおかしがつた。

車が別荘の門に着いた時、戸障子としようじを取り外はずした座敷の中に動く人の影が往来からよく見えた。僕はそのうちに白い浴衣ゆかたを着た男のいるのを見て、多分叔父が昨日きのうあたり東京から来て泊つてるのだらうと思つた。ところが奥にいるものがことごとく僕らを迎えるために玄関へ出て来たのに、その男だけは少しも顔を見せなかつた。もちろん叔父ならそのくらいの事はあるべきはずだと思つて、座敷へ通つて見ると、そこにも彼の姿は見えなかつた。僕はきよろきよろしているうちに、叔母と母が汽車

の中はさぞ暑かつたろうとか、見晴しの好い所が手に入^いつて結構だとか、年寄の女だけに口数^{くちかず}の多い挨拶^{あいさつ}のやりとりを始めた。千代子と百代子は母のために浴衣を勧めたり、脱ぎ捨てた着物を晒干^{さば}してくれたりした。僕は下女に風呂場へ案内して貰^{もら}つて、水で顔と頭を洗った。海岸からはだいぶ道程^{みちのり}のある山手だけでも水は存外悪かつた。手拭^{てぬぐい}を絞^{しぼ}つて金盥^{かなだら}の底を見ていると、たちまち砂のような滓^{おり}が澱^{おど}んだ。

「これを御使いなさい」という千代子の声が突然後^{うしろ}でした。振り返ると、乾いた白いタオルが肩の所に出ていた。僕はタオルを受取^{うけと}つて立ち上^あつた。千代子はまた傍^{そば}にある鏡台の抽出^{ひきだし}から櫛^{くし}を出してくれた。僕が鏡の前に坐^{すわ}つて髪を解かしている間、彼女は風呂場の入口の柱に身体^{からだ}を持たして、僕の濡^ぬれた頭を眺めていたが、僕が何も云わないので、向うから「悪い水でしよ

う」と聞いた。僕は鏡の中を見たなり、どうしてこんな色が着いてゐるのだらうと云つた。水の問答が済んだとき、僕は櫛を鏡台の上に置いて、タオルを肩にかけたまま立ち上つた。千代子は僕より先に柱を離れて座敷の方へ行こうとした。僕は敷^{やぶ}から棒^{うしろ}に後から彼女の名を呼んで、叔父はどこにゐるか尋ねた。彼女は立ち止まつて振り返つた。

「御父さんは四五日前ちよつといらしつたけど、一昨日^{おととい}また用が出来たつて東京へ御帰りになつたぎりよ」

「ここにやゐないのかい」

「ええ。なぜ。ことによると今日の夕方^{ごいち}吾一^{ごいち}さんを連れて、またいらつしやるかも知れないけども」

千代子は明日^{あした}もし天氣が好ければ皆^{みんな}と魚^とを漁^とりに行くはずになつてゐるのだから、田口が都合して今日の夕方までに来てく

れなければ困るのだと話した。そうして僕にも是非いつしよに行けと勧めた。僕は魚の事よりも先刻^{さつき}見た浴衣^{ゆかた}がけの男の居所が知りたかった。

十五

「先刻誰だか男の人が一人座敷にいたじゃないか」

「あれ高木さんよ。ほら秋子さんの兄さんよ。知ってるでしよう」

僕は知つてゐるともいないとも答えなかつた。しかし腹の中では、この高木と呼ばれる人の何者かをすぐ了解した。百代子の学校^{ほうばい}朋輩に高木秋子という女のある事は前から承知していた。その人の顔も、百代子といつしよに撮^とつた写真で知つていた。

手蹟しゆせきも絵端書えはがきで見た。一人の兄が亜米利加アメリカへ行っているのだと

か、今帰つて来たばかりだとかいう話もその頃耳にした。困らない家庭なのだろうから、その人が鎌倉へ遊びに来ているぐらゐは怪しむに足らなかつた。よしここに別荘を持つていたところでは不思議はなかつた。が、僕はその高木という男の住んでいる家を千代子から聞きたくなつた。

「ついこの下よ」と彼女は云つたぎりであつた。

「別荘かい」と僕は重ねて聞いた。

「ええ」

二人はそれ以外を語らずに座敷へ歸つた。座敷では母と叔母がまだ海の色がどうかとか、大仏がどつちの見当にあたるとかいふさほどでもない事を、問題らしく聞いたり教えたりしていた。百代子は千代子に彼らの父がその日の夕方までに来ると云つて、

わざわざ知らせて来た事を告げた。二人は明日魚を漁りに行く時の楽みを、今眼の当りに描き出して、すでに手の内に握った人のごとく語り合つた。

「高木さんもいらつしやるんでしよう」

「市さんもいらつしやい」

僕は行かないと答えた。その理由として、少し宅に用があつて、今夜東京へ帰えらなければならぬからという説明を加えた。しかし腹の中ではただでさえこう混雑していると、もし田口が吾一でも連れて来たら、それこそ自分の寝る場所さえ無くなるだろうと心配したのである。その上僕は姉妹の知つてゐる高木という男に会うのが厭だつた。彼は先刻まで二人と僕の評判をしていたが、僕の来たのを見て、遠慮して裏から帰つたのだと百代子から聞いた時、僕はまず窮屈な思いを逃れて好

かつたと喜こんだ。僕はそれほど知らない人を怖^{こわ}がる性分なのである。

僕の帰ると云うのを聞いた二人は、驚ろいたような顔をしてとめにかかった。ことに千代子は躍^{やつき}起になった。彼女は僕を捉^{つか}まえて変人だと云った。母を一人残してすぐ帰る法はないと云った。帰ると云つても帰さないと云った。彼女は自分の妹や弟に對してよりも、僕に對しては遙^{はる}かに自由な言葉を使い得る特権を有^もっていた。僕は平生から彼女が僕に對して振舞うごとく大胆に率直に（ある時は善意ではあるが）威圧的に、他人に向つて振舞う事ができたなら、僕のような他に欠点の多いものでも、さぞ愉快に世の中を渡つて行かれるだろうと想像して、大いにこの小さな暴君^{タイラント}を羨^{うらや}ましがっていた。

「えらい権幕^{けんまく}だね」

「あなたは親不孝よ」

「じゃ叔母さんに聞いて来るから、もし叔母さんが泊って行く方がいって、おっしゃったら、泊っていらつしやい。ね」

百代子は仲裁を試みるような口調でこう云いながら、すぐ年寄の話している座敷の方へ立つて行つた。僕の母の意向は無論聞くまでもなかつた。したがつて百代子の年寄二人から齎^{もた}らした返事もここに述べるのは蛇足^{だそく}に過ぎない。要するに僕は千代子の捕虜になつたのである。

僕はやがてちよつと町へ出て来るといふ口実^{くわいまい}の下に、午後^{もと}の暑い日を洋傘^{こうもり}で遮^{さへ}ぎりながら別荘の附近を順序なく徘徊^{はいかい}した。久しく見ない土地の昔を偲^{しの}ぶためと云えば云えない事もないが、僕にそんな寂^さびた心持^{うれ}を嬉^{うれ}しがる風流があつたにしたらところで、今はそれに耽^{ふけ}る落^{おち}つきも余裕^{よゆう}も与えられなかつた。僕はただ

うろろとそこらの標札を読んで歩いた。そうして比較的立派な平屋建の門の柱に、高木の二字を認めた時、これだろうと思つて、しばらく門前に佇んだ。たらずそれから後は全く何の目的もなしになお緩漫な歩行を約十五分ばかり続けた。しかしこれは僕が自分の心に、高木の家を見るためにわざわざ表へ出たのではないと申し渡したと同じようなものであつた。僕はさつさと引き返した。

十六

実を云うと、僕はこの高木という男について、ほとんど何も知らなかつた。ただ一遍百代子から彼が適当な配偶を求めつつある由を聞いただけである。その時百代子が、御姉さんにはど

うかしらと、ちようど相談でもするように僕の顔色を見たのを覚えてゐる。僕はいつもの通り冷淡な調子で、好いかも知れない、御父さんか御母さんに話して御覧と云つたと記憶する。それから以後僕の田口うちの家に入れた度数は何遍あるか分らないが、高木の名前は少くとも僕のゐる席ではついで誰の口にも上のぼらなかつたのである。それほど親しみの薄い、顔さえ見た事のない男の住居すまいに何の興味があつて、僕はわざわざ砂の焼ける暑さを冒おかして外出したのだらう。僕は今日こんにちまでその理由を誰にも話さずにいた。自分自身にもその時にはよく説明ができなかつた。ただ遠くの方にある一種の不安が、僕の身体からだを動かして来たという漠ばくたる感じが胸に射さしたばかりであつた。それが鎌倉で暮らした二日の間に、紛まぎれもないある形を取つて発展した結果を見て、僕を散歩に誘い出したのもやはり同じ力に違ひない

と今から思うのである。

僕が別荘へ帰つて一時間経つか経たないうちに、僕の注意した門札と同じ名前の男がたちまち僕の前に現われた。田口の叔母は、高木さんですと云つて叮嚀ていねいにその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊しまつた血色の好い青年であつた。年から云うと、あるいは僕より上かも知れないと思つたが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非共青年という文字が必要になつたくらい彼は生氣に充みちていた。僕はこの男を始めて見た時、これは自然が反対を比較するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑ぐつた。無論その不利益な方面を代表するのが僕なのだから、こう改たまつて引き合わされるのが、僕にはただ悪い洒落しやれとしか受取られなかつた。

二人の容貌ようぼうがすでに意地の好くない対照を与えた。しかし様

子とか応対^{おうたい}ぶりとかなになると僕はさらにはなはだしい相違を自覚しない訳に行かなかつた。僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹^{いとこ}とか、皆親しみの深い血属ばかりであるのに、それらに取り捲^まかれてゐる僕が、この高木に比べると、かえつてどこからか客にでも来たように見えたくらい、彼は自由に遠慮なく、しかもある程度の品格を落す危険なしに己^{おのれ}を取扱^{すべ}かう術を心得ていたのである。知らない人を怖^{おそ}れる僕に云わせると、この男は生れるや否や交際場裏に棄^すてられて、そのまま今日まで同じ所で人と成つたのだと評したかつた。彼は十分と経たないうちに、すべての会話を僕の手から奪つた。そうしてそれをことごとく一身に集めてしまった。その代り僕を除^のけ物^{もの}にしないための注意を払つて、時々僕に一句か二句の言葉を与えた。それがまた生憎^{あいにく}僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんな

を相手にする事もできず、高木一人を相手にする訳にも行かなかった。彼は田口の叔母を親しげに御母さん御母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じように、千代ちゃんという幼馴染おきななじみに用いる名を、自然に命ぜられたかのごとく使った。そうして僕に、先ほど御着になった時は、ちようど千代ちゃんとあなたの御尊おうわさをしていたところでしたと云った。

僕は初めて彼の容貌を見た時からすでに羨ましかつた。うらや話をするとところを聞いて、すぐ及ばないと思った。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかも知れない。けれどもだんだん彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せつけるような態度で、誇り顔に發揮するのではなからうかという疑が起つた。その時僕は急に彼を憎み出した。にくそうして僕の口を利くべき機会が廻つて来てもわざと沈黙を守つ

た。

落ちついた今の気分でその時の事を回顧して見ると、こう解
 釈したのはあるいは僕の僻^{ひが}みだったかも知らない。僕はよく人
 を疑^たぐる代りに、疑^ちぐる自分も同時に疑^ちがわずにはいられない
 性質だから、結局他^{ひと}に話をする時にもどつちと判然^{はつきり}したところ
 が云い悪^{にく}くなるが、もしそれが本当に僕の僻^{ひが}み根性^{こんじょう}だとすれば、
 その裏面にはまだ凝結した形にならない嫉^{しつと}妒^{ひそ}が潜^{ひそ}んでいたので
 ある。

十七

僕は男として嫉妒の強い方か弱い方か自分にもよく解らない。
 競争者のない一人息子としてむしろ大事に育てられた僕は、少

なくとも家庭のうちで嫉妬を起す機会を有た^もなかつた。小学や中学は自分より成績の好い生徒が幸いにしてそう無かつたためか、至極^{しごく}太平に通^とり抜けたように思う。高等学校から大学へかけては、席次にさほど重きをおかないのが、一般の習慣であつた上、年ごとに自分を高く見積る見識というものが加わつて来るので、点数の多少は大した苦にならなかつた。これらをほかにして、僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争つた覚^{おぼえ}はなおさらない。自白すると僕は若い女ことに美しく若い女に対しては、普通以上に精密な注意を払い得る男なのである。往来を歩いて綺麗^{きれい}な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時のように晴やかな心持になる。会^{たま}にはその所有者になつて見たいと云^{かんがえ}う考も起る。しかしその顔とその着物がどうかなく変化し得るかをすぐ予想して、酔^よが

去つて急にぞつとする人のあさましさを覚える。僕をして執念しゅうねく美しい人に附纏つけまつわらせないものは、まさにこの酒に棄すてられた淋しみの障害に過ぎない。僕はこの気分に移られるた
びに、若い時分が突然老人としよりか坊主に変つたのではあるまいかと
思つて、非常な不愉快に陥おちいる。が、あるいはそれがために恋の
嫉妬というものを知らずにすまず事が出来たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいという希望を有もっているから、嫉
妬心のないのを自慢にたくも何ともないけれども、今話した
ような訳で、眼まの当りにこの高木という男を見るまでは、そう
いう名のつく感情に強く心を奪われた試ためしがなかったのである。
僕はその時高木から受けた名状しがたい不快を明らかに覚えて
いる。そうして自分の所有でもない、また所有する気もない千
代子が原因で、この嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は

どうしても僕の嫉妬心を抑えつけないければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失った嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸い千代子と百代子が日が薄くなったから海へ行くと云い出したので、高木が必ず彼らに跟いて行くに違ないと思つた僕は、早く跡に一人残りたいと願つた。彼らははたして高木を誘つた。ところが意外にも彼は何とか言訳を拵えて容易に立とうとしなかつた。僕はそれに対する遠慮だろうと推察して、ますます眉を暗くした。彼らは次に僕を誘つた。僕は固より応じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃れる機会は、与えられないでも手を出して奪いたいくらいに思つていたのだが、今の気分では二人と浜辺まで行く努力がすでに厭であつた。母は失望したような顔をして、いっしょに行つておいでなと云つた。僕は黙つて遠

くの海の上を眺^{なが}めていた。姉妹は笑いながら立ち上った。

「相変らず偏窟^{へんくつ}ねあなたは。まるで腕白小僧見たいだわ」

千代子にこう罵^{のの}しられた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。僕自身も腕白小僧らしい思いをした。調子の好い高木は縁側^{えんがわ}へ出て、二人のために菅笠^{すががさ}のように大きな麦藁帽^{むぎわらぼう}を取ってやって、行っているらしいと挨拶^{あいさつ}をした。

二人の後姿が別荘の門を出た後で、高木はなおしばらく年寄を相手に話していた。こうやって避暑に來ていると氣樂で好いが、どうして日を送るかが大問題になつてかえつて苦痛になるなどと、實際活氣^みに充ちた身体^{からだ}を暑さと退屈さに持ち扱かつている風に見えた。やがて、これから晩まで何をして暮らそうかしらと独言^{ひとりごと}のように云つて、不意に思い出したごとく、玉^{たま}はどうですと僕に聞いた。幸いにして僕は生れてからまだ玉突とい

う遊戯を試みた事がなかったのですぐ断つた。高木はちょうど
 好い相手ができたと思つたのに残念だと云いながら歸つて行つ
 た。僕は活潑かつぱつに動く彼の後影を見送つて、彼はこれから姉妹きょうだいの
 いる浜辺の方へ行くに違いないという気がした。けれども僕は
 坐すわつてゐる席を動かなかつた。

十八

高木の去つた後あと、母と叔母はしばらく彼の噂うわさをした。初対面
 の人だけに母の印象はことに深かつたように見えた。氣のおけ
 ない、至つて行き届いた人らしいと云つて賞ほめていた。叔母は
 また母の批評を一々实例に照らして確かめる風に見えた。この
 時僕は高木について知り得た極きわめて乏しい知識のほとんど全部

を訂正しなければならぬ事を発見した。僕が百代子から聞いたのでは、^{アメリカ}亜米利加帰りという話であつた彼は、叔母の語るところによると、そうではなくつて全く英吉利^{イギリス}で教育された男であつた。叔母は英国流の紳士という言葉^{ひん}を誰かから聞いたと見えて、二三度それを使つて、何の心得もない母を驚ろかしたのみか、だからどこことなく品の善いところがあるんですよと母に説明して聞かせたりした。母はただへえと感心するのみであつた。

二人がこんな話をしている内、僕はほとんど一口も口を利^きかなかつた。ただ上部^{うわべ}から見^みて平生の調子と何の変るところもない母が、この際高木と僕を比較して、腹の中でどう思っているだろうと考えると、僕は母に対して気の毒でもありまた恨^{うら}めしくもあつた。同じ母が、千代子対僕と云う古い関係を一方に置

いて、さらに千代子対高木という新らしい関係を一方に想像するなら、はたしてどんな心持になるだろうと思うと、たとい少しの不安でも、避け得られるところをわざと与えるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕はただでさえ不愉快な上に、年寄にすまないという苦痛をもう一つ重ねた。

前後の模様から推す^おだけで、実際には事実となつて現われて来なかつたから何とも云い兼ねるが、叔母はこの場合を利用して、もし縁があつたら千代子を高木にやるつもりでいるぐらいの打明^{うちあけ}話を、僕ら母子^{おやこ}に向つて、相談とも宣告とも片づかない形式の下に、する気だつたかも知れない。すべてに気がつく癖に、こうなるとかえつて僕よりも迂遠^{うゑん}い母はどうだか、僕はその場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別つべき談判の第一節を予期していたのである。幸か不幸か、叔母がまだ何も

云い出さないうちに、姉妹は浜から広い麦藁帽の縁をひらひらさして帰つて来た。僕が僕の占いの的中しなかつたのを、母のために喜こんだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。

夕方になつて、僕は姉妹と共に東京から来るはずの叔父をステーション停車場に迎えるべく母に命ぜられて家を出た。彼らは揃の浴衣を着て白い足袋を穿いていた。それを後から見送つた彼らの母の眼に彼らがいかなる誇として映じたらう。千代子と並んで歩く僕の姿がまた僕の母には画として普通以上にどんなに価が高かつたらう。僕は母を欺むく材料に自然から使われる自分を心苦しく思つて、門を出る時振り返つて見たら、母も叔母もまだこつちを見ていた。

途中まで来た頃、千代子は思い出したように突然とまつて、

「あつ高木さんを誘うのを忘れた」と云つた。百代子はすぐ僕の顔を見た。僕は足の運びを止めたが、口は開かなかつた。「もう好いじゃないの、ここまで来たんだから」と百代子が云つた。「だつてあたし先刻誘つてくれつて頼まれたのよ」と千代子が云つた。百代子はまた僕の顔を見て逡巡^{ためら}つた。

「市^{いっ}さんあなた時計持つていらしつて。今何時」

僕は時計を出して百代子に見せた。

「まだ間に合わない事はない。誘つて来るなら来ると好い。僕は先へ行つて待つているから」

「もう遅いわよあなた。高木さん、もしいらつしやるつもりならきつと一人でもいらしつてよ。後から忘れましてたつて詫^{あや}まつたらそれで好^よかないの」

姉妹は二三度押問答の末ついに後戻りをしない事にした。高

木は百代子の予言通りまだ汽車の着かないうちに急ぎ足で構内へ這入^{はい}つて来て、姉妹に、どうも非道^{ひど}い、あれほど頼んでおくのにと云った。それから御母さんとは聞いた。最後に僕の方を向いて、先ほどはと愛想^{あいそ}の好い挨拶^{あいさつ}をした。

十九

その晩は叔父と従弟^{いとこ}を待ち合わせた上に、僕ら母子^{おやこ}が新たに食卓に加わったので、食事の時間がいつもより、だいぶ後^{おく}れたばかりでなく、私^{ひそ}かに恐れた通りはなはだしい混雑^{うち}の中に箸^{はし}と茶碗の動く光景を見せられた。叔父は笑いながら、市^{いっ}さんまるで火事場のようだろう、しかし会^{たま}にはこんな騒ぎをして飯を食うのも面白いものだよと云って、間接^{かんせつ}の言訳をした。閑静^{けんせい}な膳^{ぜん}

に慣れた母は、この賑やかさの中に實際叔父の言葉通り愉快らしい顔をしていた。母は内気な癖にこういう陽気な席が好きなのである。彼女はその時偶然口に上った一塩にした小鰺こあじの焼いたのを美味うまいと云つてしきりに賞ほめた。

「漁師りようしに頼んどくといくらでも拵こしらえて来てくれますよ。何なら、歸りに持つていらつしやいな。姉さんが好きだから上げたいと思つてたんですが、ついついでが無かつたもんだから、それにすぐ腐わるくなるんでね」

「わたしもいつか大磯おおいそで逃あつちえてわざわざ東京まで持つて歸つた事があるが、よっぽど氣をつけないと途中でね」

「腐るの」千代子が聞いた。

「叔母さん興津鯛御嫌おきつだいおきらい。あたしこれよか興津鯛の方が美味おいしいわ」と百代子が云つた。

「興津鯛はまた興津鯛で結構ですよ」と母はおとなしい答をした。

ことなくくだしい会話を、僕がなぜ覚えてるかと思つと、僕はその時母の顔に表われた、さも満足らしい気持ちをよく注意して見ていたからであるが、もう一つは僕が母と同じように一塩ひとしおの小鰻こあじを好いていたからでもある。

ついでだからここで云う。僕は自分の嗜好しこうや性質の上において、母に大変よく似たところと、全く違つたところと両方も有つてゐる。これはまだ誰にも話さない秘密だが、実は単に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分とどこがどう違つて、どこがどう似ているかの詳しい研究を人知れず重ねたのである。なぜそんな真似まねをしたかと母に聞かれては云い兼ねる。たとい僕が自分に聞き糺ただして見ても判切はつきり云えなかつたのだから、

理由は話せない。しかし結果からいうとこうである。——欠点でも母と共に具そなえているなら僕は大変嬉うれしかった。長所でも母になくつて僕だけ有もつているとはなはだ不愉快になった。そのうちで僕の最も気になるのは、僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで縁のない眼鼻立にでき上つていゝ事であつた。僕は今でも鏡を見るたびに、器量が落ちても構わないから、もつと母の人相を多量に受け継ついでおいたら、母の子らしくつてさぞ心持が好いだろうと思う。

食事の後おくれた如ごとく、寝る時間じゆんぐりも順繰じゆんぐりに延びてだいぶ遅くなつた。その上急に人数にんずが増えたので、床の位置やら部屋割をきめるだけが叔母に取つての一骨折ひとほねおりであつた。男三人はいつしよに固められて、同じ蚊帳かやに寝た。叔父は肥ふとつた身体からだを持ち扱つかつて、団扇うちわをしきりにばたばた云わした。

「市さん^{いっ}どうだい、暑いじゃないか。これじゃ東京の方がよっぽど楽だね」

僕も僕の隣にいる吾一も東京の方が楽だと云った。それでは何を苦しんでわざわざ鎌倉^{くだ}下りまで出かけて来て、狭い蚊帳へ押し合うように寝るんだか、叔父にも吾一にも僕にも説明のしようがなかった。

「これも一興^{いっきよう}だ」

疑問は叔父の一句でたちまち納^{おさ}りがついたが、暑さの方はなかなか去らないので誰もすぐは寝つかれなかった。吾一は若いだけに、明日^{あした}の魚捕^{さかなとり}の事を叔父に向ってしきりに質問した。叔父はまた真面目^{まじめ}だか冗談^{じょうだん}だか、船に乗りさえすれば、魚の方で風^{ふう}を望^{のぞ}んで降^{くだ}るような旨^{うま}い話をして聞かせた。それがただ自分の倅^{せがれ}を相手にするばかりでなく、時々はねえ市さんと、そんな

事にまるで冷淡の僕まで聴手ききてにするのだから少し変であつた。しかし僕の方はそれに対して相当な挨拶あいさつをする必要があるのでは、話の済む前には、僕は当然同行者の一人いちにんとして受答うけこたえをするようになつていた。僕は固もとより行くつもりでも何でもなかったのだから、この変化は僕に取つて少し意外の感があつた。氣楽そうに見える叔父はそのうち大きな鼾声いびきをかき始めた。吾一もすやすや寝入ねいつた。ただ僕だけは開あいている眼をわざと閉じて、更ふけるまでいろいろな事を考えた。

二十

翌日あくるひ眼が覚めると、隣に寝ていた吾一の姿がいつの間にかもう見えなくなつていた。僕は寢足らない頭を枕の上に着けて、

夢とも思索とも名のつかない路を辿りながら、時々別種の人間を偷み見るような好奇心をもつて、叔父の寝顔を眺めた。そうして僕も寝ている時は、傍から見ると、やはりこう苦がない顔をしているのだろうかと考えなどした。そこへ吾一が這入つて来て、市さんどうだろう天気はと相談した。ちよつと起きて見ると促がすので、起き上つて縁側へ出ると、海の方には一面に柔かい靄の幕がかかつて、近い岬の木立さえ常の色には見えなかつた。降つてゐるのかねと僕は聞いた。吾一はすぐ庭先へ飛び下りて、空を眺め出したが、少し降つてると答えた。

彼は今日の船遊びの中止を深く氣遣うもののごとく、二人の姉まで縁側へ引張出して、しきりにどうだろうどうだろうをくり返した。しまいに最後の審判者たる彼の父の意見を必要と認めたものか、まだ寝ている叔父をとうとう呼び起した。叔父は

天気などはどうでも好いと云つたような眠たい眼をして、空と海を一応見渡した上、なにこの模様なら今にきつと晴れるよと云つた。吾一はそれで安心したらしかったが、千代子は当にならぬ無責任な天気予報だから心配だと云つて僕の顔を見た。僕は何とも云えなかつた。叔父は、なに大丈夫大丈夫と受合つて風呂場の方へ行つた。

食事を済ます頃から霧のような雨が降り出した。それでも風がないので、海の上は平生よりもかえつて穏やかに見えた。あいにくな天気なので人の好い母はみんなに気の毒がつた。叔母は今にきつと本降になるから今日は止したが好かろうと注意した。けれども若いものはことごとく行く方を主張した。叔父はじゃ御婆さんだけ残して、若いものが揃つて出かける事にしよう云つた。すると叔母が、では御爺さんとはどつちになさるの

とわざと叔父に聞いて、みんなを笑わした。

「今日はこれでも若いものの部だよ」

叔父はこの言葉を証拠立てるためだか何だか、さつそく立つゆかたて浴衣の尻を端折はしよつて下へ降りた。姉弟きょうだい三人もそのままの姿で縁から降りた。

「御前達も尻を捲まくるが好い」

「厭いやな事」

僕は山賊のような毛脛けずねを露出むきだしにした叔父と、静御前しずかごぜんの笠かさに似た恰好かつこうの麦藁帽むぎわらぼうを被かぶつた女二人と、黒い兵児帯へこおびをこま結びにした弟を、縁の上から見下して、全く都離れのした不思議な団体のごとく眺ながめた。

「市いちさんがまた何か悪口を云おうと思つて見ている」と百代子が薄笑いをしながら僕の顔を見た。

「早く降りていらつしやい」と千代子が叱るように云った。

「市さんに悪い下駄げたを貸して上げるが好い」と叔父が注意した。

僕は一も二もなく降りたが、約束のある高木が来ないので、それがまた一つの問題になった。おかたこの天気だから見合わしているのだらうと云うのが、みんなの意見なので、僕らがそろそろ歩いて行く間に、吾一が馳足かけあしで迎むかえに行つて連れて来る事にした。

叔父は例の調子でしきりに僕に話しかけた。僕も相手になつて歩調を合せた。そのうちに、男の足だものだから、いつの間にか姉妹を乗きり越した。僕は一度振り返つて見たが、二人は後おくれた事にいつこう頓着とんじやくしない様子で、毫ごうも追いつこうとする努力を示さなかつた。僕にはそれがわざと後あとから来る高木を待ち合せるためのようになしか取れなかつた。それは誘つた人に対す

る礼儀として、彼らの取るべき当然の所作^{しよさ}だつたのだろう。しかしその時の僕にはそう思えなかつた。そう思う余地があつても、そうは感ぜられなかつた。早く来いという合図^{あひづ}をしようという考で振り向いた僕は、合図^{あひづ}を止めて^やまた叔父と歩き出した。そうしてそのまま小坪^{こつぼ}へ這入^{はい}る入口の岬^{みさき}の所まで来た。そこは海へ出張^でつた山の裾^{すそ}を、人の通れるだけの狭い幅^{はば}に削^{けず}つて、ぐるりと向う側へ廻り込まれるようにした坂道であつた。叔父は一番高い坂の角まで来てとまつた。

二十一

彼は突然彼の体格に相応した大きな声を出して姉妹を呼んだ。自白するが、僕はそれまでに何度^{うしろ}も後を振り返つて見ようとし

たのである。けれども気が咎めると云うのか、自尊心が許さないと云うのか、振り向こうとするごとに、首が猪の^{いのしし}のように堅くなつて後へ回らなかつたのである。

見ると二人の姿はまだ一町ほど下にあつた。そうしてそのすぐ後に高木と吾一が続いていた。叔父が遠慮のない大きな声を出して、おおいと呼んだ時、姉妹は同時に僕らを見上げたが、千代子はすぐ後にいる高木の方を向いた。すると高木は被^{かぶ}つていた麦藁帽^{むぎわらぼう}を右の手に取つて、僕らを目当にしきりに振つて見せた。けれども四人のうちで声を出して叔父に応じたのはただ吾一だけであつた。彼はまた学校で号令の稽古^{けいこ}でもしたものと見えて、海と崖^{がけ}に反響するような答と共に両手を一度に頭の上に差し上げた。

叔父と僕は崖の鼻に立つて彼らの近寄るのを待った。彼らは

叔父に呼ばれた後のちも呼ばれない前と同じ遅い歩調で、何か話しながら上あがつて来た。僕にはそれが尋常でなくつて、大いにふざけているように見えた。高木は茶色のだぶだぶした外套がいつうのようなものを着て時々隠袋ポケットへ手を入れた。この暑いのにまさか外套は着られまいと思つて、最初は不思議に眺ながめていたが、だんだん近くなるに従がつて、それが薄い雨除レインコートである事に気がついた。その時叔父が突然、市いちさんヨットに乗つてそこいらを遊んで歩くのも面白いだろうねと云つたので、僕は急に気がついたように高木から眼を転じて脚あしの下を見た。すると磯いそに近い所に、真白に塗つた空船からぶねが一艘そう、静かな波の上に浮いていた。糠雨ぬかあめとまでも行かない細かいものがなお降りやまないのです、海は一面に暈ぼかされて、平生いつもなら手に取るように見える向う側の絶壁の樹も岩も、ほとんど一色ひとついろに眺ながめられた。そのうち四人よつたりはようやく僕

らの傍そばまで来た。

「どうも御待たせ申しまして、実は髭ひげを剃すつていたものだから、途中でやめる訳にも行かず……」と高木は叔父の顔を見るや否いいわけや云訳をした。

「えらい物を着込んで暑かありませんか」と叔父が聞いた。

「暑くつたつて脱ぐ訳に行かないのよ。上はハイカラでも下はばんから蛮殻ばんからなんだから」と千代子が笑った。高木は雨外套レインコートの下に、直じかに半袖はんそでの薄い襯衣シャツを着て、変な半洋袴はんズボンから余った脛すねを丸出しにして、黒足袋くろたびに俎下駄まないたげたを引っかけていた。彼はこの通りと雨外套の下を僕らに示した上、日本へ帰ると服装が自由で貴女レディーの前でも気兼きがねがなくなつて好いと云つていた。

一同がぞろぞろ揃そろつて道幅の六尺ばかりな汚苦むさくるしい漁村はしに這入はいると、一種不快ふかいな臭がみんなの鼻を撲うつた。高木は隠袋ポケットから白

い手巾ハンケチを出して短かい髭おおの上を掩おおった。叔父は突然そこに立つて僕らを見ていた子供に、西の者で南の方から養子に來たものの宅うちはどこだと奇体な質問を掛けた。子供は知らないと言った。僕は千代子に何でそんな妙な聞き方をするのかと尋ねた。昨夕ゆうべ聞き合せに人をやった家うちの主人が云うには、名前は忘れたからこれこれの男と云つて探して歩けば分ると教えたからだとか千代子が話して聞かした時、僕はこの呑氣のんきな教え方と、同じく呑氣な聞き方を、いかにも余裕なくこせついている自分と比べて見て、妙うらやに羨ましく思つた。

「それで分るんでしょうか」と高木が不思議な顔をした。

「分つたらよつぽど奇体だわね」と千代子が笑つた。

「何大丈夫分るよ」と叔父が受合つた。

吾一は面白半分人の顔さえ見れば、西のもので南の方から養

子に來たものの宅はどこだと聞いては、そのたびにみんなを笑わした。一番しまいに、あみがさ編笠を被つててっこう白い手甲とぎゃはん脚絆を着けた月琴弾げつきんひきの若い女の休んでゐる汚ない茶店の婆さんに同じ問とをかけたら、婆さんは案外にもすぐそこだと容易たやすく教えてくれたので、みんながまた手を拍うつて笑つた。それは往来から山手の方へ三級ばかりに仕切られた石段を登り切つた小高い所にある小さい藁葺わらぶきの家であつた。

二十二

この細い石段を思い思いの服装なりをした六人が前後してぞろぞろ登る姿は、傍はたで見えていたら定めし変なものだつたらうと思う。その上六人のうちで、これから何をするか明瞭はつきりした考を有もつて

いたものは誰もないのだからはなはだ気楽である。肝心の叔父
さえただ船に乗る事を知っているだけで、後は網だか釣だか、ま
たどこまで漕いで出るのかいっこう弁別えないらしかった。百
代子の後から足の力で擦り減らされて凹みの多くなつた石段を
踏んで行く僕はこんな無意味な行動に、己れを委ねて悔い
ないところを、避暑の趣とでも云うのかと思いつつ上つた。同時に
この無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕が、ある
男とある女の間に暗に演ぜられつつあるのでは無かろうかと疑
ぐつた。そうしてその一幕の中で、自分の務めなければなら
ない役割がもしあるとすれば、穏かな顔をした運命に、軽く翻弄さ
れる役割よりほかにあるまいと考えた。最後に何事も打算しな
いでただ無雑作にやって除ける叔父が、人に気のつかないうち
に、この幕を完成するとしたら、彼こそ比類のない巧妙な手際

を有^もった作者と云わなければなるまいという氣を起した。僕の頭にこういう影が射した時、すぐ後^{あと}から跟^ついて上^{あが}つて来る高木が、これじゃ暑くつてたまらない、御免蒙^{ごめんこうむ}つて雨防衣^{レインコート}を脱^はぐうと云い出した。

家は下から見たよりもなお小さくて汚^{ひやくにちかぜ}なかつた。戸口^{しやくし}に杓子^{しやくし}が一つ打ちつけてあつて、それに百日風邪^{ひやくにちかぜ}吉野平吉一家一同と書いてあるので、主人の名がようやく分つた。それを見つけて出して、みんなに聞こえるように読んだのは、目敬^{めぎと}い吾一の手柄であつた。中を覗^{のぞ}くと天井も壁もことごとく黒く光つていた。人間としては婆さんが一人いたぎりである。その婆さんが、今日は天氣がよくないので、おおかたおいでじゃあるまいと云つて早く海へ出ましたから、今浜へ下りて呼んできましようと思つて断わりを述べた。舟へ乗つて出たのかねと叔父が聞くと、婆さん

は多分あの船だろうと答えて、手で海の上を指した。靄はまだ晴れなかつたけれども、先刻よりは空がだいぶ明るくなつたので、沖の方は比較的判切見える中に、指された船は遠くの向うに小さく横わつていた。

「あれじゃ大変だ」

高木は携えて来た双眼鏡を覗きながらこう云つた。

「随分呑気ね、迎いに行くつて、どうしてあんな所へ迎に行けるんでしよう」と千代子は笑いながら、高木の手から双眼鏡を受取つた。

婆さんは何直ですと答えて、草履を穿いたまま、石段を馳け下りて行つた。叔父は田舎者は氣楽だなと笑つていた。吾一は婆さんの後を追かけた。百代子はぼんやりして汚ない縁へ腰をおろした。僕は庭を見廻した。庭という名のもつたいたなく聞こ

える縁先は五坪いつつぼにも足りなかった。隅すみに無花果いちじくが一本あつて、腥なまぐさい空気の中に、青い葉を少しばかり茂らしていた。枝にはまだ熟みしない実いが云い訳わけほど結なつて、その一本の股またの所に、空からの虫籠むしかごがかかつていた。その下には瘡やせた鶏けいが二三羽むやみに爪を立てた地面の中を餓うえた嘴くちばしでつついていた。僕はその傍そばに伏せてある鉄網かなあみの鳥籠とりかごらしいものを眺ながめて、その恰好かつこうがちやうど仏手柑ぶしゅかんのごとく不規則に歪ゆがんでゐるのに一種滑稽こつけいな思おもひをした。すると叔父が突然、何分臭くさいねと云い出した。百代子は、あたしもう御魚ごぎょなんかどうでも好すいから、早く歸りたくなつたわと心細こそうな声を出した。この時まで双眼鏡で海の方を見ながら、断たえず千代子と話わしてゐた高木はすぐ後うしろを振り返つた。「何なにをしてゐるだろう。ちよつと行つて様子を見て来ましよう」

彼はそう云いながら、手に持もつた雨外套レインコートと双眼鏡を置おくため

うしろ
に後の縁を顧みた。かえり 傍に立つた千代子は高木の動かない前に手を出した。

「こつちへ御出しなさい。持つてゐるから」

そうして高木から二つの品を受け取った時、彼女は改めてまた彼の半袖姿を見て笑いながら、「とうとうはんから蛭殻になったのね」と評した。高木はただ苦笑しただけで、すぐ浜の方へ下りて行つた。僕はさも運動家らしく発達した彼の肩の肉が、急いで石段を下りるために手を振るごとに動く様を後から無言のまま注意ながして眺めた。

二十三

船に乗るためにみんなが揃そろつて浜に下り立つたのはそれから

約一時間の後のちであつた。浜には何の祭の前か過すぎか、深く砂の中に埋うめられた高い幟のぼりの棒が二本僕の眼を惹ひいた。吾一はどこから磯いそへ打ち上げた枯枝を拾つて来て、広い砂の上に大きな字と大きな顔をいくつも並べた。

「さあ御乗り」と坊主頭の船頭が云つたので、六人は順序なくごたごたに船縁ふなべりから這はい上つた。偶然の結果千代子と僕は後あとのものに押されて、仕切りの付いた舳へさきの方に二人膝ひざを突き合せて坐つた。叔父は一番先に、胴どうの間まというのか、真中の広い所に、家長かちようらしく胡坐あぐらをかいてしまった。そうして高木をその日の客として取り扱いうつもりか、さあどうぞと案内したので、彼は否応いやおうなしに叔父の傍そばに座を占めた。百代子と吾一は彼らの次の間まと云つたような仕切の中に船頭といっしよに這入つた。

「どうですこつちが空すいてますからいらつしやいませんか」と

高木はすぐ後の百代子を顧みた。百代子はあるがとうといったきり席を移さなかつた。僕は始めから千代子と一つ薄縁の上に坐るのを快く思わなかつた。僕の高木に対して嫉妬しつとを起した事はすでに明かに自白しておいた。その嫉妬は程度において昨日きのうも今日も同じだつたかも知れないが、それと共に競争心はいまだかつて微塵みじんも僕の胸に萌もさなかつたのである。僕も男だからこれから先いつどんな女を的まとに劇烈な恋に陥おちいらないとも限らない。しかし僕は断言する。もしその恋と同じ度合の劇烈な競争をあえてしなければ思う人が手に入らないなら、僕はどんな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懷ふところにして恋人を見棄ててしまうつもりでいる。男らしくないとも勇氣に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他ひとから評したらどうにでも評されるだろう。けれどもそれほど切ない競争をしなければわがものにできにくい

ほど、どっちへ動いても好い女なら、それほど切ない競争に働かない女だとしか僕には認められないのである。僕には自分に靡^{なび}かない女を無理に抱^だく喜びよりは、相手の恋を自由の野に放つてやった時の男らしい気分で、わが失恋の瘡痕^{きずあと}を淋^{さみ}しく見つめている方が、どのくらい良心に対して満足が多いか分らないのである。

僕は千代子にこう云った。――

「千代ちゃん行つちやどうだ。あつちの方が広くつて楽^{らく}なようだから」

「なぜ、ここにいちや邪魔なの」

千代子はそう云つたまま動こうとしなかった。僕には高木がいるからあつちへ行けというのだというような説明は、露骨と聞こえるにしろ、厭味^{いやみ}と受取られるにしろ、全く口にする勇氣

は出なかつた。ただ彼女からこう云われた僕の胸に、一種の嬉うれしさが閃ひらめいたのは、口と腹とどう裏表になつてゐるかを曝露ばくろする好い証拠しやうこで、自分で自分の薄弱な性情を自覚しない僕には痛い打撃であつた。

昨日きのう会つた時よりは氣のせいか少し控目になつたように見える高木は、千代子と僕の間起つたこの問答を聞きながら知らぬふりをしてゐた。船が磯いそを離れたとき、彼は「好い案排あんぱいに空模様が直つて来ました。これじや日がかんかん照るよりかえつて結構です。船遊びには持つて来いという御天氣で」というような事を叔父と話し合つたりした。叔父は突然大きな声を出して、「船頭、いったい何を捕とるんだ」と聞いた。叔父もその他のものも、この時まで何を捕るんだかいつこう知らずにいたのである。坊主頭の船頭は、粗末ぞんざいな言葉で、蛸たこを捕るんだと答え

た。この奇抜な返事には千代子も百代子も驚ろくよりもおかしかつたと見えて、たちまち声を出して笑った。

「蛸はどこにいるんだ」と叔父がまた聞いた。

「ここいらにいるんだ」と船頭はまた答えた。

そうして湯屋の留桶を少し深くしたような小判形こばんなりの桶の底に、

硝子ガラスを張ったものを水に伏せて、その中に顔を突込つっこむように押

し込みながら、海の底を覗のぞき出した。船頭はこの妙な道具を鏡かがみ

と称となえて、二つ三つ余分に持ち合わせたのを、すぐ僕らに貸し

てくれた。第一にそれを利用したのは船頭の傍そばに座を取った吾

一と百代子であつた。

鏡がそれからそれへと順々に回った時、叔父はこりや鮮やかだね、何でも見えると非道く感心していた。叔父は人間社会の事に大抵通じているせい、万に高を括る癖に、こういう自然界の現象に襲われるとじき驚ろく性質なのである。自分は千代子から渡された鏡を受け取って、最後に一枚の硝子越に海の底を眺めたが、かねて想像したと少しも異なるところのない極めて平凡な海の底が眼に入っただけである。そこには小さい岩が多少の凸凹を描いて一面に連なる間に、蒼黒い藻草が限りなく蔓延っていた。その藻草があたかも生温るい風に撈られるように、波のうねりで静かにまた永久に細長い茎を前後に揺かした。

「市さん蛸が見えて」

「見えない」

僕は顔を上げた。千代子はまた首を突込んだ。彼女の被って

いたへなへなの麦藁帽子むぎわらぼうしの縁ふちが水に浸つかつて、船頭に操あやつられる船の勢さかに逆さからうたびに、可憐な波をちよろちよろ起した。僕はうしろその後に見える彼女の黒い髪と白い頸筋くびすじを、その顔よりも美しく眺めていた。

「千代ちゃんには、目付めつかつたかい」

「駄目たこよ。蛸たこなんかどこにも泳いでいやしないわ」

「よつぽど慣れないとなかなか目付めつける訳に行かないんだそうです」

これは高木が千代子のために説明してくれた言葉であつた。

彼女は両手おけで桶おきを抑おさえたまま、船縁ふなべりから乗り出した身体からだを高木

の方ねへ捻ねじ曲まげて、「道理どうれで見えないのね」といったが、そのま

ま水たわむに戯たわむれるように、両手で抑おさえた桶をぶくぶく動かしていた。

百代子に向うの方から御姉さんと呼んだ。吾一は居所も分らな

い蛸をむやみに突き廻した。突くには二間ばかりの細長い女竹めだけの先に一種の穂先を着けた変なものをうるのである。船頭は桶を齒で銜くわえて、片手に棹さおを使いながら、船の動いて行くうちに、蛸の居所を探しあててや否いなや、その長い竹で巧みにぐにやぐにやした怪物を突き刺した。

蛸は船頭一人の手で、何疋なんびきも船の中に上がったが、いずれも同じくらいな大ききで、これはと驚ろくほどのものはなかった。始めのうちこそ皆珍みんならしがつて、捕とれるたびに騒いで見たが、しまいにはさすが元氣な叔父も少し飽あきて来たと見えて、「こう蛸ばかり捕つても仕方がないね」と云い出した。高木は煙草たばこを吹かしながら、舟底ふなぞこにかたまつた獲物えものを眺め始めた。

「千代ちゃん、蛸の泳いでるところを見た事がありますか。ちよつと来て御覧なさい、よつぽど妙ですよ」

高木はこう云つて千代子を招いたが、傍そばに坐つてゐる僕の顔を見た時、「須すなが永さんとうです、蛸たこが泳いでいますよ」とつけ加えた。僕は「そうですか。面白いでしょう」と答えたなり直席すぐを立とうとしなかつた。千代子はどれと云いながら高木の傍へ行つて新らしい座を占めた。僕は故もとの所から彼女にまだ泳いでるかと尋ねた。

「ええ面白いわ、早く来て御覧なさい」

蛸は八本の足を真直そろに揃そろえて、細長い身体を一気にすすつと区切りつつ、水の中を一直線に船板に突き当るまで進んで行くのであつた。中には烏賊いかのように黒い墨を吐くはのも交まじつていた。僕は中腰になつてちよつとその光景を覗いたなり故の席に戻つたが、千代子はそれぎり高木の傍を離れなかつた。

叔父は船頭に向つて蛸はもうたくさんだと云つた。船頭は帰

るのかと聞いた。向うの方に大きな竹籃たけかごのようなものが二つ三つ浮いていたので、蛸ばかりで淋さむしいと思つた叔父は、船をその一つの側わきへ漕こぎ寄せさせた。申し合せたように、舟中立ふねじゅうち上つて籃かごの内を覗くと、七八寸もあらうと云う魚が、縦横に狭い水の中を馳かけ廻つていた。その或ものは水の色を離れない蒼あおい光を鱗うろこに帯びて、自分の勢で前後左右に作る波を肉の裏に透とおすように輝やいた。

「一つ掬すくつて御覧なさい」

高木は大きな掬網たまたの柄えを千代子に握らした。千代子は面白半分それを受取つて水の中で動かそうとしたが、動きそうにもしないので、高木は己おのれの手を添えて二人いっしょに籃かごの中を覚束おぼつかなく攪かき廻した。しかし魚は掬すくえるどころではなかつたので、千代子はすぐそれを船頭に返した。船頭は同じ掬網たまたで叔父の命

ずるままに何疋でも水から上へ^よ扱^より出した。僕らは危怪^{きかい}な蛸^{たこ}の
 単調を破るべく、鰻^{いさぎ}、鰻^{すずぎ}、黒鯛^{くろだい}の変化を喜こんでまた岸に上^{のぼ}つ
 た。

二十五

僕はその晩一人東京へ帰った。母はみんなに引きとめられて、
 帰るときには吾一か誰か送つて行くという条件^{もと}の下に、なお二
 三日鎌倉に留^{とど}まる事を肯^{がえ}んじた。僕はなぜ母が彼らの勧めるま
 まに、人を好^よく落^おちついているのだらうと、鋭^とどく磨^とがれた自
 分の神経から推して、悠長^{ゆうちやう}過ぎる彼女をはがゆく思った。

高木にはそれから以後ついで顔を合せた事がなかった。千代
 子と僕に高木を加えて三^みつ巴^{ともえ}を描いた一種の關係が、それぎり

發展しないで、そのうちの劣敗者に当る僕が、あたかも運命の
 先途^{せんど}を予知したとき態度で、中途から渦巻^{うずまき}の外に逃れたのは、
 この話を聞くものにとつて、定めし不本意であらう。僕自身も
 幾分か火の手のまだ収まらないうちに、取り急いで纏^{まと}を撤した
 ような心持がする。と云うと、僕に始からある目論見^{もくろみ}があつて、
 わざわざ鎌倉へ出かけたとも取れるが、嫉妬心^{しつとしん}だけあつて競争
 心を有^もたない僕にも相應の己惚^{うぬぼれ}は陰気な暗い胸のどこかで時々
 ちらちら陽炎^{かげろ}つたのである。僕は自分の矛盾をよく研究した。
 そうして千代子に対する己惚^{うぬぼれ}をあくまで積極的に利用し切らせ
 ないために、他の思想やら感情やらが、入れ代り立ち替り雑然
 として吾心を奪^わいにくる煩^{わづ}らわしさに悩んだのである。

彼女は時によると、天下に只一人の僕を愛しているように見
 えた。僕はそれでも進む訳に行かないのである。しかし未来に

眼を塞ふさいで、思い切つた態度に出ようかと思案しているうちに、彼女はたちまち僕の手から逃れて、全くの他人と違わない顔になつてしまふのが常であつた。僕が鎌倉で暮した二日の間に、こういう潮しほの満干みちひはすでに二三度あつた。或時は自分の意志でこの変化を支配しつつ、わざと近寄つたり、わざと遠退とおのいたりするのでなからうかという微かすかな疑惑をさえ、僕の胸に煙らせた。そればかりではない。僕は彼女の言行を、一いつの意味に解釈し終つたすぐ後あとから、まるで反対の意味に同じものをまた解釈して、その実じつどつちが正しいのか分らないいたずらな忌々いまいましきを感じた例ためしも少なくはなかつた。

僕はこの二日間に娶めとるつもりのない女に釣られそうになつた。そうして高木という男がいやしくも眼の前に出沒する限りは、厭いやでもしまいまで釣られて行きそうな心持がした。僕は高木に

対して競争心を有たないと先に断つたが、誤解を防ぐために、もう一度同じ言葉をくり返したい。もし千代子と高木と僕と三人が巴になつて恋か愛か人情かの旋風つむじかぜの中に狂うならば、その時僕を動かす力は高木に勝とうという競争心でない事を僕は断言する。それは高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければいけない神経作用と同じ物だと断言する。結果が高木に対して勝つか負けるかに帰着する上部うわべから云えば、競争と見えるかも知れないが、動力は全く独立した一種の働きである。しかもその動力は高木がいさえしなければ決して僕を襲おそつて来ないのである。僕はその二日間に、この怪しい力の閃きらめきを物凄く感じた。そうして強い決心と共にすぐ鎌倉を去つた。

僕は強い刺戟しげきに充みちた小説を読むに堪たえないほど弱い男であ

る。強い刺戟に充ちた小説を実行する事はなおさらできない男である。僕は自分の気分が小説になりかけた刹那に驚ろいて、東京へ引き返したのである。だから汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であつた。比較的乗客の少ない中等列車のうちで、僕は自分と書き出して自分と裂き棄てたようなこの小説の続きをいろいろに想像した。そこには海があり、月があり、磯があつた。若い男の影と若い女の影があつた。始めは男が激して女が泣いた。後では女が激して男が宥めた。ついには二人手を引き合つて音のしない砂の上を歩いた。あるいは額があり、暈があり、涼しい風が吹いた。二人の若い男がそこで意味のない口論をした。それがだんだん熱い血を頬に呼び寄せて、ついには二人共自分の人格にかかわるような言葉使いをしなければすまなくなつた。果は立ち上つて拳を揮い合つた。あるいは……。

芝居に似た光景は幾幕となく眼の前に描^{えが}かれた。僕はそのいずれをも嘗^なめ試ろみる機会を失つてかえつて自分のために喜んだ。人は僕を老人みたようだと云つて嘲^{あざ}けるだろう。もし詩に訴えてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲^{あざ}けられても満足である。けれどももし詩に涸^かれて乾^{から}びたのが老人なら、僕はこの品評に甘んじたくない。僕は始終詩を求めてもがいているのである。

二十六

僕は東京へ帰つてからの気分を想像して、あるいは刺戟^{しげき}を眼の前に控えた鎌倉にいるよりもかえつて焦躁^{いらいら}つきはしまいかと心配した。そうして相手もなく一人焦躁つく事のはなはだしい

苦痛をいたずらに胸の中に描いて見た。偶然にも結果は他の一方に外れた。僕は僕の希望した通り、平生に近い落ちつきと冷静と無頓着とを、比較的容易に、淋しいわが二階の上に齎らし帰る事ができた。僕は新らしい匂のする蚊帳を座敷いっぱいにつけて、軒に鳴る風鈴の音を楽しんで寝た。宵には町へ出て草花の鉢を抱えながら格子を開ける事もあつた。母がいないので、すべての世話は作という小間使がした。鎌倉から帰つて、始めてわが家の膳に向つた時、給仕のために黒い丸盆を膝の上に置いて、僕の前に畏こまつた作の姿を見た僕は今更のように彼女と鎌倉にいる姉妹との相違を感じた。作は固より好い器量の女でも何でもなかった。けれども僕の前に出て畏こまる事よりほかに何も知っていない彼女の姿が、僕にはいかに慎ましやかにいかに控目に、いかに女として憐れ深く見えたらう。彼女は恋

の何物であるかを考えるさえ、自分の身分ではすでに生意氣過ぎると思ひ定めた様子で、おとなしく坐^{すわ}つていたのである。僕は珍らしく彼女に優しい言葉を掛けた。そうして彼女に年はいくつだと聞いた。彼女は十九だと答えた。僕はまた突然嫁に行きたくはないかと尋ねた。彼女は赧^{あか}い顔をして下を向いたなり、露骨な問をかけた僕を気の毒がらせた。僕と作とはそれまでほとんど用の口よりほかに利^きいた事がなかったのである。僕は鎌倉から新らしい記憶を持つて歸つた反動として、その時始めて、自分の家に使っている下婢^{かひ}の女らしいところに氣がついた。愛とは固^{もと}より彼女と僕の間云い得べき言葉でない。僕はただ彼女の身の周囲^{まわり}から出る落ちついた、氣安い、おとなしやかな空気を愛したのである。

僕が作のために安慰を得たと云つては、自分ながらおかしく

聞こえる。けれども今考えて見てもそれよりほかの原因は全く考えつかないようだから、やっぱり作が——作がというより、その時の作が代表して僕に見せてくれた女性のある方面の性質が、想像の刺戟しげきにすら焦躁いらい立ちたがっていた僕の頭を静めてくれたのだらうと思う。白状すれば鎌倉の景色は折々眼に浮かんた。その景色のうちには無論人間が活動いっしていた。ただそれが僕の遠くにいる、僕とはとても利害を一にいっし得ない人間の活動らしく見えたのは幸福であつた。

僕は二階に上のほつて書架の整理を始めた。綺麗きれい好きな母が始終しじゅう氣

をつけて掃除を怠おこたらなかつたにかかわらず、一々書物を並べ直すとなると、思わぬ埃ほこりの色を、目の届かない陰に見つけるので、残らず揃そろえるまでには、なかなか手間取つた。僕は暑中に似合わしい閑事業として、なるべく時間のかかるように、氣が向け

ば手にした本をいつまでも読み耽^{ふけ}つてみようという気楽な方針で蝸牛^{かたつむり}のごとく進行した。作は時ならない払塵^{はたき}の音を聞きつけて、梯子段^{はしごだん}から銀杏返^{いちようがえ}しの頭を出した。僕は彼女に書架の一部を雑巾^{ぞうきん}で拭いて貰^{もら}った。しかしいつまでかかるか分らない仕事の手伝を、済むまでさせるのも気の毒だと思つて、すぐ階下^{した}へ下げた。僕は一時間ほど書物を伏せたり立てたりして少し草臥^{くたび}れたから煙草^{たばこ}を吹かして休んでいると、作がまた梯子段から顔を出した。そうして、私でよろしければ何ぞ致しようかと尋ねた。僕は作に何かさせてやりたかった。不幸にして西洋文字の読めない彼女には手の出せない書物の整理なので、僕は気の毒だけでも、なに好いよと断つてまた下へ追いやつた。

作の事をそう一々云う必要もないが、つい前からの関係で、彼女のその時の行動を覚えていたから話したのである。僕は一

本の巻煙草まきたばこを呑み切った後あとでまた整理にかかった。今度は作のためにわれ一人いちにんの世界を妨さまたげられる虞おそれなしに、書架の二段目を一気に片づけた。その時僕は久しく友達に借りて、つい返すのを忘れていた妙な書物を、偶然棚たなの後うしろから発見した。それはむしろ薄い小形の本だったので、ついほかのものの向側むこうがわへ落ちたなり埃だらけになって、今日きょうまで僕の眼を掠かすめていたのである。

二十七

僕にこの本を貸してくれたものはある文学好すきの友達であった。僕はかつてこの男と小説の話をして、思慮の勝ったものは、万事に考え込むだけで、いっこう華はなやかな行動を仕切る勇氣がな

いから、小説に書いてもつまらないだろうと云った。僕の平生からあまり小説を愛読しないのは、僕に小説中の人物になる資格が乏しいので、資格が乏しいのは、考え考えしてぐずつくせいだろうとかねがね思っていたから、僕はついこういう質問をかけて見たくなったのである。その時彼は机上にあつたこの本を指^さして、ここに書いてある主人公は、非常に目覚^{めざ}ましい思慮と、恐ろしく凄まじい思^すい切った行動を具^{そな}えていると告げた。僕はいったいどんな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ読んで見ろと云つて、その本を取つて僕に渡した。標題にはゲダンケという独^{ドイツ}乙字^じが書いてあつた。彼は露^{ロシア}西^モ亜^の物の翻訳だと教えてくれた。僕は薄い書物を手にしながら、重ねてその梗概^{こうがい}を彼に尋ねた。彼は梗概^{こうがい}などはどうでも好いと答えた。そうして中に書いてある事が嫉妬^{しつと}なのだか、復讐^{ふくしゅう}なのだか、深刻な悪戯^{いたずら}なの

だか、酔興すいきような計略けいりやくなのだか、真面目まじめな所作しやくなのだか、氣狂きがみの推理すいなのだか、常人の打算たさんなのだか、ほとんど分らないが、何しろ華々はなばなしい行動と同じく華々はなばなしい思慮しりょが伴はななっているから、ともかくも読んで見ろと云った。僕は書物ふくを借りて帰った。しかし読む氣はしなかった。僕は読み耽ふけらない癖くせに、小説家せうせつかというものものをいつさい馬鹿ばかにしていた上に、友達ともだちのいうような事にはちつとも心を動かすべき興味きうみを有もたなかったからである。

この出来事をすっかり忘れていた僕は、何の氣もつかずにそのゲダンケみおぼえを今棚たなの後うしろから引き出して厚い塵ちりを払った。そうして見覚みおぼえのある例の独乙字の標題たういじに眼めをつけると共に、かの文学好の友達と彼のその時の言葉ことばとを思い出した。すると突然どこから起ったか分らない好奇心きうしんに驅かられて、すぐその一頁ぺいじを開いて初めから読み始めた。中には恐るべき話はなしが書いてあつた。

ある女に意のあつたある男が、その婦人から相手にされないのみか、かえつてわが知り合の人の所へ嫁入られたのを根に、新婚の夫を殺そうと企てた。ただただ殺すのではない。女房が見ている前で殺さなければ面白くない。しかもその見えている女房が彼を下手人と知つていながら、いつまでも指を銜えて、彼を見ているだけで、それよりほかにどうにも手のつけようのないという複雑な殺し方をしなければ気がすまない。彼はその手段として一種の方法を案出した。ある晚餐の席へ招待された好機を利用して、彼は急に劇しい発作に襲われたふりをし始めた。傍から見るとまるで狂人と思えない挙動をその場であえてした彼は、同席の一人残らずから、全くの狂人と信じられたのを見すまして、心の内で図に当つた策略を祝賀した。彼は人目に触れやすい社交場裡で、同じ所作をなお二三度くり返し

た後、発作のために精神に狂くるいの出る危険な人という評判を一般に博し得た。彼はこの手数てかずのかかった準備の上に、手のつけようのない殺人罪を築き上げるつもりでいたのである。しばしば起る彼の発作が、華はなやかな交際の色を暗く損そこない出してから、今まで懇意ゆきぎに往来していた誰彼の門戸が、彼に対して急に固く鎖とぎされるようになった。けれどもそれは彼の苦にするところではなかった。彼はなお自由に出入でいりのできる一軒の家を持っていた。それが取りも直さず彼のまさに死の国に蹴落けおとそうとしつつある友とその細君の家だったのである。彼はある日何気ない顔をして友の住居すまいを敲たたいた。そこで世間話に時を移すと見せて、暗に目の前の人に飛びかかる機うかがを窺うかがった。彼は机の上にあつた重い文鎖ぶんちんを取つて、突然これで人が殺せるだろうかと尋ねた。友は固もとより彼の問を真まに受けなかった。彼は構わずできるだけ

の力を文鎮に込めて、細君のもと見ている前で、最愛の夫を打ち殺した。そうして狂人の名の下に、ふうてんいん瘋癲院に送られた。彼は驚ろくべき思慮と分別と推理の力とをもつて、以上の顛末をてんまつ基礎に、自分のけつして狂人でない訳をひたすら弁解している。かと思ふと、その弁解をまた疑っている。のみならず、その疑いをまた弁解しようとしている。彼は必竟ひつぎよう正気なのだろうか、狂人なのだろうか、——僕は書物を手にしたまま慄然りつぜんとして恐れた。

二十八

僕の頭ヘッドは僕の胸ハートを抑えるためにできていた。行動の結果から見て、はなはだしい悔くいを遺のこさない過去を顧かえりみると、これが人間の常体かとも思う。けれども胸が熱しかけるたびに、厳肅な頭

の威力を無理に加えられるのは、普通誰でも経験する通り、はなはだしい苦痛である。僕は意地張いじばりという点において、どっちかというとむしろ陰性の癩癪持だから、発作ほつきに心を襲おそわれた人が急に理性のために喰い留められて、劇はげしい自動車の速力を即時に殺すような苦痛は滅多めったに嘗なめた事がない。それですらある場合には命の心棒を無理に曲げられるとでも云わなければ形容しようのない活力の燃焼を内に感じた。二つの争いが起るたびに、常に頭の命令に屈従して来た僕は、ある時は僕の頭が強いから屈従させ得るのだと思い、ある時は僕の胸が弱いから屈従するのだとも思ったが、どうしてもこの争いは生活のための争いでありながら、人知れず、わが命を削けずる争いだという畏怖いふの念から解脱げだつする事ができなかつた。

それだから僕はゲダンケの主人公を見て驚ろいたのである。

親友の命を虫の息のように軽く見る彼は、理と情との間に何らの矛盾をも扞格をも認めなかった。彼の有する凡ての知力は、ことごとく復讐の燃料となつて、残忍な兇行を手際よく仕遂げる方便に供せられながら、毫も悔ゆる事を知らなかった。彼は周密なる思慮を率いて、満腔の毒血を相手の頭から浴びせかけ得る偉大なる俳優であつた。もしくは尋常以上の頭脳と情熱を兼ねた狂人であつた。僕は平生の自分と比較して、こう顧慮なく一心にふるまえるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴るほど恐ろしかつた。できたらさぞ痛快だろうと思つた。でかした後は定めし堪えがたい良心の拷問に逢うだろうと思つた。

けれどももし僕の高木に對する嫉妬がある不可思議の徑路を取つて、向後今の数十倍に烈しく身を焼くならどうだろうと僕

は考えた。しかし僕はその時の自分を自分で想像する事ができなかった。始めは人間の元来からの作りが違ふんだから、とてもこんな真似^{まね}はしえまいという見地から、すぐこの問題を棄却^{ききやく}しようとした。次には、僕でも同じ程度の復讐^{ふくしゅう}が充分やつて除けられるに違いないという気がし出した。最後には、僕のように平生は頭と胸の争いに悩んでぐずついているものにして始めてこんな猛烈な兇行を、冷静に打算的に、かつ組織的に、逞^{たく}ましゆうするのだと思ひ出した。僕は最後になぜこう思つたのか自分にも分らない。ただこう思つた時急に變な心持に襲われた。その心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、それらよりは遙^{はる}かに複雑なものに見えた。が、纏^{まと}つて心に現われた状態から云えば、ちようどおとなしい人が酒のために大胆になつて、これなら何でもやれるという満足を感じつつ、同時に酔に打ち

勝たれた自分は、品性の上において平生の自分より遙に墮落したのだと気がついて、そうして墮落は酒の影響だからどこへどう避けても人間としてとても逃れる事はできないのだと沈痛に諦^{あき}らめをつけたと同じような変な心持であつた。僕はこの変な心持と共に、千代子の見ている前で、高木の脳天に重い文鎮^{ぶんちん}を骨の底まで打ち込んだ夢を、大きな眼を開きながら見て、驚ろいて立ち上つた。

下へ降りるや否^{いな}や、いきなり風呂場へ行つて、水をざあざあ頭へかけた。茶の間の時計を見ると、もう午過^{ひるすぎ}なので、それを好い機会^{しお}に、そこへ坐^すわつて飯を片づける事にした。給仕には例の通り作^{さく}が出た。僕は二^ふた口三口無言で飯の塊^{かたま}りを頬張つたが、突然彼女に、おい作僕の顔色はどうかあるかいと聞いた。作は吃驚^{びっくり}した眼を大きくして、いいえと答えた。それで問答が

切れると、今度は作の方がどうか遊ばしましたかと尋ねた

「いいや、大してどうもしない」

「急に御暑うございますから」

僕は黙つて二杯の飯を食い終つた。茶を注がして飲みかけた時、僕はまた突然作に、鎌倉などへ行つて混雑するより宅うちにいる方が静しずかで好いねと云つた。作は、でもあちらの方が御涼しゅうございましょうと云つた。僕はいやかえつて東京より暑いくらいだ、あんな所にいると氣ばかりいらしいといけなないと説明してやつた。作は御隠居さまはまだ当分あちらにおいででございますかと尋ねた。僕はもう帰るだろうと答えた。

僕は僕の前に坐すわっている作さくの姿を見て、一筆ひとふでがきの朝貌あさがおのよう
な気がした。ただ貴たつとい名家めいけの手にならないのが遺憾いかんであるが、
心の中はそう云う種類の画えと同じく簡略かんりやくにでき上あっているとし
か僕には受取れなかった。作ひとがらの人柄ひとがらを画えに喩たとえて何のためにな
ると聞かれるかも知れない。深い意味もなからうが、実は彼女
の給仕を受けて飯を食う間に、今しがたゲダンケを読んだ自分
と、今黒塗くろぬりの盆ぼんを持つて畏かしこままっている彼女とを比較して、自分の
腹はなぜこうしつこい油絵のように複雑なのだろうと呆あきれたか
らである。白状すると僕は高等教育を受けた証しょうこ拠ことして、今日
まで自分の頭ひとが他より複雑に働はたらくのを自慢いんがにしていた。ここ
ろがいつかその働はたららきに疲れていた。何の因果いんがでこうまで事を
細かに刻まなければ生きて行かれないのかと考えて情なさけなかつた。
僕は茶碗ちやわんを膳ぜんの上に置きながら、作の顔を見て尊たつとい感じを起

した。

「作御前でもいろいろ物を考える事があるかね」

「私なんぞ別に何も考えるほどの事がございませんから」

「考えないかね。それが好いね。考える事がないのが一番だ」

「あつても智慧ちえがございませんから、筋道が立ちません。全く駄目でございます」

「仕合せだ」

僕は思わずこう云つて作を驚ろかした。作は突然僕から冷かされたとても思つたろう。気の毒な事をした。

その夕暮に思いがけない母が出し抜けに鎌倉から歸つて来た。

僕はその時ひ日の限りかけた二階の縁に籐椅子といすを持ち出して、作が跣足はだしで庭先へ水を打つ音を聞いていた。下へ降りおて玄関へ出た時、僕は母を送つて来るべきはずの吾一の代りに、千代子が

彼女の後にあとついて沓脱くつぬぎから上つたのを見て非常に驚ろいた。僕は藤椅子の上で千代子の事を全く考えずにいたのである。考えても彼女と高木とを離す事はできなかったのである。そうして二人は当分鎌倉の舞台を動き得ないものと信じていたのである。僕は日に焼けて心持色の黒くなつたと思われる母と顔を見合わして挨拶あいさつを取り替かわす前に、まず千代子に向つてどうして来たのだと聞きたかつた。實際僕はその通りの言葉を第一に用いたのである。

「叔母さんを送つて来たのよ。なぜ。驚ろいて」

「そりやありがとう」と僕は答えた。僕の千代子に対する感情は鎌倉へ行く前と、行つてからとでだいぶ違つていた。行つてからと歸つて来てからとでもまただいぶ違つていた。高木といつしよに束ねつかられた彼女に対するのと、こう一人に切り離された

彼女に對するのとてもまただいぶ違つていた。彼女は年を取つた母を吾一に托するのが不安心だつたから、自分で随ついて來たのだと云つて、作が足を洗つてゐる間まに、母の単衣ひとえを簞笥たんすから出したり、それを旅行着と着換えさせたりなどして、元の千代子の通り豆まめやかにふるまつた。僕は母にあれから何か面白い事がありましたかと尋ねた。母は満足らしい顔をしながら、別にこれという珍らしい事も無かつたと答えたが、「でもね久しぶりに好い氣保養きほようをしました。御蔭で」と云つた。僕にはそれが傍そばにいる千代子に對しての札の言葉と聞こえた。僕は千代子に今日これからまた鎌倉へ歸るのかと尋ねた。

「泊つて行くわ」

「どこへ」

「そうね。内幸町へ行つても好いけど、あんまり広過ぎて淋さむし

いから。——久しぶりにここへ泊ろうかしら、ねえ叔母さん」

僕には千代子が始めから僕の家で寝るつもりで出て来たように見えた。自白すれば僕はそこへ坐つて十分と経たないうちに、また眼の前にいる彼女の言語動作を一種の立場から観察したり、評価したり、解釈したりしなければならいようになつたのである。僕はそこに気がついた時、非常な不愉快を感じた。またそういう努力には自分の神経が疲れ切っている事も感じた。僕は自分が自分に逆らつて余儀なくこう心を働かすのか。あるいは千代子が厭いやがる僕を無理に強いて動くようにするのか。どちらにしても僕は腹立たしかつた。

「千代ちゃんが来なくても吾一さんでたくさんだのに」

「だってあたし責任があるじゃありませんか。叔母さんを招待したのはあたしでしょう」

「じゃ僕も招待を受けたんだから、送って来て貰え^{もら}ば好^いかった」
「だから他^{ひと}の云う事を聞いて、もつといらっしやれば好^いのに」
「いいえあの時にさ。僕の帰った時にさ」

「そうするとまるで看護婦みたようね。好いわ看護婦でも、ついて来て上げるわ。なぜそう云わなかったの」

「云つても断られそうだったから」

「あたしこそ断られそうだったわ、ねえ叔母さん。たまに招待に应じて来ておきながら、厭^{いや}にむずかしい顔ばかりしているんですもの。本当にあなたは少し病氣よ」

「だから千代子について来て貰いたかったのだろう」と母が笑

いながら云つた。

僕は母の帰るつい一時間前まで千代子の来る事を予想し得なかつた。それは今改めてくり返す必要もないが、それと共に僕は母が高木について齎もたらす報道をほとんど確実な未来として予想していた。穏おだやかな母の顔が不安と失望で曇る時の気の毒さも予想していた。僕は今この予期と全く反対の結果を眼の前に見た。彼らは二人とも常に変らない親しげな叔母姪めいであつた。彼らの各自は各自に特有な温あたか味みと清すが々すがしさを、いつもの通り互いの上に、また僕の上に、心持よく加えた。

その晩は散歩に出る時間を儉約して、女二人と共に二階に上つて涼みながら話をした。僕は母の命ずるまま軒端のきばに七草ななくさを描かいた岐阜提灯ぎふちようちんをかけて、その中に細い蠟燭ろうそくを点けた。熱いから電灯を消そうと発議ほつぎした千代子は、遠慮なく畳の上を暗くした。風

のない月が高く上つた。柱に凭もたれていた母が鎌倉を思い出すと云つた。電車の音のする所で月を見るのは何だかおかしい気がする、この間から海辺に馴染なじんだ千代子が評した。僕は先刻さつきの籐椅子といすの上に腰をおろして団扇うちわを使つていた。作が下から二度ばかり上つて来た。一度は煙草盆たばこぼんの火を入れ更かえて、僕の足の下に置いて行つた。二回目には近所から取り寄せた氷菓子アイスクリームを盆のに載のせて持つて来た。僕はそのたびごと階級制度の嚴重な封建よの代に生れたように、卑しい召使の位置しょうがいを生涯しょうがいの分と心得てゐるこの作と、どんな人の前へ出てゐる貴女レディーとしてふるまつて通るべき氣位そなを具そなへた千代子とを比較しない訳に行かなかつた。千代子は作が出て来ても、作でないほかの女が出て来たと同じように、なんにも氣に留めなかつた。作の方ではいつたん起たつて梯子段はしごだんの傍そばまで行つて、もう降りようとする間際まぎわにきつと振

り返つて、千代子の後姿うしろすがたを見た。僕は自分が鎌倉で高木を傍そばに見て暮した二日間を思い出して、材料がないから何も考えないと明言した作に、千代子というハイカラな有毒の材料が与えられたのを憐あわれに眺ながめた。

「高木はどうしたろう」という問が僕の口元までしばしば出た。けれども単なる消息の興味以外に、何かためにする不純なものが自分を前に押し出すので、その都度卑怯つとだと遠くで罵ののられるためか、つい聞くのをいさぎよしとしなくなった。それに千代子が帰つて母だけになりさえすれば、彼の話は遠慮なくできるのだからとも考えた。しかし実を云うと、僕は千代子の口から直下じかに高木の事を聞きたかつたのである。そうして彼女が彼をどう思っているか、それを判切胸はつきりに畳み込んでおきたかつたのである。これは嫉妬しつとの作用なのだろうか。もしこの話を聞くも

のが、嫉妬だというなら、僕には少しも異存がない。今の料簡りようけんで考えて見ても、どうもほかの名はつけ悪いにくようである。それなら僕がそれほど千代子に恋していたのだらうか。問題がそう推移すると、僕も返事に窮きゆうするよりほかに仕方がなくなる。僕は實際彼女に対して、そんなに熱烈な愛を脈搏みやくはくの上にかけていなかったからである。すると僕は人より二倍も三倍も嫉妬しつとぶか深い訳になるが、あるいはそうかも知れない。しかしもつと適当に評したら、おそらく僕本来のわがままが原因なのだらうと思う。ただ僕は一言いちごんそれにつけ加えておきたい。僕から云わせると、すでに鎌倉を去った後あとなお高木に対しての嫉妬心がこう燃えるなら、それは僕の性情に欠陥があつたばかりでなく、千代子自身に重い責任があつたのである。相手が千代子だから、僕の弱点がこれほどに濃く胸を染めたのだと僕は明言して憚はばからない。

では千代子のどの部分が僕の人格を墮落させるだろうか。それはとても分らない。あるいは彼女の親切じやないかとも考えている。

三十一

千代子の様子はいつもの通り明あけつ放ばなしなものであつた。彼女はどんな問題が出てても苦もなく口を利きいた。それは必竟腹ひつきようの中に何も考えていない証しょうこ拠こだとしか取れなかつた。彼女は鎌倉へ行つてから水泳を自習し始めて、今では背の立たない所まで行くのが楽しみだと云つた。それを用心深い百代子けんのんが剣呑けんおんがつて、詫あやまるように悲しい声を出して止めるのが面白いと云つた。その時母は半なかば心配で半あきば呆れたような顔をして、「何ですぬ女

の癖にそんな輕機な真似をして。これから後生だから叔母さんに免じて、あぶない惡ふざけは止よしておくれよ」と頼んでいた。千代子はただ笑いながら、大丈夫よと答えただけであつたが、ふと縁側えんがわの椅子に腰を掛けてゐる僕を顧かえりみて、市いっさんもそう云う御転婆おてんぽは嫌きらでしようらと聞いた。僕はただ、あんまり好きじゃないと云つて、月の光の隈くまなく落ちる表を眺ながめていた。もし僕が自分の品格に対して尊敬を払う事を忘れたなら、「しかし高木さんには氣に入るんだろう」という言葉をその後あとにきつとつけ加えたに違ない。そこまで引き摺ずられなかつたのは、僕の体面上まだ仕合せであつた。

千代子はおくのごとく明けつ放しであつた。けれども夜が更ふけて、母がもう寝ようと云い出すまで、彼女は高木の事をとうとう一口も話頭のぼに上せなかつた。そこに僕ははなはだしい故意こい

を認めた。白い紙の上に一点の暗い印氣インキが落ちたような気がした。鎌倉へ行くまで千代子を天下の女性にょしょうのうちで、最も純粹な一人いちにんと信じていた僕は、鎌倉で暮したわずか二日の間に、始めて彼女の技巧アートを疑い出したのである。その疑うたがいが今ようやく僕の胸に根をおろそうとした。

「なぜ高木の話をしてないのだろう」

僕は寝ながらこう考えて苦しんだ。同時にこんな問題に睡眠の時間を奪おろわれる愚おろさを自分でよく承知していた。だから苦しむのが馬鹿馬鹿しくてなお癪かんが起つた。僕は例の通り二階に一人寝ていた。母と千代子は下座敷に蒲団ふとんを並べて、一つ蚊帳かやの中に身を横たえた。僕はすやすや寝ている千代子を自分のすぐ下に想像して、必竟ひつきようのつそつ苦しがる僕は負けているのだと考えない訳に行かなくなつた。僕は寝返りを打つ事さえ厭いやになつ

た。自分がまだ眠られないという弱味を階下^{した}へ響かせるのが、勝利の報知として千代子の胸に伝わるのを恥辱と思つたからである。

僕がこうして同じ問題をいろいろに考えているうちに、同じ問題が僕にはいろいろに見えた。高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に対する好意に過ぎない。僕に気を悪くさせまいと思う親切から彼女はわざとそれだけを遠慮したのである。こう解釈すると鎌倉にいた時の僕は、あれほど単純な彼女をして、僕の前に高木の二字を公け^{おおや}にする勇氣を失わしめたほど、不合理に機嫌を悪くふるまつたのだらう。もしそうだとすれば、自分は人の気を悪くするために、人の中へ出る、不愉快な動物である。宅^{うち}へ引込^{ひっこ}んで交際^{つきあい}さえしなければそれで宜^いい。けれどももし親切を冠^{かむ}らない技巧^{アート}が彼女の本義なら……。僕は技巧と

いう二字を細かに割つて考えた。高木を媒鳥おとりに僕を釣るつもりか。釣るのは、最後の目的もない癖に、ただ僕の彼女に対する愛情を一時的に刺戟しげきして楽しむつもりか。あるいは僕にある意味で高木のようになれというつもりか。そうすれば僕を愛しても好いというつもりか。あるいは高木と僕と戦うところを眺めながて面白かったというつもりか。または高木を僕の眼の前に出して、こういう人がいるのだから、早く思い切れというつもりか。

——僕は技巧の二字をどこまでも割つて考えた。そうして技巧なら戦争だと考えた。戦争ならどうしても勝負に終るべきだと考えた。

僕は寝つかれないで負けている自分を口惜くやしく思った。電灯は蚊帳を釣るとき消してしまったので、室へやの中に隙間すきまもなく蔓延はびこる暗闇くらやみが窒息するほど重苦しく感ぜられた。僕は眼の見えない

ところに眼を明けて頭だけ働らかす苦痛に堪えなくなつた。寝返りさえ慎んで我慢していた僕は、急に起つて室を明るくした。ついでに縁側へ出て雨戸を一枚細目に開けた。月の傾むいた空の下には動く風もなかつた。僕はただ比較的冷かな空気を肌と咽喉に受けただけであつた。

三十二

翌日はいつも一人で寝ている時より一時間半も早く眼が覚めた。すぐ起きて下へ降りると、銀杏返しの上へ白地の手拭を被つて、長火鉢の灰を篩つていた作が、おやもう御目覚でと云いながら、すぐ顔を洗う道具を風呂場へ並べてくれた。僕は歸りに埃だらけの茶の間を爪先で通り抜けて玄關へ出た。その時つ

でに二人の寝ている座敷を蚊帳越しに覗いて見たら、目敏い母
 も昨日きのうの汽車の疲が出たせいかな、まだ静かな眠を貪ねむりむさぼっていた。
 千代子は固もとより夢の底に埋うずまつているように正体なく枕の上に
 首を落していた。僕は目的あてもなく表へ出た。朝の散歩の趣おもむきを久
 しく忘れていた僕には、常に変わらない町の色が、暑さと雑沓ざつとう
 とに染めつけられない安息日のごとく穏おだやかに見えた。電車の
 線路が研とぎ澄まされた光を真直まつすぐに地面の上に伸ばすのも落ちつ
 いた感じであつた。けれども僕は散歩がしたくつて出たのでは
 なかった。ただ眼が早く覚さめ過ぎて、中は有したに延びた命の断片を、
 運動で埋うめるつもりで歩くのだから、それほどの興味は空にも
 地にも乃至ないし町にも見出す事ができなかつた。

一時間ばかりして僕はむしろ疲れた顔を母からも千代子から
 も怪しまれに戻つて来た。母はどこへ行つたのと聞いたが、後あと

から、色沢いろつやが好くないよ、どうかおしかいと尋ねた。

「昨夕ゆうべ好く寝られなかつたんでしよう」

僕は千代子のこの言葉に対して答うべき術すべを知らなかつた。実を云うと、昂然こうぜんとしてなに好く寝られたよと云いたかつたのである。不幸にして僕はそれほどの技巧家アーチストでなかつた。と云つて、正直に寝られなかつたと自白するには余り自尊心が強過ぎた。僕はついに何も答えなかつた。

三人が同じ食卓あさめしで朝飯を済ますや否やいな、母が昨日涼しいうちに頼んでおいた髪結かみいが来た。洗い立あらたての白い胸掛をかけて、敷居越しきいごしに手を突いた彼女は、御帰りなさいましと親しい挨拶あいさつをした。彼女はこの職業に共通なめでたい口ぶりを有もつていた。それを得意に使つて、内気な母に避暑を誇の種に話させる機会を一句ごとちようちように作つた。母は満足らしくも見えたが、そう蝶蝶しやべしくは饒舌

り得なかつた。髪結はより効目ききめのある相手として、すぐ年の若い千代子を選んだ。千代子は固もとより誰彼の容赦なく一様に気易きやすく応対のできる女だったので、御嬢様と呼びかけられるたびに相当の受答うけこたえをして話を勢はすました。千代子の泳の噂うわさが出た時、髪結は活潑かつぱつで宜よろしゅうございます、近頃の御嬢様方はみんな水泳けいこの稽古けいこをなさいますと誰が聞いても拵こしらえたような御世辞を云つた。

妙な事を吹聴ふいちようするようでおかしいが、実をいうと僕は女の髪を上げるところを見ているのが好きであつた。母が乏ともしい髪を工面まして、どうかこうか髻まげに結ゆい上げる様子は、いくら上手じようずが纏まとめるにしても、それほど見栄みばえのある画えではないが、それでも退屈しのを凌しのぐには恰好かつこうな慰みであつた。僕は髪結の手の動く間まに、自然とでき上つて行く小さな母の丸髻まるまげを眺ながめていた。そうして

腹の中で、千代子の髪を日本流に櫛くしを入れたらさぞみごとだろうと思った。千代子は色の美くしい、癖のない、長くて多過ぎる髪的所有者だったからである。この場合いつもの僕なら、千代ちゃんもついでに結いつて御貫いなときつと勧めるところであつた。しかし今の僕にはそんな親しげな要求を彼女に向つて投げかける氣が出で悪にくかつた。すると偶然にも千代子の方で、何だかあたしも一つ結つて見たくなつたと云い出した。母は御結おいよ久しぶりにと誘いざなつた。髪結かみいは是非御上げ遊ばせな、私始めて御髪おぐしを拝見した時から束髪そくはつにしていらつしやるのはもつたいなと思つとりましたとさも結いいたそうな口ぶりを見せた。千代子はとうとう鏡台の前に坐つた。

「何に結おうかしら」

髪結は島田を勧めた。母も同じ意見であつた。千代子は長い

髪を背中に垂れたまま突然市さんと呼んだ。

「あなた何が好き」

「旦那様も島田が好きだときつとおつしやいますよ」

僕はぎくりとした。千代子はまるで平気のように見えた。わざと僕の方をふり返つて、「じゃ島田に結つて見せたげましょうか」と笑つた。「好いだろう」と答えた僕の声はいかにも鈍に聞こえた。

三十三

僕は千代子の髪のでき上らない先に二階へ上つた。僕のような神経質なものが拘こだわつて来ると、無関係の人の眼にはほとんど小供らしいと思われるような所作しよさをあえてする。僕は途中で

鏡台の傍そばを離れて、美くしい島田髻しまだまげをいただく女が男から強奪ごうだつする嘆賞の租税を免まぬかれたつもりでいた。その時の僕はそれほどこの女の虚栄心に媚こびる好意を有もたなかつたのである。

僕は自分で自分の事をかれこれ取り繕つくろつて好く聞えるように話したくない。しかし僕ごときものでも長火鉢ながひばちの傍はたで起るこんな戦術よりはもう少し高尚な問題に頭を使い得るつもりでいる。ただそこまで引き摺ずり落された時、僕の弱点としてどうしても脱線する気になれないのである。僕は自分でそのつまらなさ加減をよく心得ていただけに、それをあえてする僕を自分で憎にくみ自分で鞭むちうった。

僕は空威張からいばりを卑劣と同じく嫌きらう人間であるから、低くても小さくても、自分らしい自分を話すのを名誉と信じてなるべく隠さない。けれども、世の中で認めている偉い人とか高い人とか

いうものは、ことごとく長火鉢や台所の卑しい人生の葛藤^{かつとう}を超
 越しているのだろうか。僕はまだ学校を卒業したばかりの経験
 しか有^もたない青二才に過ぎないが、僕の知力と想像に訴えて考
 えたところでは、おそらくそんな偉い人高い人はいつの世にも
 存在していないのではなからうか。僕は松本の叔父を尊敬して
 いる。けれども露骨なことを云えば、あの叔父のようなのは偉
 く見える人、高く見せる人と評すればそれで足りていると思う。
 僕は僕の敬愛する叔父に対しては偽物贋物^{きぶつがんぶつ}の名を加える非礼と
 僻見^{へきけん}とを憚^{はば}かりたい。が、事実上彼は世俗に拘泥^{こうでい}しない顔をし
 て、腹の中で拘泥しているのである。小事に齷齪^{あくそく}しない手を拱
 んで、頭の奥で齷齪しているのである。外へ出さないだけが、
 普通より品^{ひん}が好いと云って僕は讃辞を呈したく思っている。そ
 うしてその外へ出さないのは財産の御蔭^{おかげ}、年齢^{とし}の御蔭、学問と

見識と修養の御蔭である。が、最後に彼と彼の家庭の調子が程好く取れているからでもあり、彼と社会の關係が逆なようである。——話がつい横道へ外れた。僕は僕はこのせせせしたところを余り長く弁護し過ぎたかも知れない。

僕は今いう通り早く二階へ上つてしまった。二階は日が近いので、階下よりはよほど凌ぎ悪いのだけれども、平生いつけたせいで、僕は一日の大部分をここで暮らす事にしていたのである。

僕はいつもの通り机の前に坐つたなりただ頬杖を突いてぼんやりしていた。今朝煙草の灰を棄てたマジヨリカの灰皿が綺麗に掃除されて僕の脇の前に載せてあつたのに気がついて、僕はその中に現わされた二羽の鶯を眺めながら、その灰を空けた作の手を想像に描いた。すると下から梯子段を踏む音がして誰か上つて来た。僕はその足音を聞くや否や、すぐそれが作でない

事を知った。僕はこうぼんやり屈托していると、千代子に見られるのを屈辱のように感じた。同時に傍そばにあつた書物を開けて、先刻さつきから読んでいたふりをするほど器用な機転を用いるのを好まなかつた。

「結いえたから見てちょうだい」

僕は僕の前にすぐこう云いながら坐る彼女を見た。

「おかしいでしょう。久しく結わないから」

「大変美しくしてきましたよ。これからいつでも島田に結ゆうといい」

「二三度壊こわしちゃ結い、壊しちゃ結いしないといけないのよ。毛なが馴染ずまなくつて」

こんな事を聞いたり答えたり三四返へんしているうちに、僕はいつの間にか昔と同じように美しく素直な邪気のない千代子を目の前に見る気がし出した。僕の心持が何かの調子で和やわらげら

れたのか、千代子の僕に対する態度がどこかで角度を改ためたのか、それは判然^{はんぜん}と云い悪い^{にく}。こうだと説明のできる捕^{とら}どころは両方になかったらしく記憶している。もしこの氣易^{きやす}い状態が一二時間も長く続いたなら、あるいは僕の彼女に対して抱^{いだ}いた変な疑惑を、過去に溯^{さかの}ぼつて当初から真直^{まつすぐ}に黒い棒で誤解という名の下^{もと}に消し去る事ができたかも知れない。ところが僕はついに不味^{まず}い事をしたのである。

三十四

それはほかでもない。しばらく千代子と話しているうちに、彼女が単に頭を見せに上^{あが}つて来たばかりでなく、今日これから鎌倉へ帰るので、そのさようならを云いにちよつと顔を出した

のだと云う事を知った時、僕はつい用意の足りない躰つまずき方をしたのである。

「早いね。もう帰るのかい」と僕が云った。

「早かないわ、もう一晩泊ったんだから。だけどこんな頭をして帰ると何だかおかしいわね、御嫁にでも行くようで」と千代子が云った。

「まだみんな鎌倉にいるのかい」と僕が聞いた。

「ええ。なぜ」と千代子が聞き返した。

「高木さんも」と僕がまた聞いた。

高木という名前は今まで千代子も口にせず、僕も話頭のぼに上すのをわざと憚はばかっていたのである。が、何かの機会はずみで、平生通いつもりの打ち解けた遠慮のない気分が復活したので、その中に引き込まれた矢先、つい何の気もつかずに使ってしまったのである。

僕はふらふらとこの問をかけて彼女の顔を見た時たちまち後悔した。

僕が煮え切らないまた捌さばけない男として彼女から一種の輕蔑けいべつを受けている事は、僕のとうに話した通りで、実を云えば二人の交際はこの黙許を認め合つた上の親しみに過ぎなかつた。その代り千代子が常に畏おそれる点を、幸さいわいにして僕はただ一つ有もつていた。それは僕の無口である。彼女のように万事明けっ放しに腹を見せなければ気のすまない者から云うと、いつでも、しんねりむつつりと構えている僕などの態度は、けっして氣に入るはずがないのだが、そこにまた妙な見透みすかせない心の存在ほのが仄めくので、彼女は昔から僕を全然知り抜く事のできない、したがって輕蔑しながらもどこかに恐ろしいところを有つた男として、ある意味の尊敬を払つていたのである。これは公おおやけにこそ

明言しないが、向うでも腹の底で正式に認めるし、僕も冥々^{めいめい}のうちには彼女から僕の権利として要求していた事実である。

ところが偶然高木の名前を口にした時、僕はたちまちこの尊敬を永久千代子に奪い返されたような心持がした。と云うのは、「高木さんも」という僕の問を聞いた千代子の表情が急に変化したのである。僕はそれを強^{あなが}ちに勝利の表情とは認めたくない。けれども彼女の眼のうちに、今まで僕がいまだかつて彼女に見出した試しのない、一種の侮蔑^{ぶべつ}が輝やいたのは疑いもない事実であつた。僕は予期しない瞬間に、平手^{ひらて}で横面^{よこつら}を力任せに打たれた人のごとくにぴたりと止^とまつた。

「あなたそれほど高木さんの事が気になるの」

彼女はこう云つて、僕が両手で耳を抑^{おさ}えたいくらいな高笑いをした。僕はその時鋭^さどい侮辱を感じた。けれどもとつさの場

合何という返事も出し得なかつた。

「あなたは卑怯だ^{ひきょう}」と彼女が次に云つた。この突然な形容詞にも僕は全く驚ろかされた。僕は、御前こそ卑怯だ、呼ばないでもの所へわざわざ人を呼びつけて、と云つてやりたかつた。けれども年弱な女に対して、向うと同じ程度の激語を使うのはまだ早過ぎると思つて我慢した。千代子もそれなり黙つた。僕はようやくにして「なぜ」というわずか二字の間をかけた。すると千代子の濃い眉^{まゆ}が動いた。彼女は、僕自身で僕の卑怯な意味を充分自覚していながら、たまたま他の指摘^{しと}を受けると、自分の弱点を相手に隠すために、取り繕^{つく}ろつて空^{そら}つとぼけるものとこの間を解釈したらしい。

「なぜつて、あなた自分でよく解つてゐるじゃありませんか」

「解らないから聞かしておくれ」と僕が云つた。僕は階下^{した}に母

を控えているし、感情に訴える若い女の気質もよく呑み込んだつもりでいたから、できるだけ相手の気を抜いて話を落ちつかせるために、その時の僕としては、ほとんど無理なほどの、低いかつ緩い調子を取ったのであるが、それがかえって千代子の氣に入らなかつたと見える。

「それが解らなければあなた馬鹿よ」

僕はおそらく平生より蒼い顔をしたらうと思う。自分ではただ眼を千代子の上にじつと据えた事だけを記憶している。その時何物も恐れない千代子の眼が、僕の視線と無言のうちに行き合つて、両方共しばらくそこに止まつていた事も記憶している。

「千代ちゃんのような活潑かつぱつな人から見たら、僕見たいに引込思案ひっこみじあんなものは無む論卑怯ひきようなんだろう。僕は思った事をすぐ口へ出したしよさり、またはそのまま所作しよさにあらわしたりする勇氣のない、極きわめて因循いんじゆんな男なんだから。その点で卑怯だと云うなら云われても仕方がないが……」

「そんな事を誰が卑怯だと云うもんですか」

「しかし輕蔑けいべつはしているだろう。僕はちゃんと知ってる」

「あなたこそあたしを輕蔑けいべつしているじゃありませんか。あたしの方がよっぽどよく知ってるわ」

僕はことさらに彼女のこの言葉を肯定する必要を認めなかつたから、わざと返事を控えた。

「あなたはあたしを学問のない、理窟りくつの解らない、取るに足らない女だと思つて、腹の中で馬鹿にし切つてゐるんです」

「それは御前が僕をぐずと見縊みくびつてるのと同じ事だよ。僕は御前から卑怯と云われても構わないつもりだが、いやしくも徳義上の意味で卑怯というなら、そりや御前の方が間違っている。僕は少なくとも千代ちゃんに關係ある事柄について、道德上卑怯なふるまいをした覚おぼえはないはずだ。ぐずとか煮え切らないとかいふべきところに、卑怯という言葉を使われては、何だか道義的勇氣を欠いた——というより、徳義を解しない下劣な人物のように聞えてはなはだ心持が悪いから訂正して貰いたい。それとも今いった意味で、僕が何か千代ちゃんに対してすまない事でもしたのなら遠慮なく話して貰おう」

「じや卑怯の意味を話して上げます」と云つて千代子は泣き出した。僕はこれまで千代子を自分より強い女と認めていた。けれども彼女の強さは単に優しい一図やさから出た女氣おんなぎの凝り塊かたまりりとの

み解釈していた。ところが今僕の前に現われた彼女は、ただ勝
氣に充ちただけの、世間にありふれた、俗っぽい婦人としか見
えなかった。僕は心を動かすところなく、彼女の涙の間からい
かなる説明が出るだろうと待ち設けた。彼女の唇を洩れるもの
は、自己の体面を飾る強弁よりほかに何もあるはずがないと、僕
は固く信じていたからである。彼女は濡れた睫毛を二三度繁叩
いた。

「あなたはあたしを御転婆の馬鹿だと思つて始終冷笑している
んです。あなたはあたしを……愛していないんです。つまりあ
なたはあたしと結婚なさる気が……」

「そりゃ千代ちゃんの方だつて……」

「まあ御聞きなさい。そんな事は御互だと云うんでしよう。そ
んならそれで宜うござんす。何も貰つて下さいとは云やしませ

ん。ただなぜ愛してもいず、細君にもしようと思つていないあたしに對して……」

彼女はここへ来て急に口籠くちごもつた。不敏な僕はその後へ何が出て来るのか、まだ覺さとれなかつた。「御前に對して」と半ば彼女を促うながすように問をかけた。彼女は突然物を衝つき破つた風に、「なぜ嫉妬しつとなさるんです」と云い切つて、前よりは劇はげしく泣き出した。僕はさつと血が顔に上る時の熱ほてりを両方の頬ほおに感じた。彼女はほとんどそれを注意しないかのごとくに見えた。

「あなたは卑怯ひきようです、徳義的に卑怯です。あたしが叔母さんとあなたを鎌倉へ招待した料簡りようけんさえあなたはすでに疑うたぐつていらつしやる。それがすでに卑怯です。が、それは問題じゃありません。あなたは他の招待ひとに應じておきながら、なぜ平生ふだんのように愉快にして下さる事ができないんです。あたしはあなたを招待

したために恥を搔いたも同じ事です。あなたはあたしの宅の客に侮辱を与えた結果、あたしにも侮辱を与えています」

「侮辱を与えた覚はない」

「あります。言葉や仕打はどうでも構わないんです。あなたの態度が侮辱を与えているんです。態度が与えていないでも、あなたの心が与えているんです」

「そんな立ち入った批評を受ける義務は僕にないよ」

「男は卑怯だから、そう云う下らない挨拶ができるんです。高木さんは紳士だからあなたを容れる雅量がいくらでもあるのに、あなたは高木さんを容れる事がけっしてできない。卑怯だからです」

松本の話

一

それから市蔵と千代子との間がどうなつたか僕は知らない。別にどうもならないんだろう。少なくとも傍^{はた}で見ていると、二人の關係は昔から今日^{こんにち}に至るまで全く変らないようだ。二人に聞けばいろいろな事を云うだろうが、それはその時限りの氣分に制せられて、まことしやかに前後に通じない嘘^{うそ}を、永久の価値あるごとく話すのだと思えば間違ない。僕はそう信じている。あの事件ならその当時僕も聞かされた。しかも両方から聞かされた。あれは誤解でも何でもない。両方でそう信じているので、そうしてその信じ方に両方とも無理がないのだから、極^{きわ}め

てもつともな衝突と云わなければならない。したがって夫婦になろうが、友達として暮らそうが、あの衝突だけはとうてい免かれる事のできない、まあ二人の持つて生れた、因果^{いんが}と見るよりほかに仕方がなからう。ところが不幸にも二人はある意味で密接に引きつけられている。しかもその引きつけられ方がまた傍^{はた}のものにどうする権威もない宿命の力で支配されているんだから恐ろしい。取り澄ました警句を用いると、彼らは離れるために合い、合うために離れると云った風の気の毒な一対^{いつつい}を形づくっている。こう云って君に解るかどうか知らないが、彼らが夫婦になると、不幸を醸^{かも}す目的で夫婦になったと同様の結果に陥^{おち}いるし、また夫婦にならないと不幸を続ける精神で夫婦にならないのと拭^{えら}ぶところのない不満足を感じるのである。だから二人の運命はただ成行^{なりゆき}に任せて、自然の手で直接に発展させて貰^{もら}

うのが一番上策だと思う。君だの僕だのが何のかのと要らぬ世話を焼くのはかえつて当人達のために好くあるまい。僕は知つての通り、市蔵から見ても千代子から見ても他人ではない。ことに須永すながの姉からは、二人の身分について今まで頼まれたり相談を受けたりした例ためしは何度もある。けれども天の手際てぎわで旨く行かないものを、どうして僕の力で纏まとめる事ができよう。つまり姉は無理な夢を自分一人で見ているのである。

須永の姉も田口の姉も、僕と市蔵の性質が余りよく似ているので驚ろぞろいている。僕自身もどうしてこんな変り者が親類に二人揃そろつてできたのだらうかと考えては不思議に思う。須永の姉りようけんの料簡りょうけんでは、市蔵の今日こんにちは全く僕の感化を受けた結果に過ぎないと見ているらしい。僕が姉の氣に入らない点をいくらでも有もつている内で、最も彼女を不愉快にするものは、不明なる僕のわ

が甥^{おい}に及ぼしたと認められているこの悪い影響である。僕は僕
 の市蔵に対する今日までの態度に顧^{かえり}みて、この非難をもつとも
 だと肯^{がえん}ずる。それがために市蔵を田口家から疎隔したという不
 服もついでに承認して差支^{さしつかえ}ない。ただ彼ら姉二人が僕と市蔵と
 を、同じ型からでき上った偏窟^{へんくつじん}人のように見倣^{みな}して、同じ眉^{まゆ}を
 僕らの上に等しく顰^{ひそ}めるのは疑もなく誤っている。

市蔵という男は世の中と接触するたびに内へとぐるを捲^まき込
 む性質^{たち}である。だから一つ刺戟^{しげき}を受けると、その刺戟がそれか
 らそれへと廻転して、だんだん深く細かく心の奥に喰い込んで
 行く。そうしてどこまで喰い込んで行っても際限を知らない同
 じ作用が連続して、彼を苦しめる。しまいにはどうかしてこの
 内面の活動から逃^{のが}れたいと祈るくらいに気を悩ますのだけれど
 も、自分の力ではいかんともすべからざる呪^{のろ}いのごとくに引つ張

られて行く。そうしていつかこの努力のために斃たおれなければなら
 ない、たった一人で斃おそれなければならぬという怖おそれを抱いだく
 ようになる。そうして氣き狂がのように疲れる。これが市蔵の命根めいこん
 に横よこたわる一大不幸である。この不幸を転じて幸さいわいとするには、内
 へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐるを捲まき出さ
 せるよりほかに仕方がない。外にある物を頭へ運び込むために
 眼を使う代りに、頭で外にある物を眺ながめる心持で眼を使うよう
 にしなければならぬ。天下にたった一つで好いから、自分の
 心を奪い取るような偉いものか、美くしいものか、優やさしいもの
 か、を見出さなければならぬ。一口に云えば、もつと浮氣うわきに
 ならなければならぬ。市蔵は始め浮氣けいべつを輕蔑けいべつしてかかった。
 今はその浮氣を渴望している。彼は自己の幸福のために、どう
 かして翩へん々べんたる輕薄才子になりたいと心しんから神に念じているの

である。輕薄に浮かれ得るよりほかに彼を救う途は天下に一つもない事を、彼は、僕が彼に忠告する前に、すでに承知していた。けれども実行はいまだにできないでもがいている。

二

僕はこういう市蔵を仕立て上げた責任者として親類のものから暗に恨まれているが、僕自身もその点については疚ましいところが大いにあるのだから仕方がない。僕はつまり性格に應じて人を導く術を心得なかつたのである。ただ自分の好尚を移せるだけ市蔵の上に移せばそれで充分だという無分別から、勝手しだいに若いものの柔らかい精神を動かして来たのが、すべての禍の本になつたらしい。僕がこの過失に気がついたのは今から

二三年前である。しかし気がついた時はもう遅かった。僕はただなす能力のない手を拱こまぬいて、心の中で嘆息うちしたただけであつた。

事実を一言いちげんでいうと、僕の今やつているような生活は、僕に最も適当なので、市蔵にはけつして向かないのである。僕は本来から氣の移りやすくでき上つた、極めて安価きわな批評をすれば、生れつゝの浮氣うわきものに過ぎない。僕の心は絶えず外に向つて流れている。だから外部の刺戟しげきしだいでもなると云つただけではよく腑ふに落ちないかも知れないが、市蔵は在來の社會を教育するために生れた男で、僕は通俗な世間から教育されに出た人間なのである。僕がこのくらい好い年をしながら、まだ大變若いところがあるのに引き更かえて、市蔵は高等学校時代からすでに老成していた。彼は社會を考ふる種に使うけれども、

僕は社会の考えにこつちから乗り移つて行くだけである。そこに彼の長所があり、かねて彼の不幸が潜^{ひそ}んでいる。そこに僕の短所があり、また僕の幸福が宿^{とど}っている。僕は茶の湯をやれば静かな心持になり、骨董^{こつとう}を捻^{ひね}くれば寂^さびた心持になる。そのほか寄席^{よせ}、芝居、相撲^{すもう}、すべてその時々的心持になれる。その結果あまり眼前の事物に心を奪われ過ぎるので、自然に己^{おのれ}なき空虚な感に打たれざるを得ない。だからこんな超然生活を営んで強いて自我を押し立てようとするのである。ところが市蔵は自我よりほかに当初から何物を有^もっていない男である。彼の欠点を補なう——というより、彼の不幸を切りつめる生活の径路は、ただ内に潜^{もぐ}り込まないで外に応ずるよりほかに仕方がないのである。しかるに彼を幸福にし得るその唯一の策を、僕は間接に彼から奪つてしまった。親類が恨^{うら}むのはもつともである。僕は

本人から恨まれないのをまだしもの仕合せと思つていくくらいである。

今からたしか一年ぐらい前の話だと思う。何しろ市蔵がまだ学校を出ない時の話だが、ある日偶然やつて来て、ちよつと挨拶をしたぎりすぐどこかへ見えなくなつた事がある。その時僕はある人に頼まれて、書斎で日本の活花いけばなの歴史を調べていた。僕は調べものの方に氣を取られて、彼の顔を出した時、やあとただふり返つただけであつたが、それでも彼の血色がはなはだ勝すぐれないのを苦にして、仕事の区切がつくや否や彼を探しに書斎を出た。彼は妻さいとも仲が善よかつたので、あるいは茶の間で話でもしている事かと思つたら、そこにも姿は見えなかつた。妻に聞くと子供の部屋だろうというので、縁伝いに戸ドアを開けると、彼は咲子の机の前に坐すわつて、女の雑誌の口絵に出ている、ある

美人の写真を眺めていた。その時彼は僕を顧みて、今こういう美人を発見して、先刻さつきから十分ばかり相對してゐるところだと告げた。彼はその顔が眼の前にある間、頭の中の苦痛を忘れて自おのずから愉快になるのだそうである。僕はさつそくどこの何者の令嬢かと尋ねた。すると不思議にも彼は写真の下に書いてある女の名前をまだ読まずにいた。僕は彼を迂闊うかつだと云つた。それほど氣に入つた顔ならなぜ名前から先に頭に入れないかと尋ねた。時と場合によれば、細君として申し受ける事も不可能でないといふ僕は思つたからである。しかるに彼はまた何の必要があつて姓名や住所を記憶するかと云つた風の眼使めづかいをして僕の注意を怪しんだ。

つまり僕は飽あくまでも写真を実物の代表として眺め、彼は写真ながをただの写真として眺めていたのである。もし写真の背後に、

本当の位置や身分や教育や性情がつけ加わつて、紙の上の肖像を活かしにかかったなら、彼はかえつて氣に入つたその顔まで併せて打ち棄ててしまつたかも知れない。これが市蔵の僕と根本的に違ふところである。

三

市蔵の卒業する二三カ月前、たしか去年の四月頃だつたらうと思う。僕は彼の母から彼の結婚に關して、今までにない長時間の相談を受けた。姉の意思は固より田口の姉嬢を彼の嫁として迎えたいという單純にしてかつ頑固なものであつた。僕は女に理窟を聞かせるのを、男の恥のように思う癖があるので、むずかしい事はなるべく控えたが、何しろこういう問題について、

できるだけ本人の自由を許さないのは親の義務に背くのも同然だという意味を、昔風の彼女の腑に落ちるように砕いて説明した。姉は御承知の通り極めて穏やかな女ではあるが、いざとなると同じ意見を何度でもくり返して憚らない婦人に共通な特性を一人前以上に具えていた。僕は彼女の執拗を悪むよりは、その根気の好過ぎるところにかえつて妙な憐れみを催した。それで、今親類中に、市蔵の尊敬しているものは僕よりほかにいのだから、ともかくも一遍呼び寄せてとくと話して見てくれぬかという彼女の請を快よく引受けた。

僕がこの目的を果すために市蔵とこの座敷で会見を遂げたのは、それから四日目の日曜の朝だと記憶する。彼は卒業試験間近の多忙を目の前に控えながら座に着いて、何試験なんかどうなったって構やしませんかと苦笑した。彼の説明によると、か

ねてその話は彼の母から何度も聞かされて、何度も決答をくり延ばした陳腐ちんぷなものであつた。もつとも彼のそれに対する態度は、問題の陳腐と反比例にすこぶる切なさそうに見えた。彼は最後に母から口説くどかれた時、卒業の上、どうとも解決するから、それまで待つて呉くれろと母に頼んでおいたのだそうである。それをまだ試験も済まない先から僕に呼びつけられたので、多少迷惑らしく見えたばかりか、年寄は氣が短かくつて困ると言葉に出してまで訴えた。僕ももつともだと思つた。

僕の推測では、彼が学校を出るまでとかくの決答を延ばしたのは、そのうちに千代子の縁談が、自分よりは適当な候補者の上に纏まといつくに違かないと勘定かんていして、直接に母を失望させる代りに、周囲の事情が母の意思を翻ひるがえさせるため自然と彼女に圧迫を加えて来るのを待つ一種の逃避手段に過ぎないと思われた。僕は

市蔵にそうじゃ無いかと聞いた。市蔵はそうだと答えた。僕は彼にどうしても母を満足させる気はないかと尋ねた。彼は何事によらず母を満足させたいのは山々であると答えた。けれども千代子を貰もらおうとはけつして云わなかった。意地ずくで貰もらわないのかと聞いたら、あるいはそうかも知れないと云い切った。もし田口がやつても好いと云い、千代子が来ても好いと云ったらどうだと念を押したら、市蔵は返事をしらずに黙って僕の顔を眺ながめていた。僕は彼のこの顔を見ると、けつして話を先へ進める気になれないのである。畏怖いふというぎょうさんと仰山すぎるし、同情というあわとまるで憐れつぽく聞こえるし、この顔から受ける僕の心持は、何と云っていいかほとんど分らないが、永久に相手を諦あきらめてしまわなければならぬ絶望に、ある凄味すじみと優やさし味みをつけ加えた特殊の表情であつた。

市蔵はしばらくして自分はなぜこう人に嫌きらわれるんだろうと突然意外な述懐をした。僕はその時ならないのと平生の市蔵に似合しからないのとで驚ろかされた。なぜそんな愚痴ぐちを零こぼすのかと窘たじなめるような調子で反問を加えた。

「愚痴じゃありません。事実だから云うのです」

「じゃ誰が御前を嫌っているかい」

「現にそういう叔父さんからして僕を嫌っているじゃありませんか」

僕は再び驚ろかされた。あまり不思議だから二三度押問答の末推測して見ると、僕が彼に特有な一種の表情に支配されて話の進行を停止した時の態度を、全然彼に対する嫌悪けんおの念から出たと受けているらしかった。僕は極力彼の誤解を打破しに掛つた。

「おれが何で御前を悪むにく必要があるかね。子供の時から関係でも知れているじゃないか。馬鹿を云いなさんな」

市蔵は叱られて激した様子もなくますます蒼い顔あおをして僕を見つめた。僕は燐火りんかの前に坐すわっているような心持がした。

四

「おれは御前の叔父だよ。どこの国に甥おいを憎むにく叔父があるかい」
市蔵はこの言葉を聞くや否やたちまち薄い唇くちびるを反そらして淋しく笑った。僕はその淋しみの裏に、奥深い輕侮すぐの色を透すかし見た。自白するが、彼は理解の上において僕よりも優れた頭の所有者である。僕は百もそれを承知でいた。だから彼と接触するときには、彼から馬鹿にされるような愚ぐをなるべく慎んで外に出さ

ない用心を怠らなかつた。けれども時々は、つい年長者の傲るおご心から、親しみの強い彼を眼下がんかに見下みくだして、浅薄こころづきと心付ながら、その場限りの無意味にもつたをつけた訓戒などを与える折も無いではなかつた。賢かしい彼は僕に恥を搔かかせるために、自分の優越を利用するほど、品位を欠いた所作しよさをあえてし得ないのではあるが、僕の方ではその都度つど彼に対するこつちの相場が下落して行くような屈辱を感じるのが例であつた。僕はすぐ自分の言葉を訂正しにかかつた。

「そりや広い世の中だから、敵同志かたぎどうしの親子もあるだろうし、命あやを危め合う夫婦もいないとは限らないさ。しかしまあ一般に云えば、兄弟とか叔父甥とかの名で繋つながつている以上は、繋がつているだけの親しみはどこかであろうじゃないか。御前は相應の教育もあり、相應の頭もある癖に、何だか妙に一種の僻ひがみが

あるよ。それが御前の弱点だ。是非直さなくっちゃいけない。
傍^{はた}から見ていても不愉快だ」

「だから叔父さんまで嫌^{きら}っていると言うのです」

僕は返事に窮した。自分で気のつかない自分の矛盾を今市蔵から指摘されたような心持もした。

「僻^{ひがみ}みさえさらりと棄^すててしまえば何でもないじゃないか」と僕^ははさも事もなげに云^いつて退^のけた。

「僕^はに僻^{ひがみ}があるでしょうか」と市蔵は落ちついて聞いた。

「あるよ」と僕は考えずに答えた。

「どういふところが僻^{ひがみ}んでいるでしょう。判^は然^ぜ聞^きかして下さい」

「どういふところがつて、——あるよ。あるからあると云うんだよ」

「じゃそういう弱点があるとして、その弱点はどこから出たん

でしょう」

「そりゃ自分の事だから、少し自分で考えて見たらよからう」

「あなたは不親切だ」と市蔵が思い切った沈痛な調子で云った。僕はまずその調子に度を失った。次に彼の眼の色を見て萎縮した。その眼はいかにも恨めしそうに僕の顔を見つめていた。僕は彼の前に一言の挨拶さえする勇気を振り起し得なかった。

「僕はあなたに云われない先から考えていたのです。おつしやるまでもなく自分の事だから考えていたのです。誰も教えてくれ手がないから独りで考えていたのです。僕は毎日毎夜考えました。余り考え過ぎて頭も身体も続かなくなるまで考えたのです。それでも分らないからあなたに聞いたのです。あなたは自分から僕の叔父だと明言していらつしやる。それで叔父だから他人より親切だと云われる。しかし今の御言葉はあなたの口か

ら出たにもかかわらず、他人より冷刻なものとしか僕には聞こ
えませんでした」

僕は頬ほおを伝わつて流れる彼の涙を見た。幼少の時から馴染なじんで今日こんにちに及んだ彼と僕との間に、こんな光景シーンはいまだかつて一回も起らなかつた事を僕は君に明言しておきたい。したがつてこの昂奮こうふんした青年をどう取り扱つていいかの心得が、僕にまるで無かつた事もついでに断つておきたい。僕はただ茫然ぼうぜんとして手を拱こまぬいていた。市蔵はまた僕の態度などを眼中において、自分の言葉を調節する余裕もを有たなかつた。

「僕は僻ひがんでいるでしょうか。たしかに僻ひがんでいるでしょう。あなたがおつしやらないでも、よく知っているつもりです。僕は僻ひがんでいます。僕はあなたからそんな注意を受けないでも、よく知っています。僕はただどうしてこうなつたかその訳が知

りたいのです。いいえ母でも、田口の叔母でも、あなたでも、みんなよくその訳を知っているのです。ただ僕だけが知らないのです。ただ僕だけに知らせないのです。僕は世の中の人間の中であなただけを一番信用しているから聞いたのです。あなたはそれを残酷に拒絶した。僕はこれから生涯しょうがいの敵としてあなたを呪のろいます」

市蔵は立ち上った。僕はそのとつさの際に決心をした。そうして彼を呼びとめた。

五

僕はかつてある学者の講演を聞いた事がある。その学者は現代の日本の開化を解剖して、かかる開化の影響を受けるわれら

は、上滑りうわすべにならなければ必ず神経衰弱おちに陥おちいるにきまつてい
 るという理由を、臆面おくめんなく聴衆の前に曝露ばくろした。そうして物の
 真相は知らぬ内こそ知りたいものだが、いざ知つたとなると、か
 えつて知らぬが仏ほとけですましていた昔が羨うらやましくつて、今の自分
 を後悔する場合も少なくはない、私の結論などもあるいはそれ
 に似たものかも知れませんが苦笑して壇しりを退しりぞいた。僕はその
 時市蔵の事を思い出して、こういう苦にがい真理うけたまを承うけたまわらなければ
 ならない我々日本人も随分気の毒なものだが、彼のようにたつ
 た一人の秘密を、攫つかもうとしては恐れ、恐れてはまた攫つかもうと
 する青年は一層見惨みじめに違あるまいと考えながら、腹の中で暗に
 同情の涙を彼のために濺そそいだ。

これは単に僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉もを有たな
 い話だから、君が市蔵のためにせつかく心配してくれた親切に

対する前からの行がかりさえなければ、打ち明けないはずだつたが、実を云うと、市蔵の太陽は彼の生れた日からすでに曇っているのである。

僕は誰にでも明言して憚はばからない通り、いつさいの秘密はそれを開放した時始めて自然に復かえる落着らくちやくを見る事ができるという主義を抱いだいているので、穏便とか現状維持とかいう言葉には一般の人ほど重きを置いていない。したがって今日こんにちまでに自分から進んで、市蔵の運命を生れた当時に溯さかのぼつて、逆に照らしてやらなかったのは僕としてはむしろ不思議な手落と云つてもいいくらいである。今考えて見ると、僕が市蔵に呪まじわわれる間際まで、なぜこの事件を秘密にしていたものか、その意味がほとんど分らない。僕はこの秘密に風を入れたところで、彼ら母子おやこの間柄が悪くなるうとは夢にも想像し得なかつたからである。

市蔵の太陽は彼の生れた日からすでに曇つていたという僕の言葉の裏に、どんな事実が含まれているかは、彼と交りまじわの深い君の耳で聞いたたら、すでに具体的な響となつて解つてゐるかも知れない。一口ひとくちでいうと、彼らは本当の母子ではないのである。なお誤解のないように一言いちげんつけ加えると、本当の母子よりも遙はるかに仲の好い継母まははと継子ままこなのである。彼らは血を分けて始めて成立する通俗な親子関係を軽蔑けいべつしても差支さしつかえないくらい、情愛の糸で離れられないように、自然からしつかり括くくりつけられてゐる。どんな魔の振る斧おのの刃はでもこの糸を絶ち切る訳に行かないのだから、どんな秘密を打ち明けても怖こわがる必要はさらにないのである。それなのに姉は非常に恐れていた。市蔵も非常に恐れていた。姉は秘密を手に握つたまま、市蔵は秘密を手に握らせられるだろうと待ち受けたまま、二人して非常に恐れていた。

僕はとうとう彼の恐れるものの正体を取り出して、彼の前に他意なく並べてやったのである。

僕はその時の問答を一々くり返して今君に告げる勇氣に乏しい。僕には固^{もと}よりそれほどの大事件とも始から見えず、またなるべく平氣を装う必要から、つまり何でもない事のように話したのだが、市蔵はそれを命がけの報知として、必死の緊張の下^{もと}に受けたからである。ただ前の続きとして、事実だけを一口に約^{つづ}めて云うと、彼は姉の子でなくつて、小間使の腹から生れたのである。僕自身の家に起った事でない上に、二十五年以上も経^たった昔の話だから、僕も詳しい顛末^{てんまつ}は知ろうはずがないが、何しろその小間使が須永の種を宿した時、姉は相当の金をやつて彼女に暇を取らしたのだそうである。それから宿^{さが}へ下った妊婦が男の子を生んだという報知を待つて、また子供だけ引き取つ

おもてむき

て表向自分の子として養育したのだそうである。これは姉が須永に對する義理からでもあろうが、一つは自分に子のできないのを苦にしていた矢先だから、本氣に吾子として愛いづくしむ考も無論手伝つたに違ない。實際彼らは君の見るごとく、また吾々の見るごとく、最も親しい親子として今日まで発展して來たのだから、御互に事情を明あかし合つたところで毫ごうも差支さしつかえの起る訳がない。僕に云わせると、世間にありがちな反そりの合あわない本当の親子よりもどのくらい肩身が広いか分りやしない。二人だつて、そうと知つた上で、今までの睦むつまじさを回顧した時の方が、どんなに愉快が多いだろう。少なくとも僕ならそうだ。それで僕は市蔵のために特にこの美しい点を力のあらん限り彩いろどる事を怠おこたらなかつた。

「おれはそう思うんだ。だから少しも隠す必要を認めていない。御前だって健全な精神を持っているなら、おれと同じように思うべきはずじゃないか。もしそう思う事ができないというなら、それがすなわち御前の僻^{ひが}みだ。解ったかな」

「解りました。善く解りました」と市蔵が答えた。僕は「解つたらそれで好い、もうその問題についてかれこれというのは止^よしにしようよ」と云った。

「もう止します。もうけつしてこの事について、あなたを煩^{わづ}らわす日は来ないでしょう。なるほどあなたのおっしゃる通り僕は僻んだ解釈ばかりしていたのです。僕はあなたの御話を聞くまでは非常に怖^{こわ}かったです。胸の肉が縮^{ちぢ}まるほど怖かったです。」

けれども御話を聞いてすべてが明白になったら、かえって安心して気が楽になりました。もう怖い事も不安な事ありません。その代り何だか急に心細くなりました。淋さびしいです。世の中にたった一人立っているような気がします」

「だって御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだって今までのおれだよ。誰も御前に対して変るものはありやしないんだよ。神経を起しちやいけない」

「神経は起きなくつても淋うしいんだから仕方ありません。僕はこれから宅うちへ帰って母の顔を見るときつと泣くにきまつています。今からその時の涙を予想しても淋さむしくつてたまりません」

「御母さんには黙っている方がよからう」

「無論話しやしません。話したら母がどんな苦しい顔をするかわりません」

二人は默然^{もくねん}として相對した。僕は手持無沙汰^{てもちぶさた}に煙草盆^{たばこぼん}の灰吹^{はいふき}を叩いた。市蔵はうつむいて袴^{はかま}の膝^{ひざ}を見つめていた。やがて彼は淋^{さみ}しい顔を上げた。

「もう一つ伺っておきたい事がありますが、聞いて下さいますか」

「おれの知っている事なら何でも話して上げる」

「僕を生んだ母は今どこにいるんです」

彼の実の母は、彼を生むと間もなく死んでしまったのである。

それは産後の肥立^{ひだち}が悪かったせいだとも云い、または別の病^{やまい}だ

とも聞いているが、これも詳しい話をしてやるほどの材料に欠

乏した僕の記憶^{きおく}では、とうてい餓^うえた彼の眼を静めるに足りな

かった。彼の生母^{せいぼ}の最後の運命に関する僕の話は、わずか二三

分で尽きてしまった。彼は遺憾^{いかん}な顔をして彼女の名前を聞いた。

幸^{さいわい}にして僕は御弓^{おゆみ}という古風な名を忘れずにいた。彼は次に死んだ時の彼女の年齢^{とし}を問うた。僕はその点に関して、何という確^{しか}とした知識を有^もつていなかった。彼は最後に、彼の宅^{うち}に奉公していた時分の彼女に会った事があるかと尋ねた。僕はあると答えた。彼はどんな女だと聞き返した。気の毒にも僕の記憶はすこぶる朦朧^{もうろう}としていた。事実僕はその当時十五六の少年に過ぎなかったのである。

「何でも島田に結^いつてた事がある」

このくらいよりほかに要領を得た返事は一つもできないので、僕もはなはだ残念に思った。市蔵はようやく諦^{あきら}めたといい眼つきをして、一番しまいに、「じゃせめて寺だけ教えてくれませんか。母がどこへ埋^{うま}っているんだか、それだけでも知っておきたいと思いますから」と云った。けれども御弓の菩提所^{ぼだいじ}を僕が

知ろうはずがなかつた。僕は呻吟^{しんぎん}しながら、已^{やむ}を得なければ姉に聞くよりほかに仕方あるまいと答えた。

「御母さんよりほかに知ってるものは無いでしょうか」

「まああるまいね」

「じゃ分らないでもよござんす」

僕は市蔵に対して気の毒なようなまたすまないような心持がした。彼はしばらく庭の方を向いて、麗^{うらら}かな日脚^{ひあし}の中に咲く大きな椿^{つばき}を眺^{なが}めていたが、やがて視線をもとに戻した。

「御母さんが是非千代ちゃんを貰えというのも、やつぱり血統上の考えから、身縁^{みより}のものを僕の嫁にしたいという意味なんでしょうね」

「全くそこだ。ほかに何にもないんだ」

市蔵はそれでは貰おうとも云わなかつた。僕もそれなら貰う

かとも聞かなかった。

七

この会見は僕にとって美くしい経験の一つであつた。双方で腹藏なくすべてを打ち明け合う事ができたという点において、いまだに僕の貧しい過去を飾っている。相手の市藏から見ても、あるいは生れて始めての慰藉いしやではなかつたかと思う。とにかく彼が帰つたあとの僕の頭には、善い功德くどくを施こしたという愉快的感じが残つたのである。

「万事おれが引き受けてやるから心配しないがいい」

僕は彼を玄関に送り出しながら、最後にこういう言葉を彼の背に暖かくかけてやった。その代り姉に会見の結果を報告する

時ははなはだまずかつた。已^{やむ}を得ないから、卒業して頭に暇さえできれば、はつきりどうにか片をつけると云っているから、それまで待つが好かろう、今かれこれ突つつくのは試験の邪魔になるだけだからと、姉が聞いても無理のないところで、ひとまず宥^{なだ}めておいた。

僕は同時に事情を田口に話して、なるべく市蔵の卒業前に千代子の縁談が運ぶように工夫^{くふう}した。委細を聞いた田口の口振は平生の通り如才なくかつ無雑作^{むざうさ}であつた。彼は僕の注意がなくても、その辺は心得ているつもりだと答えた。

「けれども必竟は本人のために嫁入^{かたづ}けるんで、(そう申しちや角が立つが) 姉さんや市蔵の便宜^{べんぎ}のために、千代子の結婚を無理にくり上げたり、くり延べたりする訳にも行かないものだから」「ごもつともだ」と僕は承認せざるを得なかつた。僕は元来田

口家と親類並の交際つきあいをしているにはいるが、その実彼らの娘の縁談に、進んで口を出したこともなければ、また向うから相談を受けた例ためしも有たないのである。それで今日こんにちまで千代子にどんな候補者があつたのか、間接にさえほとんどその噂うわさを耳にしなかつた。ただ前の年鎌倉の避暑地とかで市蔵が会つて、気を悪くしたという高木だけは、市蔵からも千代子からも名前を教えられて覚えていた。僕は突然ながら田口にその男はどうなつたかと尋ねた。田口は愛嬌あいぎょうらしく笑つて、高木は始めから候補者として打つて出たのではないと告げた。けれども相当の身分と教育があつて独身の男なら、誰でも候補者になり得る権利は有つていふのだから、候補者でないとはけつして断言できないとも告げた。この曖昧あいまいな男の事を僕はなお委くわしく聞いて見て、彼が今上海シャンハイにいる事を確かめた。上海にいるけれどもいつ帰るか分

らないという事も確かめた。彼と千代子との間柄はその後何らの発展も見ないが、信書の往復はいまだに絶えない、そうしてその信書はきつと父^ふ母^ぼが眼を通した上で本人の手に落つるといふ条件付きの往復であるという事まで確めた。僕は一も二もなく、千代子には其男^{それ}が好いじゃないかと云つた。田口はまだどこかに慾があるのか、または別に考^{かんがえ}を有つてゐるのか、そうするつもりだとは明言しなかつた。高木のいかなる人物かをまるで解しない僕が、それ以上勧める権利もないから、僕はついそのままにして引き取つた。

僕と市蔵はその後久しく会わなかつた。久しくと云つたところでわずか一カ月半ばかりの時日に過ぎないのだが、僕には卒業試験を眼の前に控えながら、家庭問題に屈托^{くつたく}しなければならぬ彼の事が非常に気にかかつた。僕はそつと姉を訪^{たず}ねてそれ

となく彼の近況を探つて見た。姉は平気で、何でもだいぶ忙がしそうだよ、卒業するんだからそのはずさねと云つて澄ましていた。僕はそれでも不安心だったから、ある日一時間の夕を僕と会食するために割^さかせて、彼の家の近所の洋食店で共に晚餐^{ばんさん}を食いながら、ひそかに彼の様子を窺^{うかが}つた。彼は平生の通り落ちついていた。なに試験なんかどうにかこうにかやつつけまさと受合つたところに、満更^{まんざら}の虚勢も見えなかつた。大丈夫かといと念を押した時、彼は急に情^{なさけ}なそうな顔をして、人間の頭は思つたより堅固にできているもんですね、実は僕自身も怖^{こわ}くつてたまらないんですが、不思議にまだ壊れません、この様子ならまだ当分は使えるでしょうと云つた。冗談^{じょうたん}らしくもあり、また真面目^{まじめ}らしくもあるこの言葉が、妙に憐^{あわ}れ深い感じを僕に与えた。

若葉の時節が過ぎて、湯上りの単衣の胸に、団扇の風を入れた
く思うある日、市蔵がまたふらりとやつて来た。彼の顔を見る
や否いなや僕が第一にかけた言葉は、試験はどうだったという一
語であつた。彼は昨日きのうようやくすんだと答えた。そうして明日あす
からちよつと旅行して来るつもりだから暇乞いとまごに來たと告げた。
僕は成績もまだ分らないのに、遠く走る彼の心理状態を疑つて、
また多少の不安を感じた。彼は京都附近から須磨明石を経て、
ことに因よると、広島辺へんまで行きたいという希望を述べた。僕は
その旅行の比較的大袈裟おおげさなのに驚ろいた。及第とさえきまつて
いればそれでも好かろうがと間接に不賛成の意を仄ほのめかして見

ると、彼は試験の結果などには存外冷淡な挨拶をした。そんな事に気を遣う叔父さんこそ平生にも似合わしからんじゃありませんかと云つて、ほとんど相手にならなかつた。話しているうちに、僕は彼の思い立が及落の成績に關係のない別方面の動機から萌きざしているという事を発見した。

「実はあの事件以来妙に頭を使うので、近頃では落ちついて書斎に坐すわっている事が困難になりましたね。どうしても旅行が必要なんですから、まあ試験を途中で已やめなかつたのが感心だらに賞ほめて許して下さい」

「そりや御前の金で御前の行きたい所へ行くのだから少しも差支さしつかえはないさ。考えて見れば少しは飛び歩いて気を換えるのも好からう。行つて来るがいい」

「ええ」と云つて市蔵はやや満足らしい顔をしたが、「実は大き

な声で話すのも気の毒でもつたいたいんですが、叔父さんにあの話を聞いてから以後は、母の顔を見るたんびに、変な心持になつてたまらないんです」とつけ足した。

「不愉快になるのか」と僕はむしろ厳おごそかに聞いた。

「いいえ、ただ気の毒なんです。始めは淋さびしくつて仕方がなかつたのが、だんだんだんだん気の毒に変化して来たのです。実はここだけの話ですけども、近頃では母の顔を朝夕見るのが苦痛なんです。今度の旅行こんだだつて、かねてから卒業したら母に京大阪と宮島を見物させてやりたいと思つていたのだから、昔の僕なら供ともをする気で留守るすを叔父さんにでも頼みに出かけて来るところなんですが、今云つたような訳で、関係がまるで逆になつたもんだから、少しでも母の傍そばを離れたらという氣ばかりして」

「困るね、そう変になつちやあ」

「僕は離れたらまたきつと母が恋しくなるだろうと思うんですが、どうでしょう。そう旨くはいかないものでしょうか」

市蔵はさも懸念らしくこういう問をかけた。彼より経験に富んだ年長者をもつて自任する僕にも、この点に関する彼の未来はほとんど想像できなかつた。僕はただ自分に信念がなくなつて、わが心の事を他に尋ねて安心したいと願う彼の胸の裏を憐れに思つた。上部はいかにも優しそうに見えて、實際は極めて意地の強くでき上つた彼が、こんな弱い音を出すのは、ほとんど例のない事だつたからである。僕は僕の力の及ぶ限り彼の心に保証を与えた。

「そんな心配はするだけ損だよ。おれが受合つてやる。大丈夫だから遊んで来るが好い。御前の御母さんはおれの姉だ。しかもおれよりも学問をしないだけに、よほど純良にできている、

誰からも敬愛されべき婦人だ。あの姉と君のような情愛のある子がどうして離れつ切りに離れられるものか。大丈夫だから安心するが好い」

市蔵は僕の言葉を聞いて実際安心したらしく見えた。僕もやや安心した。けれども一方では、このくらい根のない慰藉いしやの言葉が、明晰めいせきな頭脳を有もった市蔵に、これほどの影響を与えたとすれば、それは彼の神経がどこか調子を失なっているためではなかろうかという疑も起った。僕は突然極端の出来事を予想して、一人身の旅行を危ぶみ始めた。

「おれもいつしよに行こうか」

「叔父さんといつしよじゃ」と市蔵が苦笑した。

「いけないかい」

「平生ふだんならこつちから誘つても行つて貰いたいんだが、何しろ

いつどこへ立つんだか分らない、云わば氣の向きしだい予定の狂う旅行だから御氣の毒でね。それに僕の方でもあなたがいると束縛があつて面白くないから……」

「じゃ止よそう」と僕はすぐ申し出を撤回した。

九

市蔵が帰つた後あとでも、しばらくは彼の事が變に氣にかかった。

暗い秘密を彼の頭に判で押した以上、それから出る一切の責任は、当然僕が背負しよつて立たなければならぬ氣がしたからである。僕は姉に会つて、彼女の様子を見もし、また市蔵の近況を聞きもしたくなつた。茶の間にいた妻さいを呼んで、相談かたがた理由わけを話すと、存外物に驚ろかない妻は、あなたがあんまり余

計なおしやべりをなさるからですよと云つて、始めはほとんど取り合わなかったが、しまいに、なんで市さんいちさんに間違があるもんですか、市さんは年こそ若いが、あなたよりよつぽど分別のある人ですものと、独りひとで受合つていた。

「すると市蔵の方で、かえつておれの事を心配している訳になるんだね」

「そうですね、誰だつてあなたの懐手ふところばかりして、舶来のパイプを銜くわえているところを見れば、心配になりますわ」

そのうち子供が学校から帰つて来て、家うちの中が急に賑にぎやかになつたので、市蔵の事はつい忘れたぎり、夕方までとうとう思ひ出す暇がなかった。そこへ姉が自分の方から突然尋ねて来た時は、僕も覚えず冷ひやりとした。

姉はいつもの通り、家族の集まっている真中に坐つて、無沙汰ぶさた

の詫^{わび}やら、時候の挨拶^{あいさつ}やらを長々しく妻^{さい}と交換していた。僕もそこに座を占^あめたまま動く機会を失った。

「市蔵^{あす}が明日から旅行するつて云うじゃありませんか」と僕は好い加減な時分に聞き出した。

「それについてね……」と姉はやや真面目^{まじめ}になつて僕の顔を見た。僕は姉の言葉を皆まで聞かずに、「なに行きたいなら行かしておやんなさい。試験で頭をさんざん使った後^{あと}だもの。少しは楽もさせないと身体^{からだ}の毒になるから」とあたかも市蔵の行動を弁護するように云った。姉は固^{もと}より同じ意見だと答えた。ただ彼の健康状態が旅行に堪^たえるかどうかを氣遣^{きづか}うだけだと告げた。最後に僕の見るところでは大丈夫なのかと聞いた。僕は大丈夫だと答えた。妻も大丈夫だと答えた。姉は安心というよりも、むしろ物足りない顔をした。僕は姉の使う健康という言葉

が、身体に關係のない精神上の意味を有^もつてゐるに違ないと考
えて、腹の中で一種の苦痛を感じた。姉は僕の顔つきから直覺
的に影響を受けたらしい心細さを額に刻^{きざ}んで、「恒^{つね}さん、先刻^{さつき}市
蔵がこちらへ上つた時、何か様子の変つたところでもありやし
ませんでしたかい」と聞いた。

「何そんな事があるもんですか。やっぱり普通の市蔵でさあ。

ねえ御仙^{おせん}」

「ええちつとも違つておいでじゃありません」

「わたしもそうかと思うけれども、何だかこの間から調子が変わ
でね」

「どんななんです」

「どんなだと云われるとまた話しようもないんだが」

「全く試験のためだよ」と僕はすぐ打ち消した。

「姉さんの神経きでんですよ」と妻も口を出した。

僕らは夫婦して姉を慰さめた。姉はしまいにやや納得なっとくしたらしい顔つきをして、みんなと夕食ゆうめしを共にするまで話し込んだ。帰る時には散歩がてら、子供を連れて電車まで見送ったが、それでも気がすまないので、子供を先へ返して、断わる姉の傍そばに席を取ったなり、とうとう彼女の家まで来た。

僕は幸い二階にいた市蔵を姉の前に呼び出した。御母さんが御前の事を大層心配してわざわざ矢来やらいまで来たから、今おれがいろいろに云つてようやく安心させたところだと告げた。したがって旅行に出すのは、つまり僕の責任なんだから、なるべく年寄に心配をかけないように、着いたら着いた所から、立つなら立つ所から、また逗留とまりゆうするなら逗留する所から、必ず音信たよりをおこ怠おこたらないようにして、いつでも用ができればいいこつちから呼

び返す事のできる注意をしたら好かろうと云った。市蔵はそのくらいの面倒なら僕に注意されるまでもなくすでに心得ていると答えて、彼の母の顔を見ながら微笑した。

僕はこれで幾分か姉の心を柔らげ得たものと信じて十一時頃また電車で矢来へ歸つて来た。

僕を迎^{むかえ}に玄関に出た妻は、待ちかねたように、どうでしたと尋ねた。僕はまあ安心だろうよと答えた。実際僕は安心したような心持だったのである。で、明^ある日は新橋へ見送りにも行かなかった。

十

約束の音信^{たより}は至る所からあつた。勘定^{かんじょう}すると大抵日に一本ぐ

らしいの割になつてゐる。その代り多くは旅先の画端書えはがきに二三行の文句を書き込んだ簡略なものに過ぎなかつた。僕はその端書が着くたびに、まず安心したという顔つきをして、妻さいからよく笑われた。一度僕がこの様子なら大丈夫らしいね、どうも御前の予言の方が適中したらしいと云つた時、妻は愛想あいそもなく、当り前ですわ、三面記事や小説見たような事が、滅多めったにあつてたまるもんですかと答えた。僕の妻は小説と三面記事とを同じ物のごとく見倣みなす女であつた。そうして両方とも嘘うそと信じて疑わないほど浪漫ロマンスに縁の遠い女であつた。

端書に満足した僕は、彼の封筒入の書翰しよかんに接し出した時さらに眉まゆを開いた。というのは、僕の恐れを抱いだいていた彼の手が、陰鬱いんうつな色に巻紙を染めた痕迹こんせきが、そのどこにも見出せなかつたからである。彼の状袋の中に巻き納めた文句が、彼の端書より

もいかに鮮かに、彼の變化した氣分を示しているかは、實際それを讀んで見ないと分らない。ここに二三通取つてある。

彼の氣分を變化するに与^{あず}かつて効力のあるものは京都の空氣だの宇治の水だのいろいろある中に、上方^{かみがた}地方の人の使う言葉が、東京に育つた彼に取つては最も興味の多い刺戟^{しげき}になつたらしい。何遍もあの辺を通過した経験のあるものから云うと馬鹿^{なめ}げているが、市蔵の当時の神経にはああ云う滑^{なめ}らかで静かな調子が、鎮^{ちん}経^{けい}剤^{ざい}以上に優しい影響を与え得たのではなからうかと思う。なに若い女の？ それは知らない。無論若い女の口から出れば効^き目^めが多いだろう。市蔵も若い男の事だから、求めてそう云う所へ近づいたかも知れない。しかしここに書いてあるのは、不思議に御婆さんの例である。――

「僕はこの辺の人の言葉を聞くと微^{かす}かな酔に身を任せたような

気分になります。ある人はべたついて厭いやだと云いますが、僕はまるで反対です。厭なのは東京の言葉です。むやみに角度の多い金米糖こんぺいとうのような調子を得意になって出します。そうして聴手ききての心を粗暴にして威張ります。僕は昨日京都から大阪へ来ました。今日朝日新聞にいる友達を尋ねたら、その友人が箕面みのおという紅葉もみじの名所へ案内してくれました。時節が時節ですから、紅葉は無論見られませんでしたが、溪川たにがわがあつて、山があつて、山の行き当りに滝があつて、大変好い所でした。友人は僕を休ませるために社の倶楽部クラブとかいう二階建の建物の中へ案内しました。そこへ這入はいつて見ると、幅の広い長い土間が、豎たてに家の間口を貫ぬいていました。そうしてそれがことごとく敷瓦しきがわらで敷き詰められている模様が、何だか支那の御寺へでも行つたような沈んだ心持を僕に与えました。この家は何でも誰かが始め別荘

に拵こしらえたのを、朝日新聞で買い取つて倶楽部用にしたのだとか聞きました。が、よし別荘にせよ、瓦かわらを畳んで出来ている、この広々とした土間は何のためでしょう。僕はあまり妙だから友人に尋ねて見ました。ところが友人は知らんと云いました。もつともこれはどうしても構わない事です。ただ叔父さんがこう云う事に明らかだから、あるいは知つておいでかも知れないと思つて、ちよつと蛇足だそくに書き添えただけです。僕の御報知したいのは実はこの広い土間ではなかったのです。土間の上に下りていた御婆おばあさんが問題だったのです。御婆さんは二人いました。一人は立つて、一人は椅子いすに腰をかけていました。ただし両方ともくりくり坊主です。その立つている方が、僕らが這はい入るや否いなや、友人の顔を見て挨拶あいさつをしました。そうして『おや御免ごめんやす。今八十六の御婆さんの頭を剃そつとるところだすよつて。——御

婆さんじつとしていなはれや、もう少しだけれ。——よう剃つたけれ毛は一本もありやせんよつて、何も恐ろしい事ありやへん』と云いました。椅子に腰をかけた御婆さんは頭を撫なでて『大きに』と礼を述べました。友人は僕を顧かえりみて野趣があると笑いました。僕も笑いました。ただ笑っただけではありません。百年も昔の人に生れたような暢のんびり氣した心持がしました。僕はこういう心持を御土産おみやげに東京へ持つて帰りたいと思います」

僕も市蔵がこういう心持を、姉へ御土産として持つて来てくれればいいがと思つた。

十一

次のは明石あかしから来たもので、前に比べると多少複雑なだけに、

市蔵の性格をより鮮やかに現わしている。

「今夜ここに来ました。月が出て庭は明らかですが、僕の部屋は影になつてかえつて暗い心持がします。飯を食つて煙草を呑んで海の方を眺めっていると、——海はつい庭先にあるのです。漣さえ打たない静かな晩だから、河縁とも池の端とも片のつかない渚の景色なんですが、そこへ涼み船が一艘流れて来しました。その船の形好は夜でよく分らなかつたけれども、幅の広い底の平たい、どうしても海に浮ぶものとは思えない穏やかな形を具えていました。屋根は確かあつたように覚えます。その軒から画の具で染めた提灯がいくつもぶら下がっていました。薄い光の奥には無論人が坐っているようでした。三味線の音も聞こえました。けれども惣体がいかにも落ちついて、滑るように楽しんで僕の前を流れて行きました。僕は静かにその影を見送つて、

御祖父^{おじい}さんの若い時分の話というのを思い出しました。叔父^{もと}さんは固^{かた}より御存じでしょう、御祖父さんが昔の通人のした月見^{ふねあそび}の舟遊を実際にやった話を。僕は母から二三度聞かされた事があります。屋根船を綾瀬川^{あやせがわ}まで漕^こぎ上^{のぼ}せて、静かな月と静かな波の映り合う真中に立つて、用意してある銀扇^{ぎんせん}を開いたまま、夜の光の遠くへ投げるのだと云うじやありませんか。扇^{かなめ}の要がぐるぐる廻^{まわ}って、地紙^{じがみ}に塗^ぬった銀泥^{ぎんでい}をきらきらさせながら水に落ちる景色は定めてみごとだろうと思います。それもただの一本ならですが、船のものがそうがかりで、ひらひらする光を投げ競^{きそ}う光景は想像しても凄艶^{せいえん}です。御祖父^{おじい}さんは銅壺^{どうこ}の中に酒をいっぱい入れて、その酒で徳利^{とくり}の爛^{かん}をした後^{あと}をことごとく棄^すてさしたほどの豪奢^{ごうしゃ}な人だと云うから、銀扇の百本ぐらい一度に水に流しても平気なんでしょう。そう云えば、遺伝だか何だ

か、叔父さんにも貧乏な割にはと云つては失礼ですが、どこかに贅沢なところがあるようですし、あんな内気な母にも、妙に陽気な事の好きな方面が昔から見えていました。ただ僕だけは、——こういうとまたあの問題を持ち出したなと早合点なさるかも知れませんが、僕はもうあの事について叔父さんの心配なさるほど屈托くつたくしてはいないつもりですから安心して下さい。ただ僕だけはと断るのはけつして苦い意味で云うのではありません。僕はこの点において、叔父さんとも母とも生れつき違っていると申したいのです。僕は比較的楽に育った、物質的に幸福な子だから、贅沢と知らずに贅沢をして平気でいました。着物などでも、母の注意で、人前へ出て恥かしくないようなものを身に着けながら、これが当然だと澄ましていました。けれどもそれは永く習慣に養われた結果、自分で知らない不明から出るので、

一度そこに気がつくと、急に不安になります。着物や食事はまあどうでもいいとして、僕はこの間ある富豪のむやみに金を使う様子を聞いて恐ろしくなつた事があります。その男は芸者はほうかん幫間を大勢集めて、かばん鞆の中から出した札の束を、その前でずたに裂いて、それを御祝儀とか称えて、みんなにやるのだそうです。それから立派な着物を着七たま湯に這入はいつて、あとは三助さんすけにくれるのだそうです。彼の乱行はまだまだたくさんありますが、いずれも天を恐れない暴慢極まるもののみでした。僕はその話を聞いた時無論彼を悪にくみました。けれども氣概に乏しい僕は、悪むよりもむしろ恐れました。僕から彼の所行しよぎようを見ると、強盗が白刃しらばの拔身を畳に突き立てて良民を脅迫おびやかしているのと同じような感じになるのです。僕は実に天とか、人道とか、もしくは神仏とかに対して申し訳がないという、真正に宗教的な意

味において恐れたのです。僕はこれほど臆病な人間なのです。驕奢きょうしやに近づかない先から、驕奢の絶頂に達して躍り狂う人の、一転化の後のちを想像して、怖こわくてたまらないのであります。――僕はこんな事を考えて、静かな波の上を流れて行く涼み船を見送りながら、このくらいな程度の慰さみが人間としてちようど手頃なんだろうと思ひました。僕も叔父さんから注意されたように、だんだん浮氣うわきになつて行きます。賞ほめて下さい。月の差す二階の客は、神戸から遊びに來たとかで、僕の厭いやな東京語ばかり使つて、折々詩吟などをやります。その中に艶なまめかしい女の声も交まじつていましたが、二三十分前から急におとなしくなりました。下女に聞いたならもう神戸へ歸つたのだそうです。夜もだいぶ更ふけましたから、僕も休みます」

「昨夕も手紙を書きましたが、今日もまた今朝以来の出来事を御報知します。こう続けて叔父さんにばかり手紙を上げたら、叔父さんはきつと皮肉な薄笑いをして、あいつどこへも文をやる所がないものだから、已を得ず姉と己に對してだけ、時間を費やして音信を怠らないんだと、腹の中で云うでしょう。僕も筆を執りながら、ちよつとそう云う考えを起しました。しかし僕にもしそんな愛人ができたら、叔父さんはたとい僕から手紙を貰わないでも、喜こんで下さるでしょう。僕も叔父さんに音信を怠つても、その方が幸福だと思います。実は今朝起きて二階へ上つて海を見下していると、そういう幸福な二人連が、磯通いに西の方へ行きました。これはことによると僕と同じ宿に泊つて

いる御客かも知れません。女がクリーム色の洋傘こうもりを翳さして、素足すそに着物の裾すそを少し捲まくりながら、浅い波の中を、男と並んで行く後姿うしろすがたを、僕は羨うらやましそうに眺ながめたのです。波は非常に澄すんでいるから高い所から見下すと、陸おかに近いあたりなどは、日の照る空気の中と変りなく何でも透すいて見えます。泳いでいる海月くらげさえ判切見はつきりえます。宿の客が二人出て来て泳ぎ廻まわっていますが、彼らの水中でやる所作しよさが、一挙一動ことごとく手に取るように見えるので、芸としての水泳の価値が、だいぶ下落するようです。（午前七時半）

「今度は西洋人が一人水に浸つかっています。あとから若い女が出て来ました。その女が波の中に立って、二階に残っているもう一人の西洋人を呼びます。『ユー、カム、ヒヤ』と云って英語を使います。『イット、イズ、ヴェリ、ナイス、イン、ウォー

ター』と云うような事をしきりに申します。その英語はなかなか達者で流暢で羨ましいくらい旨く出ます。僕はとても及ばな

いと思つて感心して聞いていました。けれども英語の達者なこ

の女から呼ばれた西洋人はなかなか下りて来ませんでした。女

は泳げないんだか、泳ぎたくないんだか、胸から下を水に浸け

たまま波の中に立っていました。すると先へ下りた方の西洋人

が女の手を執つて、深い所へ連れて行こうとしました。女は身

を疎めるようにして拒みました。西洋人はとうとう海の中で女

を横に抱きました。女の跳ねて水を蹴る音と、その笑いながら、

きやつきやつ騒ぐ声が、遠方まで響きました。(午前十時)」

「今度は下の座敷に芸者を二人連れて泊っていた客が端艇を漕

ぎに出て来ました。この端艇はどこから持つて来たか分りませ

んが、極めて小さいかつすこぶる危しいものです。客は漕いで

やるからと云つて、芸者を乗せようとはしますが、芸者の方では怖こわいからと断つてなかなか乗りません。しかしとうとう客の意の通りになりました。その時年の若い方が、わざわざ喫驚びつくりして見せる科しなが、よほど馬鹿らしゅうございました。端艇がそこいらを漕ぎ廻つて帰つて来ると、年上の芸者が、宿屋のすぐ裏に繋つないである和船に向つて、船頭はん、その船空あいていまつかと、大きな声で聞きました。今度は和船の中に、御馳走ごちそうを入れて、また海の上に出る相談らしいのです。見てみると、芸者が宿の下女を使つて、麦酒ビールだの水菓子だの三味線だのを船の中へ運び込ましておいて、しまいに自分達も乗りました。ところが肝心かんじんの御客はよほど威勢のいい男で、遙はるか向うの方にまだ端艇を漕ぎ廻していました。誰も乗せ手がなかつたと見えて、今度は黒裸くろはだかの浦の子僧を一人生捕いけどつていました。芸者はあきれた顔をして、

しばらくその方を眺めていましたが、やがて根かぎりの大きな声で、阿呆あほうと呼びました。すると阿呆と呼ばれた客が端艇をこつちへ漕こぎ戻して来ました。僕は面白い芸者でまた面白い客だと思いました。（午前十一時）」

「僕がこんなくだくだしい事を物珍らしそうに報道したら、叔父さんは物数奇ものずきだと云つて定めし苦笑なさるでしょう。しかしこれは旅行の御蔭で僕が改良した証拠しやうこなのです。僕は自由な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんなつまらない話を一々書く面倒を厭いとわなくなつたのも、つまりは考えずに観みるかではないでしょうか。考えずに観るのが、今の僕には一番薬だと思ひます。わずかの旅行で、僕の神経だか性癖だかが直つたと云つたら、直り方があまり安っぽくつて恥ずかしいくらいです。が、僕は今より十層倍も安っぽく母が僕を生んでくれた

事を切望して已まないので。白帆しらほが雲のごとく簇むらつて淡路島あわじしまの前を通ります。反対の側の松山の上に人丸ひとまるの社やしろがあるそうです。人丸という人はよく知りませんが、閑ひまがあつたらついでだから行つて見ようと思います」

結末

敬太郎けいたろうの冒険は物語に始まつて物語に終つた。彼の知ろうと

する世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼はついにその中に這入はいつて、何事も演じ得ない門外漢に似ていた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪たんぼうに過ぎなかつた。

彼は森本の口を通して放浪生活の断片を聞いた。けれどもその断片は輪廓りんかくと表面から成る極めて浅いものであった。したがって罪のない面白味を、野性の好奇心に充みちた彼の頭に吹き込んだだけである。けれども彼の頭の中の隙間すきまが、瓦斯ガスに似た冒険譚だんで膨脹ぼうちようした奥に、彼は人間としての森本の面影おもかげを、夢現ゆめうつのごとく見る事を得た。そうして同じく人間としての彼に、知識以外の同情と反感を与えた。

彼は田口と云う實際家の口を通して、彼が社会をいかに眺めながているかを少し知った。同時に高等遊民と自称する松本という男からその人生觀の一部を聞かされた。彼は親しい社会的關係によつて繋つながれていながら、まるで毛色の異ことなつたこの二人の対照を胸に据すえて、幾分か己おのれの世間的經驗が広くなつたような心持がした。けれどもその經驗はただ広く面積の上において

延びるだけで、深さはさほど増したとも思えなかつた。

彼は千代子という女性によしやうの口を通して幼児の死を聞いた。千代子によつて叙じよせられた「死」は、彼が世間並に想像したものとは違つて、美くしい画えを見るようなところに、彼の快感を惹ひいた。けれどもその快感のうちには涙が交つていた。苦痛を逃のがれるために已やむを得ず流れるよりも、悲哀をできるだけ長く抱いだいていたい意味から出る涙が交まじつていた。彼は独身ものであつた。小児に對する同情は極めて乏しかつた。それでも美くしいものが美しく死んで美しく葬られるのは憐あわれであつた。彼は雛祭ひなまつりの宵よいに生れた女の子の運命を、あたかも御雛様のそれのごとく可憐かれんに聞いた。

彼は須永すながの口から一調子狂ひとちやうしつた母子おやこの關係を聞かされて驚ろいた。彼も国元に一人の母を有もつ身であつた。けれども彼と彼

の母との関係は、須永ほど親しくない代りに、須永ほどの因果^{いんが}に纏綿^{てんめん}されていなかった。彼は自分が子である以上、親子の間を解し得たものと信じて疑わなかった。同時に親子の間は平凡なもの^{あき}と諦^{あきら}らめていた。より込み入った親子は、たとえ想像が出来るにしても、いつこう腹にはこたえなかった。それが須永のために深く掘り下げられたような気がした。

彼はまた須永から彼と千代子との間柄^{わづかひ}を聞いた。そうして彼らは必竟^{ひつぎよう}夫婦として作られたものか、朋友^{ほうゆう}として存在すべきものか、もしくは敵^{かたき}として睨^{にら}み合うべきものかを疑った。その疑いの結果は、半分の好奇と半分の好意^{かうい}を駆^かつて彼を松本に走らしめた。彼は案外にも、松本をただ舶来^{くわくわい}のパイプを銜^{くわ}えて世の中を傍観^{ぼうくわん}している男でないと発見した。彼は松本が須永に対してどんな考でどういう所置を取ったかを委^{くわ}しく聞いた。そうし

て松本のそういう所置を取らなければならなくなつた事情も審つまびらかにした。

かえり

顧みると、彼が学校を出て、始めて實際の世の中に接觸して見たいと志ぎしてから今日こんにちまでの経歴は、單に人の話をそこここと聞き廻つて歩いただけである。耳から知識なり感情なりを伝えられなかつた場合は、小川町の停留所ステツキで洋杖を大事そうに突いて、電車から下りる霜降しもふりの外套がいとうを着た男が若い女といつしよに洋食屋に這入る後あとを跟つけたくらいのものである。それも今になつて記憶の台に載のせて眺ながめると、ほとんど冒険とも探検とも名づけようのない児戯じぎであつた。彼はそれがために位地いちちにありつく事はできた。けれども人間の経験としては滑稽こっけいの意味以外に通用しない、ただ自分にだけ真面目まじめな、行動に過ぎなかつた。要するに人世に対して彼の有する最近の知識感情はことごと

く鼓膜の働らきから来ている。森本に始まつて松本に終る幾席いくせきかの長話は、最初広く薄く彼を動かしつつ漸々ぜんぜん深く狭く彼を動かすに至つて突如としてやんだ。けれども彼はついにその中に這入はいれなかつたのである。そこが彼に物足らないところで、同時に彼の仕合せなところである。彼は物足らない意味で蛇へびの頭を呪のろい、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。そうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如としてやんだように見えるこの劇が、これから先どう永久に流転るてんして行くだろうかを考えた。

後註

- 一 「糊口」は底本では「口糊」

二 「着」は底本では「来」

三 「そんな」は底本では「そんなに」

四 「糠雨」は底本では「糖雨」

五 ルビの「ぞんざい」は底本では「そんざい」

六 「鷺鳥」は底本では「鷺鳥」

七 「着」は底本では「来」

底本：「夏目漱石全集 6」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 3 月 29 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月から 1972（昭和 47）年 1 月

※疑問箇所は、新潮文庫、角川文庫の両方で確認できたもののみを修正し、注記した。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999 年 9 月 18 日公開

2004 年 2 月 27 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。